

内閣府食品安全委員会事務局  
平成20年度食品安全確保総合調査報告書

# リスク認知の形成要因等に関する調査 調査報告書

平成21年1月



株式会社ノルド  
社会環境研究所



## はじめに

この報告書は、平成20年度において食品安全委員会事務局から受託した調査研究事業「リスク認知の形成要因等に関する調査」の成果を取りまとめたものである。

食品安全委員会は、食品安全基本法第23条第1項第7号及び第8号に基づいて、リスクコミュニケーションの実施及び関係行政機関によるリスクコミュニケーションの調整を行なうこととなっている。平成18年11月には「リスクコミュニケーションの改善に向けて」を策定し、これまでも様々な取組みを展開してきている。

一方、食の安全に対する関心の高まりともあいまって、食品添加物等の食品に関するハザードに対する一般消費者の不安感は根強い状況にある。

本調査研究事業は、これらを踏まえ、効果的なリスクコミュニケーション手法の検討に資するため、食品に関するハザードに対する消費者のリスク認知状況やリスク認知の形成要因をフォーカスグループインタビュー及びインターネットアンケートにより調査・分析し、さらにリスク認知に影響を及ぼす情報源について、情報内容の整理及び訪問インタビュー等により調査・分析することで、リスクコミュニケーションのための基礎的環境を把握することを主目的として実施したものである。

調査研究の実施にあたっては、明治大学の北野大教授を座長とする計5名の有識者の方々にお集まりいただいて5回に渡る調査検討会を開催し、大変貴重かつ有益なご議論・ご助言を得ながら進めた。また、調査には、数多くの一般消費者、マスメディア、出版社、生協等のご協力をいただいた。この場を借りて、調査検討会委員及び調査協力者その他関係各位に深く謝意を表する。

平成21年1月  
株式会社ノルド  
社会環境研究所

### 本調査研究事業の実施体制

堀越 秀彦	(調査研究部長	[統括者])
藺 巳晴	(主任研究員	[実施責任者])
吉川 紀子	(調査研究部主任	[実施副責任者])
土方 直美	(研究員)	
石田 由美	(研究アシスタント)	
高橋 里絵	(研究アシスタント)	



## 目 次

I 本調査研究事業の概要.....	5
II リスク認知の形成要因に関する調査.....	9
II-1 フォーカスグループインタビュー.....	9
1 調査概要.....	9
2 調査分析結果.....	15
2-1 分析結果.....	15
2-2 フォーカスグループ別の調査結果.....	31
II-2 インターネットアンケート.....	81
1 調査概要.....	81
2 調査分析結果.....	83
2-1 調査分析結果の概要.....	83
2-2 調査分析結果.....	87
III リスク認知の形成要因に影響を及ぼす情報源の調査.....	141
1 調査概要.....	141
2 調査分析結果.....	143
2-1 消費者のリスク認知の形成要因に影響を及ぼしている主な情報源と その情報内容.....	143
2-2 情報源における情報発信の考え方・方法等.....	154
2-3 訪問インタビュー調査結果.....	159
2-3-1 マスメディア.....	159
2-3-2 中学・高校家庭科資料集出版社.....	175
IV 効果的なリスクコミュニケーション手法の検討.....	183
1 調査研究結果から得られる知見.....	183
2 食品安全分野における効果的なリスクコミュニケーション手法.....	190

### 〔参考資料〕

1 フォーカスグループインタビュー 参加者プロフィール	(203)
2 フォーカスグループインタビュー 参加者募集時のアンケート	(215)
3 フォーカスグループインタビュー 当日アンケート	(219)
4 インターネットアンケート 調査票	(221)



## I. 本調査研究事業の概要

### 1. 調査研究事業の目的

- 食品に係る化学物質系ハザード（農薬、食品添加物等）と化学物質系以外のハザード（遺伝子組換え食品等）について、消費者のリスク認知の形成要因やリスク認知に影響を及ぼす情報源・情報内容等を調査・分析し、効果的なリスクコミュニケーション手法の検討に資することを目的とする。

### 2. 調査研究事業の実施概要

- 本調査研究事業では、下記に掲げる調査を実施し、その結果に基づいて、効果的なリスクコミュニケーションの考え方や手法を検討した。

#### 1. 検討会の設置

○有識者による調査検討会の設置・開催

（2. ～ 4. の調査方法及び調査結果の検討）

#### 2. リスク認知の形成要因に関する調査

①フォーカスグループインタビュー

（消費者のリスク認知及びその形成要因の定性的把握）

②インターネットアンケート

（消費者のリスク認知及びその形成要因の定量的把握）

#### 3. リスク認知の形成要因（リスク認知の根拠となる情報の内容）に影響を及ぼす情報源の調査

①文献調査、情報内容整理

（リスク認知に影響を及ぼしている主な情報源とその内容の把握）

②訪問インタビュー調査

（主な情報源における情報発信の考え方等の把握）

#### 4. 調査結果の取りまとめ

①2. 及び3. の調査結果の総合分析

②効果的なリスクコミュニケーション手法の検討

### 3. 「リスク認知の形成要因等に関する調査検討会」の設置と検討

#### (1) 調査検討会の設置

- 本調査研究事業の目的を効果的に達成するため、有識者委員によって構成される「リスク認知の形成要因等に関する調査検討会」を設置し、調査方法や調査結果についてご意見・ご助言をいただきながら調査を実施し、効果的なリスクコミュニ

ニケーション手法の考え方や手法を取りまとめた。

## (2) 調査検討会の構成

### 1) 委員

〔座長〕

北野 大 明治大学理工学部教授

〔委員〕

中嶋 康博 東京大学大学院農学生命科学研究科准教授／同大学食の安全研究センター副センター長

広田 すみれ 武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科准教授

丸井 英二 順天堂大学医学部公衆衛生学教室教授

村上 紀子 食生活ジャーナリスト（元女子栄養大学教授）

### 2) オブザーバー（内閣府食品安全委員会事務局）

小平 均 リスクコミュニケーション官

船坂 和夫 勧告広報課課長補佐

齊藤 弘志 勧告広報課リスクコミュニケーション専門官

井口 由香里 勧告広報課交流係長

### 3) 調査検討会事務局（株式会社ノルド〔社会環境研究所〕）

堀越 秀彦 調査研究部長

藺 巳晴 主任研究員

吉川 紀子 調査研究部主任

土方 直美 研究員

石田 由美 研究アシスタント

## (3) 検討経過

	日程	議事
第1回	<平成20年> 8月29日	<ul style="list-style-type: none"><li>■ リスク認知の形成要因等に関する調査及び調査検討会について</li><li>■ 食品安全委員会のリスクコミュニケーションの取組について</li><li>■ 全体調査計画の基本枠組・方向性について</li><li>■ 調査対象ハザードの設定について</li><li>■ フォーカスグループインタビューの調査実施計画について</li></ul>
第2回	10月21日	<ul style="list-style-type: none"><li>■ フォーカスグループインタビューの調査結果について</li><li>■ インターネットアンケートの調査実施計画について</li></ul>
第3回	12月8日	<ul style="list-style-type: none"><li>■ インターネットアンケートの調査結果について</li><li>■ リスク認知の形成要因に影響を及ぼす情報源の調査に</li></ul>

		ついて
第4回	12月22日	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ インターネットアンケートの調査結果の分析について</li> <li>■ リスク認知の形成要因に影響を及ぼす情報源の調査実施計画について</li> <li>■ 全体分析及び効果的なリスクコミュニケーションのあり方・提言の方向性について</li> </ul>
第5回	<平成21年> 1月15日	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 効果的なリスクコミュニケーション手法のあり方・提言について</li> </ul>



## Ⅱ. リスク認知の形成要因に関する調査

### Ⅱ-1. フォーカスグループインタビュー

#### 1. 調査概要

##### (1) 調査目的

- 化学物質系ハザード及び化学物質系以外のハザードについて、消費者のリスク認知とリスク認知の形成要因（リスク認知の根拠となる情報の内容）等を定性的に把握する。

##### (2) 調査方法

- フォーカスグループインタビューにより行なう。  
〔調査時間〕 1グループ2時間  
〔調査場所〕 専用インタビュールーム  
〔インタビュー〕 フォーカスグループインタビュー専門モデレーター  
〔記録〕 音声録音、及び記録者による詳細発言録

##### (3) 調査対象

- フォーカスグループは、1グループ6名×3グループ（合計18名）。

#### <フォーカスグループの設定>

フォーカスグループ	設定基準	1グループの構成員の内訳
①子育て最中の女性	○ 第一子が小学生までの子供がいる首都圏在住の女性6名	○ 20～30歳代を目安とし、バランスよく抽出する。 ○ 主婦とビジネスウーマンの双方を含める。
②子育て一段落の女性	○ 高校生以上の子供のみがいる首都圏在住の女性6名	○ 40～50歳代を目安とし、バランスよく抽出する。 ○ 主婦とビジネスウーマンの双方を含める。
③ビジネスマン	○ 30～40歳代の首都圏在住のビジネスマン6名	○ 30歳代、40歳代各3名ずつ。 ○ 既婚者と未婚者を概ね半数ずつ。 ○ 子供の有無を概ね半数ずつ。 ○ 業種が偏らないよう留意。

※いずれのグループでも、食生活/食品安全に対して特に関心が高い層/低い層は除外する。

※いずれのグループでも、本人又は家族が「広告・宣伝・広報」「マスコミ」「マーケットリサーチ・社会調査」「自然科学の研究者」「食品関連」「農業・漁業関連」「医療関連」の職にある人は対象から除外する。

##### (4) 調査対象者の選定方法

- 首都圏在住の一般生活者調査モニターから調査対象を有意抽出する。

- 募集用 Web サイトを構築し、調査実施機関(株)ノルド 社会環境研究所]が保有する一般生活者調査モニターへの募集メール配信等を行う。
- 募集用 Web サイトにおいて事前アンケート（別紙参照）を行うことで、応募者の中から 3 に記載の「フォーカスグループの設定」に基づいて、適切な調査対象者を抽出する。

＜食生活/食品安全に対して特に関心が高い層/低い層の除外方法＞

	除外条件
特に関心が高い層	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">除外対象回答パターン：下記全てに該当</div> <p>【食品を購入する際の重視度－安全性】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 非常に重視する</li> <li>2. 重視する</li> <li>3. まあ重視する</li> <li>4. あまり重視しない</li> <li>5. 重視しない</li> <li>6. 全く重視しない</li> </ol> <p>【食品への不安度】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 非常に不安</li> <li>2. 不安</li> <li>3. やや不安</li> <li>4. どちらともいえない</li> <li>5. あまり不安を感じていない</li> <li>6. 不安を感じていない</li> <li>7. 全く不安を感じていない</li> </ol> <p>【食品に関する行動】</p> <p>(1) できるだけ無農薬・有機食品を選んでいる。  (2) 添加物食品は、なるべく避ける。  (3) 遺伝子組換え食品はなるべく避ける。  (4) BSE 騒動の直後、牛肉を食べないようにした。</p> <p>(1)～(4) 全てについて、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 非常にあてはまる</li> <li>2. あてはまる</li> <li>3. ややあてはまる</li> <li>4. あまりあてはまらない</li> <li>5. あてはまらない</li> <li>6. 全くあてはまらない</li> </ol>
特に関心が低い層	<p>【食品を購入する際の重視度－安全性】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 非常に重視する</li> <li>2. 重視する</li> <li>3. まあ重視する</li> <li>4. あまり重視しない</li> <li>5. 重視しない</li> <li>6. 全く重視しない</li> </ol> <div style="display: flex; align-items: center; margin-top: 10px;"> <span style="font-size: 2em; margin-right: 10px;">}</span> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">除外対象回答</div> </div>

	<p>【食品への不安度】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 非常に不安</li> <li>2. 不安</li> <li>3. やや不安</li> <li>4. どちらともいえない</li> <li>5. あまり不安を感じていない</li> <li>6. 不安を感じていない</li> <li>7. 全く不安を感じていない</li> </ol> <p style="text-align: right;">} 除外対象回答</p> <p>【食品に関する行動】</p> <p>(1) できるだけ無農薬・有機食品を選んでいる。  (2) 添加物食品は、なるべく避ける。  (3) 遺伝子組換え食品はなるべく避ける。  (4) BSE 騒動の直後、牛肉を食べないようにした。</p> <p>(1) ~ (4) 全てについて、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 非常にあてはまる</li> <li>2. あてはまる</li> <li>3. ややあてはまる</li> <li>4. あまりあてはまらない</li> <li>5. あてはまらない</li> <li>6. 全くあてはまらない</li> </ol> <p style="text-align: right;">} 除外対象回答</p>
<p>特に関心が高い層/低い層 (共通)</p>	<p>【食や食生活における関心時等 (自由回答)】</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">除外対象回答</p> <p>自身や家族の特殊なファクターの提示 (体質等)  極度に特異な見解の提示 (攻撃的批判等)</p>

(5) インタビューフロー

インタビュー項目	把握ポイント	時間 (分)	累積 (分)
※当日アンケートへの記入(帰るまで)を依頼。早く来場した人には事前に記入してもらい、適宜インタビュー展開の参考とする。			
<b>1. イントロダクション</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 趣旨説明(「食品安全委員会」委託、関係者観察の旨も説明。希望者は退席可能とする。)</li> <li>● 自己紹介(職業、家族構成、よく見る雑誌・テレビ等)</li> </ul>		5	5
<b>2. 食生活や食品安全についての関心事・懸念</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 食品の購入頻度、購入場所について(募集時アンケートの回答に対する確認程度)</li> <li>● 食生活において現在あなたが関心のあることは何ですか？</li> <li>● 日頃、食生活でなにか不安に感じることはありますか？それはどんなことですか？</li> <li>● 何故不安を感じているのですか？不安を感じるのはどんな場面ですか？(ここでは、深追いしない。→3. にて。)</li> <li>● 食生活のほかに、あなたが不安を感じていることや、懸念していることはありますか？(適宜、食品以外のハザードを提示)</li> <li>● 食生活に関して感じる不安とどちらが大きいですか？それは何故ですか？食生活で感じる不安は、他の分野で感じる不安と比べて違いはありますか？</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 食品購入スタイル</li> <li>✓ 食生活のスタイル・関心</li> <li>✓ 食品分野におけるリスク認知状況(純粹想起)</li> <li>✓ 食品分野とそれ以外の分野のハザードについてのリスク認知比較</li> </ul>	20	25
<b>3. 対象ハザードに対するリスク認知の実態</b> <b>(※対象ハザードそれぞれについて質問)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ○○について、どのようなイメージ・印象を持っていますか？</li> <li>● (イメージ・印象の流れで)○○について、日頃不安を感じていますか？それは何故ですか？</li> <li>● (情報への接触が理由の場合)どのような情報源からそう思ったのですか？</li> <li>● これまでに具体的に不安だと感じた経験はありますか？それはどのような出来事ですか？</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 各ハザードのイメージ(純粹想起)と形成要因</li> <li>✓ 各ハザードに対する認識 →リスク認知構造、ハザード認識枠組の分析</li> <li>✓ リスク認知構造(感覚的判断/理論的判断)</li> <li>✓ リスク事象の特徴(被害の大きさ、発生確率の高さ、未知性、制御可能性、ベネフィット等)</li> </ul>	75  15~20 ×4	100

<ul style="list-style-type: none"> <li>● ○○について、普段、食品を購入する際や、食べる時にどの程度気にしていますか？</li> <li>● (流れで)食品選択の基準になりますか？ 具体的にどのような行動をとりますか？</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ リスク認知の形成経路 (テレビ、新聞、雑誌、インターネット、学校、消費者団体、家族・知人等) →具体的な番組名・新聞名・人物名なども把握 →情報入手の受動性・能動性を把握</li> <li>✓ 食品購入時における各リスクに対する態度・行動</li> </ul>		
<p>※「食中毒」、「保健機能食品以外の健康食品」、2の発言で出てきたハザードのイメージ、リスク認知、形成要因についても2~3の中で大まかに把握。 発言の中で自然に出てきたら、その時点でたずね、出てこなければ、対象ハザードについて一通り聞いた後、たずねる。</p>			
<p><b>4. 食品に関する情報源</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 普段、食品に関してどこから情報を得ていますか(具体的に)。どんな情報を得ていますか。</li> <li>● 食品のリスク・安全性に関する情報を得る場合に信頼できる情報源は何ですか？(適宜、例示しながら)</li> <li>● その情報を「信頼できる」と考えるのは何故ですか？</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 食品に関する情報源・接触経路</li> <li>✓ 信頼できる情報源 (例)新聞、雑誌、テレビ(報道番組、ワイドショー等情報番組)、家族・知人、学校、国、研究機関、生協、NPO等</li> <li>✓ 信頼できると考える理由 (例)科学的な根拠、中立的・公平性、情報の充実等</li> </ul>	10	110
<p><b>5. 食品分野におけるリスクに関する情報ニーズ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 食品のリスク・安全性についてどのような情報を得たいですか？</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 食品分野におけるリスクに関する情報ニーズ</li> </ul>	5	115
<p><b>6. 食品分野におけるリスクに関する情報提供等に関する意見・要望</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 最後に、あなたにとって食とは何ですか？一言で表現してください。</li> <li>● また、食品の安全性や関連する情報提供等について国に対してご意見・ご要望があれば、併せて教えてください。</li> </ul>		5	120

(6) 調査実施時期

調査日程	フォーカスグループ
平成20年9月18日	① 子育て最中の女性
平成20年9月19日	② 子育て一段落の女性
平成20年9月19日	③ ビジネスマン

(7) 分析方法

- フォーカスグループインタビューの記録者により作成された詳細発言録をローデータとして、以下の定性的内容分析を行う。
  - ・リスク認知及び形成要因（各インタビュー項目）についての全体の傾向分析
  - ・リスク認知及び形成要因（各インタビュー項目）についてのグループ別の傾向分析
  - ・リスク認知及び形成要因（各インタビュー項目）についての各グループにおける参加者の属性・背景別の傾向分析
- インタビューの観察によって参加者の態度・声色等を含む場の雰囲気把握することにより、詳細発言録のデータに過度の意味を付与しないよう調査結果の妥当性の検証を行ないながら分析を行う。

## 2. 調査分析結果

### 2-1. 分析結果

※囲み内で引用しているのは調査対象者の発言内容である。発言末尾括弧書きの数字とアルファベットは、それぞれグループ（1：子育て最中女性、2：子育て一段落女性、3：ビジネスマン）と当該グループにおける参加者記号（末尾参考資料の参加者プロフィール参照）を示す。

#### （1）食生活や食品安全についての関心時・懸念／他分野ハザードとの比較

##### 1) 食生活における関心時・懸念

- 食生活における関心時・懸念、不安として、全体に、中国産食品問題、国産食品の選択、事故米問題、産地偽装問題、食品表示の信頼性など、最近の食の安全に関する事件・事故に関する話題が挙げられている。
- 「子育て最中女性」（20-30代）では、夫より子供の食生活が気にかけているのに対して、「子育て一段落女性」（40-50代）では、家族全体が気をつけられ、夫と子供が半々の比重になっている。
- グループ（男女）を問わず、子供がいる人は、子供の食生活が気にかかっている。

全体傾向		
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 中国産食品問題。国産食品の選択。               <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 中国産冷凍餃子。自分が買うときに原産国を気にしたことはなかったが、最近中国産は不安。(3D)</li> <li>➢ 輸入品を買わないようにしている。農薬の問題。船便であんな状態で届くのはいやだ。(2A)</li> <li>➢ TVで中国産野菜の農薬、粉ミルクの話を知ると、外国産を買うのに抵抗あり。ちょっと高くても国産を買いたい。(1B)</li> </ul> </li> <li>● 事故米問題。               <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 酒が好きなので、毎日の事故米報道は気になる。(1C)</li> <li>➢ 事故米。饅頭などにどんどん広がっているのを見て、自分も食べているかもしれないとドキドキ。(2C)</li> <li>➢ 汚染米。米だけでなく酒にも使われていたので心配。芋焼酎にも関係がある。汚染米に関係ある焼酎を飲んでいたので気になった。(3F)</li> </ul> </li> <li>● 産地偽装問題、食品表示の信頼性。               <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ ウナギが大好き。産地偽装問題があったが、そういう裏の面は消費者には見えない。それ以降、パッケージの裏面を見ても本当のことは書いていないように見え、デパートで買ったものやウナギ専門店でもしか買えなくなった。(1C)</li> <li>➢ 正しい情報がほしい。情報が与えられても嘘であることがある。表示があっても「本当か?」と疑ってしまう。(2D)</li> <li>➢ 偽装。でも自分が当たってしまったらしょうがないのか、というレベル。(3B)</li> </ul> </li> </ul>		
①「子育て最中女性」傾向 (20-30代)	②「子育て一段落女性」傾向 (40-50代)	③「ビジネスマン」傾向 (30-40代)
● 夫より子供の食生活。	● 家族の食生活のバラ	

<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 夫の食生活より、子供の食生活が大事。(1全)</li> </ul>	<p>ス。夫と子供は半々。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ メタボリック対策。私自身は肉が嫌いなのでよいが、夫は肉も魚も酒もお菓子も食べる。(2A)</li> <li>➤ 家族が外で食べたもののメモを見て、全体のバランスに配慮。(2D)</li> <li>➤ (夫の食事と子供の食事、どちらに気を使うか) 夫と子供半々。(2全)</li> </ul>	
<b>その他属性・背景別傾向</b>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 【子供あり】子供の食生活。子供の食品添加物、農薬、有害物質の摂取忌避。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 知らぬ間に体内に蓄積される有害物質や農薬は目に見えない。幼児や成長期の子供の脳や体に影響が出ると心配。(1A)</li> <li>➤ 出産後、添加物が少ないものを買うようになった。(1F)</li> <li>➤ 子供がアトピーだったので添加物や輸入品を極力避けるようになった。家で作るものに関しては気をつけている。裏の表示を見ている。(2E)</li> <li>➤ 子供が成長期なので農薬を避けたい。(3A；子供あり)</li> <li>➤ 娘の中学校の厨房でガス中毒が起こり、一週間給食が止まり、弁当を持っていった。夏に朝から弁当を持って行っても大丈夫なのかと思った。(3C；子供あり)</li> </ul> </li> </ul>		

## 2) 食生活以外の不安

- 食生活以外には、全体に、環境問題、エネルギー問題、自然災害について不安感が示されている。
- 「子育て最中女性」(20-30代)では格差社会、「子育て一段落女性」(40-50代)では医療費、年金と家計や健康に関わること、「ビジネスマン」では犯罪、日中関係と社会に関わることを挙げる人もいる。

<b>全体傾向</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 環境問題、エネルギー問題。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ エコが叫ばれている。自分もエコバッグ持参、ゴミ分別など自分にできている。自分の子供が大きくなったときのことを考えると、変になった気象などが不安。子供がかわいそう。(1E)</li> <li>➤ 気候の変化(2C)</li> <li>➤ エネルギーの枯渇。原子力に頼るようになったら余計危ないのではないか、将来のエネルギーはどうなるのか。(3A)</li> <li>➤ 環境問題などのほうが心配。(3D)</li> </ul> </li> <li>● 自然災害。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 自然災害。台風やゲリラ豪雨などを経験して、環境がどんどん壊れていくのを目の当たりにした。毎年どうなっていくのか恐ろしい。(2E)</li> <li>➤ 地震のほうが気になる。(2C)</li> <li>➤ 災害が心配。(3E)</li> </ul> </li> </ul>	

①「子育て最中女性」傾向 (20-30代)	②「子育て一段落女性」傾向 (40-50代)	③「ビジネスマン」傾向 (30-40代)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 格差社会。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 格差社会。・・・中略・・・貧乏人が貧乏のスパイラルから抜け出せない社会になっているような気がする。(1A)</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 医療費、年金。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 医療費。週末介護で夫の両親を見ているが、後期高齢者医療費はわけがわからない。(2B)</li> <li>➢ 年金がすごく気になる。どれくらい貰えるのだろうか。(2D)</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 犯罪。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 外国人による放火、盗難等の犯罪。家の近所でそういう事件が頻発。(3C)</li> <li>➢ 犯罪。突然刺されるといったことが最近ある、いつ刺されるかもわからない。(3E)</li> </ul> </li> <li>● 日中関係。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 中国が不安。国籍不明の潜水艦も出てきたりしている。(3F)</li> </ul> </li> </ul>
その他属性・背景別傾向		
-		

### 3) 食生活に対する不安とそれ以外の不安の違い

- 食生活と食生活以外の不安を比較すると、食生活が一番不安なことではないとの声がある。
- 食生活は“毎日に関わること”と日常性に言及する人が多い。日常性を根拠に、気にしきれない、大丈夫だろう等と捉える人もいる一方、「子育て最中女性」(20-30代)では頻繁に不安を感じると捉える人もいる。

全体傾向		
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 食生活が一番不安なことではない。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 食生活が最高に不安だ、とはいえない。この夏のおかしな気象や雷を不安に思う。(1F)</li> <li>➢ 食品より、災害が心配。(3E)</li> </ul> </li> <li>● 食生活は毎日に関わること。しかし今のところ何とかなっている(今まで大丈夫だからおそらく大丈夫だろう、気にしてもキリがない、自分でも気をつけられる)。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 食べることは毎日のこと、三度三度、半永久的に続くもの。だから日常なこと。心配していながら、焦って何かしようと思っではない。(2C)</li> <li>➢ 食べ物は毎日口にするものなので気になるところだが、あまりひどい目にあったことがないので、今後を考えると環境問題などのほうが心配。(3D)</li> <li>➢ 常に注意しなければならないのがつらい。自分は注意していないかもしれない、でも今のところなんとかなっている。(3F)</li> </ul> </li> </ul>		
①「子育て最中女性」傾向 (20-30代)	②「子育て一段落女性」傾向 (40-50代)	③「ビジネスマン」傾向 (30-40代)
● 食生活は頻繁に不安を感じる。食いつく。		

<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 食生活は毎日に関わる。買い物などいろいろな際に不安を感じる。(1C)</li> <li>➤ 食生活は毎日のこと。年金などの話は耳に入ってきてても人ごとのように思える。食いつき方が違う。(1D)</li> </ul>		
その他属性・背景別傾向		
—		

## (2) ハザード別のリスク認知の実態

### 1) 農薬

- 農薬に対するイメージ（リスク認知）を尋ねると、全体に、虫を殺す・寄せ付けない、健康を害する・怖い、中国産など輸入されたものは不安と捉えられている。
- また、“農薬も困るが、虫だらけも困る”等、リスクーベネフィット的な枠組みで判断している人も多い。
- 農薬に対するイメージについて理由（リスク認知の形成要因）を尋ねると、虫が死ぬから人間にも害があると類比的理解が示されているほか、生産者の態度、身の周りの経験、周囲の影響、マスメディアの影響を挙げる人が多い。
- 食品購入時の態度（リスク認知・受容性）を尋ねると、できるだけ低農薬、無農薬という人もいる一方で、低農薬、無農薬は高いので、低コストのほうを選択するという人もいる。
- 女性2グループに共通に見られる傾向として、蓄積性による健康影響に不安感が示されている。
- 「ビジネスマン」（男性）では、ほか（女性）より“それほど気にならない”と受容性を示す傾向が強い。また、基準値の存在や問題が発生していないことなどから受容できると捉える人が多い。

全体傾向
<p>【農薬に対するイメージ、リスク認知】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 虫を殺す、虫を寄せ付けない。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 虫を殺すもの。(1F)</li> <li>➤ 虫が寄り付かない効果がある。(2A)</li> </ul> </li> <li>● 健康を害する、怖い。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 農薬には怖いイメージがある。(2D)</li> <li>➤ 自分の口に入ると害がある。(3C)</li> </ul> </li> <li>● 農薬も困るが、虫だらけも困る。虫が出てくるのを覚悟で無農薬作物を買う。農薬の効果を認めて、ある程度は仕方がない。</li> </ul>

- 消費者としては、農薬の使いすぎも困るが、虫だらけも困る。(1A)
- 無農薬作物があれば迷わずそれを買う。私は作物の形が悪くてもどれだけ虫食いででも気にしない、虫が出てくるのを覚悟している。(2D)
- 害虫を防ぐのだからいいわけではないが、野菜を作るうえでは仕方ない。(3E)

- 中国産など輸入されたものは不安。

- 国産は安心だが、中国産野菜は速成のために基準中の5倍もの薬品を使っている、とニュースで見た。信じられない。(1A)
- 日本で作っている野菜は信用できる、基準値を満たした害のない程度の量だから問題ない。しかし中国はじめ外国では日本で使えないような農薬を使っているのが怖い。(3D)

【リスク認知の形成要因】

- 虫が死ぬから、人間にも害がある。

- 虫が死ぬ＝害がある。(1B)
- 虫が死ぬのだから、同じ生物である人間にいいわけがない。(3F)

- 農家自身の言葉、摂食態度による。

- 農家の人たちも農薬を使うと体調が悪くなると言っていた。自分たちが食べる分には使わず、出荷分だけに使うと聞いた。やはり形が悪くても無農薬を使いたい。(1A)
- 農家は、自分たちが食べる分に農薬を使わないと聞いた。そう聞くと気をつけたいと思える。(3A)

- 身の周りの経験・体験や家族など周囲の人からの影響による。

- 父から「虫が食べている野菜は安心」と言われてそういうものに慣れていた(1A)
- おじが大きな農家をしているが、マスクをかけて背中にタンクを背負って農薬をまいていた。緑の葉が白っぽくなっているのと、散布時のマスク姿を見て、吸ってはいけないもの、毒なのだ、と小さいころから思っていた。(1D)
- 私も無農薬の野菜を少し作っているが、薬品を使わないと形も悪いし虫や鳥によく食べられてしまう。(2B)

- テレビ、新聞、週刊誌等の報道、映像、記事から。

- 中国産野菜は速成のために基準中の5倍もの薬品を使っている、とニュースで見た。信じられない。(1A)
- 一部週刊誌の記事で「出荷するものと農家で食べているものは違う」と聞いて驚いた。(2C)
- 中国の野菜の作り方は日本の20~30年前の状態。だから中国の人は洗剤で洗ってから食べている。テレビの映像でそういうものを見て怖いと思う。(2B)
- 中国は滅茶苦茶で、よく新聞記事などで「毒が」ということを読む。(3A)

- 昔に比べれば、今のほうがよい。

- 子供のころ、今とは比べ物にならないほどの農薬をまいていた。それに比べたら今は少ない。(2B)
- 昔のほうが農薬の環境が悪かったが、それでもなんともない。今はもっと技術が進んでいるので大丈夫だろう。(3E)

【食品購入時の態度】

- できるだけ低農薬、無農薬が望ましい。

- できれば有機栽培、無農薬、低農薬の食品だけにしたい(1A)
- 低農薬が望ましい。(2C)

<ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 虫もいやだが、無農薬のほうが嬉しい。・・・中略・・・無農薬でなくても、間をとって低農薬野菜ならいいと思う。(3F)</li> <li>● 無農薬、低農薬は高いので、ある程度は低コストのほうを選択する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ できれば有機栽培、無農薬、低農薬の食品だけにしたいが、経済的な問題があるので、ある程度割り切ってしまう。特売品も買ってしまう。妥協し、バランスをとりながら買っている。(1A)</li> <li>➢ 無農薬野菜は高いので、その値段を考えると多少はしょうがない。健康を害さない程度だろうと信頼している。(3E)</li> </ul> </li> </ul>		
①「子育て最中女性」傾向 (20-30代)	②「子育て一段落女性」傾向 (40-50代)	③「ビジネスマン」傾向 (30-40代)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 【女性】蓄積性による影響が不安。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 有害物質は脂肪に蓄積されると聞き、太っている自分は危ないと思った。(1A)</li> <li>➢ 微量であっても、食べ続けるとだんだん蓄積されるものだと思っている。(1B)</li> <li>➢ 長年摂取することによって健康に何かしらのよくない影響を与えそう。(1E)</li> <li>➢ 蓄積されると体によくないと思う。(1D)</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 【女性】蓄積性による影響が不安。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 蓄積されているという不安がある。(2A)</li> <li>➢ サプリメントの広告で、「このサプリでそういうものを排出しましょう」という情報を見た。だから「溜まるのかな」と思っている。(2D)</li> <li>➢ ある一定の量を積み重ねて摂ると肝臓が処理しきれなくなり、何かが出てくるのではないだろうか。(2F)</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● それほど気にならない。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 特に強いものを使っているとは思わないので、健康不安はない。(3B)</li> <li>➢ 基準値を満たした害のない程度の量だから問題ない。(3D)</li> <li>➢ 逆に虫がいると安全なのかと思える。(3D)</li> <li>➢ 気にしていない。昔のほうが農薬の環境が悪かったが、それでもなんともない。(3E)</li> </ul> </li> <li>● 基準値の存在や、曝露による問題・出来事の不存在から受け入れられる。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 最低限、日本の農薬の基準ならしょうがないと思う。(3A)</li> <li>➢ 特に強いものを使っているとは思わない(3B)</li> <li>➢ ふつうの野菜を食べておかしくなったこともないし、そういう話を聞いたこともない。(3D)</li> <li>➢ 害があったら売っていないだろう、一応安全な基準なのだろう。(3F)</li> </ul> </li> </ul>
その他属性・背景別傾向		
(グループ別の傾向参照)		

## 2) 食品添加物

- 食品添加物に対するイメージ（リスク認知）を尋ねると、全体に、味、見栄え、保存をよくするとベネフィットも認識されているが、体によくないイメージも持たれている。
- 食品添加物に対するイメージについて理由（リスク認知の形成要因）を尋ねると、マスメディアや警告的な一般書籍の影響、周囲の影響を挙げる人が多い。
- かつて安全とされたものが後から禁止されるなど安全性評価が不安定、影響がよく分からないとの認識を示す人も多い。
- 食品購入時の態度（リスク認知・受容性）を尋ねると、食品添加物は避けようがないとの認識を示しつつも、着色料など種類によって避けている人もいる。
- 無添加はおいしくない、高いことから、必ずしも選ばないといったリスクーベネフィット的な判断をしている人もいる。
- また、分からない添加物や、表示対象外の存在などから、判断することが困難であるとの認識を示す人も多い。
- グループ別にみると、「子育て最中女性」（20-30代）では受け入れられない、子供には食べさせない、「子育て一段落女性」（40-50代）では子供が小さいときは避けていた、「ビジネスマン」（男性）ではそれほど気にならないという傾向が特徴として挙げられる。

### 全体傾向

#### 【食品添加物に対するイメージ、リスク認知】

- 味、見栄え、保存をよくする。
  - 風味をよくし、色鮮やかに、というイメージがある。(1A)
  - 保存。見栄えをよくする。色、日持ち。味も。(1E)
  - 保存をよくしたり色をきれいにしたりするのだと思う。(3E)
- 体によくないイメージ。
  - どれだけ人体に害を及ぼすかわからず、漠然と怖い。(1C)
  - 食品添加物はいけないと思う。体にいい食品添加物もあって、悪いものばかりでないと知っているが、それでもなんか悪いものというイメージ。(2D)
  - いいとはいえない(3E)
- 農薬ほどは怖くない。
  - 農薬と異なり、死に至ることはないのでそこまでは怖くない。(1C)
  - いいとはいえないが、体に思いっきり害があるイメージは農薬より低い。(3E)
- かつて安全とされたものが後から禁止されるなど安全性評価が不安定、影響がよく分からない。
  - 人体にどのような影響が出るのか本当のことはまだわからない。また、昔はよかったが今は禁止されたものもあり、評価が非常に不安定なものだ。(1A)
  - そのときどきでいけないものとして槍玉に挙がるものがある。だからやはり食品添加物はいけないと思う。(2D)
  - 単品では無害かもしれないが、複数摂ることで変な反応が起こり有害になること

があるかもしれない。(3F)

#### 【リスク認知の形成要因】

- テレビの報道番組、ドキュメンタリー映画、番組で紹介された研究論文紹介を見て。
  - アメリカの研究論文で、「添加物を大量に食べ続けると前頭葉に蓄積され、きれやすく情緒不安定になるのではないか?」というものがあつた。テレビの外国の報道番組でやっていた。(1A)
  - 映画「スーパーサイズ・ミー」も見た。もしかすると遺伝子に影響を及ぼし、将来の人間に影響を及ぼすのではないか。(1A)
  - 「添加物は味覚がおかしくなる、味をよくしている、色を変えたりする」という特集を夜7時ごろからのNHKの特集で見た。(1C)
- 危ないと警告している一般書籍などを読んで。
  - 何年前、「この添加物が危ない」といった内容の単行本を書店でちょっとだけ読んだ。どんな添加物がどういう害を及ぼすか書いてあり、怖くなった。(1E)
  - 「危ない食品」というような本を図書館で読んだ。読むと何も食べられなくなるので、気にしないようにしつつ、すごく悪いと書いてあるものは避ける。(2E)
- 身の周りの経験（経験がないこと）から。年配者や周囲の管理栄養士、学校教育など周囲の人からの影響による。
  - 都市伝説のように「添加物を食べるとアトピーになる」などの年配の意見を聞く。「ならばよくないのだ」と思うようになった。(1B)
  - 小学校の家庭科で「赤い着色料がどうのこうの」と言われたような気がする、そこからのイメージではないか。(1D)
  - 姉2人が管理栄養士。「添加物はなるべく入っていないものを選ぶように」とよく話している。(1E)
  - 身近に事件もないし、添加物を食べてどうなるという情報もないので、安心して食べているのだと思う。(3B)

#### 【食品購入時の態度】

- 食品添加物は避けようがない。
  - パッケージ裏を見て、全く入っていないものを買うこともあるが、だいたい何か入っているので、割り切って買うことが多い。(1E)
  - 避けて通れない。入っていないものはない。(2C)
  - 入っていないものを探すほうが難しいので、気にしていない。(3B)
- 着色料など添加物の種類によっては避ける。
  - 保存料が使われていないハンペンはないが、着色されていないウインナーはある。選べるものは選ぶ。(2A)
  - 添加物によって決める。やばそうな添加物が入っていたら避ける。合成着色料たっぷり、過酸化水素など、いかにも体に毒々しい感じのものが入っていたら避ける。(3C)
- 分からない添加物や、表示対象外の存在など、判断することが困難。
  - カタカナでずらっと並べられているものの内容がわからない。(1F)
  - 「カロリーゼロのコーラ」はカロリーゼロではないとテレビで見てしまった。ある程度以下ならゼロと表示できるということだった。そういう例が非常に多い。(2B)
  - 自分が知っている保存料なら判断できるが、わからないもののほうが多い。(2B)
  - たぶん表示されていないものがあるはず。(2F)

<ul style="list-style-type: none"> <li>● 無添加はおいしくない。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 私自身、無添加のものを食べてもおいしくないと思うが、子供には我慢して食べてもらうようにしている。(1B)</li> <li>➢ 無添加は味が薄そうなイメージあり。味が濃いのが好きなのであまり選ばない。(3B)</li> </ul> </li> <li>● 無添加は高いのであまり買えない。無添加が高ければ買わない。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 無添加は値段が高いのでしょっちゅう買うことはできない。(2E)</li> <li>➢ (無添加のほうが高かったら) たぶん買わない。無農薬なら少し高くても買うが、無添加ではそう思わない。(3E)</li> </ul> </li> </ul>		
①「子育て最中女性」傾向 (20-30代)	②「子育て一段落女性」傾向 (40-50代)	③「ビジネスマン」傾向 (30-40代)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● あまり受け入れられない。(食べていても安心はできない。子供には食べさせない。) <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ とにかくそういうものを使っていない天然のものを食べていけばよいと思う。(1A)</li> <li>➢ (摂取量さえ守っていれば絶対安全、という科学的根拠があれば?) だから安心、とはいえない。(1全)</li> <li>➢ 子供だけが食べるものは、添加物が入っていないものを選ぶ。若干高くても。(1B)</li> <li>➢ みんな安心しきれないままに食べているのだと思う。(1D)</li> <li>➢ そのままで食べず、いろいろ付け加える理由を考えると疑問が湧いてくる。(1F)</li> </ul> </li> <li>● 教育や周囲の人からの影響から悪い印象。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ (全体傾向の【リスク認知の形成要因】参照)</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 子供が小さいときは勉強して避けていた。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 子供が小さいころ、本を読んで少し勉強した。何も使わなくてもいいと思う。(2A)</li> <li>➢ 子供が小さいころは無香料・無着色を買っていた(2B)</li> <li>➢ 子供が小さいときは本を読んで勉強し、避けていた。(2E)</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● それほど気にならない。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ ある程度しょうがない。(3A)</li> <li>➢ 入っていないものを探すほうが難しいので、気にしていない。(3B)</li> <li>➢ 全く気にしていない。(3E)</li> <li>➢ 農薬は体に悪いイメージがあるが、添加物が体に悪いというイメージを持ったことがなかった。(3E)</li> </ul> </li> <li>● 曝露による問題・出来事がないから受け入れられる。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 昔から農薬や添加物の野菜を食べて死んだという話は聞かないから、ある程度しょうがない。(3A)</li> <li>➢ 身近に事件もないし、添加物を食べてどうなるという情報もないので、安心して食べているのだと思う。(3B)</li> <li>➢ 食べて何か変になった事件も聞いたことはない。(3D)</li> </ul> </li> </ul>
その他属性・背景別傾向		
—		

### 3) 遺伝子組換え食品

- 遺伝子組換え食品に対するイメージ（リスク認知）を尋ねると、全体に、なんとなく怖い、人体への影響が明らかになっていない、自然界にないもの・人為的と捉えられている。
- 遺伝子組換え食品に対するイメージについて理由（リスク認知の形成要因）を尋ねると、「遺伝子組換えでない」の表示が危険であることを示唆すると論理的に捉える人や、「遺伝子」という言葉から怖さが連想されるとイメージ的に捉える人がいる。また、マスメディアの否定的論調の影響を挙げる人も多い。
- 食品購入時の態度（リスク認知・受容性）を尋ねると、なんとなく避けるという態度をとる人が多いが、知らずに食べているものは仕方ないとの認識を示す人もいる。
- 「ビジネスマン」（男性）では、よく分からないが故に不安であると未知性を根拠にリスク認知をしている点が特徴的である。

全体傾向
<p>【遺伝子組換え食品に対するイメージ、リスク認知】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>● よく分からないが、なんとなく怖い。<ul style="list-style-type: none"><li>➢ なんとなく怖い。(1A)</li><li>➢ よくわかりもしないのに不安だけが煽られていて、遺伝子組み換えでないものを選んでいれば安心という感覚。(2D)</li><li>➢ よく分からないので、どんな害があるのか想像もつかず怖い。(3D)</li></ul></li><li>● 人体への影響が明らかになっていない。<ul style="list-style-type: none"><li>➢ 人体に入ったときにどういう影響を及ぼすのかまだ結果がわからないという。(1A)</li><li>➢ 企業で研究をして人に食べてもらっていると書いてあった。試されているのか、モルモットのような感じなのか、死ぬ危険もあるのではないかというイメージを持った。(1C)</li><li>➢ 遺伝子組み換え食品はそう長く経っていないので、全て検証しているとは思えない。10年経って何かがあったらいやだから、そういう食品を選ばない。(3A)</li></ul></li><li>● 自然界にないものを人為的に生み出している。これを人体に摂り入れるのは不安。また倫理的違和感がある。<ul style="list-style-type: none"><li>➢ 遺伝子組み換えは自然界にないもの、人間が勝手にやっているもの。それが人体に入るとどうなるかと思うと怖い。(1B)</li><li>➢ 「手間を省きたいとか利益追求のために人間の都合のいいようにやったらいつか罰が当たる」といった類の感覚。人間がそこまでやってはいけないと思う。(1A)</li><li>➢ 人間が侵してはいけないような気がして怖い。(2D)</li><li>➢ 遺伝子を組み替えるということは、今までなかったものを生み出す感じ。それが人体に入って大丈夫なのだろうか。(3D)</li></ul></li></ul> <p>【リスク認知の形成要因】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>● 「遺伝子組換えでない」という表示が、遺伝子組換えは危険であることを示唆する。<ul style="list-style-type: none"><li>➢ パッケージに「遺伝子組換えでない」とわざわざ書いてあるということは、組み</li></ul></li></ul>

<p>換えは悪いのだろうと思う。(1D)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ スーパーで「遺伝子組み換え食品は使用していません」と書いてあるのでよほど悪いのだろうと思う。(3D)</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 「遺伝子」という言葉の連想から怖さが喚起される。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ クローンと遺伝子組み換えが同じに見える。工場の中で全く別な材料から大豆が作られているような感じ。全く大豆が使われていない豆腐、という感じ。(2B)</li> <li>➤ 遺伝子という言葉には、たとえば子供が不自由な体で生まれてくる、などのイメージあり。自分たちの遺伝子にも影響が及ぶのではないかという不安を持つ。(2D)</li> <li>➤ 遺伝子組換えという言葉にどこかでマイナスのイメージがあるから、言い方を変えればよい。「遺伝子」を「組み替える」という言葉がマイナス。(3B)</li> </ul> </li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>● テレビの情報番組・ワイドショー、報道番組や新聞等における否定的、警鐘的論調に接して。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 「品種改良のためばかりでなく、全く違うものの遺伝子を持ってきて作るので人体への影響がまだわからない」というのを見た。やはり怖いと思った。・・・中略・・・たしかでないのに大量に出回っているのに警鐘を鳴らす番組だった。(1A)</li> <li>➤ いつも読んでいる新聞の記事(読売)で読んだ程度。新聞の記事には「少し怖い」と書いてあった。(1C)</li> <li>➤ 世間一般的に「遺伝子組換えが悪い」という論調の報道ばかりだと思う。ニュースやワイドショーで見たと思う。自分で何が悪いのか悪いのかわかっていないのに、そうでないものを選んでしまう。(2F)</li> <li>➤ ちょっと前に遺伝子組換え食品のニュースをよくやっていた。(3D)</li> </ul> </li> </ul> <p><b>【食品購入時の態度】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● なんとなく、できるだけ遺伝子組換え食品は避ける。「遺伝子組換えでない」を選ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ なるべく遺伝子組み換え食品でないものを買っている。なんとなく怖い。(1A)</li> <li>➤ 遺伝子組換えでないものを手に取る習慣になっている。(2B)</li> <li>➤ 書かれていないものを食べてしまうのはしょうがないが、書いてあれば遺伝子組換え食品でないのを選ぶ。(3A)</li> <li>➤ わからないから避けたい。そう思い込んでしまっている。(3E)</li> </ul> </li> <li>● 知らずに食べているものは致し方ない。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 考え過ぎると何も食べられなくなる。半分頭の中から閉め出して、食べたいお菓子があれば、外国のもので遺伝子組換えだとしても気にせず食べる。(2C)</li> <li>➤ 知らずに食べているものはしょうがない、考えない。(3D)</li> </ul> </li> </ul>		
①「子育て最中女性」傾向 (20-30代)	②「子育て一段落女性」傾向 (40-50代)	③「ビジネスマン」傾向 (30-40代)
—	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>● よく分からないが故に不安。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ わからないから食べたくない。(3A)</li> <li>➤ よくわからないので、どんな害があるのか想像もつかず怖い。(3D)</li> <li>➤ 怖いのか安全なのか判断できない。不安がある。(3E)</li> <li>➤ わからないから避</li> </ul> </li> </ul>

		けたい。(3E)
その他属性・背景別傾向		
—		

#### 4) BSE

- BSEに対するイメージ（リスク認知）を尋ねると、全体に、事件発生当時は怖くて牛肉食を回避したという人が多い。また、米国産又は輸入を除き、現在はあまり気にしていないという人も多い。女性では、今も不安、今も避けているという人が散見される。
- BSEに対するイメージについて理由（リスク認知の形成要因）を尋ねると、一連の出来事・事件の報道が挙げられ、逆に最近はあまり報道がないとの認識から不安感が下がっているという人もいる。
- 食品購入時の態度（リスク認知・受容性）を尋ねると、産地を確認して、できるだけ国産牛を選択し、米国産牛は避け、輸入牛ならオーストラリア産を選択しているというのが典型的である。

全体傾向
<p>【BSEに対するイメージ、リスク認知】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 事件発生当時は怖くて牛肉食を回避した。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 騒動があったころは牛肉、ユッケは食べられなかった（1D）</li> <li>➢ BSE騒ぎのときは食卓から牛肉がピタッと消えた。（2A）</li> <li>➢ 一時期は避けた（3D）</li> </ul> </li> <li>● 米国産又は輸入を除き、現在はあまり気にしていない（但し、女性の中には今も不安との意見が散見）。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 今は「自分には関係ない」ぐらいに軽く考えてしまっているのかもしれない。（1A）</li> <li>➢ 本当の国産なら私はいいが、未だに輸入物は買えない。（2E）</li> <li>➢ あまり気にしていない。食べに行っている。・・・中略・・・なるべく国産を食べる。あるいはポスター等で産地を確認するようになった。どこの牛かが気になる。（3B）</li> </ul> </li> </ul> <p>【リスク認知の形成要因】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● テレビや新聞等での一連の事件報道によって報じられた人体への影響や販売中止等の出来事から。また逆に、最近はあまり報道もないから。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ TVで、牛が立てずふらふらしているのを見た。人間も同じになると聞き、衝撃を受けた。食べてあんならどうしよう、と思った。（1B）</li> <li>➢ 吉野家一日だけ復活の日、人がたくさん並んでいたし、新聞に載ったのを見て、世間に与える影響は大きいと思った。（1E）</li> <li>➢ アメリカにアルツハイマー患者がとても多い、それは結局狂牛病だろうといわれている、とテレビのニュースで聞いた。私も、そうかな、と思っている。（2E）</li> <li>➢ ニュースでもあまり聞かないから。平気で牛肉を食べている。（3B）</li> </ul> </li> </ul> <p>【食品購入時の態度】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 産地を確認して購入。できるだけ国産牛を選択。米国産牛は避け、輸入牛はオーストラリア産を選択。</li> </ul>

<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ まだアメリカ産は怖いというイメージあり。和牛は高いのでオーストラリアぐら いのを買っている。(1D)</li> <li>➤ 今でも不安。でも食べたいので、オーストラリアビーフを買ってしまう。そちら が危なくなったらどうなるかと思ひながら、目をつぶっている。(2C)</li> <li>➤ 牛肉に関しては、国産はある意味安心感あり。(2D)</li> <li>➤ アメリカの管理体制はいい加減だろうから、ぜったい買わない。オーストラリア のなら買う。第一優先が国産、次がオーストラリア、それがなければ買わない。(3A)</li> </ul>		
①「子育て最中女性」傾向 (20-30代)	②「子育て一段落女性」傾向 (40-50代)	③「ビジネスマン」傾向 (30-40代)
—	—	—
その他属性・背景別傾向		
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 【女性に散見】今も不安。今も避けている。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 私は今でも買っていない、食べる頻度がすごく減った。(1C)</li> <li>➤ 今でも不安。(2C)</li> <li>➤ 不安はずっとある。(2F)</li> </ul> </li> </ul>		

#### 5) その他

- 食中毒は普段それほど気にしていないという人が大半である。
- いわゆる健康食品については、関心がないという人も多いが、関心がないとい  
う人を除くと不安は感じられていない。

全体傾向		
<p>【食中毒に対するリスク認知】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 普段、それほど気にしていない。特に自分で調理する分には不安はない。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 自分で調理している分には起きないだろうが、外食では起きうるのだと思ひ、怖 くなった。日々の生活で怖いと思うほどではない。(1C)</li> <li>➤ あまり不安は感じていない。(2D)</li> <li>➤ 自炊しているが、食中毒になったことはない。(3F)</li> </ul> </li> </ul> <p>【いわゆる健康食品（特保以外）に対するリスク認知】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● （関心がないという人を除いて）不安は感じない。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ カプセルに「豚由来」などと書いてある。細かく書いてあるので、きちんと研究、 管理されていると思ひて買っている。その安心感がある。(2C)</li> <li>➤ 体によくはないという不安は全くない。ユンケルは効果がわかっているの で、体に悪い不安は全くない。(3B)</li> <li>➤ 効かないのではないかと考えることはあるが、悪くなると考えたことはない。 (3E)</li> </ul> </li> </ul>		
①「子育て最中女性」傾向 (20-30代)	②「子育て一段落女性」傾向 (40-50代)	③「ビジネスマン」傾向 (30-40代)
—	—	—
その他属性・背景別傾向		
—		

### (3) 食品に関する情報源

- 食品に関する情報源、情報取得方法を尋ねると、全体に、ニュース番組、インターネット上のニュース（特に男性）、テレビの情報番組・ワイドショーを挙げる人が多い。
- 食品に関して信頼できる情報源を訪ねると、国の情報は信頼できるが分かりにくい、遅い、当たり障りがないと認識されている一方、テレビなどマスメディアの情報は、あまり信頼できないが、印象に残る、分かりやすい、面白い、結果的に信じてしまうという。
- 「子育て一段落女性」（40-50代）では、大学・専門家・第三者機関が信頼できるとの声が挙がった。

#### 全体傾向

##### 【食品に関する情報源、情報取得方法】

- テレビのニュース番組（夕方、深夜、早朝）、ニュース番組の中の特集。
  - 夕方は子供が横でうるさくてテレビに集中できないから、夜遅くの番組を見ている。報道ステーションなどを見ていて、その中で取り上げられれば見る。(1D)
  - 子供と一緒に寝て、朝4時、5時から起きだしてワイドショーを見ている。(1F)
  - 報道特集や「バンキシャ」の食品特集で見ることがある。最近は汚染米ばかり。(2F)
  - 23時台のテレビニュースを聞き流しながら、気になった部分を聞いている。(3B)
- インターネット上のニュースサイトや、ポータルサイトからの検索（特に男性）。
  - 会社のイントラネットで、「日経クリッピングニュース」といって、各紙の情報の載ったサイトを項目別に見ることができる。手の空いた時間にそれを見ていろいろな情報を得ている。(1F)
  - まず新聞、次にテレビを見て、興味を持ったらネットで調べる。・・・中略・・・「食品」というキーワードではたくさん出てき過ぎるが、YAHOO ニュースならリンクからニュースに入ることができるのでよく利用する。(2A)
  - インターネットで検索して調べる。(3A)
  - ブログ系や、2ちゃんねるで調べることが多い。(3D)
- テレビの情報番組、ワイドショー。
  - (みのもんたのような「これを食べるとよい」といった番組も) よく見る。・・・中略・・・主にワイドショーなどの情報番組。(1A)
  - 女性向け情報番組で「これが体にいい」とわかる。映像で情報を仕入れることが多い。(2B)
  - ワイドショーがいちばん。ニュースはさっと流すだけだが、ワイドショーではセンセーショナルに「この食品はこれがいけない」とかやっている。それをよく見る。(2D)
  - (※みのもんたの番組なんか見ない。もうちょっと年代が上の人が見るもの。(2全))
  - ワイドショー。土日のワイドショー。サンデーモーニングとか6チャンネルのブロードキャスター。そういうところで特集を見る。(3C)

##### 【食品に関して信頼できる情報源】

- 国や国の研究機関の情報はある程度信頼できるが、分かりにくい、遅い、当たり障りがない。
  - 国が出しているものは信用できる。発信者によって信頼感は異なる。(1全)

<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 政府発行のものは数字やデータがいっぱい読むのに一苦労。(1B)</li> <li>➤ (信頼できる情報源) インターネットなら国のサイト。国の調査は、一応調査機関を経て出てきているはずだから。だが国のサイトは作り方が悪い。字が薄いし、リンクは使いにくいし、レイアウトが悪い。(2B)</li> <li>➤ 政府の発表は賞味期限が過ぎているが信頼できる。今ごろか、と思うが、もっともな情報を公開してくれる。(3C)</li> <li>➤ 憶測だが、官公庁のホームページは当たり障りのないことで終わっていそう(3D)</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>● テレビなどマスコミの情報はあまり信頼できるわけではないが、印象に残る、分かりやすい、面白い、結果的に信じてしまう。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ どうしてもマスコミの情報が印象に残りやすい。(1B)</li> <li>➤ マスコミ(ニュースなど)はあまり信用できないと思いつつ信用してしまっている。(1E)</li> <li>➤ 国を信頼しているが、見ていて面白いのはマスコミ。(3D)</li> <li>➤ マスコミは悪いところを強調しているところもあるが、それが面白い。(3E)</li> </ul> </li> </ul>		
①「子育て最中女性」傾向 (20-30代)	②「子育て一段落女性」傾向 (40-50代)	③「ビジネスマン」傾向 (30-40代)
—	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 情報源として大学・専門家・第三者機関が信頼できる。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 国より、第三者機関のほうが信用できる。(2B)</li> <li>➤ 大学教授、専門の教授。医者。専門分野の人が信頼できる。(2C)</li> <li>➤ (信用できる情報源と理由) 大学がよい。大学は第三者機関的。(2D)</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● インターネット上のニュースサイトや、ポータルサイトからの検索。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ (全体傾向【食品に関する情報源、情報取得方法】参照)</li> </ul> </li> </ul>
その他属性・背景別傾向		
—		

(4) 食品分野におけるリスクに関する情報ニーズ

- 食品分野におけるリスク情報ニーズを尋ねると、全体に、正確な情報・知識(特に女性)とデータの提示(特に男性)が挙げられている。

全体傾向
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 正確な情報、正しい知識。(特に女性) <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 誤った情報を受けていることもあるので、正しい知識を。(1A)</li> <li>➤ 正確な情報をきちんと伝えてほしい。(1B)</li> <li>➤ 正確な情報を。汚染米のようなこともある、やはり正しい情報を教えてほしい。(2F)</li> </ul> </li> <li>● データの提示。(特に男性) <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 消費者の立場に立ち、中立的に、データをたくさん示した情報開示をしてほしい。</li> </ul> </li> </ul>

(1E)		
<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ どこまでなら安全か。添加物がどのくらいなら、農薬がどれくらいなら安全かというデータが欲しい。(3A)</li> <li>➤ 生のデータが欲しい。「こういうものを食べたらどうなる」などのデータ。(3F)</li> </ul>		
①「子育て最中女性」傾向 (20-30代)	②「子育て一段落女性」傾向 (40-50代)	③「ビジネスマン」傾向 (30-40代)
—	—	—
その他属性・背景別傾向		
(全体傾向参照)		

(5) 食品分野におけるリスクに関する情報提供等に関する意見・要望等

- 食品安全委員会や国の機関に対する情報提供等に関する意見・要望として、全体に、ネガティブ情報を含むありのままの情報開示や情報開示による消費者の選択の確保、そして、国民、消費者にダイレクトに届く情報提供が求められている。

全体傾向		
<ul style="list-style-type: none"> <li>● ネガティブ情報を含むありのままの情報開示。情報開示による消費者の選択の確保。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 危険性のある情報についても全て教えてほしい。あとは消費者の自己責任による選択に負うところもあるが、とにかく情報は全て教えてほしい。(1A)</li> <li>➤ 何でも包み隠さず、消費者が不利になることでもちょっとしたことでも隠さずに情報を開示してほしい。(1D)</li> <li>➤ 良い情報も悪い情報も出してほしい。薬品にしても何にしても使っているならそれでいい、教えてもらえばこちらがこちらの裁量で采配する。(2A)</li> <li>➤ 都合の悪いことを隠さず、正直にありのままを国民に伝えてほしい。(3D)</li> </ul> </li> <li>● 国民、消費者にダイレクトに届く情報提供。 <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 地域の広報紙誌等に情報を載せ、全世帯の目に触れるように開示してほしい。(1E)</li> <li>➤ インターネットだと見られない人もいるし、見ようとしないと見られない。店頭にわかりやすく出してほしい。(1F)</li> <li>➤ こちらから探しに行くのではなく向うから押し出し式で情報を送ってほしい。(3A)</li> <li>➤ 食品の事故が起こるたびに希望者に送られてくるメールマガジンが欲しい。(3C)</li> </ul> </li> </ul>		
①「子育て最中女性」傾向 (20-30代)	②「子育て一段落女性」傾向 (40-50代)	③「ビジネスマン」傾向 (30-40代)
—	—	—
その他属性・背景別傾向		
—		

## 2-2. フォーカスグループ別の調査結果

※引用しているのは調査対象者の発言内容である。発言末尾括弧書きの数字とアルファベットは、それぞれグループ（1：子育て最中女性、2：子育て一段落女性、3：ビジネスマン）と当該グループにおける参加者記号（末尾参考資料の参加者プロフィール参照）を示す。

### （1）グループ1（子育て最中女性〔20～30代〕）

#### 1）食生活や食品安全についての関心事・懸念

##### <食品分野におけるリスク認知状況>

- 中国産食品への抵抗感があり、高くても国産を購入。
  - TVで中国産野菜の農薬、粉ミルクの話を知ると、外国産を買うのに抵抗あり。ちょっと高くても国産を買いたい。(1B)
  - 中国産食品の問題が出るまでは安いところで安いものを買っていたが、その後はちょっと高くても国産を買うようにしている。(1D)
  
- 表示に対する信頼が低下しており、信頼できる購入先を選んでいる。
  - ウナギの産地偽装問題があったが、そういう裏の面は消費者には見えない。それ以降、パッケージの裏面を見ても本当のことは書いていないように思えてしまう。買うものを厳選したくてもしきれない。表示に対する信頼感がなくなった。(1C)
  - (いいものを買うなら)ウナギならデパートやウナギ屋。ブランドを背負っていて信用を大事にしている店ならそういうことがないのではないかと思える。(1C)
  - 生協利用の割合が増えた。生協もどこまで信用していいかわからず不安だが、少しは信用できそうで、おいしく感じる、安心できる。信頼度は高い。(1D)
  
- 値段との兼ね合いを見ながらなるべく無添加・添加物の少ないものを選んでいる。子どもの味覚への影響が心配。
  - 添加物を気にしている。パッケージ裏面は必ず見ている。(1E)
  - 無添加は値段が高いので、ちょっとぐらいなら入っていてもいいかと思って買ってしまう。それほど悪そうなものが入っていなければよいと考えている。(1E)
  - 仕事があるので家で一から作るのが難しい。値段との兼ね合い。(1E)
  - 出産後、添加物が少ないものを買うようになった。「最近の人間は味覚がわからなくなり、甘い・塩辛いのが区別がつかなくなっている。その原因は添加物だ」とテレビを見て、自分の子供がそうならないように気にしている。(1F)
  - テレビでそういうのを見ると不安になる。タレントが実際に舐めて、味はこ

んなにわからないものだとやっていたので、説得力があった。(1F)

- 冷凍食品を食べたときにおいしいと感じてしまうのは添加物のせいだと思うが、子供がその味を覚えてしまうのが怖い。事実、私がだしをとって作った料理は「パンチがない」と言われた。小さいころから添加物やポテトチップを食べなれていると、それをおいしいと感じ、おいしいものの基準がそうになってしまう。(1A)
  - 添加物はなるべく少ないほうがよい。(1B)
  - 生協の製品は添加物が少ない。ウインナーやカマボコのような、すでに出来上がった食品でそのまま口にするようなものは気になるから、無添加・無着色とパッケージに書いてあるとついそちらを買う。(1B)
- 夫の食生活より、子供の食生活。
    - 夫の食生活より、子供の食生活が大事。(1全)
  - 魚に含まれる有機水銀などのリスクにも不安を感じるようになった。
    - 妊娠中、「キンメダイやマグロを妊婦や幼児は避けるべき・控えたほうがよい」というパンフレットを病院で貰って読んだ。魚はヘルシーで体によいイメージがあり、国産魚ならいいという軽い認識だったが、水銀などの問題について意識していなかった。知らぬ間に体内に蓄積される有害物質や農薬は目に見えない。幼児や成長期の子供の脳や体に影響が出ると心配。(1A)
    - そのパンフレットには、魚ごとに有害な水銀などの含有量が載っていた。「毎日食べ続けるのはやめよう、週〇〇回以内」と書いてあった。(1A)

#### <食品分野以外のハザードについてのリスク認知>

- 食品以外では環境問題・気候変動。格差社会も不安。
  - 自分の子供が大きくなったときのことを考えると、変になった気象などが不安。子供がかawaiiそう。(1E)
  - 地球環境は気になる。地球が変になれば食べ物もおかしくなる。(1D)
  - 食生活が最高に不安だ、とはいえない。この夏のおかしな気象や雷を不安に思う。(1F)
  - (不安に思っていることは) 格差社会。金持ちはよい教育、よい食生活が可能で、貧乏人は輸入ものの安いものを食べろ、と言われていている感じ。貧乏人が貧乏のスパイラルから抜け出せない社会になっているような気がする。(1A)
- 食品分野は毎日のことなので環境問題などの社会問題よりも不安を感じる頻度が高い。
  - 食生活は毎日に関わること。買い物などいろいろな際に不安を感じる。(1C)

- 環境問題や今後の年金、老後のことなど色々な問題は、日々は感じていない。ニュースを聞いたりゲリラ豪雨にやられたり年金の掛け金が天引きされたと意識したときに考えるだけ。(1C)
  - 両方とも不安ではあるが、考える頻度が違う。(1C)
  - 食生活は毎日のこと。年金などの話は耳に入ってきてても人ごとのように思える。食いつき方が違う。(1D)
- 食生活はこれまで健康でいられたので大丈夫なのでは。
    - 食生活については、今まで取り上げられていなかっただけではないか。「それでも健康に過ごしてこられたのだから、大丈夫なのかもしれない」ということもある。(1F)

## 2) 農薬に対するリスク認知の実態

### <農薬のイメージ、リスク認知>

- 虫を殺すもの。
  - 害虫から野菜を守る。(1C)
  - 虫を殺すもの。(1F)
  - 虫を殺す。虫が死ぬのだから、食べると害があると思う。(1D)
- 作物の生育を良くする・見た目が良くなる。
  - 作物の生育をよくする。(1D)
  - 消費者がきれいな野菜や見栄えのよさを求めるから、虫の食べ跡が残らないように使われるもの。(1E)
  - 野菜がすごくきれいに見える。触ると手に何かつく感じがする。それが農薬ではないか。(1B)
  - 出荷の際に品質を保持するために、農家を使うもの。あるいは成長をよくするために使うもの。(1C)

### <リスク認知の形成要因>

- 虫が死ぬのだから人体にも有害なはず。
  - 虫を殺すからちょっと影響があるのではないかと単純に考えている。(1F)
  - ゴキブリ殺虫剤を使うときも子供に吸わせないようにしている。(1A)
  - 虫が死ぬ=害がある。(1B)
- 農薬で自殺できるのだから劇薬だと思う。
  - 報道で農薬を飲んで自殺したと聞けば、やはり体に悪いのだと思う。(1B)
  - ニュースで自殺のことを聞いて、サリンと同じような劇薬だと思った。(1B)
  - 10年ほど前の「毒入りカレー事件」で農薬をカレーに入れたと聞いて怖かつ

た（注・実際は、砒素を入れたと言われている事件）。(1B)

- 農家の農薬散布時の重装備を見たり、実際に体調が悪くなったりしたため。
  - 実家の田舎が佐渡。佐渡は農薬を今はやめているが、子供のときにラジコン飛行機による農薬散布を見た。農家の人サングラスとマスクの重装備でやっているのを見て気分が悪くなった。それで農薬は体に悪いと思った。一方、実家の裏の家は肥料に鶏糞をまいて有機栽培をしている。非常に臭いが、農薬のように頭痛もしないしクラクラすることもない。(1A)
  - 農家の人たちも農薬を使うと体調が悪くなると言っていた。自分たちが食べる分には使わず、出荷分だけに使うと聞いた。やはり形が悪くても無農薬を使いたい。(1A)
  - 実家が群馬。おじが大きな農家をしているが、マスクをかけて背中にタンクを背負って農薬をまいていた。緑の葉が白っぽくなっているのと、散布時のマスク姿を見て、吸ってはいけないもの、毒なのだ、と小さいころから思っていた。(1D)
  
- 微量でも蓄積されて体に悪影響があるのでは。
  - 一回ずつは微量でも、蓄積されて害になると思っている。(1全)
  - 有害物質は脂肪に蓄積されると聞き、太っている自分は危ないと思った。絶対農薬はいやだ。(1A)
  - 微量であっても、食べ続けるとだんだん蓄積されるものだと思っている。(1B)
  - 目に見えず、添加物同様、長年摂取することによって健康に何かしらのよくない影響を与えそう。(1E)
  - 人間が食べて死ぬわけではないが、蓄積されると体によくないと思う。(1D)
  
- 安全基準・輸入食品の検査体制に対する不安がある。
  - 国産は安心だが、中国産野菜は速成のために基準値の5倍もの薬品を使っている、とニュースで見た。信じられない。闇ルートで、日本で禁止されているものも入ってきているのではないかと。外国産野菜の薬品を、日本に入れないように完全に止めることはできていないのではないかと。(1A)
  - インターネットかテレビで見たが、日本のヒジキがイギリスで食べてはいけないもののリストに載っているという。衝撃的だった。私はこれだけ気をつけて国産のもの＝日本のものを買っているのに、外国で認められないものもあるのだ。何を食べればいいのか。日本と外国の基準は違うものなのだ。いくら安全だと言われているものでも本当はどうなのだろう。(1B)

#### <リスクへの反応・対応策>

- 虫食いがあっても安心できる野菜がよい。

- 私はきれいな野菜を求めている。逆に虫食いの跡があるほうが安心して食べられる。虫がいてもとって捨てればよいと思っている。(1E)
- 無農薬・低農薬は良いと思うが、あまりに虫の多い野菜は嫌だ。
  - 父から「虫が食べている野菜は安心」と言われてそういうものに慣れていたが、先日産地直売で買った低農薬の野菜に大量の虫がついていた。(中略)調理が苦痛だった。農薬はいやだと思うがこれではダメだ。(1A)
  - それでもまだ低農薬が好き、微妙なバランスがあると思う。消費者としては、農薬の使いすぎも困るが、虫だらけも困る。(1A)
  - 無農薬でも虫がたくさんいると食べたくない。(1C)
  - できれば使っていないものを買いたいが、あまりにも虫がたくさんいたら考えてしまう。(1E)
- 無農薬・低農薬野菜は値段が高いのでバランスを取っている。
  - できれば有機栽培、無農薬、低農薬の食品だけにしたいが、経済的な問題があるので、ある程度割り切ってしまう。(中略)妥協し、バランスをとりながら買っている。(1A)
  - 低農薬などはスーパーでも特別のコーナーにある。(後略)(1A)
- 本当に無農薬・低農薬かどうかは消費者からはわからない。
  - 農薬は気になるが、野菜購入時に農薬の使用量が記載されているわけではないので知ることができない。(1C)
  - 本当に使っていないかどうかはわからない。あまり神経質になっては買い物が大変になってしまう。(1E)
- 生産者の顔が見える野菜の方が信用できる。
  - スーパーでは特定の農家から卸しているものが売られている。生産者の顔や連絡先がついているのを見ると、見栄えが悪くてもそちらを選ぶ。見かけたからそういう野菜を買うようにしている。農薬を使っているとは思いますが、顔が記載されていれば何かがあったときに生産者にも影響が出るはず。だから記載のないものより信用できる。(1C)

### 3) 食品添加物に対するリスク認知の実態

#### <食品添加物に対するイメージ、リスク認知>

- 見栄えを良くする、保存を良くする、風味を良くするなどのイメージ。
  - 風味をよくし、色鮮やかに、というイメージがある。(1A)
  - おいしくなる。うまみのために入れている、うまみ成分。(1B)
  - 日持ちする。(1D)

- 色が鮮やかで、それっぽく見せる。(1D)
  - 保存。見栄えをよくする。色、日持ち。味も。(1E)
  - 保存と、化学調味料で味付けをしているというイメージ。(1F)
- 人体にどのような影響があるのかはわからないが、漠然と怖い。農薬のような死に至るほどの危険は感じていない。
    - あまり具体的なイメージはない。(1全)
    - 「添加物は味覚がおかしくなる、味をよくしている、色を変えたりする」という特集を夜7時ごろからのNHKの特集を見た。(中略) どれだけ人体に害を及ぼすかわからず、漠然と怖い。(1C)
    - 漠然と、何かしらの影響があると思う。たとえば味覚への影響がありそう。(1F)
    - 漠然とした不安はあるが、何がよくないのか答えられない。でも体によくないと思う。(1E)
    - 農薬同様、なんとなく、蓄積されていつかは害を及ぼすと思う。(1D)
    - 農薬と異なり、死に至ることはないのでそこまでは怖くない。農薬は「何か死ぬ」というイメージが強いが、添加物には死のイメージはなく、「何かを入れてよくしている」というイメージ。(1C)

#### <リスク認知の成要因>

- 本やテレビ番組、信頼できる身近な人の情報から。
  - 都市伝説のように「添加物を食べるとアトピーになる」などの年配の意見を聞く。「ならばよくないのだ」と思うようになった。(1B)
  - 姉2人が管理栄養士。「添加物はなるべく入っていないものを選ぶように」とよく話している。(1E)
  - アメリカの研究論文で、「添加物を大量に食べ続けると前頭葉に蓄積され、きれやすく情緒不安定になるのではないか?」というものがあつた。テレビの外国の報道番組でやっていた。(中略) もしかすると遺伝子に影響を及ぼし、将来の人間に影響を及ぼすのではないか。神様が創った自然に生えているものをそのまま食べたほうがよい。100年後、150年後に隔世遺伝で自分の孫に何かの影響が出たら困る、怖い。まだどうなのかわからないものだ。(1A)
  - 何年前か前、「この添加物が危ない」といった内容の単行本を書店でちょっとだけ読んだ。どんな添加物がどういう害を及ぼすか書いてあり、怖くなった。(1E)
  - 「添加物は味覚がおかしくなる、味をよくしている、色を変えたりする」という特集を夜7時ごろからのNHKの特集を見た。(1C)
- 家庭科の授業で着色料の中には有害なものがあると習った。

- 家庭科の授業で「以前使われた着色料にとっても有害なものがあり、今は禁止されている」と習った。そのとき「添加物はよくない」というイメージが植えつけられたのだと思う。(1B)
- 小学校の家庭科で「赤い着色料がどうのこうの」と言われたような気がする、そこからのイメージではないか。でも「なんとなく」という感じが一番強い。(1D)

#### <リスクへの反応・対応策>

- 摂取量の設定に科学的根拠があっても不安は残る。添加物を使用すること自体に疑問がある。
  - (摂取量の設定に科学的根拠があっても) だから安心、とはいえない。(1全)
  - そのままで食わず、いろいろ付け加える理由を考えると疑問が湧いてくる。(1F)
  - 保存が利くようにするというのは、正常な状態ではない。(1F)
  - 食品添加物は最近作られたもの。人体にどのような影響が出るのか本当のことはまだわからない。また、昔はよかったが今は禁止されたものもあり、評価が非常に不安定なものだ。とにかくそういうものを使っていない天然のものを食べていけばよいと思う。(1A)
  - (摂取量の設定に科学的根拠があっても) 代々続けばダメだと思う。また、その根拠を信用していいかわからない。誰を基準にして、どこから出てきた根拠なのか。個人差もあるはず。(1A)
- 食品添加物を全く摂らない食生活は難しく、不安はあるが食べてしまう。
  - たまにコンビニでおにぎりを買ってしまう。(中略) コンビニやマックには頼らざるを得ない。(1D)
  - 全く摂らずにいけるわけではないので、本を読むのをやめてしまった。(1E)
  - パッケージ裏を見て、全く入っていないものを買うこともあるが、だいたい何か入っているので、割り切って買うことが多い。(1E)
- 子どもには添加物の少ないものを食べさせる。
  - 子供だけが食べるものは、添加物が入っていないものを選ぶ。若干高くても。最近、添加物を見るようにしている。自分は食べても子供にやらないようにしようとしている。(1B)
  - 私自身、無添加のものを食べてもおいしくないと思うが、子供には我慢して食べてもらうようにしている。(1B)
- 知らない添加物、目的がわからない添加物は避ける。
  - 添加物の量ではない。たとえば魚の切り身でもたくさん書いてあるものと書

いていないものがある。書いてある内容が食塩やビタミンC、増粘剤みたいな「わかるもの」ならよいけれど、カタカナですらっと並べられているものの内容がわからない。自分がわかるものなら納得して買う、目的がわかればそれでもよいと思って買うことがある。(1F)

- 無添加は自然な味で違和感がない。
  - (無添加のよさ) それが自然に近い味だ。ミートボールも無添加のほうが薄味で違和感がない。(1F)

#### 4) 遺伝子組換え食品に対するリスク認知の実態

##### <遺伝子組み換え食品に対するイメージ>

- リスクが未知なので怖い。消費者がモルモットにされているイメージもある。
  - よくわからない、未知数。(1B)
  - なるべく遺伝子組み換え食品でないものを買っている。なんとなく怖い。(1A)
  - この間テレビ(たぶん民放)で「品種改良のためばかりでなく、全く違うものの遺伝子を持ってきて作るので人体への影響がまだわからない」というのを見た。やはり怖いと思った。アメリカでは大量にコーンなどが作られていて、日本にじわりじわり入ってきているという。自分で買わなくても知らないうちにそういう原料の食品を食べているかもしれないと思い、ぞっとした。その番組を見て恐ろしさを感じたので、なるべく遺伝子組み換えでないものを買う。(1A)
  - 野菜と違う生物の遺伝子のいいところをとって作ったりしているというが、それによって BSE の(原因となる)ような突然変異の可能性があるらしい。人体に入ったときにどういう影響を及ぼすのかまだ結果がわからないという。確かでないのに大量に出回っているのに警鐘を鳴らす番組だった。(1A)
  - 新聞の記事には「少し怖い」と書いてあった。食品特集、冷凍食品関連の記事だった。でもどれほど怖いか全くわからない。(どう怖い、と書いてあったのか)組み換えを行うに当たり、実験的な形でやっているのにそれを販売していることもあるという。企業で研究をして人に食べてもらっていると書いてあった。試されているのか、モルモットのような感じなのか、死ぬ危険もあるのではないかというイメージを持った。(1C)
- パッケージにわざわざ「遺伝子組み換えでない」と表示されるので良くないのだろうと思い、購入を避けている。
  - パッケージに「遺伝子組み換えでない」とわざわざ書いてあるということは、組み換えは悪いのだろうと思う。(1D)
  - 醤油などあれだけわざわざ「遺伝子組み換えでない」と言っているので、組み換えでないものを買ったりしていた。やはり自然なほうがいいのか、と

- 思った。(1F)
- 「組み換え食品を使っていません」とパッケージにわざわざ書いてあるということは、使っていないことを企業は強調したいのだろう、だから使っていないほうがいいだろう、となんとなく認識している程度。(1E)
  - 大豆によくある。醤油、豆腐など「遺伝子組み換えでない」と書いてあると安心。そうでないと怖い。(1B)
- 本来自然界になかった生物を人間が作り出しているのが怖い。
    - (科学的根拠に基づく安全基準があっても) それでも何か悪いような気がする。大人になってからできた技術なので、危機感も意識もなかったが、TV番組を見て「エーっ」と思った。遺伝子が異なればもう違うものになってしまう。「手間を省きたいとか利益追求のために人間の都合のいいようにやったらいつか罰が当たる」といった類の感覚。人間がそこまでやってはいけないと思う。(1A)
    - 遺伝子組み換えは自然界にないもの、人間が勝手にやっているもの。それが人体に入るとどうなるかと思うと怖い。(1B)
    - (品種改良との違い) 品種改良は同じ種同士で行う。遺伝子組み換えはそうではないイメージ、全く別のものができるのではないか。(1B)
    - TVで「海外で、除草剤をまいても遺伝子組み換え作物だけが枯れずに残る」というのを見た。その生命力が怖い。(1D)
  - 遺伝子組み換え食品についてあまり明確なイメージがない。
    - 言葉はよく聞くが、どういう仕組みなのか本当にわからない。かといって、ネットで調べたこともない。いつも読んでいる新聞の記事(読売)で読んだ程度。(1C)
    - (具体的作物イメージ) 大豆などがそうだ、というイメージ程度。(1C)
    - よくわからない。(1F)
    - 品種改良と同じようなイメージを持っていた。特に悪い話を聞いたこともない。なので危険な意識はなかった。(1F)
  - テレビによるネガティブな報道で、怖いイメージを持った。
    - テレビで見ると、そういう認識になる。(1A) (1B) (1C) (1D) (1F)
  - 遺伝子組み換え食品摂取による影響の具体的なイメージは特にないが、怖い。
    - 特にない(1全)
    - (飼料や原材料に使われていたら?) 怖い。(1A)
  - 遺伝子組み換え食品が安全だという根拠を明らかにしてほしい。

- 「安全」と書いてあっても、その根拠がわからないのが不安。(1B)
- (科学的根拠に基づく安全基準があれば) ないよりはあったほうがよい。あればまたそれを見て考えたい。(1F)

#### 5) BSEに対するリスク認知の実態

- BSE が問題になって牛肉の購入を控えた。
  - 夫(ナイジェリア人)は鶏か牛肉しか食べられない。夫の国は骨の髄液も食べるような食べ方をする。脳や骨髄液が危ないと聞いていたので不安だった。夫も魚派に変わり、牛肉を使う頻度が減った。(1A)
  - 飼料として草を食べさせていればよかったのに、肉骨粉によって変異したというのを聞いて、いやな気持ちになった。そのときイギリスに旅行したので、自分も不安になった。あの事件の食生活に与えたインパクトは強かった。(1A)
  - それほどの不安はないが、あれだけのすごい騒ぎの間は牛肉を買わなかった。また、騒動の間牛肉を使わずにご飯を食べていたので、今も牛肉を手にとることが少なくなったまま。(1C)
  
- 輸入全面禁止などの厳しい対応策を取るほど怖いものなのだと感じた。
  - たしか欧州の牛肉は全面的に輸入されなくなり、イギリスで肉を食べた人までチェックされていた。それほど怖いものなのと思ったら、牛肉が食べられなくなった。(1B)
  - 吉野家で売られなくなったとき、ものすごく恐ろしいものなのと思った。再開後、受け入れられるまでかなり長い年月がかかったのを見たり、日本政府もそれを知ってすごく懲りた、という背景が感じられた。だから私は今でも買っていない、食べる頻度がすごく減った。(1C)
  
- テレビで BSE を発症した牛の映像を見て怖くなった。
  - TV で、牛が立てずふらふらしているのを見た。人間も同じになると聞き、衝撃を受けた。食べてあんなったらどうしよう、と思った。(1B)
  
- BSE は添加物や農薬と異なった種類の不安がある。
  - 添加物や農薬とは違う種類の心配。(1A)
  
- あまり怖いと思わず、食生活にも変わりがなかった。
  - ニュースで見たときは怖いと思いながらも対岸の火事だと思った。日本国内での発症例があると聞いたこともない。多少の不安を感じつつも買っていた。(1F)

- 最近はあまり不安には感じない。汚染されている国の牛を避ければ安全だろう。
  - 今は「自分には関係ない」ぐらいに軽く考えてしまっているのかもしれない。(1A)
  - (危険部位が) 混じっていた肉を生産国に返した、というニュースを見たとき、政府がしっかりやってくれたと思った。水際で止めてくれたし、入ってきたという情報も流してくれた。それによって信頼できるようになった。(1A)
  - 日本のどこかで子牛に発症したというニュースを聞いたと思う。和牛ならいいと思っていたので驚いた。立ち消えのようになってしまったが、焼却処分などして終わったのだろうと思っている。(1A)
  - 騒動があったころは牛肉、ユッケは食べられなかったが、喉もと過ぎれば。今はアメリカ産は避けるが、ふつうに食べている。日本の牛なら安全だと思う。(1D)
  - 今は安全だというイメージあり。まだアメリカ産は怖いというイメージあり。和牛は高いのでオーストラリアぐらいのを買っている。(1D)
  - 今は不安を感じることはない。(1全)
  - 汚染されている国の牛を食べなければ大丈夫だろう。(1全)

## 6) その他のハザードに対するリスク認知の実態

### <食中毒のリスク認知>

- 自分が調理する際には食中毒は起きないと思う。日常生活では怖いと感じない。
  - 娘たちが順番に食中毒になり、嘔吐と下痢で点滴を受けたことがあった。保育園で罹ったのだと思う。(1A)
  - でもふだん大雑把な私は、TVの情報番組で「まな板、生卵を触った後に生野菜を触ってはいけない」などの情報を得ても、「それくらい大丈夫だろう」と思ってしまう。(1A)
  - 身近に感じたのは、タレントたむけんの焼肉店での食中毒事件。私もユッケが好きなので気になった。自分で調理している分には起きないだろうが、外食では起きうるのだと思い、怖くなった。(1C)
  - 日々の生活で怖いと思うほどではない。(1C)

### <健康食品のリスク認知>

- 健康食品への不安はない。
  - 特に不安はない。(1全)
- ダイエット食品で死亡した人のニュースで少し怖くなった。
  - ガルシニアで死んだ人が出たとき、「気軽に試していたが、食品添加物や農薬のように摂取すると害があるのかもしれない」と思った。(1A)

- 誇大広告が多いので、信頼できるブランドやメーカーのものを買う。
  - TVで、「『よく効く』『含有量何倍』と書いてあっても、誇大広告や嘘が多い」と聞いたので、信用できるブランドやメーカーでないといやだと思った。(1A)
- 健康食品にはそもそもあまり関心がない。
  - あまり興味がない。(1B)
  - 関心ない。(1C)
  - 興味がない。ふつうのものを食べていればふつうに健康でいられると思う。(1D)
  - それほど関心ない。(1E)
  - 好きだが、サンプルを貰って飲んでも効果を感じることはあまりない。飲み続ければいいのかもしれないが、わざわざお金を出して買おうとは思わない。(1F)

## 7) 食品に関する情報源

### <食品に関する情報源>

- 情報源は、夕方のニュース番組が多い。食品分野の報道に対する関心度は様々。
  - 特捜プロジェクト、みたいなドキュメンタリーや告発ものを深夜にやっていると、起き出してわざわざ見るほど。知りたい。(1A)
  - 遺伝子組み換え、危ない食品、子供に危ないなどのタイトルがついているとつい見てしまう。(1A)
  - 子供と一緒に見ることもある。「これ、危ないんだよ」と話すこともある。(1A)
  - ニュースを必ず夕方見る。その中で特集のように食品が取り上げられたときにたまたま見る程度。(1B)
  - 夕方6時過ぎ、フジテレビが多い。6時20分から35分ごろ、食べ放題などいろいろな特集をやっている。新聞でチェックするわけではないが、そういうのを見ている。他のチャンネルもその時間帯はよく見ている。(1C)
  - 子供が寝たあとだけ。夕方は子供が横でうるさくてテレビに集中できないから、夜遅くの番組を見ている。報道ステーションなどを見ていて、その中で取り上げられれば見る。(1D)
  - 夕方の番組で、バーコードをスキャンすると原材料、原産地まで表示されるものがあり、それが本当かどうかやっていた。それは非常に興味を持って見ている。(1F)
- ワイドショーなどの情報番組も見ており、食材の購入などに影響を受けることも。
  - (みのもんたのような「これを食べるとよい」といった番組も)よく見る。それを買に行くこともある。たとえば野菜、キノコなど、「今日はそれを使おう」と考える。主にワイドショーなどの情報番組。(1A)

- 以前やっていた番組で「白いんげんを食べると痩せる」と放送されたとき、走って買いにいった。もう売り切れていたのでは食べられなかった。(1B)
  - 帰宅前なので夕方のニュースは見られない。昼休みにみのもんたを見ている。朝バナナダイエットは買いに行って試した。(1E)
  - 今までは夜の番組ばかりだったが、今は休みなので「はなまる」など朝から見ている。(1C)
  - 子供と一緒に寝て、朝4時、5時から起きだしてワイドショーを見ている。あえて食を取り上げる番組を見ることはない。(1F)
- 家庭科の授業で食べ方や食品添加物について基本的なことを習ったが、あまり記憶に残っていない。
  - 食べ方についての教育を受けた。(1全)
  - 農薬、添加物に関する特別な教育を受けた記憶がない。(1全)
  - 習ったのは本当に基本的なことだけ。(1B)
  - 家庭科の授業で「以前使われた着色料にとっても有害なものがあり、今は禁止されている」と習った。そのとき「添加物はよくない」というイメージが植えつけられたのだと思う。(1B)
  - 小学校の家庭科で「赤い着色料がどうのこうの」と言われたような気がする、そこからのイメージではないか。でも「なんとなく」という感じが一番強い。(1D)
- ニュースをきっかけにインターネットや本で調べる。
  - (他の情報源) 雑誌、単行本(「買ってはいけない」みたいなもの)。図書館で見る。(1A)
  - 食品添加物のニュース番組を見ると、ネットや図書館で調べてしまう。(1A)
  - 啓発の単行本を見ると何も買えなくなる。開き直ってしまった。(1A)
- 母親同士の情報交換。親からの情報はあまり参考にしていない。
  - 幼稚園時代、アレルギーのひどい子がいた。かなりたくさんの食品が食べられず、家に呼んでもお菓子が出せなかった。その子供の母親がたくさん情報を持っていて、教えてもらった。(1A)
  - (親からの情報) 昔より使う食材の種類が増えた(例: 昔はゴーヤなんか使わなかった)ので、あまり参考にしない。(1A)
- 会社で新聞を見ている。
  - (他の情報源) 会社のイントラネットで、「日経クリッピングニュース」といって、各紙の情報の載ったサイトを項目別に見ることができる。手の空いた時間にそれを見ているいろいろな情報を得ている。(1F)

#### <情報源の信頼度>

- 国・病院からの情報は信頼している。
  - 国が出しているものは信用できる。発信者によって信頼感は異なる。(1全)
  - (政府から出る情報の信頼度)「妊娠と魚」のパンフレットの話が出たが、私も妊娠時代、厚労省発行のパンフレットを見た。それは信用できると思っていた。病院にあり、なおかつ国が出しているものだと信頼できる。(1B)
  - (国などの公的機関の信用度)何かあれば受ける批判も大きいだろうから、変なことはしないだろう。信頼する。(1F)
  
- 公的な機関のデータに基づいた情報は信用できる。
  - 食育への取り組みが盛んだが、イオンなどにもパッケージにマークがついていたりパンフレットを貰ったりする。そういうものは信頼する。(なぜ信頼?) 企業、国の関わる機関、さらにデータが詳しく載っていたので、何かに基づいて書かれているのではないかと考えた。(1C)
  
- マスコミの情報はあまり信用できないが印象に残る。
  - (マスコミの情報と国の情報との信頼感の違い) テレビはインパクトある部分を断片的に見せている。嘘だとは思わないが、ショッキングな部分ばかりが印象に残る。一方、政府発行のものは数字やデータがいっぱい読むのに一苦労。どうしてもマスコミの情報が印象に残りやすい。(1B)
  - マスコミ(ニュースなど)はあまり信用できないと思いつつ信用してしまっている。大きさに言っているのではないかと思いながら、信じてしまっている。(1E)
  
- どの情報源もあまり信用していない。
  - 本当のことをどれくらい告げているかわからないので、どれもあまり信頼していない。(1C)

#### 8) 食品分野におけるリスクに関する情報ニーズ

- リスク情報を全て開示して、消費者が選択できるようにしてほしい。
  - 誤った情報を受けていることもあるので、正しい知識を。また、危険性のある情報についても全て教えてほしい。あとは消費者の自己責任による選択に負うところもあるが、とにかく情報は全て教えてほしい。(1A)
  - 知り得ることは全て知りたいので何でも開示してほしい。さらに過程がどうなっているか気になるので、そこまで追求してほしい。(1B)
  - 今情報を全部教えられているとは思わない。偽装問題で公表されているのも氷山の一角だろう、全部公表してほしい。(1C)

- 何でも包み隠さず、消費者が不利になることでもちょっとしたことでも隠さずに情報を開示してほしい。そうすれば信用が増し、マイナスの情報でも消費者は違った感情で受け止めるはず。(1D)
  - 中立な立場からの正確な情報がほしい。
    - 正確性。今問題になっている米の問題で農水省はバタバタしていた。正確な情報をきちんと伝えてほしい。(1B)
    - 消費者の立場に立ち、中立的に、データをたくさん示した情報開示をしてほしい。(1E)
- 9) 食品分野におけるリスクに関する情報提供等に関する意見・要望
- 現在の国の対応に不信感がある。
    - 事故米に関する農水省の対応を見ていると不信感が募る。政府としてちゃんとやってほしい。(1E)
  - 多くの人を知ることができるような公開の仕方を。
    - 一部の人を知るところでなく、みんなが知れるところで公表してほしい。(1C)
    - テレビだとその場で終わってしまいがち。地域の広報紙誌等に情報を載せ、全世帯の目に触れるように開示してほしい。(1E)
    - 日経クリッピングニュースに細かい偽装や虚偽記載の記事が載っていることがあるが、どれも私が知らされていないものばかり。告知は会社のホームページや店頭でやっているとのことだが、そんな話は聞いていない。実際に買っているものであることもある。ちゃんとみんなの目に触れるところで公表してほしい。(1F)
    - インターネットだと見られない人もいるし、見ようとしないと見られない。店頭にわかりやすく出してほしい。(1F)

(2) グループ2 (子育て一段落女性 [40~50代])

1) 食生活や食品安全についての関心事・懸念

<食生活における関心事>

- メタボ対策など、家族の健康。
  - メタボリック対策。私自身は肉が嫌いなのでよいが、夫は肉も魚も酒もお菓子も食べる。単身赴任なので、戻ってくるとつたくさん作って食べさせてしまう。一緒に私も食べてしまうのが悩み。(2A)
  - 社会人の息子がサプリなどの通販が好きで、発芽米を買ったので試している。白米に混ぜて食べている。メタボリック対策の効果を期待している。(2C)
  - 家族が外で食べたもののメモを見て、全体のバランスに配慮。(2D)
  - あまり食べさせないようにしている。朝たくさんにして、夜あまり食べさせないようにしている。(2D)
  - 子供がアトピーだったので添加物や輸入品を極力避けるようになった。家で作るものに関しては気をつけている。裏の表示を見ている。(2E)
  - あまり食べずに腹八分、粗食を心がけている。味付けを濃くしない、油ものをあまり摂らない。(2F)
  
- 表示を信用できなくなっている。正しい情報がほしい。
  - 「朝採り」が実は朝とれたものではないと知って愕然とした。信用できない。(2B)
  - 牛肉の「和牛」表示、外国で生まれた牛でも原種が日本なら和牛と表示するという。信じられない。(2B)
  - 流通経路が長ければ長いほど心配。途中の経路を全て書ききれないわけがない。信用できるわけがない。(2B)
  - 正しい情報がほしい。情報が与えられても嘘であることがある。表示があっても「本当か?」と疑ってしまう。(2D)
  - 国の情報、企業の情報両方とも。たとえば B 級品だと納得して買うのはよいが、B 級品だとだまされるのはいや。(2D)
  - 今回の事故米のようなことがあると、何も信じられない。(2E)
  - 子供はウナギが好きなのだが、私は嫌い。自分が試食できないので「国産」のラベルを信じて買うしかない。(2A)
  
- 少し高くても安心できるものを買いたい。
  - スーパーより小さい店で、信頼できるものを買いたい。安全や安心を考えると、少し不便でも、少しコストがかかっても、安心と思えるものを食べたい。(2B)
  - 食にちょっとお金がかかっても、健康が維持できるなら医療費より安い。少

しでもいいものを直接体に入れたい。(2D)

- なるべく国産、地元産の食品を購入。
  - 輸入品を買わないようにしている。農薬の問題。船便であんな状態で届くのではいやだ。(2A)
  - 千葉に住むようになってから野菜は千葉産のものを買っている、近いところのものがなんとなく安心。(2A)
- 食事には夫と子ども両方に気を遣う。
  - 夫と子供半々。(2全)
  - 子供にも気を使う。好き嫌いがあるので。(2C)

#### <食品分野以外のリスク認知>

- 老後の医療費・年金・環境問題が心配。
  - 医療費。週末介護で夫の両親を見ているが、後期高齢者医療費はわけがわからない。私が見て大変だと思う各種手続きを年寄りにできるわけがない。(2B)
  - 年金がすごく気になる。どれくらい貰えるのだろうか。(2D)
  - 自然災害。台風やゲリラ豪雨などを経験して、環境がどんどん壊れていくのを目の当たりにした。毎年どうなっていくのか恐ろしい。(2E)
- 食品分野はそれほど不安がない。それ以外の問題の方が心配。
  - 食べてしまったら「まあいいか」。それより、本当に年金が貰えるのかとか、親の介護が気にかかる。(2A)
  - 食べることは毎日のこと、三度三度、半永久的に続くもの。だから日常なこと。心配していながら、焦って何かしようと思ってはいない。むしろ気候の変化や地震のほうが気になる。(2C)
  - ウナギの問題があって食べられなくなったが、他に食べるものがあるのでよい。(2C)
  - (食品に関する数々の問題に接しても) 自分の身に起こっていないので、あまり気にしていない。自分が選んで作っているのだからそれほど悪いことにはならないような気がしている。(2E)

## 2) 農薬に対するリスク認知の実態

### <農薬のイメージ、リスク認知>

- 虫が寄り付かない
  - 虫が寄り付かない効果がある。(2A)

- 農薬についてあまり知らないので不安。
  - 農薬には段階があるのではないか。やさしい農薬から強い農薬まであるのではないか。私はその知識がないので不安だけが残る。(2D)
  - 除草剤と農薬の違いがわかっていない。(2D)
  
- 体内に蓄積して害を及ぼすイメージがある。
  - 蓄積されているという不安がある。(2A)
  - 残留農薬。一度農薬を作物にかけると、消えずに人体に入ってしまう。(2D)
  - サプリメントの広告で、「このサプリでそういうものを排出しましょう」という情報を見た。だから「溜まるのかな」と思っている。(2D)
  - 農薬を使った食品を摂り続けていると健康を害する。(2F)
  
- 飲んだら死ぬので怖いというイメージがある。
  - 農薬を飲んで自殺する人がいると聞くと、怖い。(2D)
  - 農薬には怖いイメージがある。恩恵より怖いイメージが強い。無農薬など、「農薬を使わないことがものすごくいい」といった情報が多い。(2D)
  - 「農薬で死ぬ」というイメージ。(2A)
  
- 昔よりは散布量が減った。多少は使わないと生産が難しい。ある程度の使用は仕方ない。
  - 子供のころ、今とは比べ物にならないほどの農薬をまいていた。それに比べたら今は少ない。(2B)
  - 私も無農薬の野菜を少し作っているが、薬品を使わないと形も悪いし虫や鳥によく食べられてしまう。(2B)
  - 家庭菜園をやっている、薬を全く使わず作るのは非常に難しいと実感。趣味でやったり、高いものを買ってもよいと思う人以外、本当に無農薬のものを食べるのは難しいだろう。農薬の効果は認めざるを得ないが、ある程度は仕方がないだろう。(2E)

#### <食品購入時の態度、懸念事項>

- 無農薬・低農薬がよい。見た目が悪いものの方が安全そう。虫がついているのも覚悟。
  - 自然に見えるものを買う。極端に手のかかっていそうなものは買わない。農薬を気にして、農薬のなさそうなものを買う。(2全)
  - ちょっと形が悪くてもそちらのほうが安全そうで、買ってしまふ。本当のことが書いてあるかどうか分からないが、ついそちらを選ぶ。(2C)
  - しょうがないと思いながら、まっすぐなキュウリより曲がったキュウリを選

んでしまう。(2A)

➤ 無農薬、有機農法などの区別や、どれがおいしいのか、安全な組み合わせがどういうものなのか、全くわかっていない。でも無農薬作物があれば迷わずそれを買う。私は作物の形が悪くてもどれだけ虫食いでも気にしない、虫が出てくるのを覚悟している。(2D)

➤ 数字を見てもピンと来ないと思う。データで「大丈夫」と言われたまっすぐなキュウリよりも、曲がったキュウリを選ぶだろう。スーパーのキュウリはまっすぐだが、直売所で売っているキュウリはだいたい曲がっているから。(2A)

● 本当のところは消費者にはわからない。生産者から情報提供があるとよい。

➤ 低農薬が望ましい。生産者が見えるものがよい。生産者が載っていたりこと細かく書いてあると読んでみる。ちょっと形が悪くてもそちらのほうが安全そうで、買ってしまう。本当のことが書いてあるかどうかわからないが、ついそちらを選ぶ。(2C)

➤ 良心的な農家は、農薬使用量の数値を出している。見てもわからないが、スーパーでもそういう表示をしてくれたら選ぶ側の選択肢が広がりそう。(2B)

➤ 近所の農家の人曰く「日本の基準は世界の中でも非常に厳しいから、大丈夫だよ」。その農家を信頼しているのでよく買っている。薬を最低限使っているが、作っている人もそれを食べているので信頼している。(2E)

● 怖いとは思いますが、ある程度妥協している。

➤ 隣の畑でよく農薬をまいている。こちらに飛ばさないで、と思いながら見て見ぬふり、納得して行くしかない。(2C)

● 輸入野菜は残留農薬が心配。

➤ 中国の野菜の作り方は日本の20~30年前の状態。だから中国の人は洗剤で洗ってから食べている。テレビの映像でそういうものを見ても怖いと思う。(2B)

➤ 中国野菜については昔からいろいろ言われていた。「シイタケは薬を入れて膨らましている」とか、「中国人は抗生物質を多く含んだ魚を食べているから自分が病気になったときに薬が効かない」ということを聞いた。怖い。(2E)

➤ 輸入されたものは不安。(2全)

#### <リスク認知の形成要因>

● 子供が小さい頃に生協の冊子で読んだ。

➤ (残留農薬がなぜ怖いと思うのか) 生協から来る冊子などを見てそう思う。子供が小さいころ、なるべく体にいいものを食べさせようと思ったの

で。生協の冊子に書いてあることは信じられる。(2D)

- 子供が小さかったころ、生協に入っていた。とてもこだわった生協で、冊子が入ってきたのでよく見ていた。(2A)
- (そこで得た知識) 無農薬は農薬がかかっていない、低農薬は農薬が低い、省農薬というのもあった。それと有機栽培がどう違うのかわからない。生協は基本的に無農薬。どうしても無農薬で育てられないものは低農薬、省農薬、有機とついていた記憶がある。(2A)
- 日ごろから関心があり、インターネットの個人ブログに書いてあったのを見て。
  - (そう思うようになった原因) ある一定の量を積み重ねて摂ると肝臓が処理しきれなくなり、何かが出てくるのではないだろうか。インターネットの個人ブログで見たことがあると思う。(2F)
  - (そのブログは) 自分で見ようと思った。そういうことがたくさん書いてあるブログだった。日ごろからそういうことに関心を持っている。(2F)
- 生産者や生産国での農薬対策を知って。
  - 中国の野菜の作り方は日本の20~30年前の状態。だから中国の人は洗剤で洗ってから食べている。テレビの映像でそういうものを見ても怖いと思う。(2B)
  - 一部週刊誌の記事で「出荷するものと農家で食べているものは違う」と聞いて驚いた。でも、しょうがないから、そんな中でもなるべく農薬のかかっていなさそうなものを食べている。(2C)
- 買ってきた輸入野菜の日持ちが良すぎるので怖い。
  - 中国の野菜は日本にも入っている。何週間冷蔵庫に入れていても色が変わらないブロッコリーやイチゴを見ると怖い。(2B)

### 3) 食品添加物に対するリスク認知の実態

#### <食品添加物のイメージ、リスク認知>

- 体に悪いイメージ
  - 体にいい食品添加物もあって、悪いものばかりでないと知っているが、それでもなんか悪いものというイメージ。(2D)
  - 体にすごく悪い。赤色〇〇号とか黄色〇〇号と書いてあるようなのは怖い。(2E)
  - 今はあまり気にしていないが、今でもあまり摂らないほうがよいと思っている。(2E)
  - 外したい。(2A)
- 食品添加物には様々な効果がある。
  - つなぎ。(2C)

- 保存が可能。(2D)
  - (自然のものより) おいしくなる。化学調味料を入れると味がアップする。(2D)
  - 見た目がきれい。(2E)
- 保存料など使った方がいいものもあるとは思うが、なるべく避けたい。
    - 保存料など使ったほうがいいものもある。保存料が使われていないハンペンはないが、着色されていないウイナーはある。選べるものは選ぶ。(2A)
    - 体にいい食品添加物もあって、悪いものばかりでない知っているが、それでもなんか悪いものというイメージ。(2D)
- 表示や国の基準もあまり信用できない。
    - 子供が小さいころは無香料・無着色を買っていたが、最近は「どこまで無香料無着色なの?」と思う。たとえば「カロリーゼロのコーラ」はカロリーゼロではないとテレビで見てしまった。ある程度以下ならゼロと表示できるということだった。そういう例が非常に多い。着色料などもそうだ。(2B)
    - 自分が知っている保存料なら判断できるが、わからないもののほうが多い。有害なものをそれほど大量に使ってはいないと思うが、とりあえず記載しておけばいいというものではない。(2B)
    - マーガリンの中に入っているトランス脂肪酸がよくないといわれている。昔はサッカリンがいけないといわれた。そのときどきでいけないものとして槍玉に挙がるものがある。だからやはり食品添加物はいけないと思う。(2D)
    - 添加物のない食品を売っているところなどほとんどない。無添加と書いてあるものでも、裏を見ると保存料などが入っている。(2E)
    - 表示されている食品添加物はよいが、たぶん表示されていないものがあるはず。厚生省が書かなければならないと基準で定めたものしか書いていないと思う。(2F)
- 無添加の食品は高い上においしく感じない。
    - 無添加のウイナーは種類も少なく、味も悪い。ネットで期待して買ったことがあるが、おいしくなかった。味覚がおかしくなっているのかもしれない。(2E)
    - 無添加は値段が高いのでしょっちゅう買うことはできない。(2E)
    - シャウエッセンなど、(化学調味料が入っている製品は) おいしい。(2E)
- ある程度割り切って食べている。
    - 食品添加物を締め出したら日本人は全員死んでしまう。これだけ加工食品が行き渡っていると、日本の土壌から生えるものだけでは生きていけない。自

給率もこれだけ下がっているのだから。(2A)

- 何かの基準を満たしていないものは出荷されていないだろうから、信用するしかない。(2B)
- 避けて通れない。入っていないものはない。(2C)
- 同じ食品を集中的に食べないようにすればちょっとはいいのではないか。(2E)

#### <食品購入時の態度>

- 表示を見て、なるべく添加物の少ないものを選んでいる。
  - 「危ない食品」というような本を図書館で読んだ。読むと何も食べられなくなるので、気にしないようにしつつ、すごく悪いと書いてあるものは避ける。(2E)
  - 全てが悪いとはいわない、保存料などはしょうがない、でもなるべく避けた。裏をよく見て、あとは自分で選択するしかない。(2F)
  - ウィナーのパッケージの裏などをよく見るようにしている。(2A)
  - 色鮮やかなものは買わない。(2全)
  - 自分の目で鮮度を見極める自信はない。(2E)
- 添加物の使用量が少ないものを選べるよう、情報がほしい。
  - 「この商品は、使用量が基準値よりかなり低い」と書いてあると魅力的。(2D)

#### <リスク認知の形成要因>

- 子どもが小さい頃、本を読んで勉強した。
  - 子供が小さいころ、本を読んで少し勉強した。何も使わなくてもいいと思う。(2A)
  - 子供が小さいときは本を読んで勉強し、避けていた。(2E)
  - 「危ない食品」というような本を図書館で読んだ。読むと何も食べられなくなるので、気にしないようにしつつ、すごく悪いと書いてあるものは避ける。(2E)

#### 4) 遺伝子組換え食品に対するリスク認知の実態

##### <遺伝子組み換え食品のイメージ、リスク認知>

- 遺伝子組み換え食品について聞いたことはある。大豆、とうもろこし、小麦などが思い浮かぶ。
  - 聞いたことがある。(2全)
  - (遺伝子組み換え食品と聞いて思い浮かぶのは) 大豆、とうもろこし、味噌、きな粉。大豆から作られるもの全て。(2B)
  - (遺伝子組み換え食品と聞いて思い浮かぶのは) 小麦。(2D)

- 「遺伝子」組み換えという言葉が怖い。自分の遺伝子にも影響があるイメージ。品種改良なら受け入れられる。
  - 「高度品種改良」なら怖くないが、「遺伝子」という言葉が怖い（2全）
  - 言い方、名前の要素はすごく大きい。後期高齢者医療という言葉も然り。遺伝子も「品種改良」なら受け入れられる。言葉は大事。（2C）
  - 「高度品種改良が遺伝子組み換えを指す」ということならよい。（2D）
  - 遺伝子という言葉には、たとえば子供が不自由な体で生まれてくる、などのイメージあり。自分たちの遺伝子にも影響が及ぶのではないかという不安を持つ。（2D）
  
- 遺伝子組み換え食品がどういうものかよくわからないので不安。
  - 仕組みが全くわからない。クローンと遺伝子組み換えが同じに見える。工場の中で全く別な材料から大豆が作られているような感じ。全く大豆が使われていない豆腐、という感じ。（2B）
  - 逆に、仕組みがわかれば少しは安心するかも。少し選択肢を広げて選ぶかも。（2B）
  - 強い品種を作るために遺伝子を組み替えた、ということしか知らない。ニュースか何かで見たと思う。（2E）
  
- 遺伝子組み換え食品がどのようなリスクをもたらすかわからないので不安。
  - 「病気に強くなる」という理由で遺伝子を組み替えているが、それが私たちにどのように悪いのかわからない。本当にいけないものなら国がちゃんと言ってほしい。（2D）
  - 遺伝子組み換えでないものを選ぶようにしている。よくわかりもしないのに不安だけが煽られていて、遺伝子組み換えでないものを選んでいれば安心という感覚。（2D）
  
- パッケージにわざわざ「遺伝子組み換えでない」と書いてあるので、その方が安心。
  - 「遺伝子組み換えでない大豆使用」とパッケージに書いてあるということは、それがいいことだということ。（2A）
  - ワイドショーで取り上げられたとき、近くの手スーパーの納豆、豆腐、揚げのコーナーに「これは使っていません」と張り紙が出た記憶あり。それを見て「ほう」と思った。わざわざ貼り出すほどすごいことなのかと思った。それまではワイドショーや新聞で言葉を知っていた程度だったが、関心が高まった。（2A）
  - 遺伝子組み換えでないものを手に取る習慣になっている。（2B）

- 生協で何年も前から「遺伝子組み換え大豆を使っていない豆腐」などのパンフレットを見てきた。5年ぐらい前からそれを全面的に打ち出している。そう書いてあると安心。(2C)

#### <リスクへの反応、対応策>

- 安全基準を信用する。
  - 考え過ぎると何も食べられなくなる。半分頭の中から閉め出して、食べたいお菓子があれば、外国のもので遺伝子組み換えだとしても気にせず食べる。安全基準を満たしていると思いたい。(2C)
  - (政府の安全だという情報) 日本はそういうところがきちんとしているので、安全かもしれないと考えそう。(2C)

#### <リスク認知の形成要因>

- テレビ番組などで情報を得たが、必要以上に不安を煽っているようにも感じる。
  - 世間一般的に「遺伝子組み換えが悪い」という論調の報道ばかりだと思う。ニュースやワイドショーで見たと思う。自分で何がいいのか悪いのかわかっていないのに、そうでないものを選んでしまう。(2F)
  - ほとんどの製品が「遺伝子組み換えでないものを使っている」と書いてある。ならば何のために遺伝子組み換え食品を作っているのか。(2D)
  - クローン羊と遺伝子組み換えが同一視され、みんなが必要以上にいけないと言っているような気がする。安全性などをきちんとうたってほしい。PR不足。(2D)
- 生協のパンフレットで。
  - 生協で何年も前から「遺伝子組み換え大豆を使っていない豆腐」などのパンフレットを見てきた。5年ぐらい前からそれを全面的に打ち出している。(2C)
- 家庭における食のプロとして周囲に乗り遅れないように。
  - 売場書いてあると、これは気にしなければいけないことなんだろうと思ってしまう。また、熱心に裏を見ている人を見ると「私も見なくちゃ、見るふりだけでもしなくちゃ」という気になる。安いものをサッと買って買うことはできない。「それを気にしていないと現代の主婦じゃない」と思って格好をつけてしまう。(2C)
  - ちょっと前まで中国産野菜を気にしなかったが、このところさすがにダメだと思う。中国産野菜を手にとって眺めている人もいるので、他のものも見なければいけないような気がする。乗り遅れないように。(2C)
  - 一家の主婦であり、家の中では食のプロだと思われるのだから、形だけでも気にしなくちゃ、と思う。(2C)

#### <情報提供に関する要望>

- 正確な情報がほしい。映像はわかりやすい。生協の情報は信頼している。
  - もっと是非について語るべき。新聞に書いてあっても細かいところまで見ない。ニュース番組やNHK特集で検証番組をしてもらいたい。目に映るもののほうがわかりやすい。でないと正直言ってわからない。(2E)
  - それまで遺伝子組み換えのことを知らなかった。そういうことにスポットが当たったことで「へえ、そんなのがあったのか」と思った。業界の人しか知らない情報が一般に降りてくるとき、情報の量はかなり少なくなっているはず。(2C)
  - 問題が大きくなれば消費者に知らせなければいけないが、そういうことに関しては生協のほうが熱心。生協の情報は特に信頼感がある。(2C)

#### 5) BSEに対するリスク認知の実態

##### <BSEに対するリスク認知>

- BSEが話題になった際には牛肉の購入・摂取を控えた。
  - 私は肉がキライなのでなんでもないが、夫と子供が肉好き。しかし、BSE騒ぎのときは食卓から牛肉がピタッと消えた。(2A)
  - 自分の分はいらないので、スーパーでオージービーフを家族の分だけ買っていた。(2A)
  - ほとぼりが冷めるまで牛肉は買わなかった。特にアメリカ産を食べなかった。(2C)
  - 牛肉やウナギなど、問題が話題になっている間は手に取る気になれないので少し我慢。(2C)
  - 息子は吉野家の牛丼が食べられなくなり、アメリカの牛ではおいしくないと言っていた。(2C)
  - 子供は怖がって牛肉を食べなくなった。近所のスーパーにはアメリカ産牛肉は置いていないが、子供は国産以外食べなくなってしまった。国産と書いてあっても嘘かもしれないが、子供はバンクーバーにホームステイしたのに、一度もビーフを食べなかった(ホストはチキンしか食べない家だった)。ちょっと神経質なのかもしれない。(2E)
- 現在の検査体制は信頼したいが、多少不安がある。
  - 検査体制もだいぶ厳しくなっているので、そのあたりは信じなくてはいけないと思う。内臓でないところを選べばいいのだろう。でもミンチはどうなのか？(2A)
  - 対オーストラリアビーフの検査体制はどうなっているのか。対アメリカほど厳しくはないのではないのか。カナダポークやブラジル産などを見るが、ちょ

- っといやなので買わないようにしている。だがたとえば焼き鳥はタイ産が多い。加工品になってどれだけ口に入っているかと思うと怖い。(2B)
- 世の中でこれだけ例があると、システムが整っていてもどこまで規制できるのか不安。(2D)
  - ちゃんとしているんだかしていないんだか。テレビでよく「どこそこの部位が見つかった」と言っているが。(2D)
  - (日本の BSE 対策) まだ安全だと思う。しかし全頭検査はサンダ牛だけと聞いて、信じられなくなった。新聞で読んだか本で読んだ。ブランド牛も何もあったものじゃない。(2B)
- 輸入食品は嫌。国産は安心できる。
    - 豚、鶏肉も海外産がふつうに売られているが、私は輸入の食品はイヤ。腐らないわけがない。横浜の映像でドラム缶のすごいのとかを見てしまう。ああいうのがイヤ。元々輸入食品がキライ。(2A)
    - (全頭検査、日本の発症例ゼロ、それでも不安?) 本当の国産なら私はいいが、未だに輸入物は買えない。(2E)
    - 牛肉に関しては、国産はある意味安心感あり。(2D)
  - 生産地表示が信用できない。
    - アメリカで育てられた日本種も「和牛」。そういうことが明確でないので情報が欲しい。(2B)
    - 牛肉の表示も“和牛”などいろいろ。ブランド牛も信じられない。(2C)
    - ただ、本当に国産かどうかがわからない。それでもそこまで言ったら何も食べられなくなる。(2E)
    - 加工された肉は国産かどうかもわからないので、しょうがなく食べている。(2F)
  - 今も不安。
    - 今でも不安。でも食べたいので、オーストラリアビーフを買ってしまう。そちらが危なくなったらどうなるかと思いながら、目をつぶっている。(2C)
    - 不安はずっとある。(2F)

#### <リスク認知の形成要因>

- テレビ番組からの情報。
  - アメリカにアルツハイマー患者がとても多い、それは結局狂牛病だろうといわれている、とテレビのニュースで聞いた。私も、そうかな、と思っている。(2E)
  - テレビでイギリスの若い女の子が狂牛病の牛肉を食べて病気になった映像を

見た。あれを見て以来、怖くて食べられなくなった。元々あまり食べるほうではなかったが、ますます食べなくなった。(2F)

## 6) その他のハザードに対するリスク認知の実態

### <食中毒に対するリスク認知>

- 夏場の弁当などは心配だが、あまり不安は感じない。むしろ除菌に神経質になりすぎる傾向に疑問。
  - 夏場のお弁当を持たせるのが心配。うちでは今年から大学生になったので弁当から解放されたが、周辺には節約のために弁当を持ってくるお嬢さん方が多いようだ。(中略) その話が出たのが夏前だったので、持って行っても大丈夫なのだろうかと思った。(2C)
  - あまり不安は感じていない。(2D)
  - あまりにも除菌しまくるのは好きではない。食事前に手を洗い、うがいをするのは子供にやらせたが、あまりにやらせると子供を弱くする、というのが私の考え。よそのお母さんが必要以上にウエットティッシュを使っているのを見て、あまりに無菌状態ではないかと思われた。自分の育ち方を考えればあれはちょっと。(2B)
- 実際に食中毒になると怖いと思う。
  - 去年、法事で使った料亭で、自分を含む20人がノロウイルスに感染、入院騒ぎに。仕出し料理を作った板前が潜伏期間だったというだけでああなるというのを経験して怖くなった。ああいうのは怖い。(2B)

### <健康食品に対するリスク認知>

- 色々な健康食品を試している。効果は疑問。
  - 7年前、サプリにハマった。あらゆるサプリにハマった。朝、すごい錠剤の量でおなかいっぱい。ある日、これだけで太りそうだと思ってやめた。(2A)
  - ヨーグルトをたくさん食べている、と妹に言ったら、カスピ海ヨーグルトのタネをくれた。今は作って食べている。(2A)
  - 関心あり。ダイエット目的でもろみ酢を10年近く愛用。他にも友達に勧められたものなどをよく摂っている。(2B)
  - ケフィアなどのヨーグルトはタネ菌を貰って自作することもある。(2B)
  - 息子がサプリおたく。おそらくネットショッピングのポイント制に魅力があるようで、はまっている。数種類のサプリを朝に並べてやるのが私の仕事。ついでに私用のヒアルロン酸なども買ってもらって飲んでいるが、私は一応手を出して試してみる程度。(2C)
  - 昔より安く、買うとポイントも貯まるのでつい買ってしまう。飲んでいれば安心。でも効果がわからない。(2D)

- そのときどきでブームになったものに手を出してしまうが、効果があるかどうかはわからない。(2F)
- 「健康」という言葉や、表示が詳細なので安心している。
  - 一応「健康」とついていると、他の食品より厳しい基準が設けられているのでは、という漠然とした思いがある。(2B)
  - カプセルに「豚由来」などと書いてある。細かく書いてあるので、きちんと研究、管理されていると思って買っている。その安心感がある。(2C)
- 全く不安を感じない。
  - 何でできているか全く気にせず買って飲ませている。原材料に対する不安も全くない。(2D)
- 色々なものを飲んで大丈夫かとの不安は多少ある。
  - 夫にいろいろなサプリを飲ませている。あれもこれも摂って大丈夫なのかと思いつつ、ダイエット、燃焼系などいろいろ飲ませている。(2D)
- サプリメントは怖いので買わない。もしくは信用できるブランドのものを選ぶ。
  - 全く興味がないので買わなかった。食事をちゃんとしていればいいと思う。(2E)
  - 義母が黒酢とかチョコラ BB がいいと言って私にくれる。(2E)
  - 夫のメタボリック検診で引っかかったので、インターネットで見たゴマ麦茶を買った。もう飲み終わったようだ。自分や子供のことは気にしないが、夫が太り気味なのでそれが気になる。(2E)
  - (効用? 危険性?) だから私は怖くてサプリは買わない。(2E)
  - あまり知らない会社のは買わない。ある程度名前が知れていて信頼できる食品会社のを買う。「肝臓を壊して人が亡くなった」というお茶は、名も知らぬ中国のブランドだったと思う。(2D)

## 7) 食品に関する情報源

### <食品に関する情報源>

- 新聞・テレビで見る。
  - まず新聞、次にテレビで見て、興味を持ったならネットで調べる。でも今回の汚染米については全く調べなかった。毎回同じことだから。(2A)
  - テレビが最初。情報番組やニュースで「この食品が実は危なかった」「こういう事件があった」と見たり、女性向け情報番組で「これが体にいい」とわかる。映像で情報を仕入れることが多い。(2B)
  - 自分の中で信用度が高く、最後にじっくり見るのは新聞の生活面。(2B)

- テレビ番組ではニュース特集をより信頼。ワイドショーを見て即購入することはない。
  - (番組なら) 報道特集や「バンキシャ」のニュース系の中の今日の特集がいい。バラエティより、そういうもののほうがよい。積極的に見ようと思う。ニュース系のほうが信頼できる、安心できる。(2C)
  - ワイドショーがいちばん。ニュースはさっと流すだけだが、ワイドショーではセンセーショナルに「この食品はこれがいけない」とかやっている。それをよく見る。夕方より朝。最近はあまり食品が扱われているのを見ていない。(2D)
  - みのもんたは信用できない。それでもたまに裏番組がつまらないときに見ることがある。解説を聞いていると「なるほど」と思うが、だからといってそのままスーパーに買いに行くことはない。(2D)
  - みのもんたでは軽すぎる。(2E)
  - 報道特集や「バンキシャ」の食品特集で見ることがある。最近は汚染米ばかり。(2F)
  - みのもんたの番組なんか見ない。もうちょっと年代が上の人が見るもの。(2全)
  
- 仕事があるので、日中はテレビを見ない。
  - 仕事があるので日中のテレビは見ていない。(2A)
  
- 検索エンジンを使ってインターネットで調べる。
  - (調べるサイト) YAHOO から入り検索。もし新聞に企業名が出ていたら、それをキーワードに調べる。(2A)
  - 「食品」というキーワードではたくさん出てき過ぎるが、YAHOO ニュースならリンクからニュースに入ることができるのでよく利用する。(2A)
  
- 家庭科では栄養素については習ったが、食の安全については習っていない。安全が当たり前だった。
  - 食については習ったが、食の安全安心についての教育なんてなかった。(2全)
  - 六栄養素の絵を描いた記憶あり。(2A)
  - 栄養成分表の読み方を習った。栄養素もやった。(2B)
  - 私たちの年代は添加物をバンバン食べさせられた世代。(2B)
  - 安全なのが当然だ、という時代だった。(2D)
  
- 子どもの世代は食に関する教育に学校が熱心。
  - 子供はやっていたと思う。特にその成果が現れているかどうかはわからない。

(2全)

- 給食試食会に行った。これほど熱心にやっているのかと思って感心した。栄養士が献立を考え、子供たちの口に合うようにしながらも、安全なもので、今は子供が苦手と思える味でもいつかこの味に戻ってこられるように、という心でやっているという。私たちの頃となんと違うのかと思った。(2B)

<情報源の信頼度>

- 国の情報は信用している。
  - 一応国は信用している。(2全)
  
- 国よりも第三者研究機関をより信頼。
  - 国より、第三者機関のほうが信用できる。(2B)
  - (信頼できるコメンテーター) 大学教授、専門の教授。医者。専門分野の人が信頼できる。(2C)
  - (信用できる情報源と理由) 大学がよい。大学は第三者機関的。リーマンブラザーズの破綻についてゴールドマンサックスの人が言っているのは信用しがたいが、大学の先生の言っていることは中立的に思える。(2D)

8) 食品分野におけるリスクに関する情報ニーズ

- 正確な情報を開示してほしい。
  - 良い情報も悪い情報も出してほしい。薬品にしても何にしても使っているならそれでいい、教えてもらえばこちらがこちらの裁量で采配する。(2A)
  - 正確な情報をきちんと隠さずにやってもらいたい。(2C)
  - 正確な情報を。汚染米のようなこともある、やはり正しい情報を教えてほしい。(2F)
  - 正しい情報がほしい。情報が与えられても嘘であることがある。表示があっても「本当か?」と疑ってしまう。(2D)
  - 国の情報、企業の情報両方とも。たとえば B 級品だと納得して買うのはよいが、B 級品だとだまされるのはいや。(2D)
  
- 本当のところは消費者にはわからないので生産者から情報提供があるとよい。
  - 良心的な農家は、農薬使用量の数値を出している。見てもわからないが、スーパーでもそういう表示をしてくれたら選ぶ側の選択肢が広がりそう。(2B)
  - 生産者が載っていたりこと細かく書いてあると読んでみる。ちょっと形が悪くてもそちらのほうが安全そうで、買ってしまふ。本当のことが書いてあるかどうかわからないが、ついそちらを選ぶ。(2C)
  
- 添加物の使用量が少ないものを選べるよう、情報がほしい。

- 「この商品は、使用量が基準値よりかなり低い」と書いてあると魅力的。(2D)
- 国の危機管理の一環として事件発生に関する情報開示もきちんとしてほしい。
  - 行き当たりばったりの情報開示はやめて、きちんと危機管理を。大臣の口が滑った尻拭いで本来公表しないはずだったデータを公表したりしている。被害者の企業と加害者企業がめちゃくちゃになり、困った人がたくさん出た。テロの危機管理同様、食品もちゃんとやって。食べるほうの身になってほしい。自分たちはどうせおいしいものを食べているからいいや、事故米を食べているのは給食や老人ホームの人たちだからいいや、というところが見え隠れする。(2D)
  - 真実を隠したり人のせいにするのはやめて。事故米も厚労省の怠慢と今まで積もったことが原因なのに、逃げ腰の姿勢だった。我々の税金で運営しているのだからちゃんとやってほしい。(2E)

#### 9) 食品分野におけるリスクに関する情報提供等に関する意見・要望

- 国のインターネットサイトは難しい、見にくい。情報が多すぎてほしい情報にたどり着けない。
  - (信頼度の高いサイト) そのとき次第。国の機関のページは難しく、見てると疲れるのでイヤ。しかも堅い。パッと見た感じが違う。一方、メーカーサイトは見やすい。(2A)
  - (信頼できる情報源) インターネットなら国のサイト。国の調査は、一応調査機関を経て出てきているはずだから。だが国のサイトは作り方が悪い。字が薄いし、リンクは使いにくいし、レイアウトが悪い。農水省発表の焼酎のリストが出たが、見つらなかった。厚労省のホームページに血液の問題が出たときも調べにくかった。信頼性があるからこそ、見やすく作ってほしい。(2B)
  - (信頼できる情報源) ドッグフードに狂牛病の要素が入っているかもしれないという話があったとき、メーカーのホームページに調べに行った。すると非常に詳しくどこの肉を使っているか書いてあった。メーカーのホームページはわかりやすい。(2D)
  - その際、国のサイトは調べにくく、ペットフードの話さえにたどり着けなかった。(2D)
  - 国のホームページはどこの省庁のも見つらい。(2A)
  - 国のホームページは情報が多すぎる。それにPDFが多すぎて重い。簡易版を作ったり、小学生版を作るとよい。(2D)
- 情報の開示だけでなく、国民の声が吸い上げられるようなシステムを。
  - 国のホームページをもう少し見やすくし、出した情報に対して自分たちの声が吸い上げられるようなシステムを作ってほしい。たとえば今回の事故米事

件で被害者となった業者への補償は我々の税金でまかなわれていることを忘れないで。省庁は頭のいい人ばかりが行くところのはずだから、頭の悪いことをしないで。(2B)

(3) グループ3 (ビジネスマン [30~40代])

1) 食生活や食品安全についての関心事・懸念

<食品分野における関心事>

- 輸入食品が不安。
  - 野菜の原産国。子供が成長期なので農薬を避けたい。特に中国産を避けるし、安売りの食品はスーパー店員に原産国を尋ねている。子供も「中国産だからやめよう」と言う。(3A)
  - 中国産冷凍餃子。自分が買うときに原産国を気にしたことはなかったが、最近中国産は不安。(3D)
  
- 賞味期限や食中毒は心配。
  - 夏の初め、7月ごろ、娘の中学校の厨房でガス中毒が起こり、一週間給食が止まり、弁当を持っていった。夏に朝から弁当を持って行っても大丈夫なのかと思った。(3C)
  - また、小学生の息子の給食室の厨房に泥水が入り、給食が止まった。集団食中毒が起きたらどうするのかと思った。(3C)
  - 二つの事件を通じて、子供を預かるのは大変なのだった。(3C)
  - 賞味期限が気になる。土日には出来合いのものを買うが、いつから売られているのか気になることがある。(3E)
  
- 汚染米(→酒)にやや関心。
  - 事故米という言葉は初めて聞いた。一般の人が知らないそういうものがあるのだな、と思った。(3A)
  - (汚染米の件で)うちにも焼酎メーカーから回収のハガキが来た。(3B)
  - 汚染米。米だけでなく酒にも使われていたので心配。芋焼酎にも関係がある。汚染米に関係ある焼酎を飲んでいたので気になった。うちにはメーカーからハガキが来た。(3F)
  - 今回の事故米の件でリンクをたどって「こういうものだ」とわかった。新聞のサイトからたどっていった。(リンクの状況)事故米の定義、どこで使われているかなどを見ていった。(最終的な説明者)どこだったか忘れた。必要最低限のことは理解したと思う。(3A)
  - (気になったこと)事故米に関して、使っていないところの名前と住所が発表されてしまった。(3B)
  - 最近事故米のニュースが印象に残っている。(3D)
  
- 食品の偽装問題は気になるがあまり心配していない。
  - 偽装。でも自分が当たってしまったらしょうがないのか、というレベル。(3B)

<食品以外の分野における関心事>

- 環境・エネルギー問題。
  - エネルギーの枯渇。原子力に頼るようになったら余計危ないのではないか、将来のエネルギーはどうなるのか。(3A)
  - 異常気象。(3D)
  
- 犯罪。
  - 外国人による放火、盗難等の犯罪。家の近所でそういう事件が頻発。グローバル化する一方、そういう問題が生じている。(3C)
  - 犯罪。突然刺されるといったことが最近ある、いつ刺されるかもわからない。(3E)
  
- 日中関係。
  - 食生活以外にも中国が不安。国籍不明の潜水艦も出てきたりしている。(3F)
  
- 自分や家族の健康。
  - 自分と家族の健康。(3B)

<食品分野とそれ以外のリスク認知の差>

- 食品分野とそれ以外のどちらが重要とはいえない。質が違う。
  - 甲乙つけがたい。(3A)
  - どちらも同じくらい。(3D)
  - 甲乙つけがたい。(3F)
  
- 犯罪に巻き込まれるリスクは予見できない。
  - 食べ物の原産地などは自分でも気をつけられるが、犯罪に巻き込まれるのは予見できない。質が違う。(3A)
  - 刺される等は予見できない。(3B)
  
- 食品分野以外の方が心配。食はこれまでなんとかなってきた。
  - 一年間に 1000 回、あと 30 年の人生で 3 万回の食事をする。天文学的な数字なので、気にしていたらキリがない。当たったら当たったでしょうがない。もしあと 3 回しか食べられないなら資財を投げ打って高級なものを食べる。(3C)
  - 食べたいときに食べたいものを食べているので、食生活はあまり気にしていない。(3B)
  - 食べ物は毎日口にするものなので気になるところだが、あまりひどい目にあったことがないので、今後を考えると環境問題などのほうが心配。(3D)

- 食品より、災害が心配。(3E)
  - 日本は食のトラブルの可能性が低いと思う。(3E)
  - 食品はお茶や米、酒など幅広いので絶えず気を配らなければならない。常に注意しなければならないのがつらい。自分は注意していないかもしれない、でも今のところなんとかなっている。(3F)
- 子どもがいるので、食には注意している。
    - 子供が心配なので注意している。ものによっては生協を利用している。(3A)
    - 生協にはある程度信頼感を持っている。(3A)

## 2) 農薬に対するリスク認知の実態

### <農薬に対するイメージとリスク認知>

- 殺虫剤なので、有害。
  - 「農薬＝殺虫剤」。自分の口に入ると害がある。(3C)
  - 体に悪い。(3E)
  - 虫が死ぬのだから、同じ生物である人間にいいわけがない。虫は野菜を洗わずに食べるが、人間は洗うから多少は大丈夫だろう。(3F)
  - 無農薬のほうがよい。農薬のイメージはよくない、殺虫剤のイメージ。(3D)
  - お茶に農薬を混入したものが売られていた、という犯罪があった。(3F)
- 残留農薬に対して有害性のイメージがない。基準値を信頼している。
  - (害について) 特に聞いたことがない。(3全)
  - 特に強いものを使っているとは思わないので、健康不安はない。農薬に対する不安を考えたことがない。(3B)
  - 蓄積が心配で野菜を食べなくなったらビタミンが不足し、健康を害する。人体に影響のない農薬が使われていると勝手に解釈している。(3C)
  - 野菜についている農薬が体内に蓄積されて害になると思ったことは全くない。残留農薬という言葉聞いたことはない。(3D)
  - 気にしていない。昔のほうが農薬の環境が悪かったが、それでもなんともない。今はもっと技術が進んでいるので大丈夫だろう。(3E)
  - でもちょっと入っているのはしょうがない。無農薬野菜は高いので、その値段を考えると多少はしょうがない。健康を害さない程度だろうと信頼している。(3E)
  - (体の大きさの違い) 害があったら売っていないだろう、一応安全な基準なのだろう。(3F)

### <リスク認知の形成要因>

- 農家は自家用の野菜に農薬は使わないと聞いた。
  - 農家は、自分たちが食べる分に農薬を使わないと聞いた。そう聞くと気をつけたいと思える。(3A)

#### <リスクへの反応>

- 日本の基準ならまあ良い。
  - 子供のことを考えると無農薬のほうがいいが、最低限、日本の農薬の基準ならしょうがないと思う。農協の指導を信頼するしかない。金銭的な問題で全て無農薬のものを買うことができないのしょうがない。(3A)
  - 中国は滅茶苦茶で、よく新聞記事などで「毒が」ということを読む。それと比較すれば、日本で変なものを使っていたという話をあまり聞かない。(3A)
  - 日本で作っている野菜は信用できる、基準値を満たした害のない程度の量だから問題ない。しかし中国はじめ外国では日本で使えないような農薬を使っているのが怖い。(3D)
  - (日本は大丈夫という根拠) ふつうの野菜を食べておかしくなったこともないし、そういう話を聞いたこともない。(3D)
  - 輸入レモンのワックスがきつい、という話を聞いたことがある。(3F)
- 多少は仕方ない。虫が入っているのは嫌だ。
  - 虫を食べるよりはよい。(3B)
  - 野菜についていた虫を食べてしまったらそれも害がありそう。昔、よく味噌汁に虫が浮いていた(そういう親だった)。(3C)
  - 虫もいやだが、無農薬のほうが嬉しい。それでも先日キャベツを切っていたらナメクジが出てきた、いやだった。(3F)
  - 無農薬でなくても、間をとって低農薬野菜ならいいと思う。(3F)
  - 害虫を防ぐのだからいいわけではないが、野菜を作るうえでは仕方ない。(3E)
- 野菜に虫がいても大丈夫。
  - 自分で買うときは農薬のことは気にしていない。逆に虫がいると安全なのかと思える。以前は気持ち悪かったが、最近は大丈夫。(3D)

#### <リスク対応策>

- 生協で購入する。
  - 生協で買うのは、農薬があまり使われていないから。そういううたい文句でやっているから。(3A)
- 国産を選ぶ。
  - スーパーでは国産かどうかだけを見ている。(3A)

- 農薬というより、国産か外国産かを見る。それが農薬につながっていくから。(3F)
- (価格の問題) 中国産は怖いので、多少高くても国産を選ぶ。(3F)
- 見た目が悪い方を選ぶ。
  - 低農薬とか無農薬と書いてあるだけでは判断しない。食材の見てくれで、無農薬っぽいかどうか判断する。思いっきりぴかぴかの野菜より、汚れているほうが無農薬っぽくて手が伸びる。(3C)
- 値段との兼ね合い。
  - 無農薬かどうかは見ればわかるが、農薬を使っている場合は使われている量の多寡はわからない。だから値段の兼ね合いで安いものを買ってしまう。ふだんあまり気にしていない。(3D)
  - (顔の見える生産者情報があるとよいか) ものによるが、基本的には写真を貼ってあるものは高そうだというイメージがあるので、そうでないものを選ぶ。(3D)

### 3) 食品添加物に対するリスク認知の実態

#### <食品添加物のイメージ、リスク認知>

- 着色料、香料などのイメージ。
  - 着色料、香料。(3F)
  - (使う理由) 保存をよくしたり色をきれいにしたりするのだと思う。(3E)
- 農薬ほど有害なイメージはない。
  - 農薬は体に悪いイメージがあるが、添加物が体に悪いというイメージを持つことがなかった。裏を見ても賞味期限程度だった。(3E)
  - いいとはいえないが、体に思いっきり害があるイメージは農薬より低い。(3E)
- 複数の食品添加物を摂取すると害があるかもしれない。
  - 単品では無害かもしれないが、複数摂ることによって変な反応が起こり有害になることがあるかもしれない。(3F)

#### <リスクへの反応・対応策>

- 避けようと思っていない。
  - あえてたくさん使って料理を作ろうとは思わないが、日本で売っているものを食べないようにしようと思ったことはない。(3D)
  - 栄養バランスには気をつけても、添加物にまで気を配るかどうかはわからない。(3F)

- (将来の子供への不安) 自分が食べて子供への影響なんて、考えたことがない。(3B)
- 着色料や化学調味料など特定の食品添加物のみ気になる。
  - 色が普通とかなり違う食品は、パッケージ裏を見て添加物を気にする。そうでなければあまり気にしない。(3A)
  - 合成着色料は気になる。子供が駄菓子屋でそういうものを買ってきてしょっちゅう食べているのが気になる。毒々しい色で、口の中がメロンソーダの粉ジュースでブルーになっているのを見るとぞっとする。また、きれいな梅干を見るとぞっとする。(3C)
  - 味の素はあまり好きでない。そういう添加物が入っているのはイヤ。(3C)
  - 気にしていないつもりだったが……。うまみ調味料をいっさい使わない自分はちょっと気にしているのだと思う。(3D)
  - 食べ物では気にしないが、飲み物は気になる。たとえばお茶やチューハイ。(3F)
  - (チューハイの添加物とは) 香料や着色料。入っていないのが売りになっている製品を買う。(3F)
  - (食品は大丈夫なのか?) 大丈夫ではないが、あまり気にしていない。(3F)
  - 添加物によって決める。やばそうな添加物が入っていたら避ける。(やばそう、とは) 合成着色料たっぷり、過酸化水素など、いかにも体に毒々しい感じのものが入っていたら避ける。(3C)
- 農薬ほど気にしない。値段との兼ね合い。見た目も考慮。
  - 農薬でないのであまり気にしない。あまりにもグロテスクなら別だが、無添加が1割以上高ければ選ばない。(3A)
  - 無添加のほうが高いだろうから、値段と見た目で考える。(3B)
  - 値段が同じなら無添加を間違いなく買う。(3D)
  - 同じ値段なら添加物のないものを選ぶ。でも無添加の見た目があまりにもおいしくなさそうなら買わない。(3E)
  - (無添加のほうが高かったら) たぶん買わない。無農薬なら少し高くても買うが、無添加ではそう思わない。(3E)
  - 価格を考えて買う。無添加が倍以上だったら買わない。(3F)
- 気にしない。
  - 入っていないものを探すほうが難しいので、気にしていない。(3B)
  - 全く気にしていない。それなりにきれいに、おいしそうに見えるのはしょうがないと割り切っている。(3E)
  - スーパーのパッケージはちょっと気にして見ているが、保存料は入っていて

も気にしない。(3D)

- 無添加は昔ながらの味だが、味が薄そう。
  - 無添加のほうが昔ながらの味。合成保存料などが入っていると本来食べ物が持っている味がしないのでは。(3A)
  - 無添加は味が薄そうなイメージあり。味が濃いのが好きなのであまり選ばない。(3B)
  
- 「無添加」の表示は信用。消費期限が短くなってもすぐに食べてしまうのでよい。
  - (信用) 添加物が入っていないのだ、と信用する。(3D)
  - (添加物を使わないことによる保存性の悪さなどのデメリット) すぐに食べるから大丈夫。(3D)

#### <リスク認知の形成要因>

- 有害だという情報を聞いたことがない。特に事件もなかった。
  - 有害だ、という情報を聞いたことがない。(3全)
  - 蓄積しているんだなあ、とは思っているが、昔から農薬や添加物の野菜を食べて死んだという話は聞かないから、ある程度しょうがない。(3A)
  - 身近に事件もないし、添加物を食べてどうなるという情報もないので、安心して食べているのだと思う。(3B)
  - あまり聞いたことがない。(3D)
  - ラーメンやつけ麺をよく食べるが、かん水がよく入っている。わかっても食べてしまう。「大丈夫だから使っているのだ」と思うようにしている。(3D)
  - (大丈夫と思う根拠) 着色料はあまりいいイメージはないが、食べて何か変になった事件も聞いたことはない。(3D)

#### 4) 遺伝子組換え食品に対するリスク認知の実態

##### <遺伝子組み換え食品に対するイメージ、リスク認知>

- 作り物のイメージ。
  - 合成、作り物という感じ。ニュースあるいはネットで見聞きした。(3B)
  - 遺伝子組み換えは、自然界にあるものと違うものを作り出すこと。(3E)
  
- 遺伝子組み換え食品といえば大豆やトウモロコシ。
  - 大豆。(3B)
  - トウモロコシ。(3F)
  
- 「遺伝子組み換え」という言葉がマイナスイメージ。
  - 遺伝子組み換えという言葉にどこかでマイナスのイメージがあるから、言い

方を変えればよい。「遺伝子」を「組み替える」という言葉がマイナス。「品種改良」ならプラスイメージ。(3B)

- BSE の画像が強烈だったので、言い換えをしてもダメ。遺伝子という言葉で聞くとあの画像がどうしても出てきてしまう。食べていると不安だというより、とにかくあの画像が脳裏に浮かんでしまう。(3C)
  
- どう悪いのかわからない。安全性の検証ができていないので怖い。
  - 遺伝子を組み替えるということは、今までなかったものを生み出す感じ。それが人体に入って大丈夫なのだろうか。(3D)
  - 気にする。いいか悪いかかわからない。危険な可能性もあり、怖い。(3D)
  - (よくわからないから怖い?) よくわからないので、どんな害があるのか想像もつかず怖い。(3D)
  - 遺伝子組み換え食品を食べてすぐどうにかなったという話は聞いたことがないが、どうなるかわからないから怖い。(3D)
  - 全く影響がないのか怖いものなのか今はわからない。添加物は昔から食べていても大丈夫だから怖くないが、遺伝子組み換え食品は最近のものなので、いちばん怖いのか安全なのか判断できない。不安がある。(3E)
  - 遺伝子組み換え食品はそう長く経っていないので、全て検証しているとは思えない。10年経って何かがあったらいやだから、そういう食品を選ばない。(どれくらい経つと影響が出ると思うか)それがわからないから食べたくない。(3A)
  - 醤油等のパッケージでよく見るが、未だに影響がわからない。表示されるようになってから時間が経っているのに、未だに影響がわからないのはなぜだろう。(3F)
  - (安全だと思えるか)安全かどうかはわからない。(3F)
  
- 心配していない。
  - 心配はあまりないし気にしていない。知識もない。(3B)
  
- 遺伝子組み換え技術の必要性がわからない。
  - だが、ならばなぜやっているのか、という疑問がある。(3B)
  
- 遺伝子組み換え食品を食べると BSE のような病気になるイメージがある。
  - BSE 問題と遺伝子組み換え食品がごっちゃになっているかもしれない。BSE 問題で子牛がへばっているのを見た、印象的だった。食べると俺もああなるのか、怖い、と思った。(3C)

<リスクへの反応・対応策>

- 遺伝子組み換え食品は避ける。
  - パッケージに遺伝子組み換え食品と書いてあったらパス。(3A)
  - パッケージを確かめて買う。使っていないほうが安全だと思う。国産丸大豆100%みたいなものを買いたい。(3F)
  - 書かれていないものを食べてしまうのはしょうがないが、書いてあれば遺伝子組み換え食品でないのを選ぶ。(3A)
  
- 知らずに食べているのだろう。気にしても仕方ない。
  - もしかすると知らずにかなり食べているかもしれない。でも俺だけが不安になっているわけではない、多少なら大丈夫だろうと思う。(3C)
  - 知らずに食べているものはしょうがない、考えない。(3D)
  - 外食などしているとしょうがない。気にしないほうがよい。(3F)

#### <リスク認知の形成要因>

- 遺伝子組み換え食品不使用が宣伝になるので。
  - スーパーで「遺伝子組み換え食品は使用していません」と書いてあるのでよほど悪いのだろうと思う。(3D)
  
- ニュースで知った。
  - ちょっと前に遺伝子組み換え食品のニュースをよくやっていた。最近やっていない。(そのとき聞いた内容)「遺伝子組み換え食品だということを隠していたが実は遺伝子組み換え食品だった」という内容だったと思う。(3D)
  - 品種改良だと考えればそう悪いものとは思えないのかもしれないが、ニュースなどによって「使っていると悪い」というイメージを持ってしまっている。また、わからないから避けたい。そう思い込んでしまっている。(3E)
  
- テレビで見て、BSE に遺伝子が何か関係していたと記憶している。
  - (BSE と遺伝子組み換えを同一視した理由) BSE でも遺伝子という部分が出てきていたからと思う。本質的には違うことなのだろうが、そのとき「だから遺伝子組み換え食品の大豆や芋を食うとああなるのかもしれない」と思い、気持ちが悪くなった。(3C)
  - (子牛を何で見た?) ニュースやワイドショーで見たと思う。(3C)
  
- データに基づいて安全性が証明されれば安心できる。
  - (安全性についてのデータがあれば?) 気にしなくなると思う。ちゃんとしたデータがあれば。ニュース等でそういうのを大々的に「安全ですよ」と言ってくれたら大丈夫。(3D)

- 多くの人々が食べて大丈夫だという実績ができれば安心できる。
  - それなりの実績が出て、みんな買い始めて、いろいろな製品が出てくれば安心するかもしれない。(3E)

## 5) BSEに対するリスク認知の実態

### <BSEに対するリスク認知、リスク対応策>

- 話題になった時期は購入を控えたが、今は気にしていない。
  - 事件が起きたときは気にしたが、それほどでもなくなった。(3A)
  - 今日本に入ってくる牛肉は大丈夫、日本政府を信頼している。一時期は避けたが、今は大丈夫。(3D)
  - (信頼の根拠) 恐れのある牛は日本にぜったい入ってきていないと信じている。そう思わなければ安いアメリカ牛は食べられない。(3D)
  - 当時は国産でなければ食べられなかったが、今は“喉もと過ぎれば”。(3E)
  - アメリカの検査体制も強化されたと思う、今は気にしていない、不安ではない。(3E)
  - 世の中が騒がなくなったし、あの画像も最近見ないので不安感は軽くなった。(3C)
  - 以前ほど気にしてはいないが、できれば国産が嬉しい。輸入ならアメリカよりオーストラリア。(3F)
- 今でも国産を選ぶ。
  - アメリカの管理体制はいい加減だろうから、ぜったい買わない。オーストラリアのなら買う。第一優先が国産、次がオーストラリア、それがなければ買わない。(3A)
  - (産地) なるべく国産を食べる。あるいはポスター等で産地を確認するようになった。どこの牛かが気になる。(3B)
  - BSE の画像を見てから、精肉コーナーで見ると国産と輸入品は値段がすごく違う。輸入は安いけれどリスクがあるという暗黙の了解のような気がして、手が出ない。国産があまり高ければ、その日は買わない。(3C)
- あまり気にしていない。
  - 吉野家、すごく食べたかった。一日だけの解禁日には行った、おいしかった。(3B)
  - あまり気にしていない。食べに行っている。(気にしない理由) ニュースでもあまり聞かないから。平気で牛肉を食べている。(3B)

## 6) その他のハザードに対するリスク認知の実態

### <最も心配なハザード>

- 農薬が心配。BSE は自分でリスクを回避できる。
  - 農薬。(3A)
  - 農薬。(3B)
  - 添加物が心配。BSE は選ばなければ避けられる (3C)
  - BSE がいちばん心配じゃない。他は同程度。(3D)
  - さっきまでは遺伝子、ここで話を聞いて農薬。(3E)
  - いちばん気になるのは農薬。次が添加物。(3F)

#### <食中毒のリスク認知>

- 子どもが食中毒にならないかは心配。概してあまり不安でない。
  - 子供が心配なので、危なそうならなるべく捨ててしまう。(3A)
  - 食中毒には夏のイメージがある。夏が終わったので心配していない。(3B)
  - あまり心配ではない。(3E)
  - 自炊しているが、食中毒になったことはない。(3F)
- 食中毒の経験あり。なりたくない。
  - 経験あり。旅館に行ったときに食中毒になって倒れてしまうのはいやだ。(3C)

#### <健康食品のリスク認知>

- 効果のあるものは飲んでる。または興味がある。
  - ウコン、効く。今日は飲みそうだという日には飲んでるが、二日酔いしない。(3B)
  - リポビタンやユンケルをたまに飲んでる。ユンケルは高いので効きがぜんぜん違う。仕事するとき、睡眠不足だったり体の調子が悪いときに飲んでる。効く。200 円のリポ D とユンケルは全然違う。(3B)
  - 何年か前、肝臓機能で要注意が出たので、ウコンを飲んでる。ハウスが出している錠剤を飲んでる。(3C)
  - 酒を飲むのでウコンを摂っている。翌日すっきり。(3F)
  - 今ウコンのことを聞いたので、試してみたくなった。酒を飲むので。(3A)
- 健康食品には関心がない。合成、まずそうだから。
  - 健康食品には関心がなく、試したことがない。合成だから。(3A)
  - (ドリンク剤) そういうものは味がおいしくないイメージがあるので、買わない。飲んだらハマるかもしれないし健康にはよいかもかもしれないが、おいしくなさそう。(3E)
- 体に悪いとは思っていない。
  - 心配していない。(3全)

- 体によくないという不安は全くない。ユンケルは効果がわかっているので、体に悪い不安は全くない。(3B)
- 効かないのではないかと考えることはあるが、悪くなると考えたことはない。(3E)
- 試してみて問題がなければよい。
  - ウコンは自分の体で試してダメだったらやめる。(3C)
  - でもアリナミンは昔から出ていて、飲んで具合が悪くなったと聞いたことがないので大丈夫。(3C)
- 良くない飲み合わせや依存性などは気になる。
  - サプリには飲み合わせ、食べ合わせがあるらしいので、それが知りたい。(3F)
  - アリナミンなどのドリンク剤を飲むと半日ぐらいは楽になるが、飲みすぎると依存性がありそうなので気をつけている。(3C)

## 7) 食品に関する情報源

### <食品に関する情報源>

- 新聞で見る。
  - 一般紙の家庭欄に載っているとたまに見る。最近印象に残った記事はない。(3A)
- テレビやインターネットのニュースで見る。
  - 23 時台のテレビニュースを聞き流しながら、気になった部分を聞いている。(3B)
  - ワイドショー。土日のワイドショー。サンデーモーニングとか 6 チャンネルのブロードキャスター。そういうところで特集を見る。最近吉兆の記憶あり。何度も謝って懲りない奴らだと思った。芋づる式にドロドロ出てきたのですごいと思った。(3C)
  - テレビで平日夜、ニュースステーション、ニュースゼロなど。(3E)
  - (印象) たまに食料の特集をやっているが、覚えていない、聞き流す程度、見て「ああそうなのか」と思っても翌日には忘れていて、印象に残らない。(3E)
  - テレビのニュースやネットのニュースで情報を得る。(3F)
  - 夜のテレビニュースかネットの YAHOO ニュースあるいは新聞社のニュースサイト。(3D)
- ニュースで気になったことをインターネットで調べる。インターネットニュースの場合はリンクをたどる。
  - YAHOO のポータルサイトから、YAHOO ニュース、新聞社のニュースサイト

を見て、気になるところをクリック。(3D)

- インターネットのニュースに食品関連があったらリンクをたどって情報を見ている。(3A)
- 食中毒があると当該保健所が自動的にリンクを張るので、どんな事件か興味本位で見に行くことがある。(3C)
- 言葉そのものがわからないときはウィキペディアで細かく、時間のあるときに確認。(3D)
- ニュースで見て気になったことをネットで調べる。ネットでは事故米のことが出ているのでクリックして見ている。(3D)
- (ネット) ポータルサイトのニュースコーナーからニュースサイトに飛ばされてそれを読む。インターネットで検索。ツールバーに設定してあるので、そこに言葉を入れて検索して行く。(3F)
- インターネットで検索して調べる。(3A)
- 心配なことがあったらネットで検索して調べる。電話をかけて問い合わせようとは思わない。(3E)
- ネットにキーワードを入れて検索。(3B)

#### <情報源の信頼度>

- 国や国の研究機関からの情報は信頼できる。表現が堅い、発表が遅いなどの不満も。
  - 国の研究機関の発表なら信頼がおけそう。プライベート・私立の機関より、国の機関のほうが信頼できる。(3A)
  - 国交省のサイト、飛行機のことを調べたくて見た。お堅いことばかりが書いてあって面白くないが信頼性は高い。(3D)
  - (信頼できる情報源) 政府の発表は賞味期限が過ぎているが信頼できる。今ごろか、と思うが、もっともな情報を公開してくれる。急いでやるより間違いないものを出してくれるだろうから、信頼している。しかし出されるころには忘れているかも。(3C)
  - (信頼できる情報源) 政府の発表がバシッとあれば。私は政府の発表を信頼する。信頼できないこともあるが、信頼する。(3D)
  - (信頼できる情報源) 調査機関、国の調査機関。公平性、中立性。(3F)
- マスコミは面白い、わかりやすい。
  - 国を信頼しているが、見ていて面白いのはマスコミ。(3D)
  - 国民、視聴者からすれば、政府がやっている話より民放のニュースキャスターのニュースのほうがわかりやすく見たいだろう。(3D)
  - 権威が言うとなじみ難いように話すというイメージあり。もっともな意見に聞こえるが、わかりやすいのはニュースなど。客観的なデータがなくても「あ

- あそうなんだ」と納得できればよい。(3B)
- (信頼できる情報源) 政府の情報は悪いことが出てこない。マスコミは悪いところを強調しているところもあるが、それが面白い。(3E)
- メディアはテレビが良い。
    - メディアはテレビがよい。具体的な番組イメージはない。(3A)
    - (専門家が正しい科学的な説明をしたら) 自分が本当に興味のあることで、その発表をテレビでやっていけば見たいと思う。(3D)
    - 国の調査機関の人が調査結果や解析結果を発表し、テレビのニュース番組で取り上げるのがよい。(3F)
    - でもテレビは都合のいいように編集するのではないかという心配がある。(3F)
  - インターネットの情報は検索エンジンで検索し、検索結果の上位から閲覧。Yahoo知恵袋や2チャンネルなど個人の口コミも信用してはいないがよく見ている。
    - ニュースは新聞社のホームページ。(新聞社の信頼性) イメージで。(3B)
    - (どんな情報なら納得できるか) あまり納得いかないことが多い。(3B)
    - (専門家が正しい科学的な説明をしたら) どれくらいタイムリーかによる。彼らは膨大なデータを検証するだろうから、中間報告を見てもどうかと思う。(3C)
    - まずはYAHOO等で検索、上から順に見る。またはウィキペディア。(3D)
    - 信頼性は低めだが、YAHOO知恵袋を見ることも。(3D)
    - ブログ系や、2ちゃんねるで調べることが多い。怪しいが、それでもいろいろなことがわかる。(それらの科学的根拠や信頼性) ないと思うが、それは他のどこにもない。タイムリーな話題は、正式に裏づけされて世に出るまで時間がかかりそうだから、大体のことを知るためにブログや2ちゃんねるを見る。しっかりしたデータはあとからでよい。(3D)
    - (インターネットの検索結果) 出てきたものを上から見て行くので、特定の信頼を寄せている情報源はない。みんなが見ているから上位に出てくると思うから、信頼している。(3F)
  - 国のホームページはあまり見ない。情報が遅い、難しいなどのイメージ。
    - 経産省。仕事での最近の現状を知りたくて見た。私生活では国のホームページは見ない。(3A)
    - 官公庁ホームページにはあまり行かない。(3D)
    - 憶測だが、官公庁のホームページは当たり障りのないことで終わっていそう、新しい情報はなさそう。(3D)
    - (正しいデータがありそうか) それも信じていない。不祥事がたくさんある

- から公開されていないのではないか。また、情報が遅いのではないか。(3D)
- 農水省などのホームページは堅くて難しい言葉が書いてありそうで、見る気になれないから行かない。行ったことはない、イメージだけで言っている。(3E)
  - (最近上位に来るトピック) 米なら農水省か? 農水省ホームページには行っていない。その件について調べようと思わなかった。(3F)

#### <影響を受けた情報源、経験>

- 母親・祖母から栄養バランスについて教えられた。
  - 母に「カルシウムを摂れ」とよく言われた記憶アリ。今は摂っていない。(3B)
  - 親や祖母から「野菜をたくさん食べろ」といわれ続けた。守るようにしているが、気がつくと食べていないこともある。でも野菜ジュースで補えばいい。(3D)
  
- ネットなどで調べた。
  - 人から聞くより、自分が調べたことが多い。ネットなどで調べてわかったことが多い。(3D)
  - 今、遺伝子組み換えをもう少し調べてみたいと思っている。(3D)
  
- 雑誌や漫画で見た。
  - 漫画「美味しんぼ」に影響を受けたかもしれない。輸入レモンの話、農薬、鯨などいろいろな話題があった。影響されたと思う。素材のことも載っていた。他にも、グルメマンガからの情報が多い。自分が料理をするようになったのもマンガの影響かもしれない。(3F)
  - 週刊現代。「今グルメブームで生食したり無農薬や無添加のものを食べるのが美食につながる反面、虫がいたり害虫がいて、内蔵がやられて回虫やカイセンにやられている人が多い」と読んだ。一概に無農薬がいいともいえない、そういう面もあるのだと思った。やはり健康診断を受けなければならないと思った。(3C)
  - 雑誌dancyuなども好き。酒関係、つまみ関係の写真が美味しそうでつい買う。(3F)
  
- あまり食の安全に関心がない。特に思い当たる要因もない。
  - 思い出せない。(3A)
  - (気にしないのは) 身近に事件がなかったから。(3B)
  - 身近にそういう話題が出てくれば気にするかもしれない。BSE が盛り上がった当時は気にした。またそういう話題が出れば気にするかもしれない。(3E)
  - 自分にはあまり関係ないと思う。(3E)

- 特に思い当たる要因はない。(3E)
- 小さいころは好き嫌いが多かった。自分が食べたいものを食べていた。それだけ。(3E)

#### <家庭科などの学校教育の影響>

- 家庭科では食生活についてあまり習わなかった。
  - 家庭科で特別な教育を受けた覚えはない。(3全)
  - ムニエルを作ったくらいしか記憶がない。(3B)
  - 昔は食生活がどのという時代ではなかったが、昔は牛乳を飲もうといわれた程度。(3E)

#### <子どもの食の安全について>

- 中国産食品など話題になった危ないものは避ける。
  - (子供あり) 話題になった危ないものは買わない。(3A)
  - 原産地を確かめる。(3A)
  - 子供の子供に対する影響もあるかもしれないので気をつける。(3A)
  - (食育) 買い物に連れて行き、「中国産だからやめよう」と言うようにしている。子供も「中国だからやめよう」と言うようになった。(3A)
- 栄養バランス、規則正しい食事など食べ方の方が大切。
  - (もし子供ができたら) 好き嫌いなく満遍なく三食食べなさい、と言いたい。(3B)
  - (子供あり) いけないと思うことあり。うちは忙しくなると規則正しい時間に食べさせていない。(3C)
  - (もし子供ができたら) 添加物や農薬より、栄養のバランスを教えたい。(3D)
  - (食べる内容) 合成着色料を避ける。ファーストフードの油をなるべく取らせない。(3C)
  - (もし子供ができたら) バランスよく食べなさい、洋食ばかりでなく和食も食べろ、伝統的なものを食べよう、と伝えたい。(3F)
- 賞味期限だけ気をつければよい。
  - いたずらにニュースを信じて、つまらない噂話に加担してほしくない。聞いた言葉はよく確かめよ、と言っている。ニュースはあまりに取り出して報道し過ぎると感じている。(3C)
  - 買い物と一緒にいったときに賞味期限に気をつけるようにと話している。手前から取らずに奥から取れ、とか。(3E)
  - (子供あり) 私は食について寛大で気にしない。腐ったものを食わなければよい。賞味期限だけ気をつけろ、と言っている。(3E)

- 自分は特に気にしない。学校での食育に任せる。
  - （一緒に食事）ふつうの日は一緒には食べない。土日だけ。作られたものが出てくるだけなので、私は気にしない。(3E)
  - ある程度の年になれば学校でも教えてくれそう。細かい知識のない人間が偏った意見を言うより、学校でいい教育をしてくれるのではないか。(3D)

#### 8) 食品分野におけるリスクに関する情報ニーズ

- データに基づいた情報を提供してほしい。人体への影響を知りたい。
  - どこまでなら安全か。添加物がどのくらいなら、農薬がどれくらいなら安全かというデータが欲しい。もうあるのかもしれないが、パッと見つからない。(3A)
  - テレビ番組で、事故米を使った焼酎を誰かが飲み続けてデータを取ったら面白そう。人体に対する影響を知りたい。(3D)
  - 生のデータが欲しい。「こういうものを食べたらどうなる」などのデータ。(3F)
  - 今気になるのは汚染米について。日本酒は徹底的に磨くものだが、汚染米を使ったお酒は人体にどういう影響を及ぼすか、といったことが知りたい。(3F)
  - 安全性が最も気になる。農薬など、食べたらどこまで安全なのか。(3E)
- 自分の食生活に関わるリスク情報がほしい。
  - 外食し続けたらどうなるかという情報が欲しい。(3B)
- 安全な食品、旬でおいしい食品などの情報がほしい。生産者が安全でおいしい食品を作る動機付けを。
  - 悪い話は高速で世間に伝わるが、では何を食べればよいのか。「こういうものは有用です、皆さんぜひ召し上がってください」という広報があれば心が温かくなりそう。熱心にそういうことに取り組んでいるところを手伝い、食事を楽しくしてほしい。(3C)
  - 旬のもので手の込んだものがこういうところにあります、奨励します、という情報を。国から奨励金が出て「もっとうまいものを作ろう」という形になればよい。(3C)

#### 9) 食品分野におけるリスクに関する情報提供等に関する意見・要望

- タイムリーに、ありのままを伝えてほしい。
  - 都合の悪いことを隠さず、正直にありのままを国民に伝えてほしい。(3D)
  - 餃子問題のとき、日本政府はすでに知っていたが発表が遅れたということがあったようだ。悪いこともタイムリーにすぐ発表してほしい。(3E)

- 関心が高くなくても知ることができるようにリスク情報を発信してほしい。
  - 遺伝子が危ないとか安全な根拠はなんなのかなど、こちらから探しに行くのではなく向うから押し出し式で情報を送ってほしい。(3A)
  - 食品の事故が起こるたびに希望者に送られてくるメールマガジンが欲しい。犯罪では役所から飛ばしてくるそういうものがある。(3C)
  
- 安全だということを保障してほしい。
  - 外食や弁当が多いので、「これは安全」「今日の安全な弁当」が欲しい。(3B)
  - (安全の基準) 食べて影響がなく、将来も大丈夫、ということが保証されていること。(数値が必要か) 数値でなくても「安全だよ」と言ってほしい。でもそのためには数値が必要か。(3E)
  
- 安全管理を厳格にしてほしい。
  - 輸入食品について安全面をしっかりと確認し、何かがあったら輸入停止を厳しくしてほしい。ずさんな管理が今回の事故米の事件を起こした。品質のよくない外国産品があれば、きちんと管理したうえで日本市場に出してほしい。(3A)
  - 米偽装では政府のずさんな検査も原因の一つだった。きっちりやってほしい。(3E)
  
- 食料安全保障に取り組んでほしい。
  - ニュースで北朝鮮のホームレスを見た。キャスターが渡したおにぎりを泣きながら食べている女性がいた。日本も人ごとではない。どういう世の中になるかわからない。とにかく食べるものだけはこの先ずっとある国でいてほしい。食糧危機に陥らないようにしてほしい。(3B)
  - 自給率が低い日本、しっかりしてもらわないと不安が高まる。よろしく願いしたい。(3D)
  - 自給率を計画的に上げてほしい。余るとキャベツなどすぐ捨ててしまい無駄にしている。農家に指導し、計画的に、ちゃんとしてほしい。(3F)

## Ⅱ-2. インターネットアンケート

### 1. 調査概要

#### (1) 調査目的

- 化学物質系ハザード及び化学物質系以外のハザードについて、消費者のリスク認知とリスク認知の形成要因（リスク認知の根拠となる情報の内容）等を定量的に把握し、認知と形成要因の関連性や、認知及び形成要因と属性・背景の関連性を分析する。

#### (2) 調査方法

- インターネットアンケート調査

- ◇ 本調査結果は、インターネットアンケート調査によることの特徴を踏まえて活用されたい。
- ◇ 特に、不安を感じるきっかけとなった情報源（Q7,12,17,22）のインターネットに関連する項目、インターネットの閲覧頻度（Q42）、等の調査結果を解釈する際には留意が必要。

#### (3) 調査対象

- 全国の20歳以上の男女（インターネットユーザー）
- 全国規模の一般生活者調査モニター（楽天リサーチのモニター）から性別・年代別・地域別構成比に応じて層化無作為抽出。

#### (4) サンプル数

- 2000サンプル（下表参照）
- 平成17年の国勢調査結果をもとに、性別・年代別・地域別で割付を行った。

	男性					女性					計
	20代	30代	40代	50代	60代以上	20代	30代	40代	50代	60代以上	
北海道・東北	16	18	18	23	38	16	18	19	24	50	240
関東	57	69	56	64	100	52	65	53	64	121	701
中部	23	28	25	30	49	21	27	24	30	62	319
関西	24	29	23	29	49	24	30	25	31	62	326
中国・四国	12	14	13	18	30	12	14	14	19	41	187
九州・沖縄	16	17	17	21	34	16	18	18	22	48	227
計	148	175	152	185	300	141	172	153	190	384	2000

#### (5) 調査実施時期

- 2008年10月29日～10月31日

#### (6) 分析方法

- 各ハザードに対する消費者のリスク認知とリスク認知の形成要因及び調査対象者の属性・背景との関連を明らかにするため、以下の分析を行う。
  - ◇ 単純集計による全体の傾向分析
  - ◇ 属性別クロス集計による属性別の傾向分析
  - ◇ 数量化理論、因子分析等多変量解析によるリスク認知形成要因の構造モデル

#### の発見

- クロス分析に際しては、母比率の差の検定、母平均の差の検定を行い、本報告書の分析コメントでは、これらの検定により有意な差がある（差があるという結論が95%以上正しい）ものについてのみ言及している。

## 2. 調査分析結果

### 2-1. 調査分析結果の概要

#### (1) 普段の食生活

##### 1) 食材の購入頻度／惣菜・弁当の購入頻度／外食の頻度

- 全体平均では、食材の購入頻度は 2.8 回／週、惣菜・弁当の購入頻度は 1.4 回／週、外食の頻度は 1.2 回／週。
- 女性（特に 30 代以上）、専業主婦で食材の購入頻度が高く、男性（特に若年層）、正規就業者、学生、未婚者、一人暮らしで、惣菜・弁当の購入頻度、外食頻度が高い。

##### 2) 調理頻度

- 全体の半数弱が「ほぼ毎日」調理しており、4 分の 1 は「ほとんど自分で調理していない」。
- 男性より女性で調理頻度は高く、女性の中では高齢層ほど、高くなっている。
- 男性は、30-40 代で調理頻度が低く、60 代以上で高い。
- 専業主婦、既婚者、子供のいる人（特に子供の年齢が高い人）で、調理頻度は高い。

##### 3) 食品購入時、重視していること

- 食品購入時重視していることの上位 3 位は、「価格」「鮮度」「安全性」。
- 「安全性」については、女性、高齢層、専業主婦、既婚者、子供のいる人（特に年齢の高い子供）で、重視する人が多い。

#### (2) リスク認知度

##### 1) 食品分野とそれ以外の分野のリスク認知度

- 7 つの事象（環境問題、自然災害、食品安全、重症感染症、犯罪、戦争・テロ、交通事故）の中で、食品安全に対する不安度が最も高く、9 割の人が不安を感じている。
- どの事象とも、全般的に、女性、専業主婦、既婚者、子供のいる人、文科系で不安度は高い。
- また、食材の購入頻度、調理頻度の高い人、ニュース・報道番組、ワイドショー・情報番組の閲覧頻度が高い人ほど、不安度が高い傾向がみられる。

##### 2) 食品分野における各ハザードのリスク認知度

- 残留農薬は 9 割、食品添加物は 8 割、遺伝子組換え食品は 6 割、BSE は 7 割、食中毒は 3 分の 2 の人が不安を感じている。
- 一方、いわゆる健康食品、特定保健用食品（トクホ）・栄養補助食品は、半数以上が「どちらともいえない」と回答。
- 全般的に、女性、高齢層、専業主婦、既婚者、子供のいる人、文科系で不安度は高い。
- 残留農薬、食品添加物、遺伝子組換え食品、BSE について、食材の購入頻度、調理頻

度の高い人、テレビ（ニュース・報道番組、ワイドショー・情報番組、ドキュメンタリー番組）、新聞の閲覧頻度が高い人ほど、不安度が高い傾向がみられる。

### （３）不安を感じたきっかけ・情報源

#### １）不安を感じたきっかけ

- 残留農薬、食品添加物、遺伝子組換え食品、BSE とともに、「事件・事故のニュース・報道」がトップ。
- 中でも、残留農薬、BSE については、8 割以上の方が「事件・事故のニュース・報道」がきっかけとなっている。
- 続いて、残留農薬、食品添加物、遺伝子組換え食品は、「危険性・有害性に関する見解・論調」、BSE は「テレビなどで衝撃的な映像を見て」が多い。
- 遺伝子組換え食品では、「なんとなく」という意見が 3 割と多い。

#### ２）不安を感じるきっかけとなった情報源

- 残留農薬、食品添加物、遺伝子組換え食品、BSE とともに、「ニュース・報道番組」が最も多く、中でも、残留農薬、BSE については、8 割以上が不安を感じた情報源としてあげている。
- 次に、「新聞」「ワイドショー・情報番組」が 2 位～3 位にあげられ、「ドキュメンタリー番組」「インターネット上のニュースサイト」「雑誌」と続く。
- 遺伝子組換え食品については、「特になし」という意見が 2 割以上と多い。

### （４）各ハザードに対するイメージなど

#### １）各ハザードに対するイメージなどの比較

- 残留農薬、BSE は、食品添加物、遺伝子組換え食品に比べ、「人体に悪い影響を与える」「事件・事故が発生したときの被害が大きい」「事件・事故が発生する確率が高い」「怖い、恐ろしい」「将来世代にまで影響を及ぼす」といったイメージが強い。
- 「科学的に未知、不確か」「得体が知れない」といったイメージは、遺伝子組換え食品、BSE で強い。
- また、残留農薬は「摂取するたびに人体に蓄積」、BSE は「いったん被害を受けると回復がむずかしい」といったイメージが強い。
- 「どのような被害・影響があるのか知っている」、「どのように安全管理されているか知っている」「どのようにすれば回避できるか知っている」といったハザードに対する知識については、遺伝子組換え食品が最も低く、BSE が最も高い。
- 「食品表示によって消費者の選択肢が確保されている」、「国の安全基準が科学的な健康影響評価によって設定されている」、「国など行政による安全管理施策・体制が確立している」「生産者、食品の製造・流通過程の安全管理施策・体制が確立している」については、どのハザードも評価が低い。
- 遺伝子組換え食品は、残留農薬、食品添加物に比べ、個人的なメリット（「栄養価の

向上、病気の予防など、自分の食生活の中で役立っている」) が感じられていない。

## 2) 因子分析から示唆されること

- 残留農薬、食品添加物は、消費者の認知構造が似ており、「人体や将来世代に対する影響」、「安全管理体制・食品表示」、「安全管理、回避方法、被害・影響に対する理解」の因子が強く寄与している。
- 遺伝子組換え食品は、「人体や将来世代に対する影響」、「安全管理体制・食品表示」に続き、「得体が知れないなどの未知性」が寄与している。
- BSE は、「安全管理体制・食品表示」、「蓄積性・将来世代」という因子が強く寄与しているのが特徴的である。

## (5) 各ハザードに対する考え

### 1) 各ハザードに対する考えの比較

- 残留農薬、食品添加物については、「健康影響リスクをゼロにすることはできない」と考える人が多い。
- 食品添加物は、他のハザードに比べメリットが感じられており、比較的受容性も高い。
- 残留農薬、食品添加物、遺伝子組換え食品については、多少高くても無農薬／無添加／非遺伝子組換え食品を選ぶ、子供に対しては与えない、という人が多い。
- 遺伝子組換え食品は、国で認められていても、できれば避けたいと思われている。
- 牛肉については「全て BSE に感染していないことを確認した上でなければ一切流通させるべきではない」という考えが強い。

## (6) 食品の安全性に関する意識・ニーズ

### 1) 食品の安全性に関する評価

- 食品の安全性について、6割以上が悪くなっていると評価し、よくなっていると評価した人は2割。

### 2) 食品の安全性について信頼できる情報源

- 「ニュース・報道番組」が最も信頼されており、「新聞」「ドキュメンタリー番組」「ワイドショー・情報番組」といったメディア系が続く。

### 3) 食品の安全性に関する情報提供において行政に期待すること

- 「正確な情報提供」に関するニーズが最も高く、「ネガティブ情報も包み隠さず開示」「迅速な情報提供」「わかりやすい情報の提供」「科学的根拠に基づいた情報の提供」が続く。

## (7) 食品安全委員会の認知・イメージ

### 1) 食品安全委員会の認知

- 食品安全委員会について、「名前は聞いたことがある」人は6割以上を占める。「知らない」は3割、「どんな機関であるかを含めて知っている」は6.5%。
- 若年層（特に男性）で、認知度は低い。

## 2) 食品安全委員会のイメージ

- 「食品安全の基準設定や規制を実施している」とのイメージが最も多く、「食品の健康影響評価に取り組んでいる」「食品安全に必要な施策などについて関係省庁に勧告」「重大な食品事故などの緊急時対応に取り組んでいる」が続く。
- 「親しみやすい」「行動が迅速」「透明性がある」「消費者の立場や意見を大切にしている」といったイメージはほとんど持たれていない。
- 「わからない・イメージがない」という人は3分の1にも及ぶ。

## (8) 癌の原因になると思うもの、食品の安全性に関する知識

### 1) 癌の原因になると思うもの

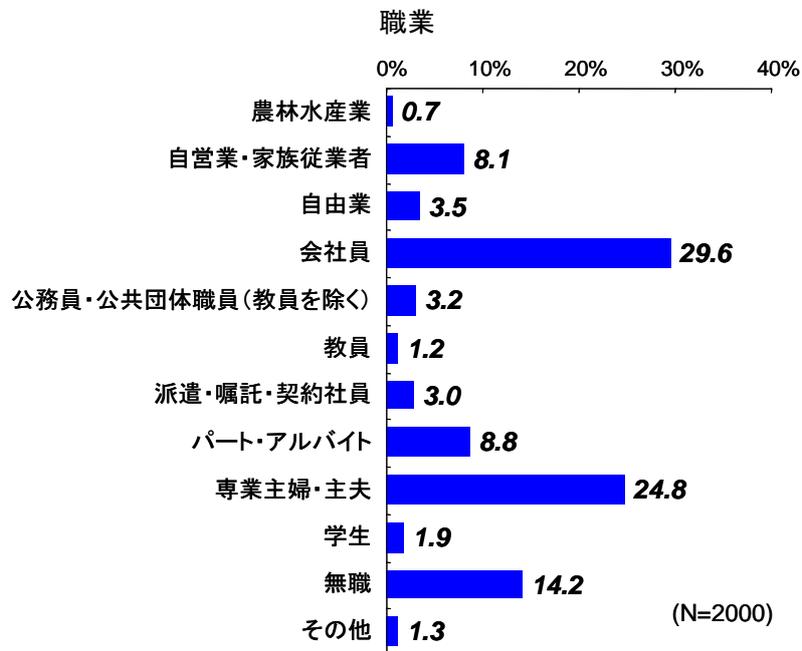
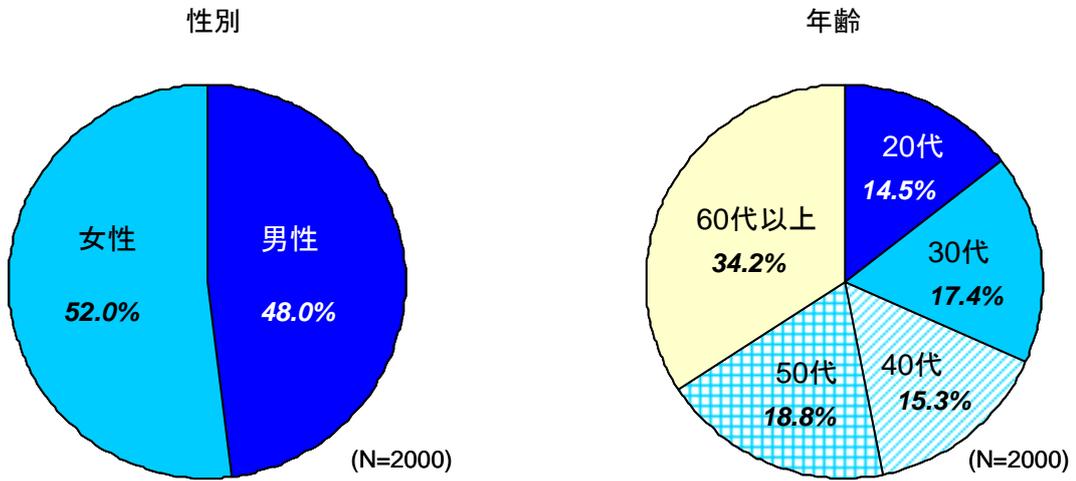
- 癌の原因として、「喫煙（タバコ）」が最も多く、次に「大気汚染と汚染物質（重金属など）」「ストレス」「食品添加物」「電磁波・放射線・紫外線」と続く。

### 2) 食品の安全性に関する知識

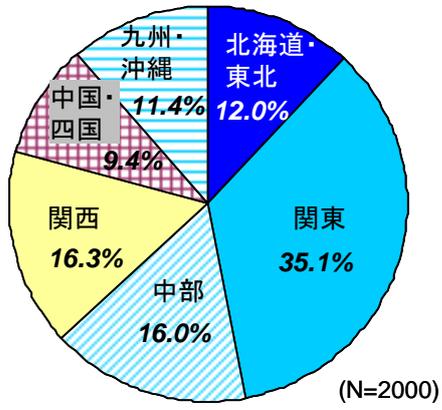
- 食品の安全性に関する知識について、あると思っている人（「十分にあり」「ある程度あると思う」）は半数。

## 2-2. 調査分析結果

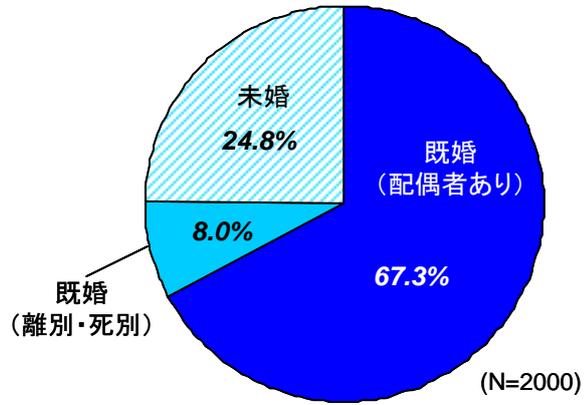
### (1) 回答者属性



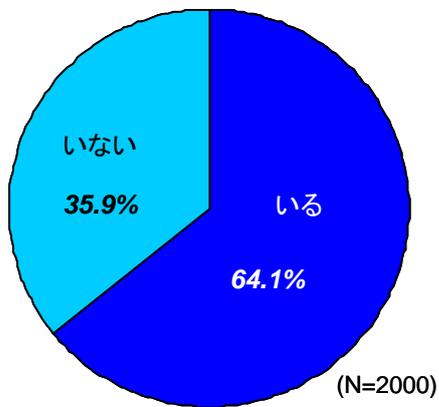
居住地



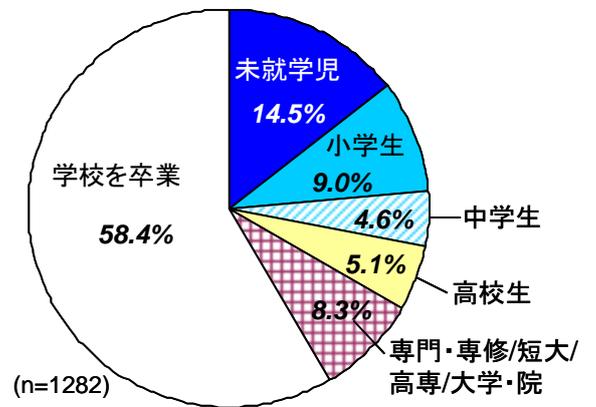
婚姻の有無



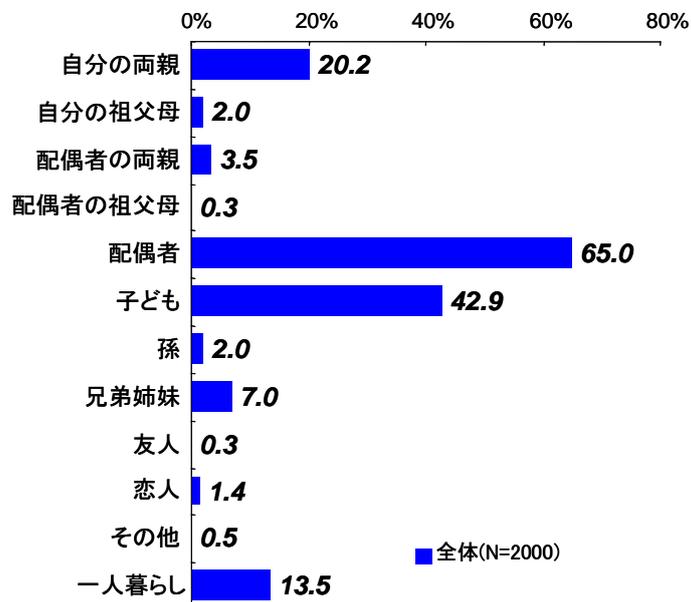
子供の有無



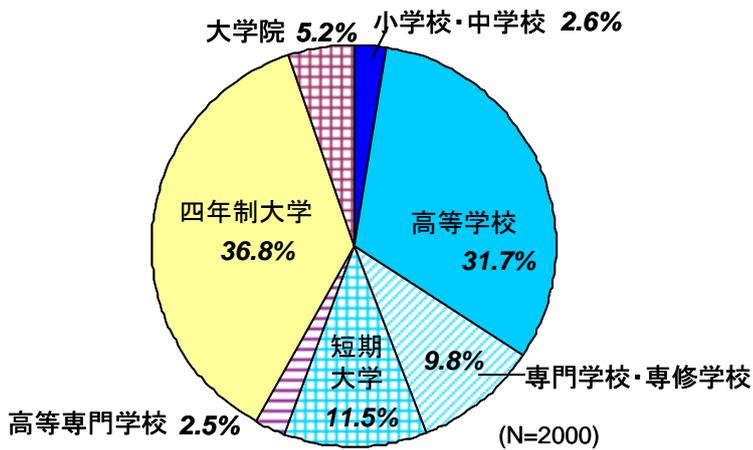
一番下の子供  
(ベース：子供のいる回答者)



### 同居している人

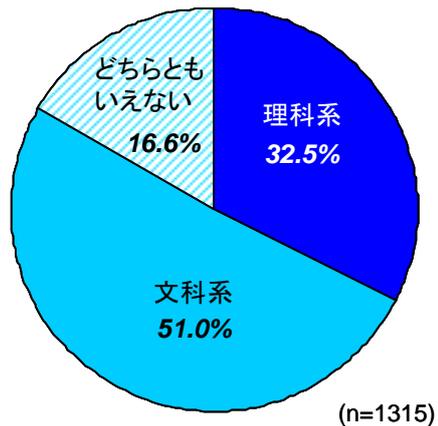


### 最終学歴



### 専攻学科

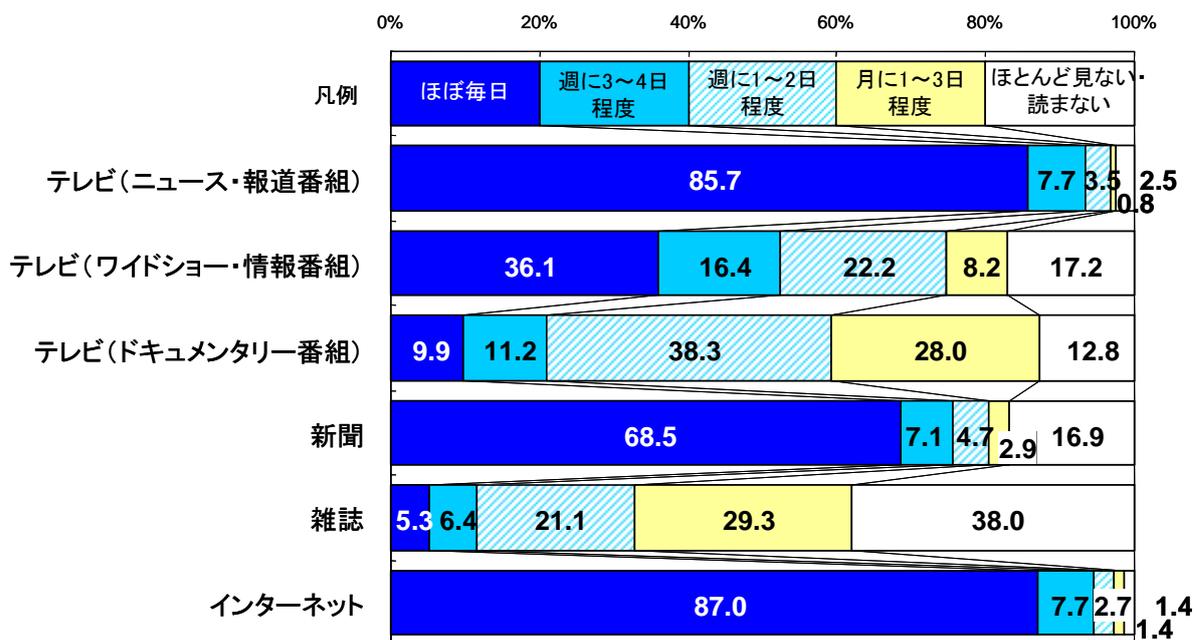
(ベース：専門・専修学校、短大、高等専門学校、四年制大学、大学院卒の回答者)



(2) 情報接触度

- 「テレビ(ニュース・報道番組)」(85.7%)、「インターネット」(87.0%)は8割以上、新聞はおよそ7割(68.5%)が「ほぼ毎日」見ていると回答している。

Q42. あなたはテレビ、新聞などをどの程度ご覧になっていますか。(N=2000)



- ニュース・報道番組、ドキュメンタリー番組は、男女ともに、高齢層で閲覧頻度が高く、若年層で閲覧頻度が低い。
- ワイドショー・情報番組は、女性の30代以上で閲覧頻度が高い。
- 専業主婦はニュース・報道番組、ワイドショー・情報番組の閲覧頻度が高く、正規就業者は低い。
- 未婚者、子供のいない人、一人暮らしの人は、一般的にテレビの閲覧頻度が低い。
- 子供のいる人の中でも、子供の年齢が小さい人は、テレビの閲覧頻度は低く、大きい人は、閲覧頻度が高い。

Q42. あなたはテレビ、新聞などをどの程度ご覧になっていますか。

<性別、年齢、性年齢、職業、既婚/未婚、子供の有無、一番下の子供について、一人暮らし/同居、専攻学科別>

		(%)															
		合計	(1)テレビ(ニュース・報道番組)					(2)テレビ(ワイドショー・情報番組)					(3)テレビ(ドキュメンタリー番組)				
			ほぼ毎日	週に3~4日程度	週に1~2日程度	月に1~3日程度	ほとんど見ない・読まない	ほぼ毎日	週に3~4日程度	週に1~2日程度	月に1~3日程度	ほとんど見ない・読まない	ほぼ毎日	週に3~4日程度	週に1~2日程度	月に1~3日程度	ほとんど見ない・読まない
全体		2000	85.7	7.7	3.5	0.8	2.5	36.1	16.4	22.2	8.2	17.2	9.9	11.2	38.3	28.0	12.8
性別	男性	960	83.8	8.3	4.0	0.9	3.0	29.4	13.2	26.6	11.1	19.7	10.8	11.5	38.1	26.5	13.1
	女性	1040	87.4	7.0	3.0	0.6	2.0	42.3	19.3	18.2	5.4	14.8	8.9	11.0	38.4	29.3	12.4
年齢	20代	289	69.6	15.6	5.9	1.4	7.6	24.9	17.0	24.6	9.3	24.2	8.3	5.9	25.6	31.5	28.7
	30代	347	77.8	11.2	5.8	1.2	4.0	32.0	15.6	24.8	10.1	17.6	6.6	6.6	35.2	34.3	17.3
	40代	305	82.0	9.5	5.2	1.3	2.0	36.4	16.7	23.0	8.9	15.1	5.9	8.9	41.6	29.5	14.1
	50代	375	89.9	5.9	2.4	0.8	1.1	38.7	15.7	18.9	7.7	18.9	9.1	8.3	42.7	33.3	6.7
	60代以上	684	95.8	2.6	1.0	-	0.6	41.4	16.8	21.3	6.6	13.9	14.3	18.4	41.2	19.6	6.4
性年齢	男性-20代	148	66.9	16.2	8.1	1.4	7.4	20.3	11.5	29.1	13.5	25.7	6.8	6.1	25.7	33.1	28.4
	男性-30代	175	72.6	16.0	4.6	1.1	5.7	22.9	12.0	28.0	15.4	21.7	7.4	6.9	33.1	33.1	19.4
	男性-40代	152	78.3	8.6	8.6	2.0	2.6	27.6	11.8	32.9	10.5	17.1	9.2	8.6	38.8	28.3	15.1
	男性-50代	185	89.2	7.0	1.1	1.1	1.6	30.3	13.0	23.2	8.1	25.4	8.6	8.6	44.3	30.8	7.6
	男性-60代以上	300	98.0	0.7	1.0	-	0.3	38.0	15.7	23.3	9.7	13.3	17.0	20.0	43.0	15.7	4.3
	女性-20代	141	72.3	14.9	3.5	1.4	7.8	29.8	22.7	19.9	5.0	22.7	9.9	5.7	25.5	29.8	29.1
	女性-30代	172	83.1	6.4	7.0	1.2	2.3	41.3	19.2	21.5	4.7	13.4	5.8	6.4	37.2	35.5	15.1
	女性-40代	153	85.6	10.5	2.0	0.7	1.3	45.1	21.6	13.1	7.2	13.1	2.6	9.2	44.4	30.7	13.1
	女性-50代	190	90.5	4.7	3.7	0.5	0.5	46.8	18.4	14.7	7.4	12.6	9.5	7.9	41.1	35.8	5.8
	女性-60代以上	384	94.0	4.2	1.0	-	0.8	44.0	17.7	19.8	4.2	14.3	12.2	17.2	39.8	22.7	8.1
職業	自営業・家族従業者/農林水産	175	89.1	5.7	2.9	-	2.3	43.4	15.4	20.6	9.1	11.4	18.3	12.0	41.1	21.7	6.9
	正規就業者	748	79.9	11.5	4.4	0.9	3.2	26.6	13.1	27.1	12.4	20.7	7.1	9.1	37.2	31.6	15.1
	非正規就業者	236	85.2	6.8	3.8	1.3	3.0	36.9	17.4	22.9	5.9	16.9	5.9	10.2	37.3	30.9	15.7
	専業主婦・主夫	495	91.5	5.1	2.0	-	1.4	47.3	20.2	17.0	3.2	12.3	9.5	12.5	40.0	27.9	10.1
	学生*	38	60.5	15.8	7.9	5.3	10.5	18.4	18.4	18.4	5.3	39.5	5.3	5.3	21.1	31.6	36.8
	無職	283	92.2	3.2	3.2	0.7	0.7	39.2	19.4	18.4	7.4	15.5	16.3	16.3	39.6	19.1	8.8
	その他*	25	84.0	4.0	-	4.0	8.0	32.0	-	32.0	4.0	32.0	12.0	4.0	36.0	32.0	16.0
	既婚/未婚																
既婚/未婚	既婚(配偶者あり)	1345	89.4	6.4	2.6	0.4	1.2	37.6	17.0	22.0	7.2	16.2	10.0	12.3	39.9	27.4	10.3
	既婚(離別・死別)	160	88.8	4.4	3.8	1.3	1.9	40.6	14.4	20.0	10.0	15.0	13.8	12.5	41.9	23.1	8.8
未婚	495	74.5	12.1	5.7	1.4	6.3	30.5	15.6	23.4	10.1	20.4	8.3	7.7	32.5	30.9	20.6	
子どもの有無	子供あり	1282	90.0	5.9	2.3	0.5	1.2	38.4	17.1	21.8	7.3	15.4	10.8	12.6	40.2	26.3	10.1
	子供なし	718	77.9	10.9	5.4	1.1	4.7	32.0	15.2	23.0	9.6	20.2	8.2	8.8	34.7	30.9	17.4
一番下の子どもについて	未就学児	186	76.3	12.9	5.4	1.6	3.8	26.3	17.7	26.3	9.1	20.4	5.9	5.4	31.2	35.5	22.0
	小学生	115	81.7	9.6	6.1	0.9	1.7	36.5	17.4	19.1	7.8	19.1	9.6	6.1	39.1	32.2	13.0
	中学生	59	81.4	10.2	6.8	1.7	-	35.6	10.2	28.8	5.1	20.3	6.8	8.5	49.2	20.3	15.3
	高校生	66	90.9	4.5	1.5	-	3.0	39.4	10.6	21.2	9.1	19.7	3.0	10.6	40.9	30.3	15.2
	専門・専修短大/専大・大学院	107	91.6	5.6	-	1.9	0.9	29.9	17.8	21.5	7.5	23.4	7.5	7.5	42.1	34.6	8.4
学校を卒業	749	95.1	3.3	1.1	-	0.5	43.0	17.9	20.6	6.8	11.7	13.6	16.6	41.7	22.0	6.1	
一人暮らし/同居	一人暮らし	270	75.2	10.7	5.6	1.5	7.0	32.2	11.5	22.6	11.5	22.2	10.0	10.4	30.0	31.1	18.5
	家族など同居	1730	87.3	7.2	3.1	0.6	1.8	36.7	17.2	22.1	7.6	16.4	9.8	11.3	39.5	27.5	11.8
専攻学科	理科系	427	83.1	9.1	3.5	1.2	3.0	28.3	11.9	25.1	11.5	23.2	9.6	9.6	33.5	32.1	15.2
	文科系	670	84.3	8.4	4.3	0.4	2.5	31.6	16.9	25.2	9.0	17.3	8.2	11.3	41.8	27.3	11.3
	どちらともいえない	218	86.7	7.3	3.2	1.4	1.4	43.1	20.6	15.1	5.0	16.1	7.3	11.9	35.8	28.9	16.1

\* サンプル小のため参考値

- 新聞は、男女ともに、高齢層で閲覧頻度が高く、若年層で閲覧頻度が低い。
- 自営業・家族従業者/農林水産、専業主婦、無職で、新聞の閲覧頻度が高い。
- 未婚者、子供のいない人、一人暮らしの人は、新聞の閲覧頻度が低い。
- 子供のいる人の中でも、子供の年齢が小さい人は、新聞の閲覧頻度は低く、大きい人は高い。

Q42. あなたはテレビ、新聞などをどの程度ご覧になっていますか。

<性別、年齢、性年齢、職業、既婚/未婚、子供の有無、一番下の子について、一人暮らし/同居、専攻学科別>

		(%)															
		合計	(4)新聞					(5)雑誌					(6)インターネット				
			ほぼ毎日	週に3~4 日程度	週に1~2 日程度	月に1~3 日程度	ほとんど 見ない・ 読まない	ほぼ毎日	週に3~4 日程度	週に1~2 日程度	月に1~3 日程度	ほとんど 見ない・ 読まない	ほぼ毎日	週に3~4 日程度	週に1~2 日程度	月に1~3 日程度	ほとんど 見ない・ 読まない
性別	全体	2000	68.5	7.1	4.7	2.9	16.9	5.3	6.4	21.1	29.3	38.0	87.0	7.7	2.7	1.4	1.4
	男性	960	70.2	6.5	4.9	2.3	16.1	7.1	6.7	24.4	25.9	35.9	90.4	6.6	1.6	0.4	1.0
	女性	1040	66.9	7.7	4.5	3.4	17.5	3.7	6.2	18.0	32.3	39.9	83.8	8.7	3.8	2.2	1.6
年齢	20代	289	33.2	14.2	8.7	7.6	36.3	6.2	7.3	22.8	26.0	37.7	88.2	8.0	2.4	0.3	1.0
	30代	347	50.7	9.2	9.8	5.2	25.1	7.8	6.6	21.6	30.5	33.4	90.2	7.2	0.9	0.9	0.9
	40代	305	68.2	10.5	3.6	2.3	15.4	4.6	6.6	23.3	26.2	39.3	90.5	5.2	2.3	1.6	0.3
	50代	375	78.4	6.1	1.6	1.9	12.0	5.1	5.3	20.5	32.0	37.1	86.9	7.2	2.7	1.6	1.6
	60代以上	684	87.1	2.0	2.6	0.4	7.7	4.1	6.4	19.3	29.8	40.4	83.2	9.1	3.9	1.8	2.0
性年齢	男性-20代	148	38.5	14.9	7.4	8.1	31.1	9.5	8.1	24.3	23.6	34.5	90.5	7.4	0.7	-	1.4
	男性-30代	175	53.1	9.1	10.3	2.3	25.1	10.9	6.9	22.9	29.7	29.7	89.7	7.4	1.1	0.6	1.1
	男性-40代	152	71.7	7.2	5.3	2.0	13.8	7.2	7.2	28.3	23.0	34.2	92.8	5.3	1.3	0.7	-
	男性-50代	185	79.5	4.9	1.6	1.1	13.0	5.9	5.4	24.9	28.1	35.7	89.7	6.5	1.1	0.5	2.2
	男性-60代以上	300	89.3	1.3	2.3	0.3	6.7	4.3	6.3	23.0	25.0	41.3	90.0	6.3	2.7	0.3	0.7
	女性-20代	141	27.7	13.5	9.9	7.1	41.8	2.8	6.4	21.3	28.4	41.1	85.8	8.5	4.3	0.7	0.7
	女性-30代	172	48.3	9.3	9.3	8.1	25.0	4.7	6.4	20.3	31.4	37.2	90.7	7.0	0.6	1.2	0.6
	女性-40代	153	64.7	13.7	2.0	2.6	17.0	2.0	5.9	18.3	29.4	44.4	88.2	5.2	3.3	2.6	0.7
	女性-50代	190	77.4	7.4	1.6	2.6	11.1	4.2	5.3	16.3	35.8	38.4	84.2	7.9	4.2	2.6	1.1
	女性-60代以上	384	85.4	2.6	2.9	0.5	8.6	3.9	6.5	16.4	33.6	39.6	77.9	11.2	4.9	2.9	3.1
職業	自営業・家族従業者/農林水産	175	76.6	3.4	3.4	2.9	13.7	6.3	7.4	20.6	34.9	30.9	88.6	6.9	2.9	1.1	0.6
	正規就業者	748	62.0	9.1	6.0	4.4	18.4	7.6	6.8	25.9	27.5	32.1	89.7	7.1	1.3	0.8	1.1
	非正規就業者	236	63.1	9.3	3.0	3.0	21.6	4.2	6.4	20.8	26.7	41.9	88.6	5.9	2.1	2.1	1.3
	専業主婦・主夫	495	74.1	6.7	5.1	1.4	12.7	3.2	5.3	16.2	33.1	42.2	82.2	8.1	5.3	2.2	2.2
	学生*	38	34.2	15.8	5.3	2.6	42.1	7.9	10.5	21.1	28.9	31.6	89.5	5.3	5.3	-	-
	無職	283	78.8	2.1	2.8	1.1	15.2	2.5	6.4	17.3	26.1	47.7	85.2	10.2	2.1	1.1	1.4
	その他*	25	80.0	4.0	4.0	4.0	8.0	8.0	4.0	20.0	24.0	44.0	88.0	12.0	-	-	-
既婚/未婚	既婚(配偶者あり)	1345	77.1	6.3	3.6	2.0	10.9	5.3	6.0	20.7	30.4	37.5	85.9	8.2	3.1	1.4	1.3
	既婚(離別・死別)	160	70.0	1.3	1.3	1.9	25.6	2.5	4.4	16.3	30.0	46.9	80.0	9.4	3.1	3.8	3.8
	未婚	495	44.6	11.1	8.7	5.5	30.1	6.3	8.1	23.4	25.9	36.4	91.9	5.7	1.4	0.4	0.6
子どもの有無	子供あり	1282	79.1	5.1	3.3	1.6	10.9	5.1	6.0	20.0	29.9	39.1	84.3	8.5	3.4	2.0	1.8
	子供なし	718	49.6	10.6	7.2	5.2	27.4	5.7	7.1	23.0	28.1	36.1	91.6	6.1	1.5	0.1	0.6
一番下の子について	未就学児	186	53.8	8.6	10.2	4.3	23.1	5.4	5.9	19.4	29.0	40.3	84.9	9.7	2.2	1.6	1.6
	小学生	115	68.7	12.2	4.3	2.6	12.2	9.6	8.7	25.2	24.3	32.2	90.4	4.3	2.6	1.7	0.9
	中学生	59	79.7	5.1	1.7	1.7	11.9	1.7	8.5	27.1	28.8	33.9	84.7	5.1	3.4	5.1	1.7
	高校生	66	84.8	9.1	1.5	1.5	3.0	10.6	4.5	21.2	19.7	43.9	84.8	7.6	3.0	-	4.5
	専門・専修短大/高等 大学・院	107	78.5	7.5	0.9	1.9	11.2	6.5	2.8	15.9	34.6	40.2	91.6	4.7	0.9	1.9	0.9
	学校を卒業	749	86.5	2.5	2.0	0.7	8.3	3.9	6.0	19.2	31.2	39.7	82.1	9.7	4.1	2.1	1.9
一人暮らし/同居	一人暮らし	270	41.5	7.0	6.7	6.3	38.5	5.6	9.6	17.0	26.7	41.1	91.1	6.3	1.1	0.4	1.1
	家族などと同居	1730	72.7	7.1	4.4	2.3	13.5	5.3	5.9	21.7	29.7	37.5	86.3	7.9	2.9	1.5	1.4
専攻学科	理科系	427	65.8	7.7	4.4	2.8	19.2	6.6	6.8	21.3	28.8	36.5	90.2	5.9	2.3	1.2	0.5
	文科系	670	70.7	9.1	5.1	2.4	12.7	5.5	6.9	24.9	30.4	32.2	89.1	7.0	1.5	1.2	1.2
	どちらともいえない	218	60.1	7.8	5.0	5.0	22.0	5.5	6.9	17.4	30.3	39.9	83.0	12.4	2.8	0.5	1.4

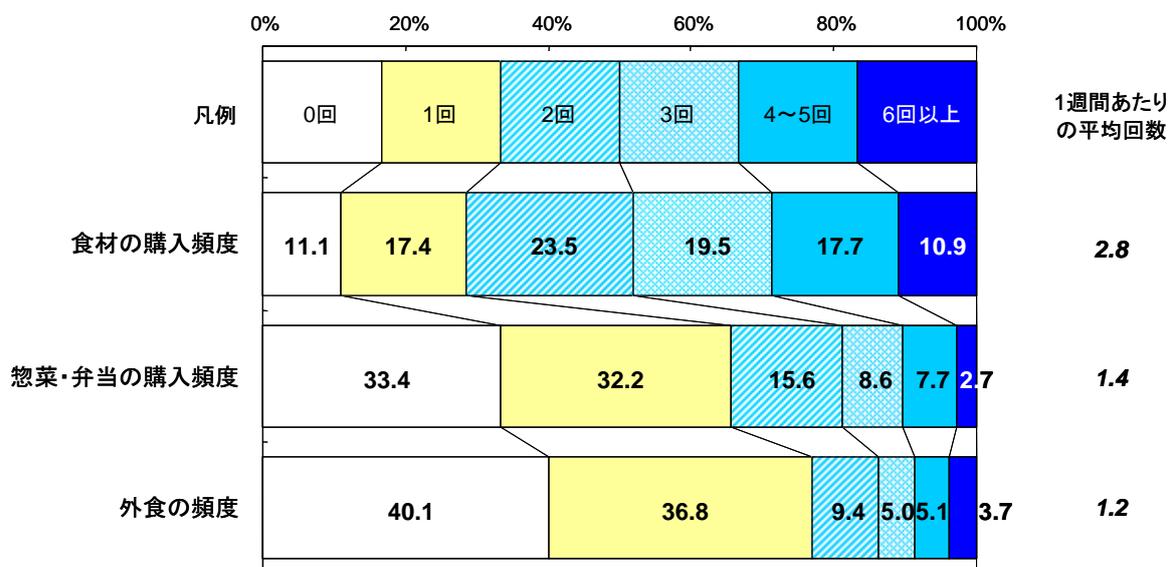
\* サンプル小のため参考値

(3) 普段の食生活

1) 食材の購入頻度／惣菜・弁当の購入頻度／外食の頻度

- 食材の購入頻度の一週間あたりの平均回数は2.8回、惣菜・弁当の購入頻度は1.4回、外食の頻度は1.2回となっている。

Q1.あなたは一週間のうち、①食材の購入、②惣菜・弁当の購入、③外食、をどの程度行っていますか。(N=2000)



- 女性（特に30代以上）、専業主婦で食材の購入頻度が高い。
- 一方、男性（特に若年層）、正規就業者、学生、未婚者、一人暮らしで、惣菜・弁当の購入頻度、外食頻度が高い。

Q1.あなたは一週間のうち、①食材の購入、②惣菜・弁当の購入、③外食、をどの程度行っていますか。（一週間あたりの平均回数）

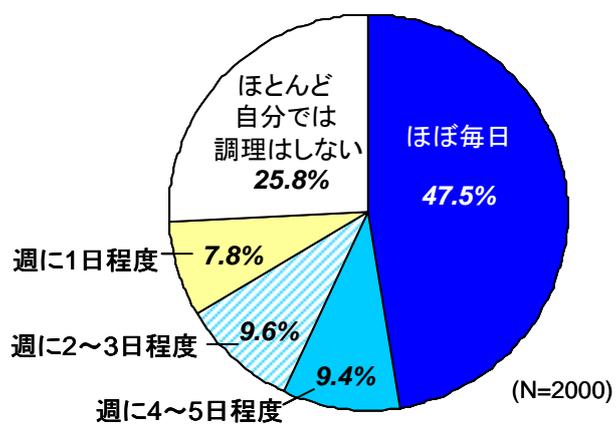
<性別、年齢、性年齢、職業、既婚/未婚、子供の有無、一番下の子供について、一人暮らし/同居、専攻学科別>

		(N)	食材の購入頻度	惣菜・弁当の購入頻度	外食の頻度
全体		2000	2.8	1.4	1.2
性別	男性	960	2.2	1.6	1.6
	女性	1040	3.3	1.3	0.9
年齢	20代	289	2.2	1.8	1.8
	30代	347	2.7	1.8	1.5
	40代	305	2.7	1.5	1.5
	50代	375	2.9	1.5	1.1
	60代以上	684	3.0	1.1	0.7
性年齢	男性-20代	148	1.9	1.9	2.0
	男性-30代	175	2.1	2.2	2.0
	男性-40代	152	2.1	1.8	2.0
	男性-50代	185	2.0	1.6	1.5
	男性-60代以上	300	2.5	1.2	0.9
	女性-20代	141	2.5	1.6	1.6
	女性-30代	172	3.3	1.4	1.1
	女性-40代	153	3.4	1.3	1.1
	女性-50代	190	3.7	1.3	0.7
女性-60代以上	384	3.4	1.0	0.6	
職業	自営業・家族従業者/農林水産	175	2.5	1.5	1.1
	正規就業者	748	2.3	1.8	1.9
	非正規就業者	236	3.1	1.6	1.1
	専業主婦・主夫	495	3.6	0.9	0.6
	学生	38	2.2	2.1	1.9
	無職	283	2.7	1.1	0.6
	その他	25	2.5	1.0	0.8
既婚/未婚	既婚（配偶者あり）	1345	3.0	1.2	1.1
	既婚（離別・死別）	160	2.5	1.3	0.8
	未婚	495	2.3	2.1	1.8
子供の有無	子供あり	1282	3.0	1.2	1.0
	子供なし	718	2.4	1.8	1.6
一番下の子供について	未就学児	186	2.8	1.3	1.5
	小学生	115	2.9	1.7	1.5
	中学生	59	2.8	1.3	1.2
	高校生	66	2.5	1.2	1.1
	専門・専修/短大/高専/大学・院	107	3.0	1.2	1.1
	学校を卒業	749	3.1	1.1	0.8
一人暮らし/同居	一人暮らし	270	2.5	2.2	1.7
	家族など同居	1730	2.8	1.3	1.1
専攻学科	理科系	427	2.3	1.6	1.7
	文科系	670	2.9	1.5	1.5
	どちらともいえない	218	3.1	1.3	0.9

## 2) 調理頻度

- 「ほぼ毎日調理している」は全体の半数弱（47.5%）で、「ほとんど自分で調理していない」はおよそ4分の1（25.8%）となっている。

Q2.あなたは普段、ご自身でどの程度調理をされていますか。



- 男性より女性で調理頻度は高く、女性の中では高齢層ほど、高くなっている。
- 男性は、30-40代で調理頻度が低く、60代以上で高い。
- 専業主婦、既婚者、子供のいる人（特に子供の年齢が高い人）で、調理頻度は高い。

Q2.あなたは普段、ご自身でどの程度調理をされていますか。

<性別、年齢、性年齢、職業、既婚/未婚、子供の有無、一番下の子供について、一人暮らし/同居別>

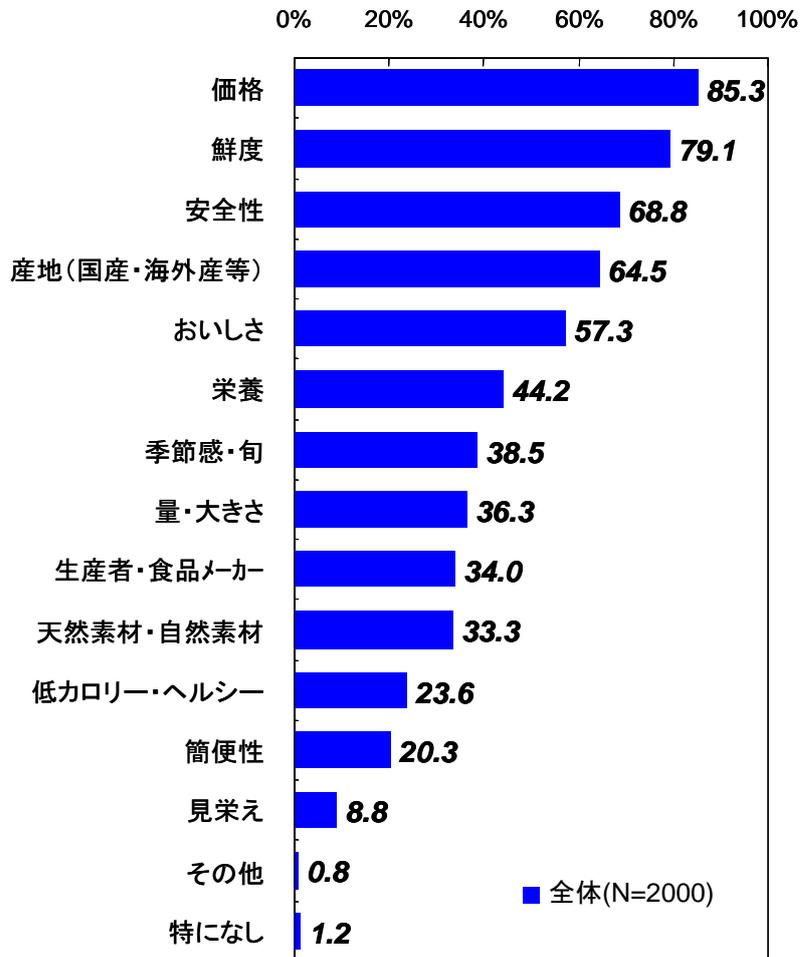
		(N)	ほぼ毎日	週に4~5日程度	週に2~3日程度	週に1日程度	ほとんど自分では調理はしない
全体		2000	47.5	9.4	9.6	7.8	25.8
性別	男性	960	19.0	8.8	11.6	13.4	47.3
	女性	1040	73.8	10.0	7.8	2.5	6.0
年齢	20代	289	27.0	14.5	15.2	10.7	32.5
	30代	347	35.2	12.7	13.0	11.5	27.7
	40代	305	43.0	8.5	12.1	7.9	28.5
	50代	375	53.1	9.1	7.2	6.9	23.7
	60代以上	684	61.3	6.1	5.7	5.0	21.9
性年齢	男性-20代	148	17.6	14.9	13.5	14.2	39.9
	男性-30代	175	12.0	10.3	13.1	17.7	46.9
	男性-40代	152	10.5	7.2	15.8	13.2	53.3
	男性-50代	185	20.5	9.2	10.3	12.4	47.6
	男性-60代以上	300	27.0	5.3	8.3	11.3	48.0
	女性-20代	141	36.9	14.2	17.0	7.1	24.8
	女性-30代	172	58.7	15.1	12.8	5.2	8.1
	女性-40代	153	75.2	9.8	8.5	2.6	3.9
	女性-50代	190	84.7	8.9	4.2	1.6	0.5
	女性-60代以上	384	88.0	6.8	3.6	0.0	1.6
職業	自営業・家族従業者/農林水産	175	44.0	4.6	6.9	10.3	34.3
	正規就業者	748	23.4	10.4	14.8	13.5	37.8
	非正規就業者	236	54.7	11.0	13.1	4.2	16.9
	専業主婦・主夫	495	89.9	7.3	1.6	0.0	1.2
	学生*	38	13.2	28.9	10.5	18.4	28.9
	無職	283	38.5	8.5	8.8	6.4	37.8
	その他*	25	36.0	20.0	4.0	4.0	36.0
既婚/未婚	既婚(配偶者あり)	1345	53.8	6.9	6.2	6.5	26.6
	既婚(離別・死別)	160	66.9	11.9	9.4	3.1	8.8
	未婚	495	24.0	15.4	19.0	12.5	29.1
子供の有無	子供あり	1282	56.2	6.6	6.2	6.1	25.0
	子供なし	718	31.9	14.3	15.7	10.7	27.3
一番下の子供について	未就学児	186	48.9	5.9	6.5	6.5	32.3
	小学生	115	40.0	11.3	10.4	7.8	30.4
	中学生	59	40.7	6.8	13.6	11.9	27.1
	高校生	66	43.9	9.1	4.5	6.1	36.4
	専門・専修/短大/高専/大学・院	107	57.9	3.7	4.7	6.5	27.1
	学校を卒業	749	62.5	6.3	5.2	5.2	20.8
一人暮らし/同居	一人暮らし	270	40.7	20.7	18.5	8.5	11.5
	家族など同居	1730	48.5	7.6	8.2	7.6	28.0

\* サンプル小のため参考値

3) 食品購入時、重視していること

- 食品購入時重視していることとして、「価格」(85.3%)、「鮮度」(79.1%)、「安全性」(68.8%)が多くあげられている。

Q3.食品を購入する際、あなたが気をつけていること、重視していることは何ですか。  
(複数回答)



- 「価格」は男女共に8割以上の方が重視している。それ以外の項目については、一般的に女性のほうが重視している割合が多い。
- 「鮮度」「安全性」「産地」「季節感・旬」「生産者・食品メーカー」「天然素材・自然素材」は、年齢が高いほど重視する人が多い。
- 一方、「価格」「量・大きさ」は、年齢が若い人ほど重視する人が多い。

Q3.食品を購入する際、あなたが気をつけていること、重視していることは何ですか。  
(複数回答)

<性別、年齢、性年齢別>

		(N)	価格	鮮度	安全性	産地(国産・海外産等)	おいしさ	栄養	季節感・旬	量・大きさ
全体		2000	85.3	79.1	68.8	64.5	57.3	44.2	38.5	36.3
性別	男性	960	84.2	70.9	59.8	53.8	53.1	31.5	27.2	32.9
	女性	1040	86.3	86.5	77.1	74.3	61.2	55.9	48.8	39.3
年齢	20代	289	92.7	64.7	54.3	52.6	60.6	43.9	27.3	47.1
	30代	347	87.3	74.1	59.9	59.1	55.9	49.0	33.7	43.5
	40代	305	85.2	76.4	65.2	59.7	58.4	45.6	32.5	36.1
	50代	375	81.3	79.7	69.1	65.3	54.1	41.1	42.4	31.5
	60代以上	684	83.3	88.5	80.8	73.8	57.9	42.8	46.1	30.7
性年齢	男性-20代	148	92.6	54.1	47.3	44.6	60.1	39.2	19.6	41.9
	男性-30代	175	83.4	66.3	49.1	46.9	54.9	36.6	22.9	45.1
	男性-40代	152	84.2	71.1	58.6	48.0	51.3	29.6	23.0	33.6
	男性-50代	185	78.4	68.1	56.2	51.4	48.1	24.9	30.8	26.5
	男性-60代以上	300	84.0	83.7	75.0	66.7	52.7	29.7	33.3	25.0
	女性-20代	141	92.9	75.9	61.7	61.0	61.0	48.9	35.5	52.5
	女性-30代	172	91.3	82.0	70.9	71.5	57.0	61.6	44.8	41.9
	女性-40代	153	86.3	81.7	71.9	71.2	65.4	61.4	41.8	38.6
	女性-50代	190	84.2	91.1	81.6	78.9	60.0	56.8	53.7	36.3
	女性-60代以上	384	82.8	92.2	85.4	79.4	62.0	53.1	56.0	35.2

		(N)	生産者・食品メーカー	天然素材・自然素材	低カロリー・ヘルシー	簡便性	見栄え	その他	特になし
全体		2000	34.0	33.3	23.6	20.3	8.8	0.8	1.2
性別	男性	960	26.6	26.0	19.4	19.2	7.7	0.9	2.4
	女性	1040	40.9	40.0	27.4	21.3	9.8	0.6	0.1
年齢	20代	289	22.8	15.2	19.4	26.0	14.5	-	0.7
	30代	347	30.5	28.8	26.2	21.6	10.1	0.6	1.4
	40代	305	31.5	27.5	23.3	26.2	7.9	1.3	0.7
	50代	375	30.9	36.0	20.8	18.9	6.9	1.1	2.4
	60代以上	684	43.3	44.3	25.6	15.4	7.2	0.7	0.9
性年齢	男性-20代	148	19.6	13.5	14.2	24.3	15.5	-	1.4
	男性-30代	175	24.0	22.3	26.3	24.0	10.3	-	2.3
	男性-40代	152	25.7	25.0	20.4	22.4	8.6	1.3	1.3
	男性-50代	185	20.5	24.3	17.3	18.9	5.4	2.2	4.9
	男性-60代以上	300	35.7	36.0	18.7	12.3	3.3	1.0	2.0
	女性-20代	141	26.2	17.0	24.8	27.7	13.5	-	-
	女性-30代	172	37.2	35.5	26.2	19.2	9.9	1.2	0.6
	女性-40代	153	37.3	30.1	26.1	30.1	7.2	1.3	-
	女性-50代	190	41.1	47.4	24.2	18.9	8.4	-	-
	女性-60代以上	384	49.2	50.8	31.0	17.7	10.2	0.5	-

- 専業主婦は、「鮮度」「安全性」「産地」「おいしさ」「栄養」など、多くの項目で重視する人が多い。
- 「安全性」については、専業主婦、既婚者、子供のいる人（特に年齢の高い子供）で、重視する人が多い。

Q3.食品を購入する際、あなたが気をつけていること、重視していることは何ですか。

(複数回答)

<職業、既婚/未婚、子供の有無、一番下の子どもについて、一人暮らし/同居、専攻学科別>

		(N)	価格	鮮度	安全性	産地(国産・海外産等)	おいしさ	栄養	季節感・旬	量・大きさ	(%)
全体		2000	85.3	79.1	68.8	64.5	57.3	44.2	38.5	36.3	
職業	自営業・家族従業者/農林水産	175	82.9	78.3	71.4	62.9	55.4	40.0	45.1	26.9	
	正規就業者	748	84.2	71.9	56.8	53.9	56.1	37.6	30.1	36.2	
	非正規就業者	236	89.4	76.3	68.2	65.7	59.3	50.4	39.8	42.8	
	専業主婦・主夫	495	86.3	91.1	84.2	80.0	63.8	60.4	52.7	40.4	
	学生*	38	94.7	65.8	57.9	55.3	47.4	28.9	23.7	42.1	
	無職	283	84.1	82.0	73.1	66.4	50.2	32.5	31.8	28.6	
	その他*	25	76.0	72.0	76.0	64.0	52.0	44.0	44.0	36.0	
既婚/未婚	既婚(配偶者あり)	1345	85.3	83.5	74.1	70.1	58.9	44.8	42.4	34.9	
	既婚(離別・死別)	160	80.6	81.3	67.5	56.9	54.4	48.8	40.6	31.9	
	未婚	495	86.9	66.3	54.7	51.5	53.9	40.8	27.1	41.4	
子どもの有無	子供あり	1282	85.9	83.5	74.6	69.5	58.5	44.6	41.5	34.7	
	子供なし	718	84.3	71.2	58.4	55.4	55.2	43.3	33.0	39.0	
一番下の子どもについて	未就学児	186	91.9	76.9	63.4	60.2	60.8	52.2	32.3	46.8	
	小学生	115	87.0	74.8	65.2	60.9	55.7	48.7	34.8	36.5	
	中学生	59	88.1	76.3	59.3	61.0	59.3	35.6	28.8	39.0	
	高校生	66	81.8	78.8	77.3	65.2	62.1	33.3	36.4	37.9	
	専門・専修/短大/高専/大学・院	107	78.5	82.2	73.8	70.1	57.0	45.8	53.3	33.6	
	学校を卒業	749	85.4	87.6	80.0	74.1	58.2	43.7	44.6	31.0	
一人暮らし/同居	一人暮らし	270	86.7	66.7	57.0	50.0	50.0	40.4	31.9	44.8	
	家族など同居	1730	85.1	81.0	70.6	66.7	58.4	44.7	39.5	34.9	
専攻学科	理科系	427	84.1	74.7	61.8	53.9	52.7	36.3	32.3	34.2	
	文科系	670	84.9	81.0	71.5	68.4	59.9	49.4	44.2	35.5	
	どちらともいえない	218	88.1	81.2	69.3	64.7	60.6	52.8	44.0	39.4	

		(N)	生産者・食品メーカー	天然素材・自然素材	低カロリー・ヘルシー	簡便性	見栄え	その他	特になし
全体		2000	34.0	33.3	23.6	20.3	8.8	0.8	1.2
職業	自営業・家族従業者/農林水産	175	33.1	34.3	24.0	19.4	1.7	1.1	0.6
	正規就業者	748	26.1	25.7	23.4	22.7	9.6	0.7	2.1
	非正規就業者	236	38.1	30.5	24.6	25.4	10.2	0.4	0.8
	専業主婦・主夫	495	46.1	46.1	26.9	17.8	12.5	0.8	-
	学生*	38	18.4	18.4	18.4	23.7	7.9	-	-
	無職	283	31.4	32.9	17.3	14.8	2.8	1.1	1.8
	その他*	25	52.0	56.0	28.0	12.0	16.0	-	-
既婚/未婚	既婚(配偶者あり)	1345	37.0	37.5	22.5	17.0	9.2	0.8	1.5
	既婚(離別・死別)	160	36.9	33.8	24.4	23.1	6.9	0.6	-
	未婚	495	24.8	21.8	26.3	28.5	8.3	0.6	0.8
子どもの有無	子供あり	1282	37.1	37.4	22.3	17.1	8.3	0.9	1.3
	子供なし	718	28.4	25.9	25.8	26.0	9.6	0.6	1.0
一番下の子どもについて	未就学児	186	29.0	29.0	19.9	21.0	14.0	1.1	1.6
	小学生	115	30.4	28.7	17.4	18.3	4.3	1.7	1.7
	中学生	59	35.6	30.5	8.5	18.6	5.1	-	1.7
	高校生	66	30.3	24.2	19.7	21.2	7.6	-	3.0
	専門・専修/短大/高専/大学・院	107	40.2	36.4	18.7	17.8	9.3	0.9	1.9
	学校を卒業	749	40.5	42.7	25.5	15.4	7.7	0.8	0.9
一人暮らし/同居	一人暮らし	270	24.1	24.1	29.6	33.3	6.3	1.1	0.7
	家族など同居	1730	35.5	34.7	22.6	18.3	9.2	0.7	1.3
専攻学科	理科系	427	25.1	28.1	20.4	20.8	8.7	0.5	2.1
	文科系	670	36.3	37.0	24.9	19.9	7.8	1.0	1.3
	どちらともいえない	218	33.9	35.8	28.4	20.2	8.7	0.5	0.9

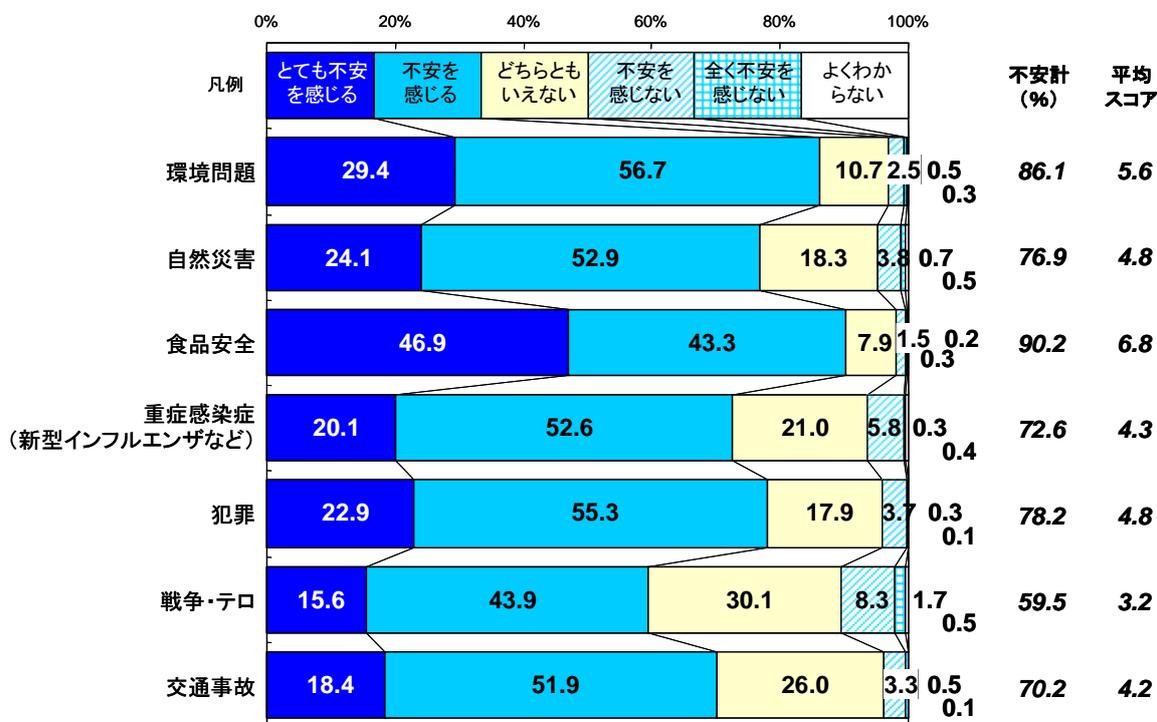
\* サンプル小のため参考値

(4) リスク認知度

1) 食品分野とそれ以外の分野でのリスク認知度

- 下記 7 つの事象について不安度をたずねたところ、「食品安全」に対する不安度が最も高く、9 割の人 (90.2%) が「とても不安を感じる」「不安を感じる」と回答している。
- 次に、「環境問題」(86.1%)、「犯罪」(78.2%)、「自然災害」(76.9%) の不安度が高くなっている (括弧内は、「とても不安を感じる」「不安を感じる」の計)。

Q4.あなたは次にあげる事柄について、どの程度不安を感じますか。(N=2000)



※スコア配点

とても不安を感じる	+10
不安を感じる	+5
どちらともいえない	0
不安を感じない	-5
全く不安を感じない	-10

- 全般的に、男性より女性、また、専業主婦、既婚者、子供のいる人で不安度は高い。
- 専攻学科では、理科系より、文科系、どちらともいえないで、全般的に不安度は高い。

Q4.あなたは次にあげる事柄について、どの程度不安を感じますか。(平均スコア)

<性別、年齢、性年齢、職業、既婚/未婚、子供の有無、一番下の子供について、一人暮らし/同居、専攻学科別>

		環境問題	自然災害	食品安全	重症感染症	犯罪	戦争・テロ	交通事故
全体		5.6	4.8	6.8	4.3	4.8	3.2	4.2
性別	男性	5.1	4.1	6.2	3.7	4.3	2.6	3.8
	女性	6.1	5.5	7.3	4.9	5.3	3.7	4.6
年齢	20代	5.3	4.7	6.4	3.9	4.6	2.6	3.7
	30代	5.7	4.8	7.0	4.4	5.1	3.4	4.3
	40代	5.4	4.6	6.9	4.3	4.7	2.8	3.9
	50代	5.8	4.8	6.7	4.1	4.6	3.3	4.1
	60代以上	5.7	5.0	6.8	4.7	5.0	3.4	4.6
性年齢	男性-20代	5.0	4.1	6.1	3.4	4.1	2.6	3.4
	男性-30代	5.2	4.1	6.3	4.0	4.4	2.9	3.8
	男性-40代	5.0	4.1	6.4	3.7	4.1	2.0	3.3
	男性-50代	5.2	4.1	6.1	3.4	4.1	2.5	3.7
	男性-60代以上	5.2	4.2	6.2	4.0	4.6	2.8	4.4
	女性-20代	5.6	5.3	6.6	4.3	5.1	2.7	4.0
	女性-30代	6.3	5.6	7.6	4.8	5.8	4.0	4.9
	女性-40代	5.8	5.2	7.3	4.9	5.3	3.7	4.4
	女性-50代	6.3	5.4	7.2	4.8	5.2	4.0	4.4
女性-60代以上	6.1	5.6	7.3	5.2	5.3	3.9	4.8	
職業	自営業・家族従業者/農林水産	5.6	4.8	6.9	4.2	4.7	3.1	4.3
	正規就業者	5.4	4.3	6.3	3.8	4.4	2.7	3.6
	非正規就業者	5.6	5.2	6.8	4.5	5.1	3.4	4.6
	専業主婦・主夫	6.3	5.6	7.5	5.4	5.5	4.1	4.9
	学生*	5.7	4.1	6.3	2.6	3.3	2.0	3.2
	無職	5.2	4.6	6.5	4.2	5.2	3.2	4.4
	その他*	6.2	5.0	6.8	4.6	2.8	2.0	3.2
既婚/未婚	既婚(配偶者あり)	5.8	4.9	6.9	4.6	5.0	3.3	4.4
	既婚(離別・死別)	5.7	4.8	6.7	4.0	4.9	3.3	4.1
	未婚	5.1	4.7	6.3	3.6	4.4	2.9	3.7
子供の有無	子供あり	5.8	4.9	6.9	4.6	5.0	3.2	4.4
	子供なし	5.3	4.7	6.5	3.9	4.6	3.1	3.8
一番下の子供について	未就学児	6.3	5.0	7.2	4.9	5.2	3.2	4.5
	小学生	5.7	4.7	7.0	4.8	5.2	3.0	4.4
	中学生	5.9	5.2	7.2	4.9	5.3	3.0	3.5
	高校生	4.9	4.0	7.2	4.2	4.6	2.3	4.3
	専門・専修/短大/高専/大学・院	5.7	4.8	6.2	3.8	4.3	2.6	4.2
	学校を卒業	5.8	4.9	6.9	4.6	5.0	3.5	4.6
一人暮らし/同居	一人暮らし	4.8	4.2	5.8	3.0	4.0	2.4	3.4
	家族など同居	5.7	4.9	6.9	4.5	5.0	3.3	4.3
専攻学科	理科系	5.3	4.1	6.3	4.0	4.4	2.7	3.6
	文科系	5.8	4.8	6.9	4.3	4.8	3.1	4.1
	どちらともいえない	6.1	5.4	7.4	4.8	5.7	4.0	4.6

- 一般的に、食材の購入頻度、調理頻度の高い人、ニュース・報道番組、ワイドショー・情報番組の閲覧頻度が高い人ほど、不安度が高い傾向がみられる。

Q4.あなたは次にあげる事柄について、どの程度不安を感じますか。(平均スコア)

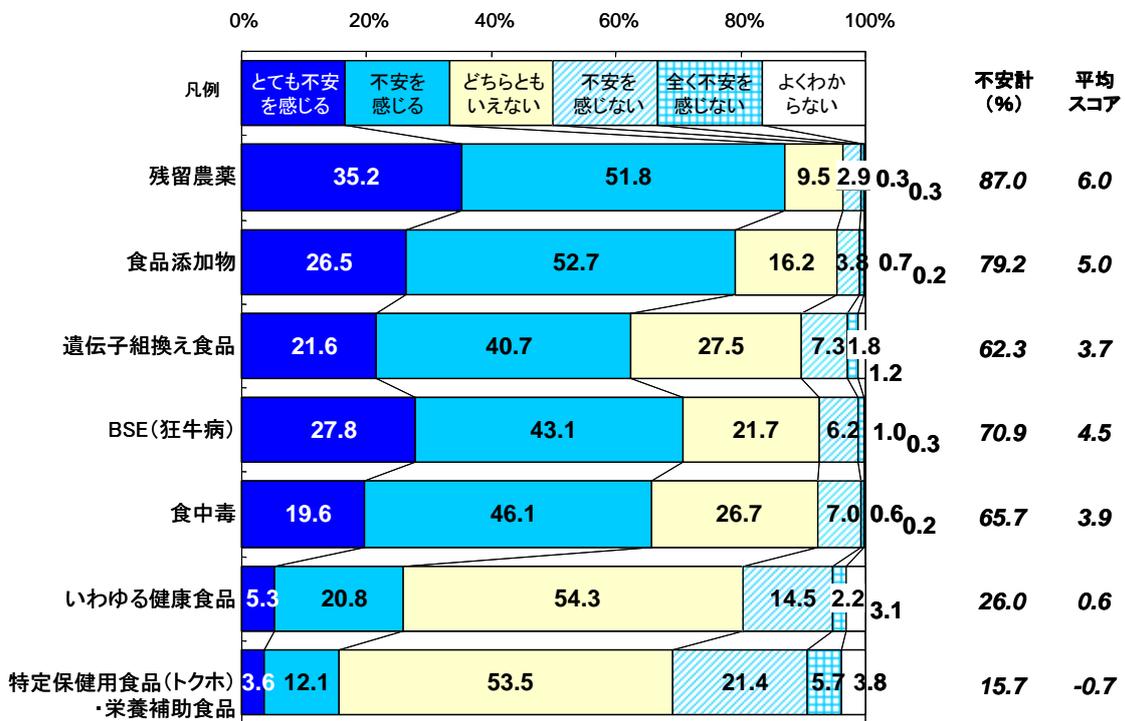
<食材、惣菜・弁当の購入頻度、外食頻度、調理頻度、情報接触度別>

		環境 問題	自然 災害	食品 安全	重症 感染症	犯罪	戦争・テロ	交通 事故
全体		5.6	4.8	6.8	4.3	4.8	3.2	4.2
食材の購入 頻度(一週 間)	0回	4.7	3.9	5.8	3.2	4.0	2.2	3.3
	1~3回	5.7	4.8	6.8	4.4	4.9	3.3	4.2
	4回以上	5.8	5.1	7.1	4.6	5.1	3.4	4.6
惣菜・弁当 の購入頻度 (一週間)	0回	5.8	5.0	6.9	4.5	5.1	3.5	4.2
	1~3回	5.7	4.9	6.8	4.4	4.8	3.1	4.3
	4回以上	4.9	3.7	6.1	3.4	4.1	2.4	3.9
外食の頻度 (一週間)	0回	5.5	5.0	6.8	4.3	5.0	3.3	4.3
	1~3回	5.7	4.9	6.8	4.5	4.9	3.3	4.3
	4回以上	5.7	4.0	6.3	3.6	4.1	2.2	3.4
調理頻度	ほぼ毎日	6.1	5.4	7.3	5.0	5.2	3.8	4.7
	週に4~5日程度	5.5	4.5	6.6	4.0	4.7	2.7	3.6
	週に2~3日程度	5.3	4.3	6.6	3.4	4.4	2.7	3.8
	週に1日程度	5.7	4.2	6.1	3.8	4.4	2.7	3.8
	ほとんど自分では調理はしない	5.0	4.2	6.2	3.8	4.5	2.6	3.8
ニュース・報 道番組	閲覧頻度高	5.8	4.9	6.9	4.5	5.0	3.3	4.4
	閲覧頻度低	4.5	4.2	6.2	3.3	4.1	2.4	3.4
ワイド ショー・情報 番組	閲覧頻度高	5.8	5.2	7.0	4.7	5.1	3.5	4.7
	閲覧頻度低	5.4	4.3	6.5	3.9	4.5	2.8	3.7
ドキュメンタ リー番組	閲覧頻度高	5.8	4.9	6.8	4.7	5.0	3.4	4.4
	閲覧頻度低	5.4	4.7	6.7	3.9	4.6	2.8	3.9
新聞	閲覧頻度高	5.8	4.9	6.9	4.6	5.0	3.3	4.4
	閲覧頻度低	5.2	4.5	6.4	3.8	4.6	3.0	3.9
雑誌	閲覧頻度高	5.8	4.9	6.8	4.6	4.9	3.4	4.2
	閲覧頻度低	5.5	4.8	6.8	4.2	4.8	3.1	4.2
インターネット	閲覧頻度高	5.6	4.9	6.8	4.4	4.9	3.3	4.2
	閲覧頻度低	5.5	4.5	6.6	3.7	4.8	2.7	4.1

2) 食品分野における各ハザードのリスク認知度

- 残留農薬は87.0%、食品添加物は79.2%、遺伝子組換え食品は62.3%、BSEは70.9%、食中毒は65.7%の人が不安を感じている（「とても不安を感じる」「不安を感じる」）。
- 一方、いわゆる健康食品、特定保健用食品（トクホ）・栄養補助食品は、半数以上が「どちらともいえない」と回答している。

Q5.あなたは次にあげる事柄について、どの程度不安を感じますか。(N=2000)



※スコア配点

とても不安を感じる	+10
不安を感じる	+5
どちらともいえない	0
不安を感じない	-5
全く不安を感じない	-10

- 全てのハザードについて、男性より女性のほうが不安度が高い。
- 食品添加物、遺伝子組換え食品、BSEについては、男女ともに高齢層で不安度が高い。
- 全般的に、専業主婦、既婚者、子供のいる人で不安度は高い。
- 専攻学科では、理科系より、文科系、どちらともいえないで不安度は高い。

Q5.あなたは次にあげる事柄について、どの程度不安を感じますか。(平均スコア)

<性別、年齢、性年齢、職業、既婚/未婚、子供の有無、一番下の子供について、一人暮らし/同居、専攻学科別>

		残留農薬	食品添加物	遺伝子組換え食品	BSE	食中毒	いわゆる健康食品	特定保健用食品・栄養補助食品
全体		6.0	5.0	3.7	4.5	3.9	0.6	-0.7
性別	男性	5.4	4.4	2.9	3.8	3.4	0.2	-0.9
	女性	6.4	5.6	4.4	5.2	4.3	1.1	-0.5
年齢	20代	5.3	4.0	2.2	3.9	4.1	-0.2	-1.8
	30代	5.8	4.5	3.4	4.3	4.0	0.4	-1.5
	40代	5.7	4.8	3.7	4.3	3.3	0.2	-1.1
	50代	6.2	5.3	3.9	4.5	3.0	0.6	-0.6
	60代以上	6.3	5.7	4.4	5.1	4.4	1.3	0.3
性年齢	男性-20代	4.7	3.7	1.6	3.2	3.5	-0.8	-2.2
	男性-30代	5.1	3.9	2.4	3.4	3.7	0.5	-1.1
	男性-40代	5.0	4.1	3.1	4.0	3.1	-0.2	-1.4
	男性-50代	5.8	4.8	3.0	3.5	2.5	-0.1	-1.0
	男性-60代以上	6.0	5.1	3.7	4.4	3.9	0.9	0.2
	女性-20代	6.0	4.4	2.9	4.5	4.7	0.5	-1.4
	女性-30代	6.5	5.2	4.5	5.2	4.3	0.3	-1.9
	女性-40代	6.3	5.4	4.2	4.7	3.6	0.7	-0.8
	女性-50代	6.5	5.8	4.8	5.4	3.6	1.2	-0.1
	女性-60代以上	6.6	6.1	4.9	5.6	4.8	1.7	0.3
職業	自営業・家族従業者/農林水産	5.8	5.4	4.0	5.0	3.7	0.8	-0.4
	正規就業者	5.4	4.4	2.9	3.8	3.2	0.2	-1.3
	非正規就業者	6.1	5.1	3.8	4.4	4.2	0.6	-0.8
	専業主婦・主夫	6.7	5.9	4.8	5.4	4.6	1.4	-0.2
	学生*	6.3	4.6	2.2	4.2	4.5	0.3	-1.9
	無職	6.0	5.1	3.8	4.8	4.1	0.6	0.0
	その他*	6.2	5.4	4.2	5.2	4.8	-0.4	-1.7
既婚/未婚	既婚(配偶者あり)	6.2	5.3	4.0	4.7	4.0	0.8	-0.5
	既婚(離別・死別)	5.6	4.8	3.9	4.9	3.8	0.9	0.0
	未婚	5.3	4.3	2.9	3.9	3.5	0.2	-1.5
子供の有無	子供あり	6.2	5.3	4.1	4.8	4.0	0.8	-0.4
	子供なし	5.5	4.5	3.0	4.1	3.7	0.3	-1.3
一番下の子供について	未就学児	6.0	4.6	3.6	4.6	4.5	0.2	-1.5
	小学生	6.2	5.3	3.5	4.4	3.9	0.4	-1.0
	中学生	5.5	4.9	4.4	4.8	3.7	0.5	-0.9
	高校生	5.8	5.2	3.8	4.3	2.9	-0.1	-0.5
	専門・専修/短大/高専/大学・院	5.8	4.9	3.1	4.0	2.8	0.1	-1.2
	学校を卒業	6.4	5.7	4.4	5.1	4.1	1.3	0.2
一人暮らし/同居	一人暮らし	5.2	4.2	2.5	3.8	3.6	0.1	-1.3
	家族など同居	6.1	5.2	3.9	4.7	3.9	0.7	-0.6
専攻学科	理科系	5.6	4.5	2.7	3.5	3.0	-0.1	-1.3
	文科系	6.0	5.2	4.1	4.6	3.8	0.7	-0.8
	どちらともいえない	6.5	5.5	4.5	5.5	4.2	0.6	-0.6

- 全てのハザードについて、食材の購入頻度、調理頻度の高い人ほど、不安度が高い傾向がみられる。
- 残留農薬、食品添加物、遺伝子組換え食品、BSE について、テレビ（ニュース・報道番組、ワイドショー・情報番組、ドキュメンタリー番組）、新聞の閲覧頻度が高い人ほど、不安度が高い傾向がみられる。

Q5.あなたは次にあげる事柄について、どの程度不安を感じますか。（平均スコア）

<食材、惣菜・弁当の購入頻度、外食頻度、調理頻度、情報接触度別>

		残留農薬	食品添加物	遺伝子組換え食品	BSE	食中毒	いわゆる健康食品	特定保健用食品・栄養補助食品
全体		6.0	5.0	3.7	4.5	3.9	0.6	-0.7
食材の購入頻度（一週間）	0回	4.7	3.8	2.3	3.3	2.9	-0.4	-1.2
	1～3回	6.0	5.0	3.7	4.5	3.9	0.7	-0.7
	4回以上	6.4	5.6	4.3	5.1	4.2	1.0	-0.5
惣菜・弁当の購入頻度（一週間）	0回	6.1	5.3	3.9	4.6	3.7	0.7	-0.4
	1～3回	6.0	5.1	3.8	4.7	4.1	0.7	-0.8
	4回以上	5.3	4.1	2.5	3.2	2.9	0.3	-1.1
外食の頻度（一週間）	0回	6.0	5.1	3.7	4.6	3.8	0.8	-0.3
	1～3回	6.0	5.2	3.8	4.7	4.0	0.6	-0.9
	4回以上	5.6	4.1	2.9	3.6	3.2	0.0	-1.7
調理頻度	ほぼ毎日	6.5	5.7	4.5	5.2	4.3	1.1	-0.4
	週に4～5日程度	6.0	4.8	3.3	4.3	3.8	0.6	-0.7
	週に2～3日程度	5.7	4.6	3.1	4.0	3.3	0.5	-1.2
	週に1日程度	5.6	4.6	3.1	4.1	3.6	0.0	-1.0
	ほとんど自分では調理はしない	5.1	4.1	2.8	3.7	3.3	0.1	-1.0
ニュース・報道番組	閲覧頻度高	6.1	5.2	3.9	4.6	3.9	0.7	-0.6
	閲覧頻度低	5.1	4.2	2.3	4.0	3.5	0.1	-1.2
ワイドショー・情報番組	閲覧頻度高	6.2	5.3	4.1	4.9	4.3	0.9	-0.5
	閲覧頻度低	5.7	4.8	3.3	4.2	3.4	0.4	-1.0
ドキュメンタリー番組	閲覧頻度高	6.1	5.3	4.0	4.7	4.2	1.0	-0.3
	閲覧頻度低	5.7	4.6	3.3	4.3	3.4	0.1	-1.3
新聞	閲覧頻度高	6.2	5.3	4.1	4.7	3.9	0.8	-0.5
	閲覧頻度低	5.5	4.4	2.9	4.2	3.7	0.3	-1.1
雑誌	閲覧頻度高	6.1	5.2	4.1	4.6	4.1	0.8	-0.6
	閲覧頻度低	5.9	4.9	3.5	4.5	3.7	0.6	-0.7
インターネット	閲覧頻度高	6.0	5.1	3.8	4.6	3.9	0.6	-0.8
	閲覧頻度低	5.7	4.8	3.3	3.8	3.5	0.8	-0.3

(5) 不安を感じたきっかけ・情報源

1) 不安を感じたきっかけ

- 各ハザードについて不安を感じている人に、不安を感じたきっかけについてたずねたところ、残留農薬、食品添加物、遺伝子組換え食品、BSE とともに、「事件・事故のニュース・報道」がトップとなっている。
- 中でも、残留農薬、BSE については、8 割以上の人（それぞれ 89.8%、82.7%）が「事件・事故のニュース・報道」がきっかけとなっている。
- 続いて、残留農薬、食品添加物、遺伝子組換え食品は、「危険性・有害性に関する見解・論調」、BSE は「テレビなどで衝撃的な映像を見て」が多い。
- 遺伝子組換え食品では、「なんとなく」という意見が 3 割（31.5%）と多い。

Q6,Q11,Q16,Q21. ○○について、不安を感じるようになったきっかけは何ですか。  
 (複数回答) (ベース：各ハザードについて不安と感じている人)

残留農薬

	n	%
全体	1740	100.0
1 事件・事故のニュース・報道を見て	1563	89.8
2 危険性・有害性に関する見解・論調に接して	754	43.3
3 テレビなどで衝撃的な映像を見て	625	35.9
4 危険性・有害性を示すデータを見て	553	31.8
5 家族や知人などから話を聞いて	147	8.4
6 なんとなく	77	4.4
7 国や研究機関などからの勧告を見て	71	4.1
8 講習会・セミナー等に参加して	52	3.0
9 身のまわりで被害を受けた人がいる	32	1.8
10 学校の授業を受けて	18	1.0
11 自分自身が被害を受けたことがある	8	0.5
12 その他	20	1.1

食品添加物

	n	%
全体	1583	100.0
1 事件・事故のニュース・報道を見て	1043	65.9
2 危険性・有害性に関する見解・論調に接して	617	39.0
3 危険性・有害性を示すデータを見て	449	28.4
4 テレビなどで衝撃的な映像を見て	360	22.7
5 なんとなく	295	18.6
6 家族や知人などから話を聞いて	183	11.6
7 講習会・セミナー等に参加して	72	4.5
8 国や研究機関などからの勧告を見て	54	3.4
9 学校の授業を受けて	39	2.5
10 身のまわりで被害を受けた人がいる	38	2.4
11 自分自身が被害を受けたことがある	21	1.3
12 その他	16	1.0

遺伝子組換え食品

	n	%
全体	1246	100.0
1 事件・事故のニュース・報道を見て	560	44.9
2 危険性・有害性に関する見解・論調に接して	436	35.0
3 なんとなく	392	31.5
4 危険性・有害性を示すデータを見て	248	19.9
5 テレビなどで衝撃的な映像を見て	172	13.8
6 家族や知人などから話を聞いて	89	7.1
7 国や研究機関などからの勧告を見て	36	2.9
8 講習会・セミナー等に参加して	29	2.3
9 学校の授業を受けて	5	0.4
10 自分自身が被害を受けたことがある	4	0.3
11 身のまわりで被害を受けた人がいる	3	0.2
12 その他	21	1.7

BSE

	n	%
全体	1417	100.0
1 事件・事故のニュース・報道を見て	1172	82.7
2 テレビなどで衝撃的な映像を見て	605	42.7
3 危険性・有害性に関する見解・論調に接して	507	35.8
4 危険性・有害性を示すデータを見て	334	23.6
5 なんとなく	112	7.9
6 家族や知人などから話を聞いて	65	4.6
7 国や研究機関などからの勧告を見て	41	2.9
8 身のまわりで被害を受けた人がいる	15	1.1
9 講習会・セミナー等に参加して	14	1.0
10 自分自身が被害を受けたことがある	4	0.3
11 学校の授業を受けて	4	0.3
12 その他	5	0.4

## 2) 不安を感じるきっかけとなった情報源

- 各ハザードについて不安を感じている人に、不安を感じるきっかけとなった情報源についてたずねたところ、残留農薬、食品添加物、遺伝子組換え食品、BSE とともに、「ニュース・報道番組」が最も多く、中でも、残留農薬、BSE については、8 割以上（それぞれ 87.4%、81.8%）が不安を感じた情報源としてあげている。
- 次に、「新聞」「ワイドショー・情報番組」が 2 位～3 位にあげられ、「ドキュメンタリー番組」「インターネット上のニュースサイト」「雑誌」と続く。
- 遺伝子組換え食品については、「特になし」という意見が 2 割以上（23.9%）と多い。

Q7,Q12,Q17,Q22. ○○について、不安を感じたのは、どのような情報源からでしょうか。  
 （複数回答）（ベース：各ハザードについて不安と感じている人）

残留農薬

全体		n	%
1	ニュース・報道番組	1520	87.4
2	新聞	891	51.2
3	ワイドショー・情報番組	805	46.3
4	ドキュメンタリー番組	453	26.0
5	インターネット上のニュースサイト	444	25.5
6	雑誌	176	10.1
7	生協などの協同組合	134	7.7
8	生産者・食品メーカー	132	7.6
9	家族・知人	132	7.6
10	書籍	123	7.1
11	ラジオ	97	5.6
12	スーパー・小売店	67	3.9
13	行政（国、地方自治体等）	63	3.6
14	NPO・消費者団体	50	2.9
15	インターネット上のコミュニティサイト	44	2.5
16	大学・研究機関・研究者	44	2.5
17	個人のブログ	27	1.6
18	病院	26	1.5
19	学校（幼稚園、小・中学校、高校）	6	0.3
20	その他	8	0.5
21	特になし	96	5.5

食品添加物

全体		n	%
1	ニュース・報道番組	1021	64.5
2	新聞	605	38.2
3	ワイドショー・情報番組	602	38.0
4	ドキュメンタリー番組	356	22.5
5	インターネット上のニュースサイト	233	14.7
6	雑誌	193	12.2
7	書籍	165	10.4
8	家族・知人	160	10.1
9	生協などの協同組合	119	7.5
10	生産者・食品メーカー	74	4.7
11	ラジオ	68	4.3
12	NPO・消費者団体	50	3.2
13	大学・研究機関・研究者	43	2.7
14	行政（国、地方自治体等）	33	2.1
15	スーパー・小売店	32	2.0
16	インターネット上のコミュニティサイト	31	2.0
17	学校（幼稚園、小・中学校、高校）	29	1.8
18	病院	24	1.5
19	個人のブログ	17	1.1
20	その他	13	0.8
21	特になし	264	16.7

遺伝子組換え食品

全体		n	%
1	ニュース・報道番組	699	56.1
2	新聞	409	32.8
3	ワイドショー・情報番組	398	31.9
4	ドキュメンタリー番組	268	21.5
5	インターネット上のニュースサイト	130	10.4
6	雑誌	122	9.8
7	生協などの協同組合	72	5.8
8	家族・知人	72	5.8
9	書籍	60	4.8
10	ラジオ	43	3.5
11	生産者・食品メーカー	32	2.6
12	大学・研究機関・研究者	30	2.4
13	NPO・消費者団体	29	2.3
14	インターネット上のコミュニティサイト	27	2.2
15	スーパー・小売店	25	2.0
16	行政（国、地方自治体等）	20	1.6
17	個人のブログ	10	0.8
18	病院	7	0.6
19	学校（幼稚園、小・中学校、高校）	2	0.2
20	その他	12	1.0
21	特になし	298	23.9

BSE

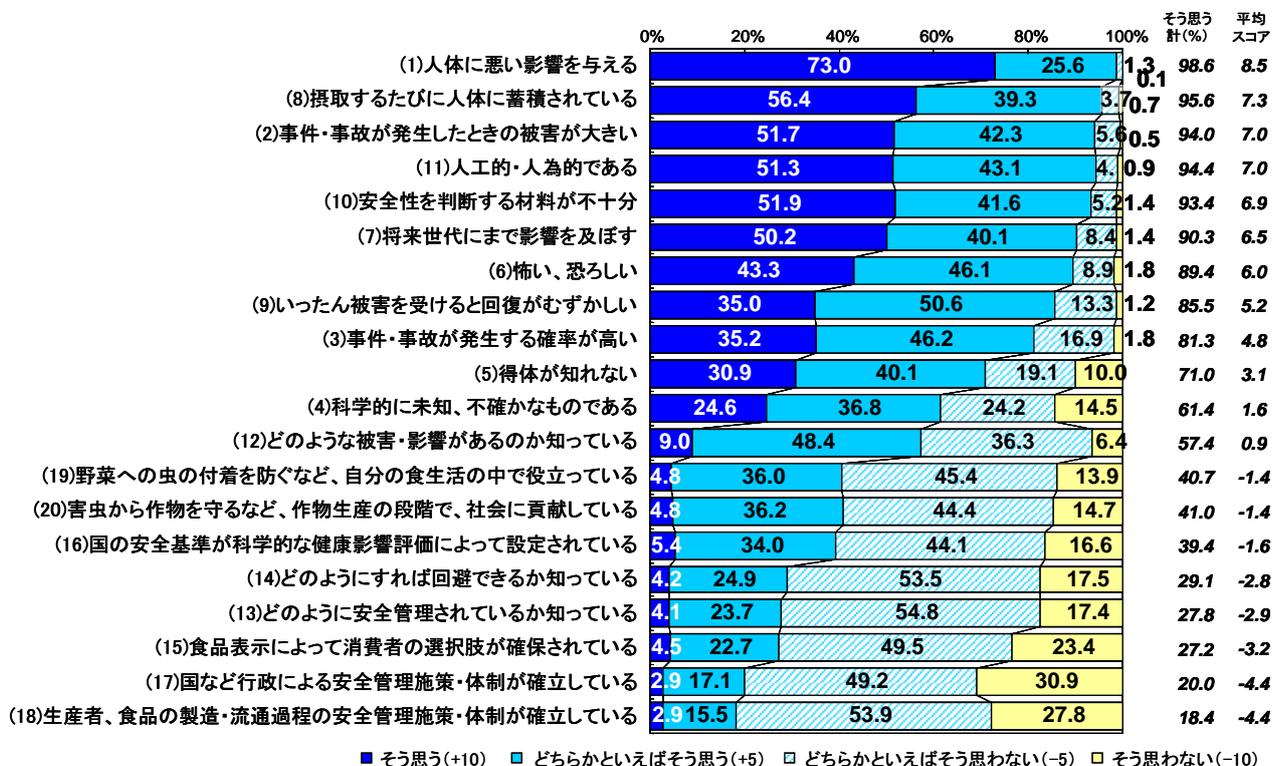
全体		n	%
1	ニュース・報道番組	1159	81.8
2	ワイドショー・情報番組	655	46.2
3	新聞	600	42.3
4	ドキュメンタリー番組	444	31.3
5	インターネット上のニュースサイト	214	15.1
6	雑誌	138	9.7
7	家族・知人	69	4.9
8	ラジオ	68	4.8
9	書籍	52	3.7
10	生協などの協同組合	47	3.3
11	行政（国、地方自治体等）	45	3.2
12	スーパー・小売店	33	2.3
13	生産者・食品メーカー	31	2.2
14	NPO・消費者団体	26	1.8
15	インターネット上のコミュニティサイト	23	1.6
16	大学・研究機関・研究者	22	1.6
17	病院	15	1.1
18	個人のブログ	11	0.8
19	学校（幼稚園、小・中学校、高校）	2	0.1
20	その他	2	0.1
21	特になし	145	10.2

(6) 各ハザードに対するイメージなど

1) 残留農薬に対するイメージなど

- 下記グラフは、残留農薬に対するイメージについて、平均スコアの高い順に並べ替えたものである。
- 残留農薬について、「人体に悪い影響を与える」(98.6%)、「摂取するたびに人体に蓄積されている」(95.6%)、「事件・事故が発生したときの被害が大きい」(94.0%)、「人工的・人為的」(94.4%)、「安全性を判断する材料が不十分」(93.4%)、「将来世代にまで影響を及ぼす」(90.3%)といったイメージが強い(括弧内は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の計)。
- 「野菜への虫の付着を防ぐなど、自分の食生活の中で役に立っている」「害虫から作物を守るなど、作物生産の段階で、社会に貢献している」というメリットについては4割が肯定的、6割が否定的。
- 「国など行政による安全管理施策・体制が確立している」「生産者、食品の製造・流通過程の安全管理施策・体制が確立している」については、8割以上(それぞれ80.0%、81.6%)が否定的。

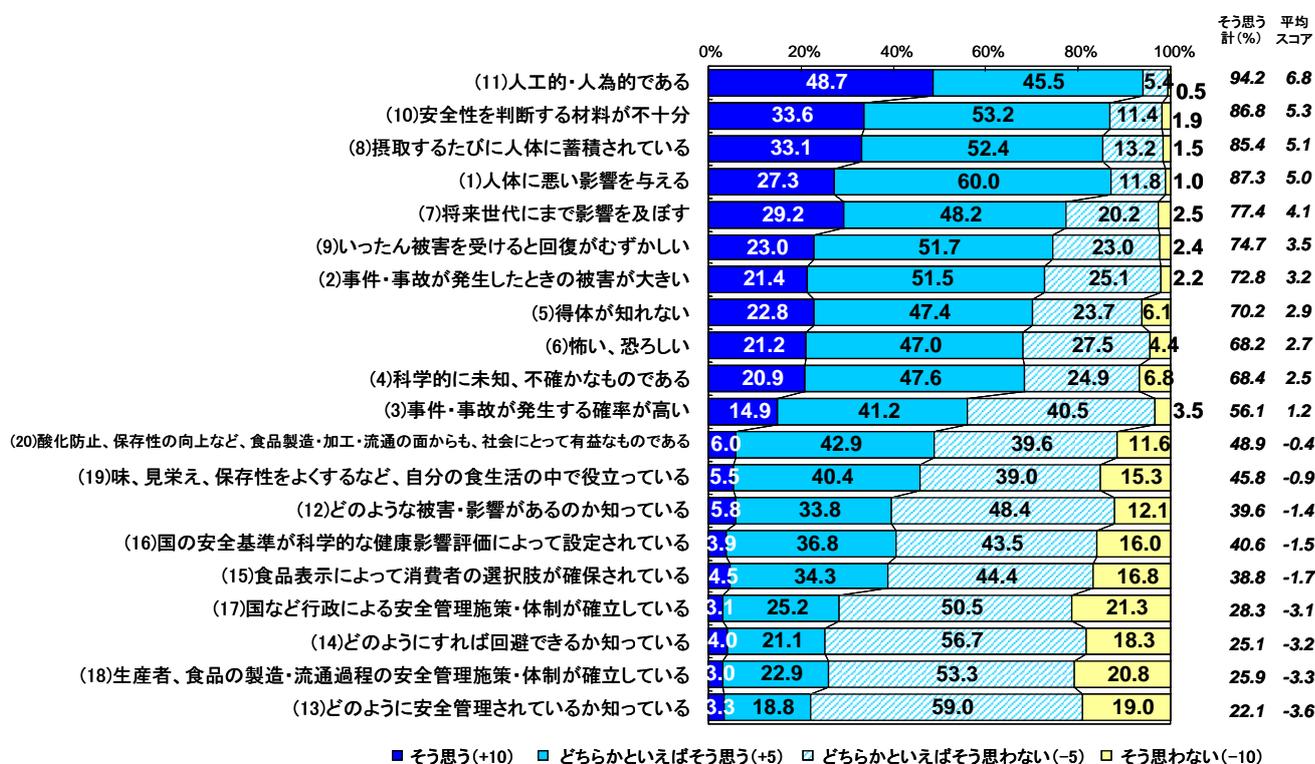
Q9.残留農薬についてあなたはどのようにお考えですか。(N=2000)



## 2) 食品添加物に対するイメージなど

- 下記グラフは、食品添加物に対するイメージについて、平均スコアの高い順に並べ替えたものである。
- 食品添加物について、「人工的・人為的」(94.2%)、「安全性を判断する材料が不十分」(86.8%)、「摂取するたびに人体に蓄積されている」(85.4%)、「人体に悪い影響を与える」(87.3%)といったイメージが強い(括弧内は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の計)。
- 「酸化防止、保存性の向上など、食品製造・加工・流通の面からも、社会にとって有益なものである」という社会的メリットについては、肯定派(48.9%)、否定派(51.1%)が半数ずつ、「味、見栄え、保存性をよくするなど、自分の食生活の中で役立っている」という自分にとってのメリットについては、否定派がやや多い(54.2%)。
- 「どのように安全管理されているか知っている」「生産者、食品の製造・流通過程の安全管理施策・体制が確立している」「どのようにすれば回避できるか知っている」「国など行政による安全管理施策・体制が確立している」については、7割以上が否定的。

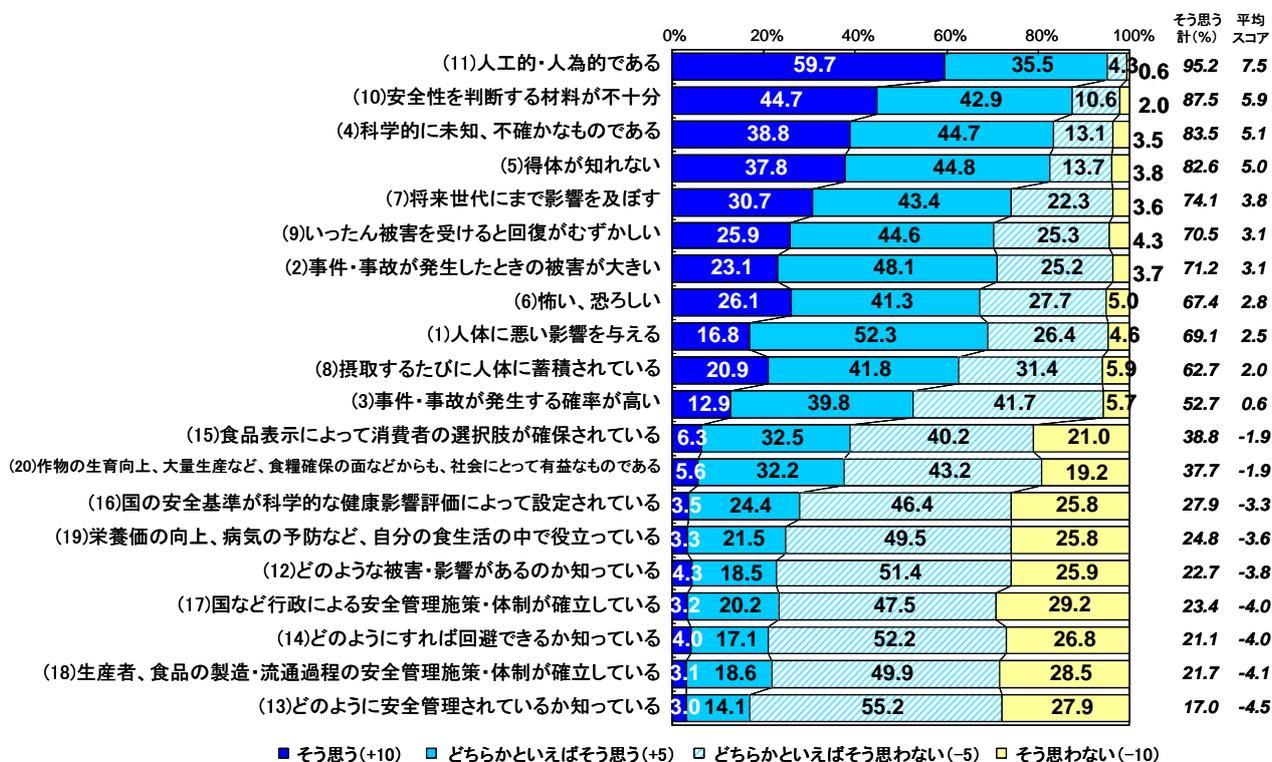
Q14.食品添加物についてあなたはどのようにお考えですか。(N=2000)



### 3) 遺伝子組換え食品に対するイメージなど

- 下記グラフは、遺伝子組換え食品に対するイメージについて、平均スコアの高い順に並べ替えたものである。
- 遺伝子組換え食品について、「人工的・人為的」(95.2%)、「安全性を判断する材料が不十分」(87.5%)、「科学的に未知、不確かなもの」(83.5%)、「得体が知れない」(82.6%)といったイメージが強い(括弧内は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の計)。
- 「作物の生育向上、大量生産など、食糧確保の面からも、社会にとって有益なものである」という社会的メリットについては、37.7%が肯定的、62.3%が否定的であり、「栄養価の向上、病気の予防など、自分の食生活の中で役立っている」という自分にとってのメリットについては、否定的な意見が75.2%を占める。
- 「どのように安全管理されているか知っている」「生産者、食品の製造・流通過程の安全管理施策・体制が確立している」「どのようにすれば回避できるか知っている」「国など行政による安全管理施策・体制が確立している」「どのような被害・影響があるのか知っている」「国の安全基準が科学的な健康影響評価によって確立している」については、7割以上が否定的。

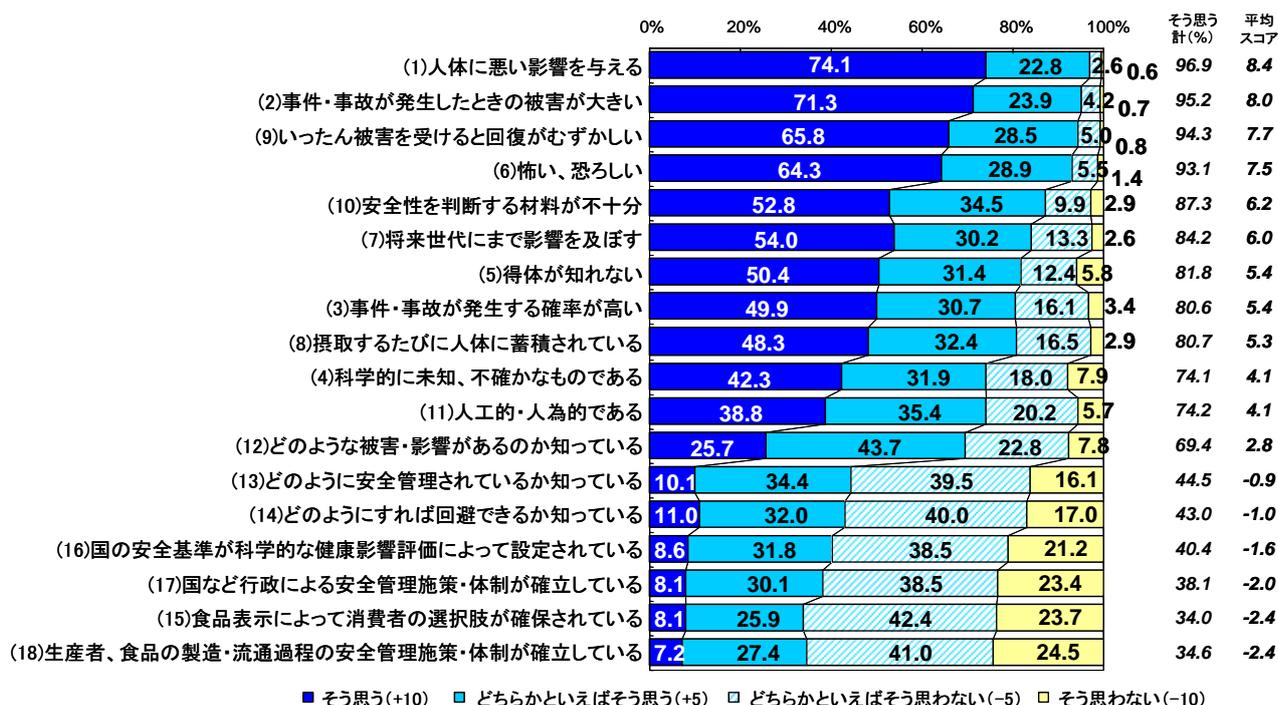
Q19.遺伝子組換え食品についてあなたはどのようにお考えですか。(N=2000)



#### 4) BSE に対するイメージなど

- 下記グラフは、BSE に対するイメージについて、平均スコアの高い順に並べ替えたものである。
- BSE について、「人体に悪い影響を与える」(96.9%)、「事件・事故が発生したときの被害が大きい」(95.2%)、「いったん被害を受けると回復がむずかしい」(94.3%)、「怖い、恐ろしい」(93.1%)といったイメージが強い(括弧内は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の計)。
- 「生産者、食品の製造・流通過程の安全管理施策・体制が確立している」「食品表示によって消費者の選択肢が確保されている」「国など行政による安全管理施策・体制が確立している」については、6割以上が否定的。

Q24. BSE (狂牛病) や BSE (狂牛病) のもたらす影響などについて  
あなたはどのようにお考えですか。(N=2000)



## 5) 各ハザードに対するイメージの比較

- 下記表は、各イメージのハザード間の比較をするため、各ハザードのイメージの平均スコアをまとめたものである。
- 残留農薬、BSE は、食品添加物、遺伝子組換え食品に比べ、「人体に悪い影響を与える」「事件・事故が発生したときの被害が大きい」「事件・事故が発生する確率が高い」「怖い、恐ろしい」「将来世代にまで影響を及ぼす」といったイメージが強い。
- 「科学的に未知、不確か」「得体が知れない」といったイメージは、遺伝子組換え食品、BSE で強い。
- また、残留農薬は「摂取するたびに人体に蓄積」、BSE は「いったん被害を受けると回復がむずかしい」といったイメージが強い。
- ハザードの被害・影響、安全管理方法、回避策を知っているという人は、遺伝子組換え食品が最も少なく、BSE が最も多い。
- 「食品表示によって消費者の選択肢が確保されている」、「国の安全基準が科学的な健康影響評価によって設定されている」、「国など行政による安全管理施策・体制が確立している」「生産者、食品の製造・流通過程の安全管理施策・体制が確立している」については、どのハザードもスコアがマイナスの値であり、評価が低い。
- 遺伝子組換え食品は、残留農薬、食品添加物に比べ、個人的なメリット（「栄養価の向上、病気の予防など、自分の食生活の中で役立っている」）が感じられていない。

各ハザードに対するイメージの比較（平均スコア）

	残留農薬	食品添加物	遺伝子組換え食品	BSE
(1)人体に悪い影響を与える	8.5	5.0	2.5	8.4
(2)事件・事故が発生したときの被害が大きい	7.0	3.2	3.1	8.0
(3)事件・事故が発生する確率が高い	4.8	1.2	0.6	5.4
(4)科学的に未知、不確かなものである	1.6	2.5	5.1	4.1
(5)得体が知れない	3.1	2.9	5.0	5.4
(6)怖い、恐ろしい	6.0	2.7	2.8	7.5
(7)将来世代にまで影響を及ぼす	6.5	4.1	3.8	6.0
(8)摂取するたびに人体に蓄積されている	7.3	5.1	2.0	5.3
(9)いったん被害を受けると回復がむずかしい	5.2	3.5	3.1	7.7
(10)安全性を判断する材料が不十分	6.9	5.3	5.9	6.2
(11)人工的・人為的である	7.0	6.8	7.5	4.1
(12)どのような被害・影響があるのか知っている	0.9	-1.4	-3.8	2.8
(13)どのように安全管理されているか知っている	-2.9	-3.6	-4.5	-0.9
(14)どのようにすれば回避できるか知っている	-2.8	-3.2	-4.0	-1.0
(15)食品表示によって消費者の選択肢が確保されている	-3.2	-1.7	-1.9	-2.4
(16)国の安全基準が科学的な健康影響評価によって設定されている	-1.6	-1.5	-3.3	-1.6
(17)国など行政による安全管理施策・体制が確立している	-4.4	-3.1	-4.0	-2.0
(18)生産者、食品の製造・流通過程の安全管理施策・体制が確立している	-4.4	-3.3	-4.1	-2.4
(19)自分の食生活の中で役立っている	-1.4	-0.9	-3.6	
(20)社会にとって有益である	-1.4	-0.4	-1.9	

6) 各ハザードに対するイメージの因子分析

①残留農薬

- 残留農薬に対する認知の構造を把握するため、因子分析を行った。
- Q9 (残留農薬に対するイメージなど) に因子分析を施したところ、下表のような因子が出現した。

	因子軸名	因子に影響を与えている項目
因子1	人体や将来世代に対する影響	Q9_8.摂取するたびに人体に蓄積されている Q9_7.将来世代にまで影響を及ぼす Q9_9.いったん被害を受けると回復がむずかしい Q9_6.怖い、恐ろしい Q9_1.人体に悪い影響を与える
因子2	安全管理体制・食品表示	Q9_17.国など行政による安全管理施策・体制が確立している Q9_18.生産者、食品の製造・流通過程の安全管理施策・体制が確立している Q9_16.国の安全基準が科学的な健康影響評価によって設定されている Q9_15.食品表示によって消費者の選択肢が確保されている
因子3	安全管理、回避方法、被害・影響に対する理解	Q9_13.どのように安全管理されているか知っている Q9_14.どのようにすれば回避できるか知っている Q9_12.どのような被害・影響があるのか知っている
因子4	メリット認識	Q9_19.野菜への虫の付着を防ぐなど、自分の食生活の中で役立っている Q9_20.害虫から作物を守るなど、作物生産の段階で、社会に貢献している
因子5	得体が知れないなどの未知性	Q9_5.得体が知れない Q9_4.科学的に未知、不確かなものである
因子6	事件・事故	Q9_2.事件・事故が発生したときの被害が大きい Q9_3.事件・事故が発生する確率が高い

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7
Q9_8.摂取するたびに人体に蓄積されている	0.7815	-0.0374	0.0372	-0.0452	0.0504	0.1187	-0.0327
Q9_7.将来世代にまで影響を及ぼす	0.7031	-0.0161	0.0694	-0.0669	0.1348	0.1261	-0.0748
Q9_9.いったん被害を受けると回復がむずかしい	0.6805	0.0042	0.0779	-0.0150	0.1760	0.0484	0.0425
Q9_6.怖い、恐ろしい	0.5749	-0.0061	0.0416	-0.0848	0.2122	0.3138	-0.1675
Q9_1.人体に悪い影響を与える	0.5065	-0.0400	0.0413	-0.0403	-0.0390	0.4372	-0.0400
Q9_17.国など行政による安全管理施策・体制が確立している	-0.0627	0.9109	0.1055	0.1401	0.0516	-0.0322	0.1061
Q9_18.生産者、食品の製造・流通過程の安全管理施策・体制が確立している	-0.0788	0.7772	0.1589	0.2095	0.0477	-0.0193	0.0045
Q9_16.国の安全基準が科学的な健康影響評価によって設定されている	-0.0131	0.6432	0.1930	0.1699	-0.0490	0.0315	-0.0121
Q9_15.食品表示によって消費者の選択肢が確保されている	-0.0101	0.5915	0.3255	0.0866	0.1121	0.0286	-0.1895
Q9_13.どのように安全管理されているか知っている	0.0300	0.2651	0.8085	0.0677	0.1130	0.0000	0.0301
Q9_14.どのようにすれば回避できるか知っている	0.0578	0.2796	0.6732	0.0610	0.0530	0.0172	-0.0936
Q9_12.どのような被害・影響があるのか知っている	0.1862	0.0964	0.6003	0.0287	-0.0117	0.1680	0.0824
Q9_19.野菜への虫の付着を防ぐなど、自分の食生活の中で役立っている	-0.0757	0.2902	0.0824	0.8083	0.0094	-0.0296	-0.0626
Q9_20.害虫から作物を守るなど、作物生産の段階で、社会に貢献している	-0.0783	0.2481	0.0685	0.8027	-0.0269	-0.0817	0.0591
Q9_5.得体が知れない	0.2775	0.0569	0.0427	-0.0386	0.7964	0.1311	-0.1337
Q9_4.科学的に未知、不確かなものである	0.1960	0.0629	0.0848	0.0185	0.6966	0.0396	0.1013
Q9_2.事件・事故が発生したときの被害が大きい	0.3482	0.0118	0.0854	-0.0384	0.0838	0.7204	0.0551
Q9_3.事件・事故が発生する確率が高い	0.4058	0.0331	0.1255	-0.0951	0.2049	0.5412	-0.0081
Q9_10.安全性を判断する材料が不十分	0.4394	-0.0966	0.0070	0.0012	0.2351	0.1168	0.1673
Q9_11.人工的・人為的である	0.3911	-0.0482	0.1142	-0.0102	0.0392	0.1863	0.1950

因子No	二乗和	寄与率 (%)	累積寄与率 (%)
1	2.96	14.82	14.82
2	2.52	12.62	27.44
3	1.72	8.60	36.04
4	1.43	7.17	43.21
5	1.36	6.80	50.01
6	1.24	6.20	56.21
7	0.21	1.03	57.24

## ②食品添加物

- 食品添加物に対する認知の構造を把握するため、因子分析を行った。
- Q14（食品添加物に対するイメージなど）に因子分析を施したところ、下表のような因子が出現した。

	因子軸名	因子に影響を与えている項目
因子1	人体や将来世代に対する影響	Q14_8.摂取するたびに人体に蓄積されている Q14_7.将来世代にまで影響を及ぼす Q14_1.人体に悪い影響を与える Q14_9.いったん被害を受けると回復がむずかしい Q14_6.怖い、恐ろしい Q14_10.安全性を判断する材料が不十分 Q14_11.人工的・人為的である
因子2	安全管理体制・食品表示	Q14_17.国など行政による安全管理施策・体制が確立している Q14_18.生産者、食品の製造・流通過程の安全管理施策・体制が確立している Q14_16.国の安全基準が科学的な健康影響評価によって設定されている Q14_15.食品表示によって消費者の選択肢が確保されている
因子3	安全管理、回避方法、被害・影響に対する理解	Q14_13.どのように安全管理されているか知っている Q14_14.どのようにすれば回避できるか知っている Q14_12.どのような被害・影響があるのか知っている
因子4	得体が知れないなどの未知性	Q14_5.得体が知れない Q14_4.科学的に未知、不確かなものである
因子5	メリット認識	Q14_19.味、見栄え、保存性をよくするなど、自分の食生活の中で役立っている Q14_20.酸化防止、保存性の向上など、食品製造・加工・流通の面からも、社会にとって有益なものである
因子6	事件・事故	Q14_3.事件・事故が発生する確率が高い Q14_2.事件・事故が発生したときの被害が大きい

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7
Q14_8.摂取するたびに人体に蓄積されている	0.8248	-0.0449	0.0625	0.1175	-0.0696	-0.0576	-0.0341
Q14_7.将来世代にまで影響を及ぼす	0.7786	-0.0660	0.1006	0.1921	-0.1176	-0.1716	-0.1070
Q14_1.人体に悪い影響を与える	0.6554	-0.0076	0.1009	0.1300	-0.1261	-0.2050	-0.1182
Q14_9.いったん被害を受けると回復がむずかしい	0.6517	-0.0722	0.0745	0.2327	-0.0832	-0.2683	0.0656
Q14_6.怖い、恐ろしい	0.6115	-0.0223	0.1349	0.3701	-0.1446	-0.2214	-0.2440
Q14_10.安全性を判断する材料が不十分	0.5610	-0.1277	-0.0047	0.3526	0.0066	-0.0399	0.2714
Q14_11.人工的・人為的である	0.5020	-0.0627	0.0588	0.0628	0.0823	0.0331	0.1890
Q14_17.国など行政による安全管理施策・体制が確立している	-0.1077	0.8753	0.1536	0.0148	0.1709	-0.0160	0.0061
Q14_18.生産者、食品の製造・流通過程の安全管理施策・体制が確立している	-0.0841	0.8307	0.2007	0.0149	0.1935	-0.0120	-0.0713
Q14_16.国の安全基準が科学的な健康影響評価によって設定されている	-0.0539	0.7878	0.1594	-0.0535	0.1802	0.0051	0.0506
Q14_15.食品表示によって消費者の選択肢が確保されている	-0.0216	0.6410	0.3084	-0.0358	0.1358	0.0602	-0.0275
Q14_13.どのように安全管理されているか知っている	0.0307	0.3090	0.8010	0.0755	0.0815	-0.0512	0.0059
Q14_14.どのようにすれば回避できるか知っている	0.0920	0.3109	0.7492	0.0089	0.0520	-0.0484	-0.0127
Q14_12.どのような被害・影響があるのか知っている	0.2530	0.1418	0.6926	0.0339	-0.0038	-0.1393	-0.0002
Q14_5.得体が知れない	0.3842	-0.0090	0.0225	0.8032	-0.0609	-0.0762	-0.0754
Q14_4.科学的に未知、不確かなものである	0.3036	-0.0069	0.0598	0.7108	-0.0014	-0.1229	0.0712
Q14_19.味、見栄え、保存性をよくするなど、自分の食生活の中で役立っている	-0.0942	0.3249	0.0491	-0.0446	0.7593	0.0638	-0.0067
Q14_20.酸化防止、保存性の向上など、食品製造・加工・流通の面からも、社会にとって有益なものである	-0.1097	0.3151	0.0731	-0.0239	0.7508	0.0617	0.0316
Q14_3.事件・事故が発生する確率が高い	0.4793	-0.0269	0.2205	0.2358	-0.1222	-0.5765	-0.1020
Q14_2.事件・事故が発生したときの被害が大きい	0.5021	-0.0078	0.1524	0.1344	-0.0836	-0.6785	0.0558

因子No.	二乗和	寄与率 (%)	累積寄与率 (%)
1	3.92	19.60	19.60
2	2.94	14.69	34.29
3	2.00	10.01	44.30
4	1.63	8.13	52.42
5	1.36	6.81	59.23
6	1.05	5.24	64.48
7	0.23	1.17	65.64

### ③遺伝子組換え食品

- 遺伝子組換え食品に対する認知の構造を把握するため、因子分析を行った。
- Q19（遺伝子組換え食品に対するイメージなど）に因子分析を施したところ、下表のような因子が出現した。

	因子軸名	因子に影響を与えている項目
因子1	人体や将来世代に対する影響	Q19_1.人体に悪い影響を与える Q19_8.摂取するたびに人体に蓄積されている Q19_7.将来世代にまで影響を及ぼす Q19_3.事件・事故が発生する確率が高い Q19_9.いったん被害を受けると回復がむずかしい Q19_6.怖い、恐ろしい Q19_2.事件・事故が発生したときの被害が大きい
因子2	安全管理体制・食品表示	Q19_17.国など行政による安全管理施策・体制が確立している Q19_16.国の安全基準が科学的な健康影響評価によって設定されている Q19_18.生産者、食品の製造・流通過程の安全管理施策・体制が確立している Q19_15.食品表示によって消費者の選択肢が確保されている
因子3	得体が知れないなどの未知性	Q19_10.安全性を判断する材料が不十分 Q19_5.得体が知れない Q19_4.科学的に未知、不確かなものである
因子4	安全管理、回避方法、被害・影響に対する理解	Q19_13.どのように安全管理されているか知っている Q19_12.どのような被害・影響があるのか知っている Q19_14.どのようにすれば回避できるか知っている
因子5	メリット認識	Q19_20.作物の生育向上、大量生産など、食糧確保の面などからも、社会にとって有益なものである Q19_19.栄養価の向上、病気の予防など、自分の食生活の中で役立っている

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
Q19_1.人体に悪い影響を与える	0.8011	0.0167	-0.1727	0.0993	-0.1598
Q19_8.摂取するたびに人体に蓄積されている	0.7991	-0.0045	-0.1726	0.0837	-0.0753
Q19_7.将来世代にまで影響を及ぼす	0.7934	-0.0239	-0.3442	0.0157	-0.0590
Q19_3.事件・事故が発生する確率が高い	0.7910	-0.0266	-0.1244	0.1881	-0.0695
Q19_9.いったん被害を受けると回復がむずかしい	0.7563	-0.0680	-0.3210	0.0433	0.0162
Q19_6.怖い、恐ろしい	0.7458	-0.0114	-0.3421	0.0630	-0.1745
Q19_2.事件・事故が発生したときの被害が大きい	0.7355	-0.0587	-0.2447	0.0705	0.0428
Q19_17.国など行政による安全管理施策・体制が確立している	-0.0088	0.9183	0.1035	0.1633	0.1325
Q19_16.国の安全基準が科学的な健康影響評価によって設定されている	0.0073	0.8589	0.0929	0.1727	0.1411
Q19_18.生産者、食品の製造・流通過程の安全管理施策・体制が確立している	-0.0286	0.8417	0.0883	0.2325	0.1547
Q19_15.食品表示によって消費者の選択肢が確保されている	-0.1037	0.6437	-0.0104	0.2465	0.1038
Q19_10.安全性を判断する材料が不十分	0.4198	-0.1170	-0.6042	-0.0623	0.0214
Q19_5.得体が知れない	0.4340	-0.0402	-0.6580	-0.0327	-0.1367
Q19_4.科学的に未知、不確かなものである	0.3023	-0.0840	-0.7282	-0.0325	0.0131
Q19_13.どのように安全管理されているか知っている	0.0959	0.3642	0.0808	0.8089	0.1665
Q19_12.どのような被害・影響があるのか知っている	0.2992	0.2429	0.0627	0.7149	0.0664
Q19_14.どのようにすれば回避できるか知っている	0.0875	0.4253	0.0237	0.6700	0.0839
Q19_20.作物の生育向上、大量生産など、食糧確保の面などからも、社会にとって有益なものである	-0.2123	0.3215	-0.0041	0.1191	0.7687
Q19_19.栄養価の向上、病気の予防など、自分の食生活の中で役立っている	-0.0978	0.4348	0.0962	0.2443	0.5806
Q19_11.人工的・人為的である	0.2035	-0.0411	-0.4835	-0.0452	-0.0137

因子No.	二乗和	寄与率 (%)	累積寄与率 (%)
1	4.87	24.37	24.37
2	3.40	17.01	41.39
3	2.08	10.42	51.80
4	1.93	9.65	61.46
5	1.13	5.65	67.11

#### ④ B S E

- B S Eに対する認知の構造を把握するため、因子分析を行った。
- Q24（BSEに対するイメージなど）に因子分析を施したところ、下表のような因子が出現した。

	因子軸名	因子に影響を与えている項目
因子1	安全管理体制・食品表示	Q24_17.国など行政による安全管理施策・体制が確立している Q24_18.生産者、食品の製造・流通過程の安全管理体制が確立している Q24_16.国の安全基準が科学的な健康影響評価によって設定されている Q24_15.食品表示によって消費者の選択肢が確保されている
因子2	蓄積性・将来世代	Q24_8.摂取するたびに人体に蓄積されている Q24_7.将来世代にまで影響を及ぼす Q24_3.事件・事故が発生する確率が高い
因子3	人体への健康被害	Q24_1.人体に悪い影響を与える Q24_2.事件・事故が発生したときの被害が大きい Q24_9.いったん被害を受けると回復がむずかしい
因子4	得体が知れないなどの未知性	Q24_4.科学的に未知、不確かなものである Q24_5.得体が知れない
因子5	安全管理、回避方法、被害・影響に対する理解	Q24_14.どのようにすれば回避できるか知っている Q24_13.どのように安全管理されているか知っている Q24_12.どのような被害・影響があるのか知っている

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
Q24_17.国など行政による安全管理施策・体制が確立している	0.9329	-0.0405	-0.0037	-0.0402	0.1371
Q24_18.生産者、食品の製造・流通過程の安全管理体制が確立している	0.8722	-0.0572	-0.0149	-0.0361	0.1795
Q24_16.国の安全基準が科学的な健康影響評価によって設定されている	0.8722	-0.0300	0.0082	-0.0459	0.2048
Q24_15.食品表示によって消費者の選択肢が確保されている	0.7027	0.0137	-0.0733	-0.0048	0.3553
Q24_8.摂取するたびに人体に蓄積されている	0.0145	0.7385	0.2516	0.1520	0.0301
Q24_7.将来世代にまで影響を及ぼす	-0.0152	0.7376	0.3077	0.2315	-0.0409
Q24_3.事件・事故が発生する確率が高い	-0.0006	0.5234	0.4150	0.1854	0.0251
Q24_1.人体に悪い影響を与える	-0.0160	0.2461	0.8399	0.0421	0.0916
Q24_2.事件・事故が発生したときの被害が大きい	-0.0150	0.2940	0.8085	0.0855	0.0684
Q24_9.いったん被害を受けると回復がむずかしい	-0.0352	0.4294	0.5557	0.0948	0.1477
Q24_4.科学的に未知、不確かなものである	-0.0179	0.1883	0.0280	0.8183	-0.0332
Q24_5.得体が知れない	0.0104	0.2787	0.1087	0.7969	-0.0794
Q24_14.どのようにすれば回避できるか知っている	0.3582	0.0142	0.0081	-0.0689	0.7259
Q24_13.どのように安全管理されているか知っている	0.4075	-0.0161	0.0207	0.0042	0.7082
Q24_12.どのような被害・影響があるのか知っている	0.1598	0.1726	0.2661	-0.0631	0.6007
Q24_6.怖い、恐ろしい	-0.0450	0.4845	0.4802	0.3047	0.0057
Q24_10.安全性を判断する材料が不十分	-0.1452	0.3285	0.1876	0.4262	-0.0179
Q24_11.人工的・人為的である	-0.0527	0.4397	0.1089	0.1872	0.1282

因子 No.	二乗和	寄与率 (%)	累積寄与率 (%)
1	3.23	17.97	17.97
2	2.38	13.22	31.19
3	2.37	13.14	44.33
4	1.76	9.76	54.09
5	1.67	9.28	63.37

※その他、単相関係数（リスク認知度（Q5）とイメージ項目（Q9,14,19,24））、重回帰分析、数量化Ⅰ類、数量化Ⅱ類（目的変数＝リスク認知度（Q5）、説明変数＝イメージ項目（Q9,14,19,24））によって、リスク認知形成要因の構造のモデル化を試みたが、各ハザードのリスク認知を説明する要因は見出されなかった。

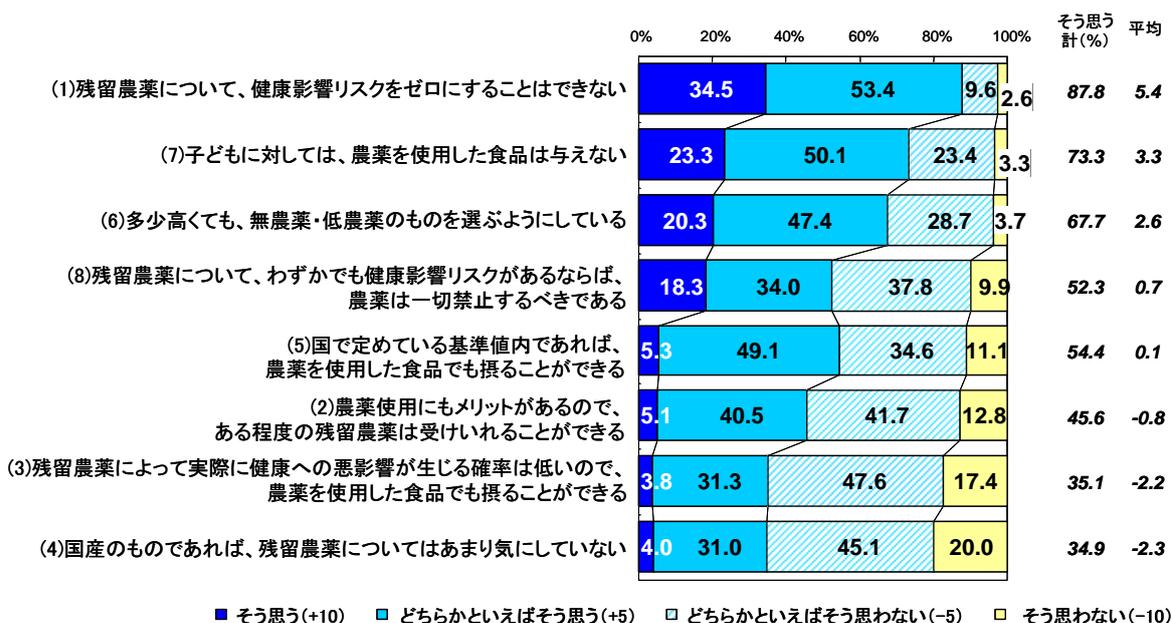
(7) 各ハザードに対する考え

1) 残留農薬に対する考え

- 「残留農薬について、健康影響リスクをゼロにすることはできない」については、およそ9割（87.8%）が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的である。
- 「子どもに対しては、農薬を使用した食品は与えない」「多少高くても、無農薬・低農薬のものを選ぶようにしている」については、3分の2以上が肯定的（それぞれ73.3%、67.7%）。
- 「国産のものであれば、残留農薬についてはあまり気にしていない」「残留農薬によって実際に健康への悪影響が生じる確率は低いので、農薬を使用した食品でも摂ることができる」については、3分の2が「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と否定的（それぞれ65.1%、64.9%）。

Q10.下記にあげる農薬に関する記述について、あなたはどのようにお考えですか。

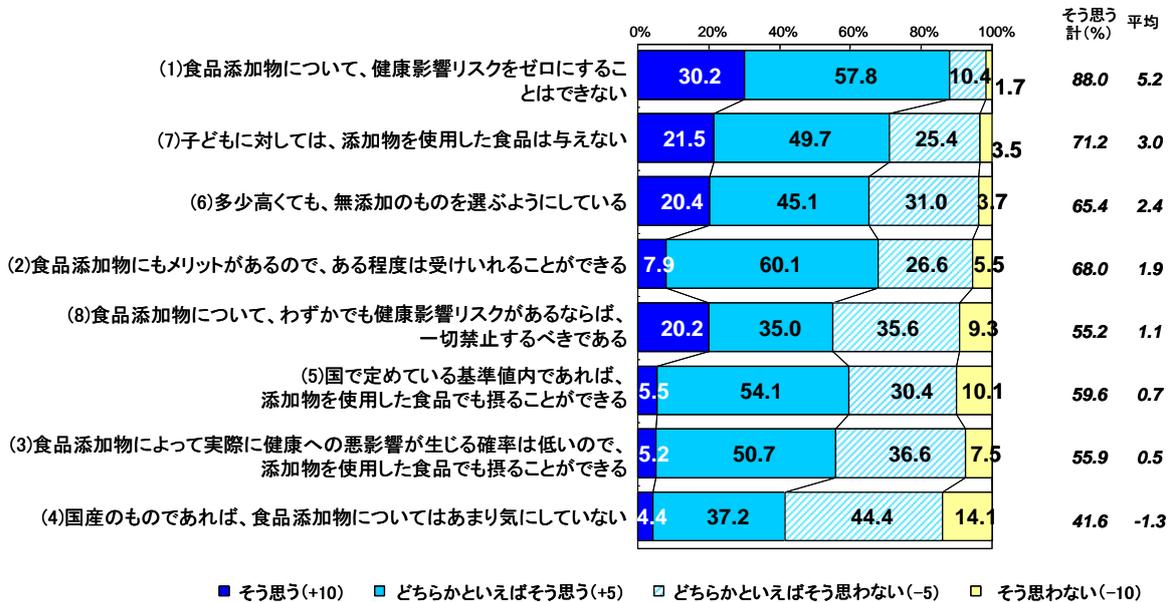
(N=2000)



## 2) 食品添加物に対する考え

- 「食品添加物について、健康影響リスクをゼロにすることはできない」については、およそ9割(88.0%)が肯定的(「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答)。
- 3分の2以上の方が、「子どもに対しては、添加物を使用した食品は与えない」(71.2%)、「多少高くても、無添加のものを選ぶようにしている」(65.4%)と考えている一方で、「食品添加物にもメリットがあるので、ある程度は受けいれることができる」(68.0%)としている。
- 「国産のものであれば、食品添加物についてはあまり気にしていない」については、6割(58.4%)が否定的(「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」)。

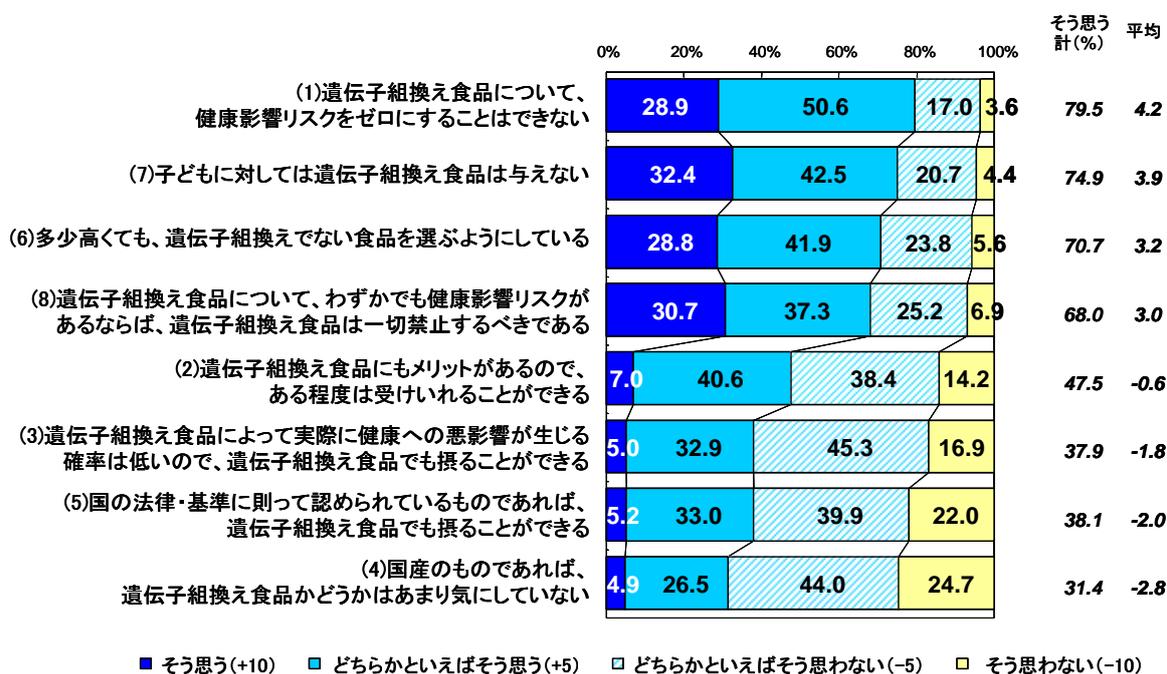
Q15.下記にあげる食品添加物に関する記述について、あなたはどのようにお考えですか。  
(N=2000)



### 3) 遺伝子組換え食品に対する考え

- 「遺伝子組換え食品について、健康影響リスクをゼロにすることはできない」については、8割(79.5%)が肯定的(「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答)。
- 「子どもに対しては、遺伝子組換え食品は与えない」「多少高くても、遺伝子組換えでない食品を選ぶようにしている」「遺伝子組換え食品について、わずかでも健康影響リスクがあるならば、遺伝子組換え食品は一切禁止するべきである」については、3分の2以上の人(それぞれ74.9%、70.7%、68.0%)が肯定的。
- 「国産のものであれば、遺伝子組換え食品かどうかはあまり気にしていない」「国の法律・基準に則って認められているものであれば、遺伝子組換え食品でも摂ることができる」「遺伝子組換え食品によって実際に健康への悪影響が生じる確率は低いので、遺伝子組換え食品でも摂ることができる」については、6割以上が否定的(それぞれ68.6%、61.9%、62.1%)。

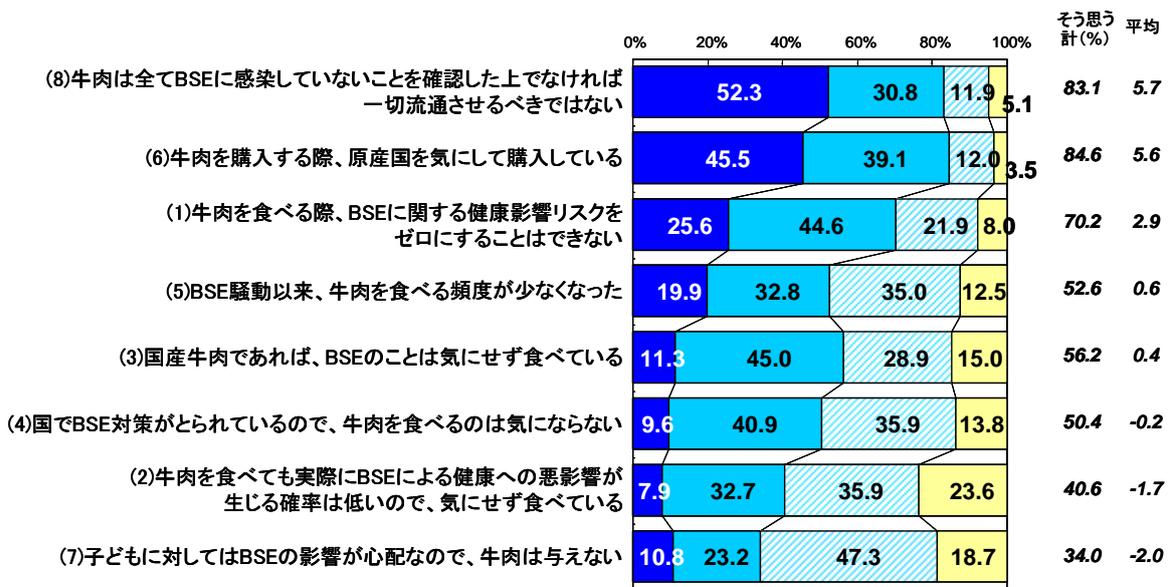
Q20.下記にあげる遺伝子組換え食品に関する記述について、あなたはどのようにお考えですか。(N=2000)



#### 4) BSEに対する考え

- 「牛肉は全て BSE に感染していないことを確認した上でなければ一切流通させるべきではない」「牛肉を購入する際、原産国を気にして購入している」については、8割以上（それぞれ 83.1%、84.6%）が肯定的（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」）。
- 「牛肉を食べる際、BSE に関する健康影響リスクをゼロにすることはできない」については、7割（70.2%）が肯定的。
- 「子どもに対しては BSE の影響が心配なので、牛肉は与えない」「牛肉を食べても実際に BSE による健康への悪影響が生じる確率は低いので、気にせず食べている」については6割以上（それぞれ 66.0%、59.4%）が否定的（「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」）。

Q25.下記にあげる BSE（狂牛病）や牛肉に関する記述について、あなたはどのようにお考えですか。（N=2000）



■ そう思う(+10) ■ どちらかといえばそう思う(+5) □ どちらかといえばそう思わない(-5) □ そう思わない(-10)

## 5) 各ハザードに対する考えの比較

- 下記表は、各ハザードに対する考えの平均スコアをまとめたものである。
- 「健康影響リスクをゼロにすることはできない」という考えをもつ人は、残留農薬 (5.4)、食品添加物 (5.2) で多い。
- 「メリットがあるのである程度は受け入れることができる」人は、食品添加物が多い (1.9)。
- 「実際に健康への悪影響が生じる可能性は低いので、摂ることができる」については、残留農薬 (-2.2)、遺伝子組換え食品 (-1.8)、BSE (-1.7) で、平均スコアがマイナスとなっており否定的意見のほうが多い。
- 遺伝子組換え食品は、「国で認められていれば摂ることができる」という考えについて、否定的意見のほうが多い (-2.0)。
- 「多少高くても、無農薬／無添加／非遺伝子組換え食品を選ぶ」については、肯定的意見のほうが多い (それぞれ 2.6、2.4、3.2)。
- 残留農薬、食品添加物、遺伝子組換え食品については、「子供に対しては与えない」という意見が多い (それぞれ 3.3、3.0、3.9)。
- 牛肉については「全て BSE に感染していないことを確認した上でなければ一切流通させるべきではない」という考えが強い (5.7)。

各ハザードに対する考えの比較 (平均スコア)

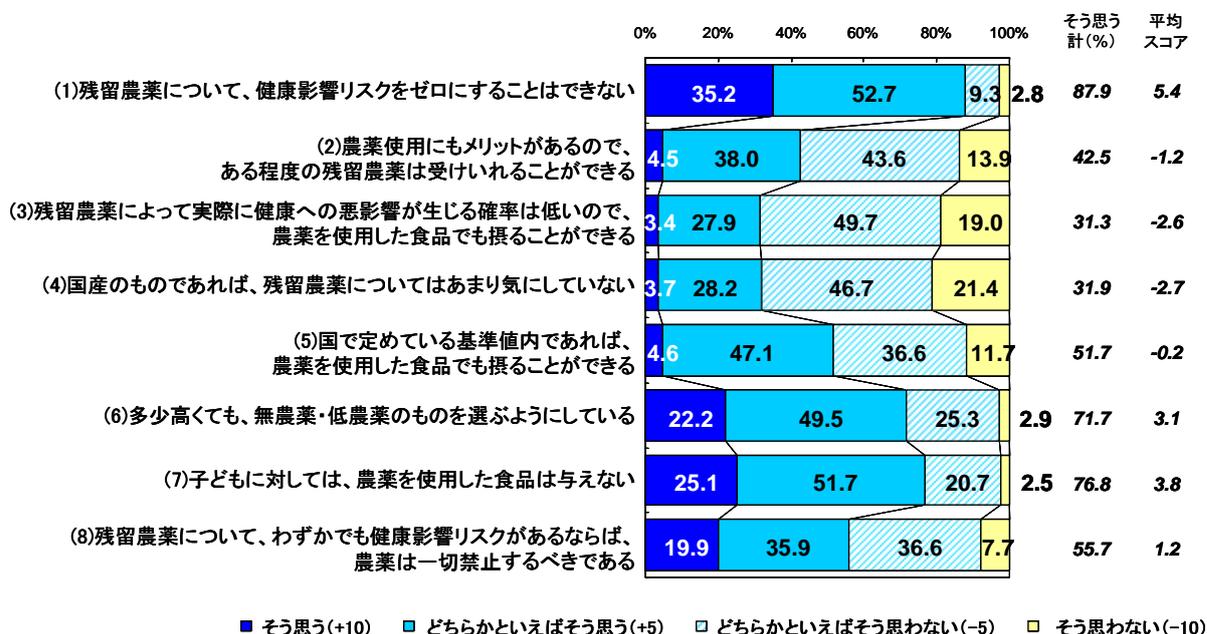
	残留農薬	食品添加物	遺伝子組換え食品	BSE
健康影響リスクをゼロにすることはできない	5.4	5.2	4.2	2.9
メリットがあるので、ある程度は受け入れることができる	-0.8	1.9	-0.6	
実際に健康への悪影響が生じる可能性は低いので、摂ることができる	-2.2	0.5	-1.8	-1.7
国産であれば気にしない	-2.3	-1.3	-2.8	0.4
(農)(添)国で定めている基準値内であれば摂ることができる (遺)国で認められていれば摂ることができる (B)国で対策がとられているので気にならない	0.1	0.7	-2.0	-0.2
多少高くても、無農薬／無添加／非遺伝子組換え食品を選ぶようにしている	2.6	2.4	3.2	
子供に対しては与えない	3.3	3.0	3.9	-2.0
(農)(添)(遺)わずかでも健康影響リスクがあるならば、一切禁止すべきである (B)牛肉は全てBSEに感染していないことを確認した上でなければ一切流通させるべきではない	0.7	1.1	3.0	5.7

## 6) 不安と感じている人の各ハザードに対する考え

- 次頁以降に示す4つのグラフは、各ハザードについて不安と感じている人の各ハザードに対する考えをまとめたものである。
- 各ハザードについて不安と感じている人でも、「健康影響リスクをゼロにすることはできない」と思っている人は多い（残留農薬 87.9%、食品添加物 89.4%、遺伝子組換え食品 85.2%、BSE 71.5%）。
- また、それぞれのハザードでは、ある条件の下で一定の受容性がみられる。
  - ◇ 残留農薬について、不安と感じている人の半数以上（51.7%）が「国で定めている基準値内であれば摂ることができる」と回答。
  - ◇ 食品添加物について、不安と感じている人の半数以上が「メリットがあるので、ある程度は受け入れることができる」（64.1%）、「実際に健康への悪影響が生じる確率は低いので、摂ることができる」（50.4%）、「国で定めている基準値内であれば摂ることができる」（54.9%）と回答。
  - ◇ 牛肉について、不安と感じている人の半数以上（52.0%）が「国産であれば、気にせず食べている」と回答。

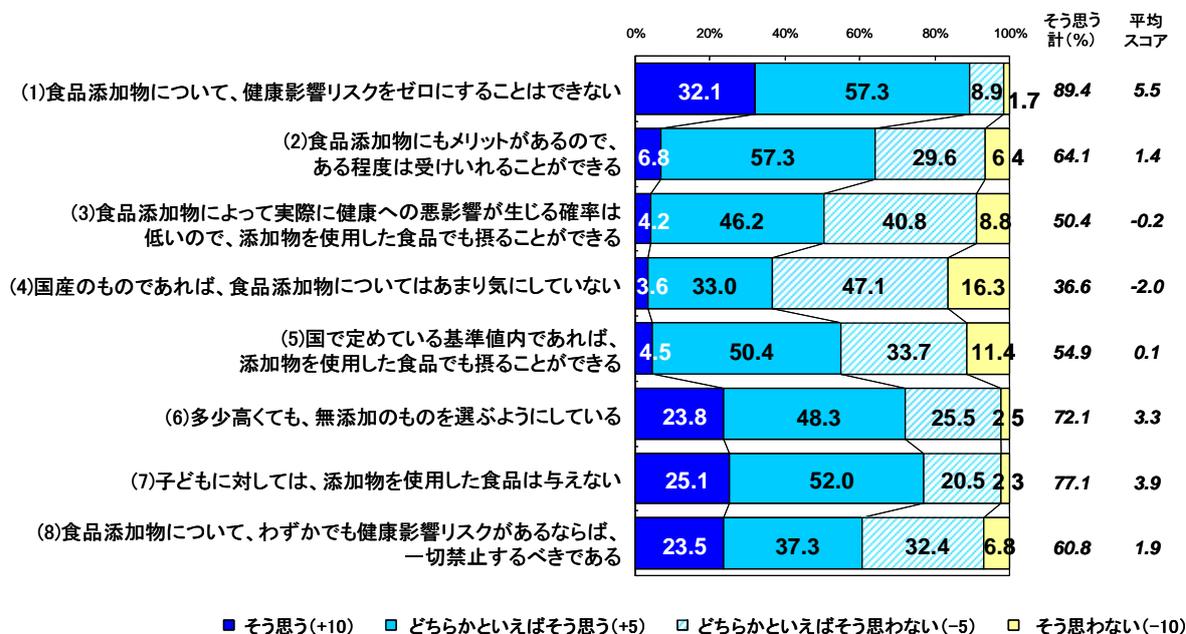
Q10.下記にあげる農業に関する記述について、あなたはどのようにお考えですか。

(ベース：残留農薬を不安と感じている人,n=1740)



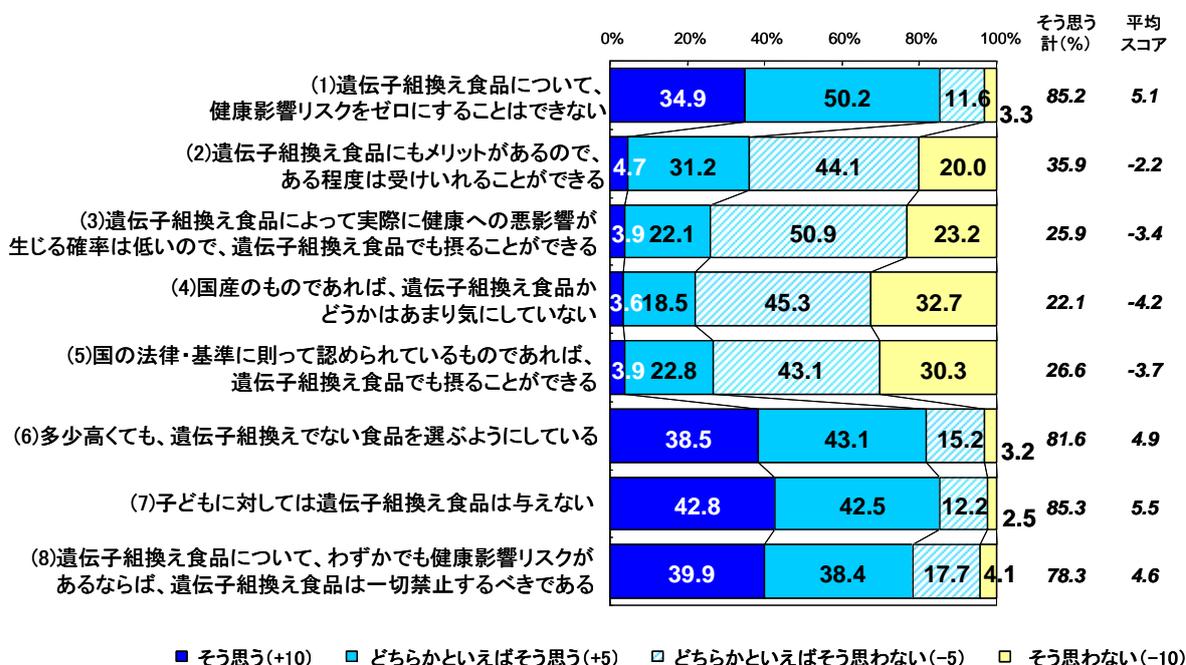
Q15.下記にあげる食品添加物に関する記述について、あなたはどのようにお考えですか。

(ベース：食品添加物を不安と感じている人,n=1583)



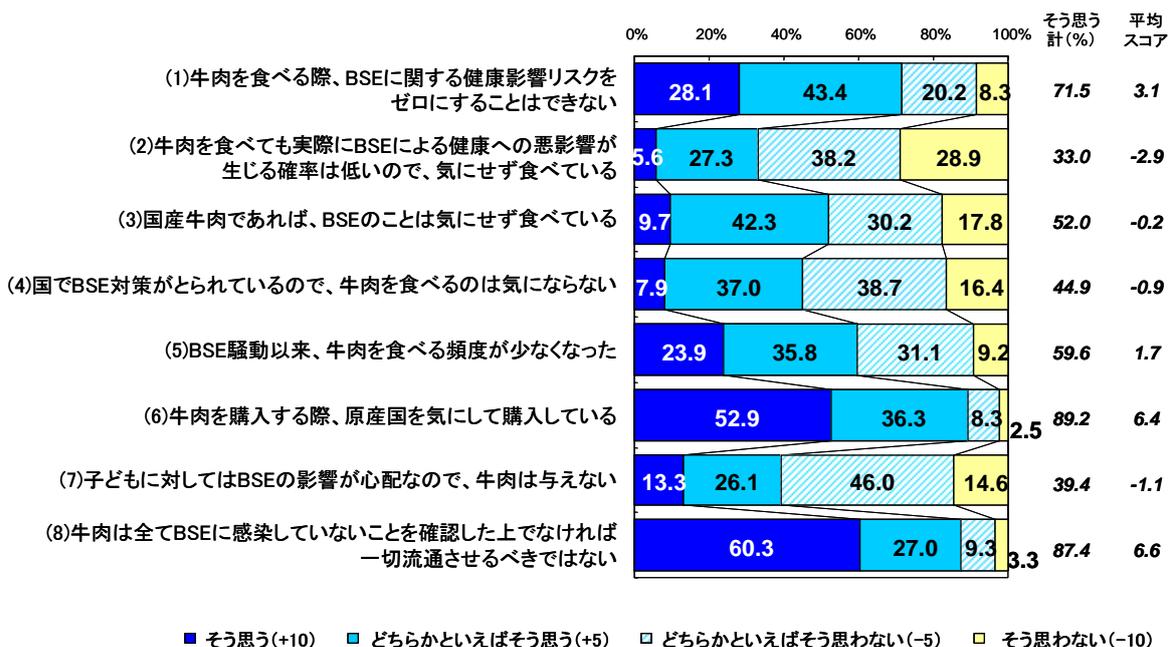
Q20.下記にあげる遺伝子組換え食品に関する記述について、  
あなたはどのようにお考えですか。

(ベース：遺伝子組換え食品を不安と感じている人,n=1246)



Q25.下記にあげるBSE（狂牛病）や牛肉に関する記述について、  
あなたはどのようにお考えですか。

(ベース：BSEを不安と感じている人,n=1417)

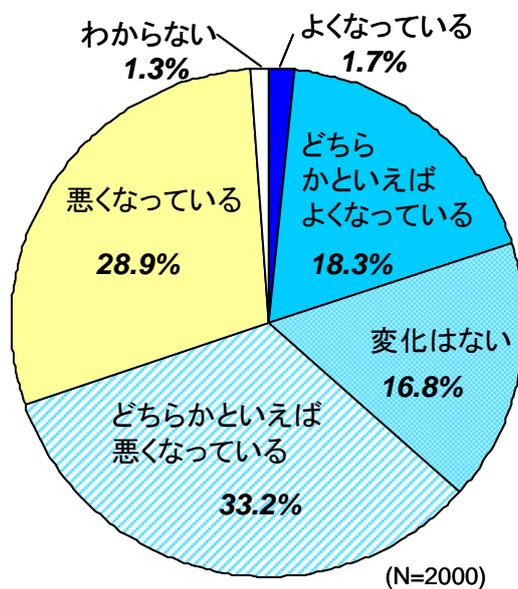


(8) 食品の安全性に関する意識・ニーズ

1) 食品の安全性に関する評価

- 食品の安全性について社会全体としてよくなっていると思うかについてたずねたところ、6割以上(62.1%)が悪くなっている(「悪くなっている」「どちらかといえば悪くなっている」と評価し、よくなっている(「よくなっている」「どちらかといえばよくなっている」と評価した人は2割(19.9%)。

Q26.食品の安全性について、社会全体としてよくなっていると思いますか。  
悪くなっていると思いますか。



- 女性の30 - 50代、非正規就業者、専業主婦で、悪くなっているとの回答が多い。一方、男性60代以上、自営業・家族従業者/農林水産、無職では、よくなっているとの回答が比較的多い。
- 専攻学科では、理科系より文科系、どちらともいえないで、悪くなっているとの回答が多い。

Q26.食品の安全性について、社会全体としてよくなっていると思いますか。  
悪くなっていると思いますか。

<性別、年齢、性年齢、職業、既婚/未婚、子供の有無、一人暮らし/同居、専攻学科別>

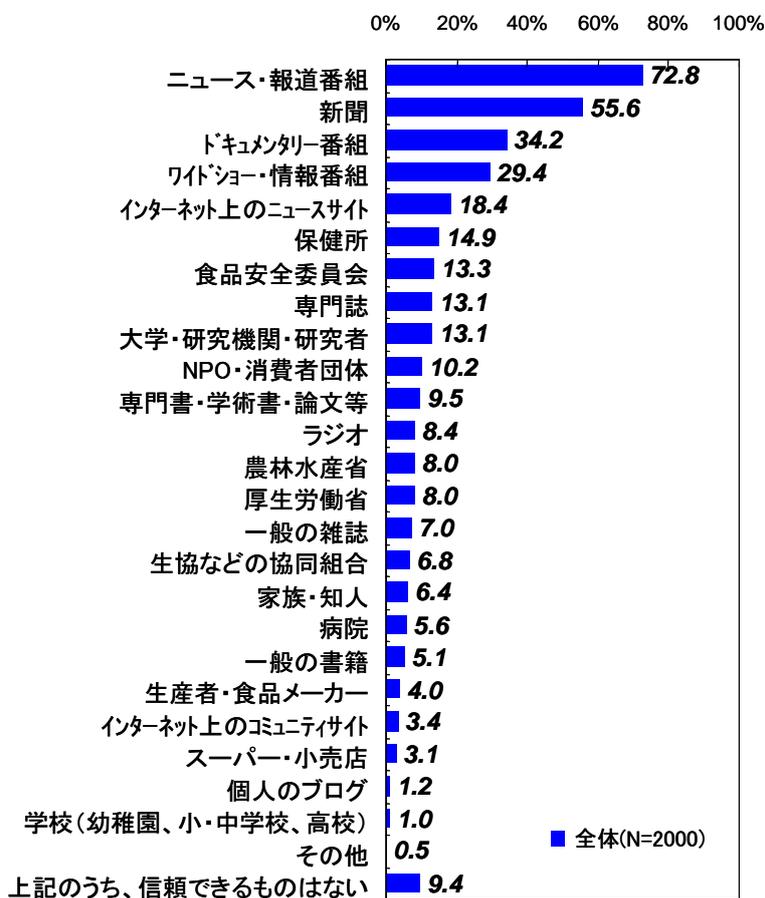
		(N)	よくなっている	どちらかといえばよくなっている	変化はない	どちらかといえば悪くなっている	悪くなっている	わからない	よくなっている計	悪くなっている計	平均スコア
全体		2000	1.7	18.3	16.8	33.2	28.9	1.3	19.9	62.1	-3.5
性別	男性	960	2.7	20.5	18.2	31.9	25.6	1.0	23.2	57.5	-2.9
	女性	1040	0.7	16.2	15.4	34.4	31.9	1.4	16.8	66.3	-4.1
年齢	20代	289	2.1	15.6	24.6	26.0	29.4	2.4	17.6	55.4	-3.3
	30代	347	1.2	13.3	16.7	32.3	35.7	0.9	14.4	68.0	-4.4
	40代	305	1.0	14.4	17.0	36.1	29.5	2.0	15.4	65.6	-4.0
	50代	375	2.1	18.4	11.7	34.9	32.3	0.5	20.5	67.2	-3.9
	60代以上	684	1.8	23.5	16.1	34.5	23.1	1.0	25.3	57.6	-2.7
性年齢	男性-20代	148	3.4	14.9	28.4	28.4	23.0	2.0	18.2	51.4	-2.7
	男性-30代	175	2.3	16.6	18.9	29.1	32.6	0.6	18.9	61.7	-3.7
	男性-40代	152	0.7	17.1	21.7	28.3	30.3	2.0	17.8	58.6	-3.6
	男性-50代	185	3.2	21.1	10.3	34.1	30.3	1.1	24.3	64.3	-3.4
	男性-60代以上	300	3.3	27.0	16.0	35.7	17.7	0.3	30.3	53.3	-1.9
	女性-20代	141	0.7	16.3	20.6	23.4	36.2	2.8	17.0	59.6	-4.0
	女性-30代	172	-	9.9	14.5	35.5	39.0	1.2	9.9	74.4	-5.2
	女性-40代	153	1.3	11.8	12.4	43.8	28.8	2.0	13.1	72.5	-4.4
	女性-50代	190	1.1	15.8	13.2	35.8	34.2	-	16.8	70.0	-4.3
	女性-60代以上	384	0.5	20.8	16.1	33.6	27.3	1.6	21.4	60.9	-3.4
職業	自営業・家族従業者/農林水産	175	1.1	24.0	19.4	32.6	22.3	0.6	25.1	54.9	-2.6
	正規就業者	748	2.0	19.1	17.4	32.0	28.3	1.2	21.1	60.3	-3.3
	非正規就業者	236	0.4	14.8	15.7	37.3	30.1	1.7	15.3	67.4	-4.2
	専業主婦・主夫	495	0.8	13.9	14.5	36.0	33.3	1.4	14.7	69.3	-4.4
	学生*	38	2.6	21.1	21.1	31.6	23.7	-	23.7	55.3	-2.6
	無職	283	3.2	23.0	16.6	30.4	25.4	1.4	26.1	55.8	-2.6
	その他*	25	4.0	12.0	28.0	16.0	40.0	-	16.0	56.0	-3.8
既婚/未婚	既婚（配偶者あり）	1345	1.6	19.0	14.6	35.2	28.4	1.1	20.6	63.6	-3.5
	既婚（離別・死別）	160	2.5	18.1	16.9	32.5	28.8	1.3	20.6	61.3	-3.4
	未婚	495	1.6	16.2	22.4	27.9	30.3	1.6	17.8	58.2	-3.5
子供の有無	子供あり	1282	1.8	20.0	15.5	34.6	27.1	1.0	21.8	61.6	-3.3
	子供なし	718	1.4	15.0	18.9	30.8	32.2	1.7	16.4	63.0	-3.9
一人暮らし/同居	一人暮らし	270	1.5	17.4	20.7	29.3	29.6	1.5	18.9	58.9	-3.5
	家族など同居	1730	1.7	18.4	16.1	33.8	28.8	1.2	20.1	62.6	-3.5
専攻学科	理科系	427	1.4	22.0	20.1	30.9	25.1	0.5	23.4	56.0	-2.8
	文科系	670	1.6	17.8	14.2	34.2	30.7	1.5	19.4	64.9	-3.8
	どちらともいえない	218	1.4	11.5	14.7	37.2	32.6	2.8	12.8	69.7	-4.5

\* サンプル小のため参考値

## 2) 食品の安全性について信頼できる情報源

- 食品の安全性について信頼できる情報源についてたずねたところ、「ニュース・報道番組」が最も多く（72.8%）、「新聞」（55.6%）、「ドキュメンタリー番組」（34.2%）、「ワイドショー・情報番組」（29.4%）といったメディア系が続く。
- 「食品安全委員会」は全体の13.3%となっており、食品安全委員会について知っている人でみると、34.1%が信頼できるとしている。

Q27.食品の安全性に関する情報を得る場合、次あげるメディアや機関・団体等の情報について、あなたが信頼できるものをお選びください。（複数回答）



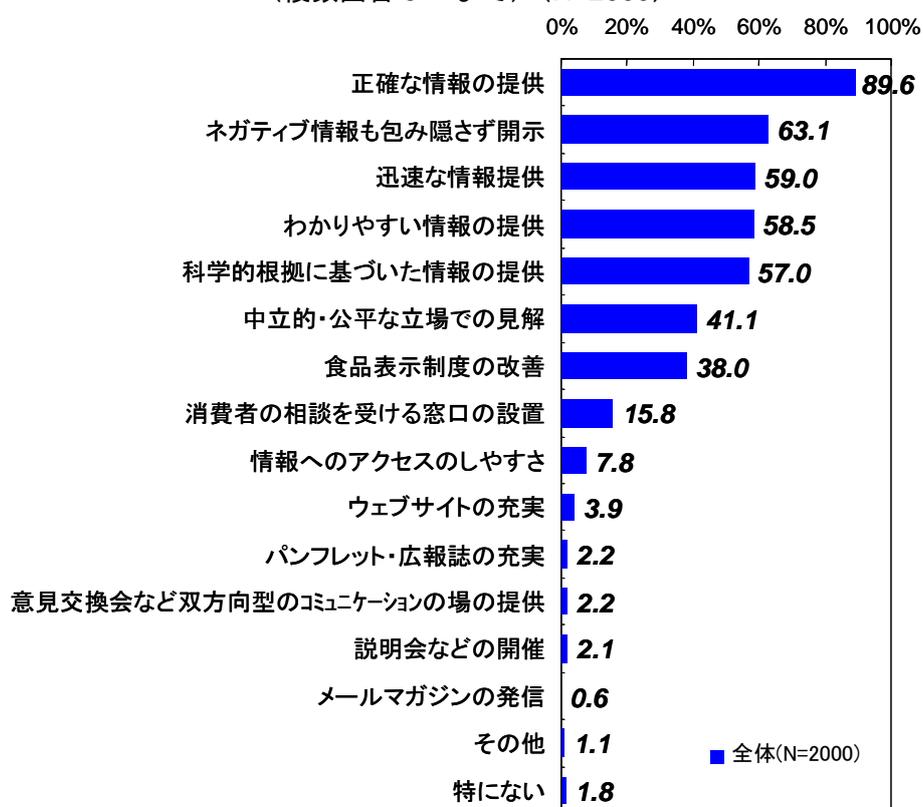
Q27.食品の安全性について信頼できる情報源×Q29.食品安全委員会の認知

全体		(n)	%
		2000	13.3
Q29.食品安全委員会の認知	どんな機関であるかを 含めて知っている	129	34.1
	名前は聞いたことがある	1265	15.1
	知らない	606	5.0

### 3) 食品の安全性に関する情報提供において行政に期待すること

- 食品の安全性に関する情報提供において行政に期待することについてたずねたところ、「正確な情報の提供」が最も多く（89.6%）、「ネガティブ情報も包み隠さず開示」（63.1%）、「迅速な情報提供」（59.0%）、「わかりやすい情報の提供」（58.5%）、「科学的根拠に基づいた情報の提供」（57.0%）が続く。

Q28.食品の安全性に関する情報提供において、行政に期待することは何ですか。  
 （複数回答5つまで）（N=2000）

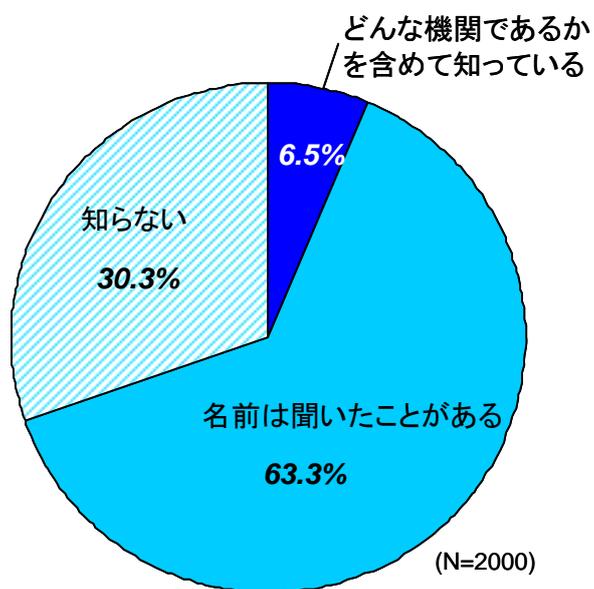


(9) 食品安全委員会の認知・イメージ

1) 食品安全委員会の認知

- 食品安全委員会の認知についてたずねたところ、「名前は聞いたことがある」が63.3%と最も多い。「知らない」が3割(30.3%)で、「どんな機関であるかを含めて知っている」は6.5%。

Q29.食品安全委員会をご存知ですか。



- 20代で「知らない」という人が4割を占め（41.5%）、若年層で認知度は低い。特に男性20代で45.3%が「知らない」と回答。

### Q29.食品安全委員会をご存知ですか。

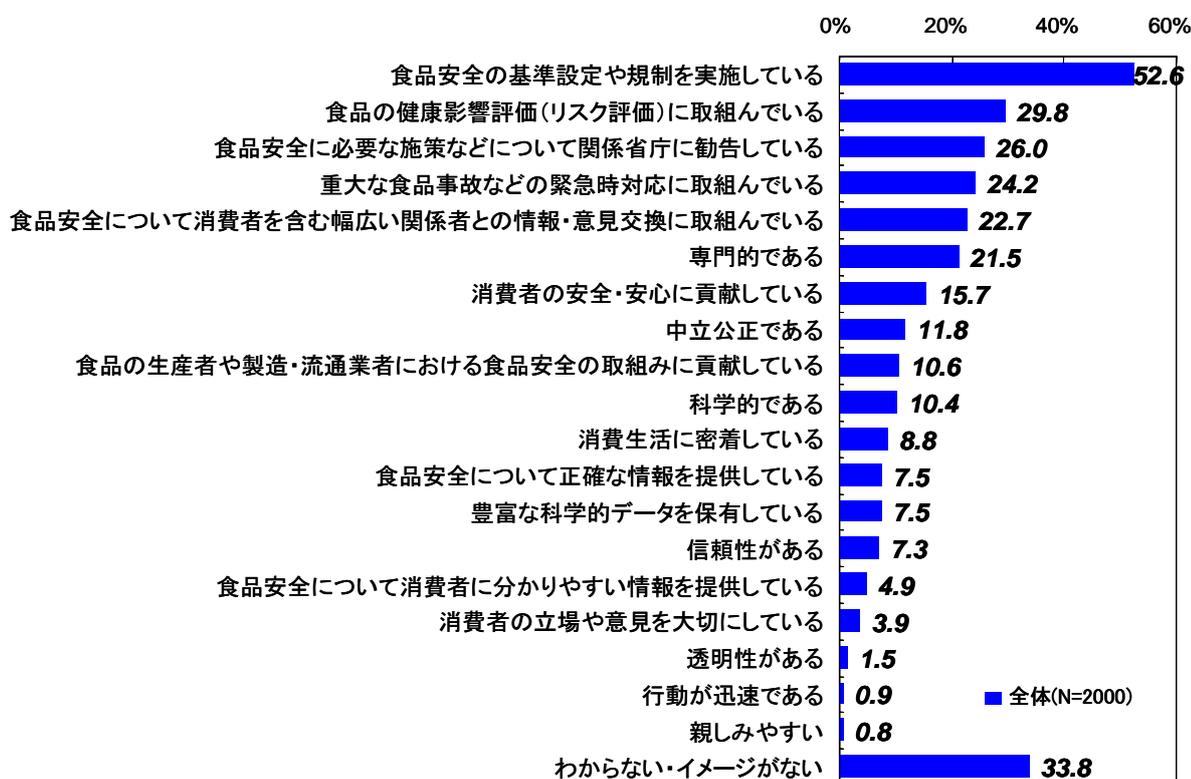
<性別、年齢、性年齢、職業、既婚/未婚、子供の有無、一人暮らし/同居、専攻学科別>

		(N)	どんな機関であるかを含めて知っ	名前は聞いたことがある	知らない
全体		2000	6.5	63.3	30.3
性別	男性	960	6.9	59.7	33.4
	女性	1040	6.1	66.5	27.4
年齢	20代	289	5.2	53.3	41.5
	30代	347	5.2	61.4	33.4
	40代	305	6.2	58.4	35.4
	50代	375	7.2	65.6	27.2
	60代以上	684	7.3	69.3	23.4
性年齢	男性-20代	148	6.1	48.6	45.3
	男性-30代	175	4.6	58.3	37.1
	男性-40代	152	7.2	52.6	40.1
	男性-50代	185	6.5	57.3	36.2
	男性-60代以上	300	8.7	71.0	20.3
	女性-20代	141	4.3	58.2	37.6
	女性-30代	172	5.8	64.5	29.7
	女性-40代	153	5.2	64.1	30.7
	女性-50代	190	7.9	73.7	18.4
	女性-60代以上	384	6.3	68.0	25.8
職業	自営業・家族従業者/農林水産	175	4.0	65.1	30.9
	正規就業者	748	7.4	57.4	35.3
	非正規就業者	236	4.2	66.9	28.8
	専業主婦・主夫	495	6.1	67.9	26.1
	学生*	38	5.3	55.3	39.5
	無職	283	8.5	66.1	25.4
	その他*	25	4.0	80.0	16.0
既婚/未婚	既婚（配偶者あり）	1345	7.1	64.8	28.0
	既婚（離別・死別）	160	3.8	65.6	30.6
	未婚	495	5.5	58.2	36.4
子供の有無	子供あり	1282	6.9	65.3	27.8
	子供なし	718	5.6	59.6	34.8
一人暮らし/同居	一人暮らし	270	5.9	62.6	31.5
	家族など同居	1730	6.5	63.4	30.1
専攻学科	理科系	427	8.7	63.2	28.1
	文科系	670	7.6	61.3	31.0
	どちらともいえない	218	3.7	63.8	32.6

## 2) 食品安全委員会のイメージ

- 食品安全委員会のイメージとして、「食品安全の基準設定や規制を実施している」との回答が52.6%と最も多く、「食品の健康影響評価に取り組んでいる」(29.8%)、「食品安全に必要な施策などについて関係省庁に勧告」(26.0%)、「重大な食品事故などの緊急時対応に取り組んでいる」(24.2%)が続く。
- 「親しみやすい」(0.8%)、「行動が迅速」(0.9%)、「透明性がある」(1.5%)、「消費者の立場や意見を大切にしている」(3.9%)といったイメージはほとんど持たれていない。
- 「わからない・イメージがない」という人は3分の1(33.8%)にも及ぶ。

Q30.あなたの食品安全委員会に対するイメージ・認識として、  
あてはまるものをお選びください。(複数回答)



Q30.あなたの食品安全委員会に対するイメージ・認識として、  
あてはまるものをお選びください。(複数回答)

<食品安全委員会の認知度別>

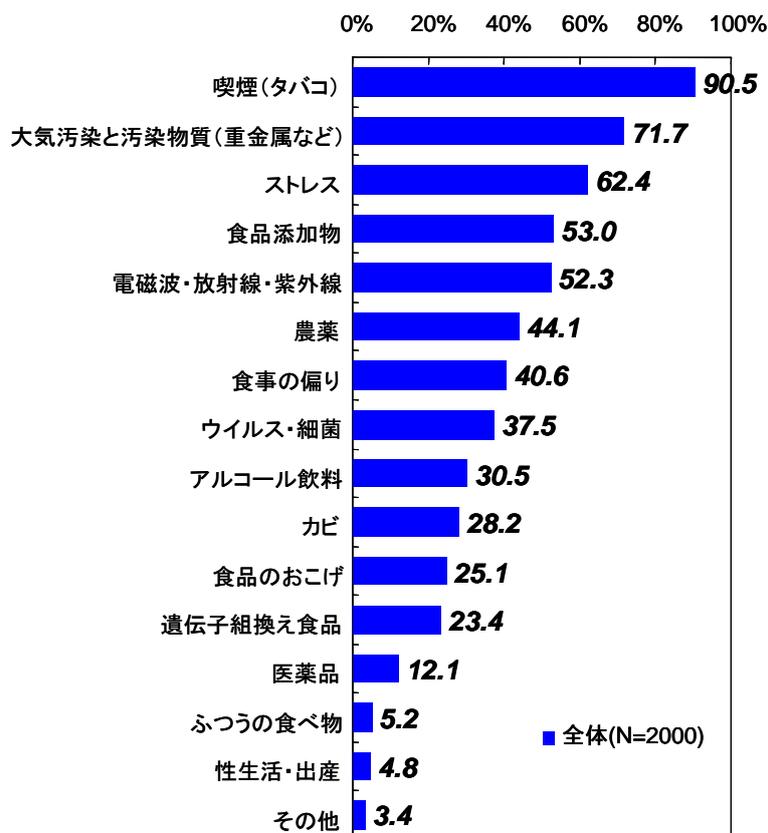
		合計	食品安全の実施している	食品の健康影響(リスク評価)に取組んでいる	食品安全に関する必要措置を勧告している	重大な食品事故に緊急対応している	取組んでいる	消費者の安全・安心に貢献している	中立的公正である	科学的である	(%)	
全体		2000	52.6	29.8	26.0	24.2	22.7	21.5	15.7	11.8	10.6	10.4
Q29. 食品安全委員会の認知	どんな機関であるかを 含めて知っている	129	74.4	48.1	54.3	41.9	37.2	38.8	32.6	22.5	21.7	25.6
	名前は聞いたことがある	1265	57.5	32.7	28.7	26.8	24.0	23.6	16.7	13.0	11.6	10.8
	知らない	606	37.6	19.6	14.2	15.0	17.0	13.4	9.9	6.9	6.1	6.1
		合計	消費生活に密着している	正確な情報を提供している	豊富な科学的データを保有している	信頼性がある	消費者に分かりやすい情報を提供している	消費者の立場や意見を大切にする	透明性がある	行動が迅速である	親しみやすい	わからない・イメージがない・イメージが低い
全体		2000	8.8	7.5	7.5	7.3	4.9	3.9	1.5	0.9	0.8	33.8
Q29. 食品安全委員会の認知	どんな機関であるかを 含めて知っている	129	15.5	11.6	19.4	14.0	6.2	8.5	4.7	3.9	3.1	6.2
	名前は聞いたことがある	1265	9.8	7.4	7.5	8.1	5.4	4.0	1.4	0.6	0.6	27.0
	知らない	606	5.1	6.6	4.8	4.1	3.6	2.6	0.8	0.8	0.5	54.0

(10) 癌の原因になると思うもの、食品の安全性に関する知識

1) 癌の原因になると思うもの

- 癌の原因になると思うものについてたずねたところ、「喫煙（タバコ）」が90.5%と最も多く、次に「大気汚染と汚染物質（重金属など）」（71.7%）、「ストレス」（62.4%）、「食品添加物」（53.0%）、「電磁波・放射線・紫外線」（52.3%）と続く。

Q31.癌の原因になるものは何だと思えますか。（複数回答）（N=2000）



- 男性より女性で、「ストレス」「電磁波・放射線・紫外線」「食事の偏り」が10ポイント以上多い。
- 年齢が高いほど、「大気汚染と汚染物質」「食品添加物」「農薬」は多く、若いほど「アルコール飲料」が多い。
- 専業主婦では「ストレス」「食品添加物」「電磁波・放射線・紫外線」「カビ」「食品のおこげ」が、比較的多い。

Q31.癌の原因になるものは何だと思いますか。(複数回答)

<性別、年齢、性年齢、職業、既婚/未婚、子供の有無、一人暮らし/同居、専攻学科別>

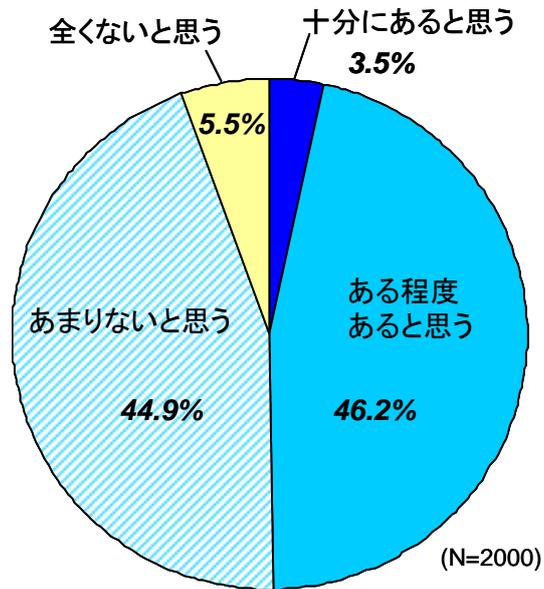
	(N)	喫煙(タバコ)	大気汚染と汚染物質(重金属など)	ストレス	食品添加物	電磁波・放射線・紫外線	農薬	食事の偏り	ウイルス・細菌	アルコール飲料	カビ	食品のおこげ	遺伝子組換え食品	医薬品	ふつうの食べ物	性生活・出産	その他	
全体	2000	90.5	71.7	62.4	53.0	52.3	44.1	40.6	37.5	30.5	28.2	25.1	23.4	12.1	5.2	4.8	3.4	
性別																		
男性	960	88.6	72.5	53.2	49.9	46.7	43.0	34.3	37.8	28.3	26.7	21.1	22.5	12.9	5.9	4.7	2.8	
女性	1040	92.1	71.0	70.8	55.8	57.4	45.1	46.3	37.1	32.4	29.5	28.7	24.1	11.3	4.4	4.9	3.8	
年齢																		
20代	289	94.1	61.9	57.1	31.8	45.3	33.6	44.6	24.9	37.4	20.8	26.3	15.6	10.4	6.6	7.3	2.8	
30代	347	91.9	69.7	65.1	44.7	55.0	37.8	52.2	36.3	35.7	23.3	25.4	16.7	11.2	8.1	8.4	4.3	
40代	305	90.5	71.1	65.2	52.1	60.3	43.3	40.0	37.0	33.4	24.6	25.6	26.2	13.1	6.2	4.3	2.6	
50代	375	86.1	75.2	67.2	61.1	53.6	45.9	36.8	44.3	25.6	32.5	25.6	25.6	14.7	4.8	3.7	3.7	
60代以上	684	90.5	75.1	59.2	62.0	49.4	51.2	35.2	39.8	26.2	32.9	23.8	27.5	11.4	2.8	2.8	3.2	
性年齢																		
男性-20代	148	91.9	64.2	53.4	32.4	46.6	35.1	37.8	24.3	33.1	22.3	26.4	15.5	8.8	6.8	4.1	2.0	
男性-30代	175	91.4	70.9	53.1	36.0	53.1	34.3	46.9	37.1	30.9	25.7	22.3	12.0	11.4	10.9	8.0	3.4	
男性-40代	152	86.8	75.0	60.5	52.6	52.6	44.1	35.5	35.5	30.3	24.3	23.0	28.3	14.5	7.9	4.6	1.3	
男性-50代	185	84.9	72.4	60.0	57.3	48.1	43.8	32.4	47.0	25.9	29.7	22.2	24.3	16.2	4.3	4.9	3.8	
男性-60代以上	300	88.7	76.3	45.3	60.7	39.0	51.0	25.7	40.3	25.0	28.7	16.3	28.0	13.0	2.7	3.0	3.0	
女性-20代	141	96.5	59.6	61.0	31.2	44.0	31.9	51.8	25.5	41.8	19.1	26.2	15.6	12.1	6.4	10.6	3.5	
女性-30代	172	92.4	68.6	77.3	53.5	57.0	41.3	57.6	35.5	40.7	20.9	28.5	21.5	11.0	5.2	8.7	5.2	
女性-40代	153	94.1	67.3	69.9	51.6	68.0	42.5	44.4	38.6	36.6	24.8	28.1	24.2	11.8	4.6	3.9	3.9	
女性-50代	190	87.4	77.9	74.2	64.7	58.9	47.9	41.1	41.6	25.3	35.3	28.9	26.8	13.2	5.3	2.6	3.7	
女性-60代以上	384	91.9	74.2	70.1	63.0	57.6	51.3	42.7	39.3	27.1	36.2	29.7	27.1	10.2	2.9	2.6	3.4	
職業																		
自営業・家族従業員/農林水産	175	88.6	67.4	60.6	61.1	45.1	51.4	40.6	40.6	26.9	29.1	18.9	21.1	13.1	2.9	2.9	1.7	
正規就業者	748	90.8	73.3	59.6	46.8	52.1	41.0	39.7	36.2	31.6	25.1	22.9	22.2	13.4	7.0	5.7	2.8	
非正規就業者	236	87.7	68.6	65.3	51.3	51.7	41.5	43.6	36.9	31.8	28.0	29.2	22.0	11.4	4.2	8.5	5.9	
専業主婦・主夫	495	92.3	71.7	72.7	59.2	58.4	46.5	44.6	39.8	31.3	34.1	31.5	26.1	10.9	4.0	3.6	3.0	
学生*	38	100.0	60.5	36.8	26.3	44.7	26.3	39.5	26.3	36.8	21.1	15.8	13.2	10.5	7.9	5.3	-	
無職	283	88.7	73.5	53.0	58.3	48.1	47.7	33.9	36.7	26.1	26.1	21.6	25.8	11.3	4.2	2.8	4.2	
その他*	25	88.0	80.0	68.0	52.0	48.0	48.0	32.0	36.0	32.0	28.0	20.0	20.0	8.0	4.0	-	8.0	
既婚/未婚																		
既婚(配偶者あり)	1345	90.5	73.7	63.0	56.5	50.6	46.4	39.8	39.2	29.8	31.0	26.0	25.7	12.0	4.7	4.3	3.0	
既婚(離別・死別)	160	89.4	70.0	65.0	60.0	57.5	43.8	38.8	40.0	28.1	28.8	20.0	22.5	13.8	5.0	5.0	3.1	
未婚	495	90.7	66.9	59.6	41.0	55.2	38.0	43.2	31.9	32.9	20.2	24.0	17.4	11.7	6.5	6.1	4.2	
子供の有無																		
子供あり	1282	90.4	72.9	62.9	57.3	50.3	46.3	38.3	38.5	29.4	31.4	25.4	25.7	12.4	4.4	4.2	2.7	
子供なし	718	90.5	69.6	61.3	45.3	55.7	40.3	44.6	35.7	32.3	22.3	24.4	19.2	11.6	6.5	5.8	4.5	
一人暮らし/同居																		
一人暮らし	270	88.9	68.9	60.0	47.0	54.1	38.9	43.0	31.1	31.9	25.6	23.3	20.0	13.0	5.6	7.0	4.4	
家族など同居	1730	90.7	72.1	62.7	53.9	52.0	44.9	40.2	38.4	30.2	28.6	25.3	23.9	12.0	5.1	4.5	3.2	
専攻学科																		
理科室	427	92.0	75.9	55.7	53.2	52.2	43.1	35.8	38.9	29.5	29.7	23.0	22.0	15.2	7.3	6.3	3.3	
文科室	670	89.4	71.8	64.8	53.9	53.3	45.7	44.6	32.5	29.6	25.2	25.7	25.1	11.8	5.7	4.2	3.0	
どちらともいえない	218	88.1	72.0	72.0	57.3	55.5	48.6	50.0	37.6	34.4	31.7	27.5	23.9	12.8	4.1	5.5	5.0	

\*サンプル小のため参考値

## 2) 食品安全性に関する知識

- 食品の安全性に関する知識についてあると思うか自己評価をたずねたところ、全体の半数（49.7%）があると思っている（「十分にある」「ある程度あると思う」と回答）。

Q32.あなたは、健康に悪影響を与えないようにするために、  
どのような食品を選んだ方がよいかや、どのような調理が必要かについての  
知識があると思いますか。



- 女性、高齢層、専業主婦、自営業・家族従業者/農林水産で、食品の安全性に関する知識の自己評価が比較的高い。

Q32.あなたは、健康に悪影響を与えないようにするために、どのような食品を選んだ方がよいかや、どのような調理が必要かについての知識があると思いますか。

<性別、年齢、性年齢、職業、既婚/未婚、子供の有無、一人暮らし/同居、専攻学科別>

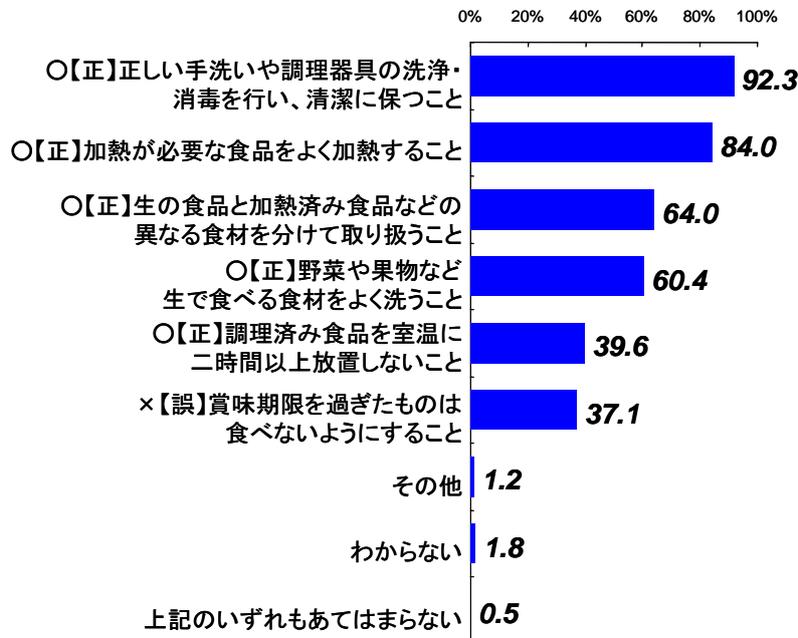
		(N)	(%)				平均スコア
			十分にあると思う	ある程度あると思う	あまりないと思う	全くないと思う	
全体		2000	3.5	46.2	44.9	5.5	-0.1
性別	男性	960	3.0	40.6	47.7	8.6	-0.9
	女性	1040	3.8	51.3	42.3	2.5	0.6
年齢	20代	289	6.2	34.3	54.7	4.8	-0.9
	30代	347	4.3	38.6	49.9	7.2	-0.9
	40代	305	1.3	46.2	47.2	5.2	-0.4
	50代	375	3.7	48.0	41.6	6.7	0.0
	60代以上	684	2.6	54.1	39.0	4.2	0.6
性年齢	男性-20代	148	4.7	35.8	52.0	7.4	-1.1
	男性-30代	175	4.6	33.1	52.0	10.3	-1.5
	男性-40代	152	2.0	40.8	48.0	9.2	-1.1
	男性-50代	185	3.8	40.0	45.4	10.8	-1.0
	男性-60代以上	300	1.3	47.7	44.3	6.7	-0.4
	女性-20代	141	7.8	32.6	57.4	2.1	-0.7
	女性-30代	172	4.1	44.2	47.7	4.1	-0.2
	女性-40代	153	0.7	51.6	46.4	1.3	0.2
	女性-50代	190	3.7	55.8	37.9	2.6	1.0
	女性-60代以上	384	3.6	59.1	34.9	2.3	1.3
職業	自営業・家族従業者/農林水産	175	2.9	55.4	36.6	5.1	0.7
	正規就業者	748	3.7	39.3	49.7	7.2	-0.9
	非正規就業者	236	3.4	36.9	54.2	5.5	-1.1
	専業主婦・主夫	495	3.0	57.4	37.6	2.0	1.1
	学生*	38	7.9	36.8	52.6	2.6	-0.3
	無職	283	2.5	49.1	41.0	7.4	-0.1
	その他*	25	12.0	36.0	48.0	4.0	0.2
既婚/未婚	既婚(配偶者あり)	1345	2.9	48.6	43.6	4.8	0.1
	既婚(離別・死別)	160	2.5	51.3	42.5	3.8	0.3
	未婚	495	5.3	38.0	49.1	7.7	-0.8
子供の有無	子供あり	1282	3.1	49.0	43.0	4.9	0.1
	子供なし	718	4.0	41.2	48.3	6.4	-0.6
一人暮らし/同居	一人暮らし	270	3.0	44.8	45.2	7.0	-0.4
	家族など同居	1730	3.5	46.4	44.9	5.2	-0.1
専攻学科	理科系	427	3.5	45.0	45.2	6.3	-0.3
	文科系	670	3.1	47.2	46.0	3.7	-
	どちらともいえない	218	6.9	44.5	43.1	5.5	0.2

\* サンプル小のため参考値

3) 食中毒防止に有効だと思うこと

- 食中毒防止に有効だと思うことについてたずねたところ、「正しい手洗いや調理器具の洗浄・消毒を行い、清潔に保つこと」(92.3%)、「加熱が必要な食品をよく加熱すること」(84.0%)について、8割以上の人が正しく認識しているが、「調理済み食品を室温に二時間以上放置しないこと」について、正しく認識している人は4割(39.6%)となっている。
- 「賞味期限を過ぎたものは食べないようにすること」について、37.1%の人が誤った認識を持っている。

Q33.食品をより安全に保ち、食中毒を防ぐために有効だと思うものを、  
以下の中からすべてお選びください。(複数回答)(N=2000)



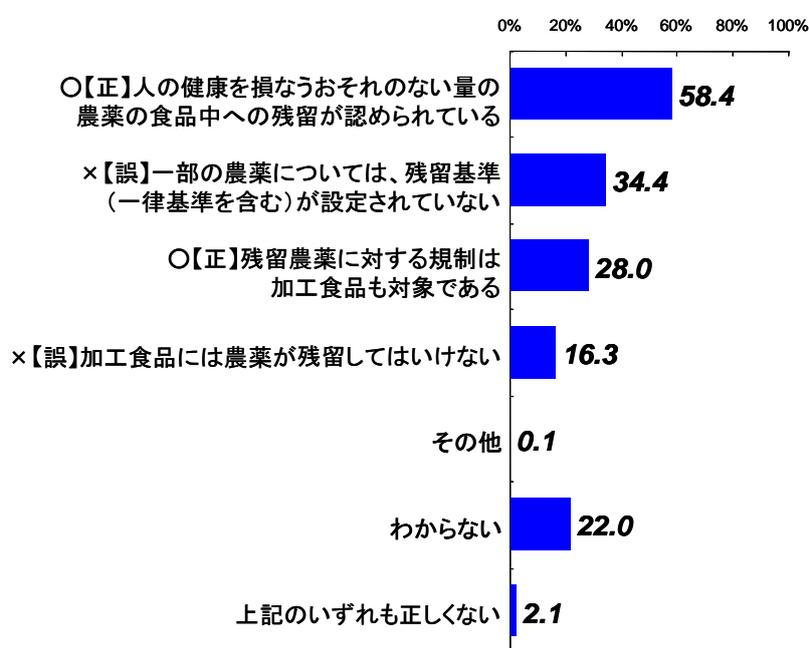
< Q32.食品の安全性に関する知識の自己評価別 >

	合計	Q33.食中毒防止に有効だと思うこと								
		【正】正しい手洗いや調理器具の洗浄・消毒を行い、清潔に保つこと	【正】加熱が必要な食品をよく加熱すること	【正】生の食品と加熱済み食品などの異なる食材を分けて取り扱うこと	【正】野菜や果物など生で食べる食材をよく洗うこと	【正】調理済み食品を室温に二時間以上放置しないこと	【誤】賞味期限を過ぎたものは食べないようにすること	その他	わからない	上記のいずれもあてはまらない
全体	2000	92.3	84.0	64.0	60.4	39.6	37.1	1.2	1.8	0.5
知識あり	993	94.0	85.8	72.4	67.6	44.8	35.9	1.6	0.1	0.5
知識なし	1007	90.7	82.2	55.7	53.2	34.4	38.3	0.7	3.5	0.5

#### 4) 残留農薬の基準について正しいと思うこと

- 残留農薬の基準について正しいと思うことについてたずねたところ、「人の健康を損なうおそれのない量の農薬の食品中への残留が認められている」について、58.4%の人が正しく認識している。
- 「一部の農薬については、残留基準（一律基準を含む）が設定されていない」「加工食品には農薬が残留してはいけない」について、それぞれ34.4%、16.3%の人が誤った認識を持っている。

Q34.食品中に残留する農薬の基準について、以下の中から正しいと思うものをすべてお選びください。（複数回答）（N=2000）



< Q32.食品の安全性に関する知識の自己評価別 >

	合計	Q34.残留農薬の基準について正しいと思うこと						
		【正】人の健康を損なうおそれのない量の農薬の食品中への残留が認められている	【誤】一部の農薬については、残留基準（一律基準を含む）が設定されていない	【正】残留農薬に対する規制は加工食品も対象である	【誤】加工食品には農薬が残留してはいけない	その他	わからない	上記のいずれも正しくない
全体	2000	58.4	34.4	28.0	16.3	0.1	22.0	2.1
知識あり	993	62.5	38.5	34.3	19.2	0.1	16.1	2.3
知識なし	1007	54.3	30.4	21.7	13.3	0.1	27.8	1.8

### Ⅲ. リスク認知の形成要因に影響を及ぼす情報源の調査

#### 1. 調査概要

##### (1) 調査目的

- リスク認知の形成要因に関する調査（フォーカスグループインタビュー及びインターネットアンケート）に基づいて、消費者のリスク認知の形成要因（リスク認知の根拠となる情報の内容）に影響を及ぼしている主な情報源とその情報内容、及び情報源における情報発信の考え方・方法等を把握する。

##### (2) 調査方法

- 文献調査、情報内容整理（Ⅱ. の調査分析結果の整理を含む）
- 訪問インタビュー調査（1ケース1時間程度）  
※忌憚のない実態・意見等を把握するため、所属名や個人名について匿名を前提として協力を得た。

##### (3) 調査対象

- マスメディア（テレビ報道番組、新聞〔全国紙〕）  
※訪問インタビュー調査は、テレビ局（キー局）6局、全国一般紙4紙に依頼し、協力を得られた民放1局の記者、及び全国一般紙3紙4名の記者・論説委員を対象として実施した。
- 中学・高校の家庭科資料集（副読本）  
※文献調査の調査対象として収集した家庭科資料集（副読本）は以下のとおり（特記していない限り2008年版）。  
※訪問インタビュー調査は、出版社3社に依頼し、協力を得られた2社の編集者を対象として実施した。

#### 〔高校生用〕

東京書籍『自分らしく生きる 最新ビジュアルワイド家庭科 資料+食品成分表』

東京書籍『新テーマスタディ』

教育図書『家庭科トータルデータ 資料+成分表』

実教出版『生活学 Navi 資料+成分表 2009』※新刊 2009年版

実教出版『ニューライブラリー家庭科 資料集+成分表 改訂版 2008』

実教出版『ニュービジュアル家庭科 資料集+成分表 改訂版 2008』

開隆堂『ACCESS 資料集（食品成分表付き）』

大修館書店『高校生のための生活学改訂版 家庭科資料集と食品成分表』

一橋出版『アプローチ家庭科 資料&食品成分表』

第一学習社『生活ハンドブック 資料&成分表』

東京法令出版『ズームアップ資料 家庭科』

〔中学生用〕

新学社『新技術・家庭資料集』

正進社『新家庭総合資料』

開隆堂出版『技・家ハンドブック家庭分野』

## 2. 調査分析結果

### 2-1. 消費者のリスク認知の形成要因に影響を及ぼしている主な情報源とその情報内容

#### (1) マスメディア（新聞〔全国紙〕、テレビ報道番組）

##### 1) 報道概況

※次頁以降のデータを参照。

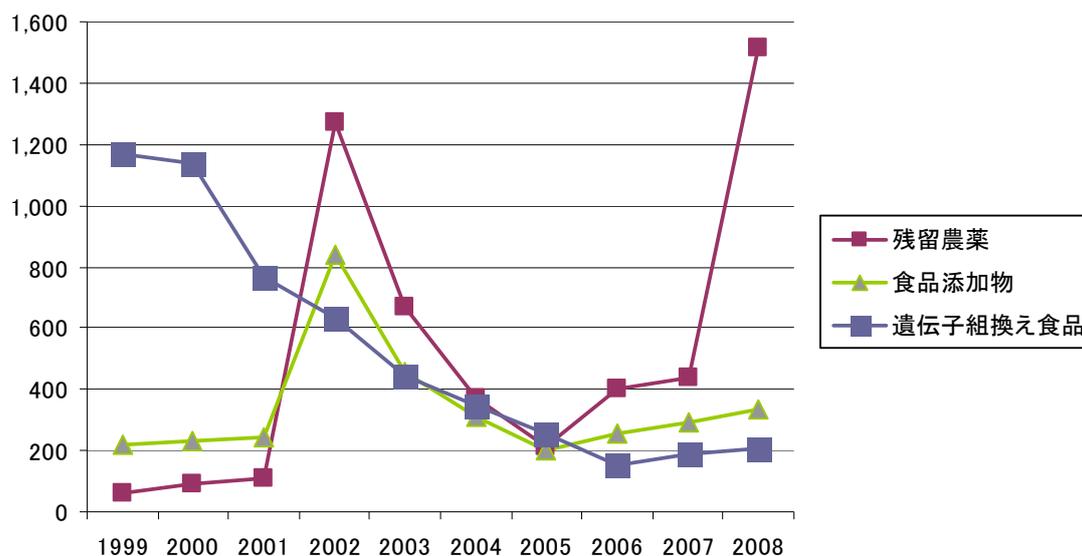
- 「日経テレコン21」の検索結果に基づいて、残留農薬、食品添加物、遺伝子組換え食品、BSEの報道件数を比較すると、圧倒的にBSEが多い。
- 遺伝子組換え食品の報道件数は過去約10年間のトレンドとしては減少傾向にある。（平成18（2006）年以降微増。）
- 遺伝子組換え食品以外のハザードについては、大きな事件・事故の発生に伴って報道件数が急増するほかは、特に目立つ傾向は見られない。日頃から時折コンスタントに取り上げられているが、際立った件数の報道があるわけではない。
- この傾向は、「食品安全」が特に話題となった平成20（2008）年の月別報道件数推移をみても概ね同様である。
- II-2. のインターネットアンケートでもハザードを問わず、不安を感じたきっかけとして「事件・事故のニュース・報道を見て」が圧倒的多数である結果からも分かる通り、事件・事故に伴って急増する報道によって不安感が強く喚起されることがわかる。
- 以上のことから、事件・事故報道によって喚起された不安感がそのまま残存して持続していくことがうかがえる。

〔過去10年間の残留農薬、食品添加物、遺伝子組換え食品、BSEに関する主な事件・事故等〕

2001年	日本初のBSE罹患牛が確認 食用牛の全頭検査導入
2002年	雪印食品の食肉偽装事件（外国産を国産と偽装） ミスタードーナツの肉まんに法定外食品添加物が混入 中国産冷凍ほうれん草から基準値を超えた残留農薬が検出
2003年	食品安全基本法制定、食品安全委員会設置 牛肉トレーサビリティ法施行（12月） 米国産牛肉の輸入停止（12月）
2004年	吉野屋で牛丼販売休止
2008年	1月 中国産冷凍ギョーザ事件 4月 吉野屋加工工場における米国産牛肉の特定危険部位発見 9月 中国におけるメラミンの牛乳へのメラミン混入事件

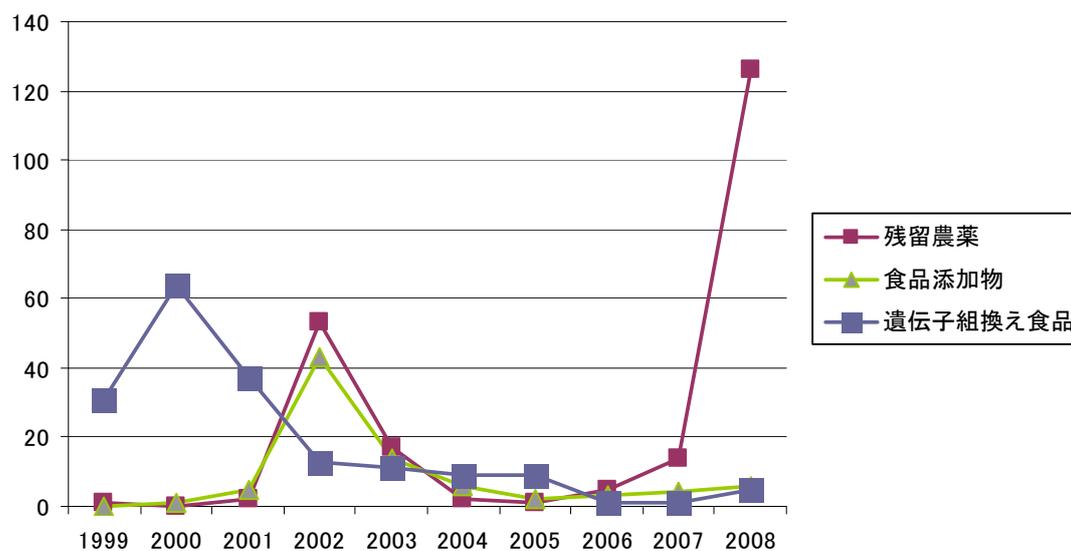
■年間記事数推移（残留農薬/食品添加物/遺伝子組換え食品）

※1999年～2008年各年について、朝日、毎日、読売、産経、日経4紙を対象に、「残留農薬」「食品添加物」「遺伝子組換え and 食品」それぞれを検索キーワードとして報道件数を検索した結果の推移を以下に示す（検索データベース：「日経テレコン21」）。



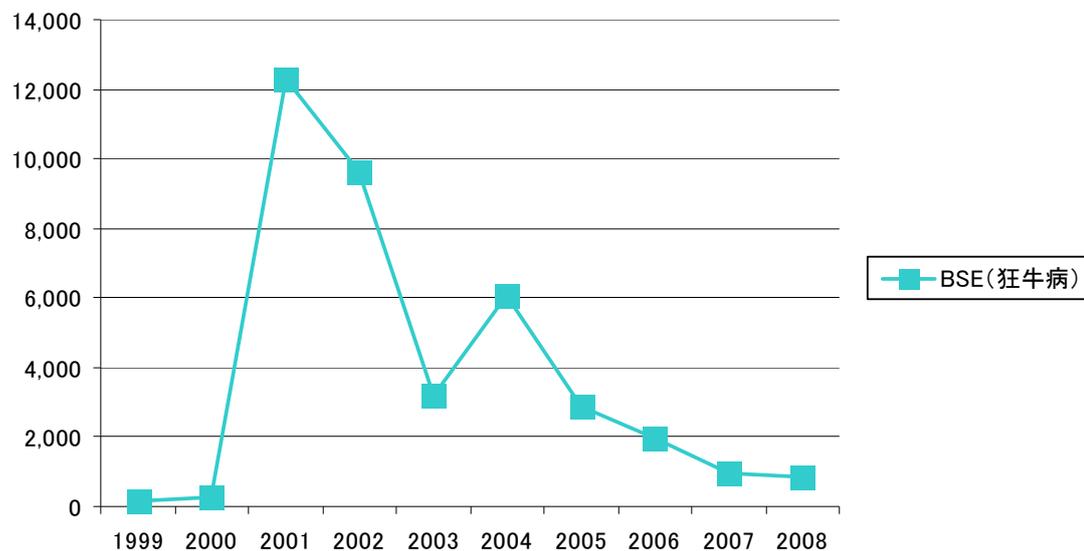
■NHKニュース年間報道件数推移（残留農薬/食品添加物/遺伝子組換え食品）

※1999年～2008年各年について、NHKニュースを対象に、「残留農薬」「食品添加物」「遺伝子組換え and 食品」それぞれを検索キーワードとして報道件数を検索した結果の推移を以下に示す（検索データベース：「日経テレコン21」）。



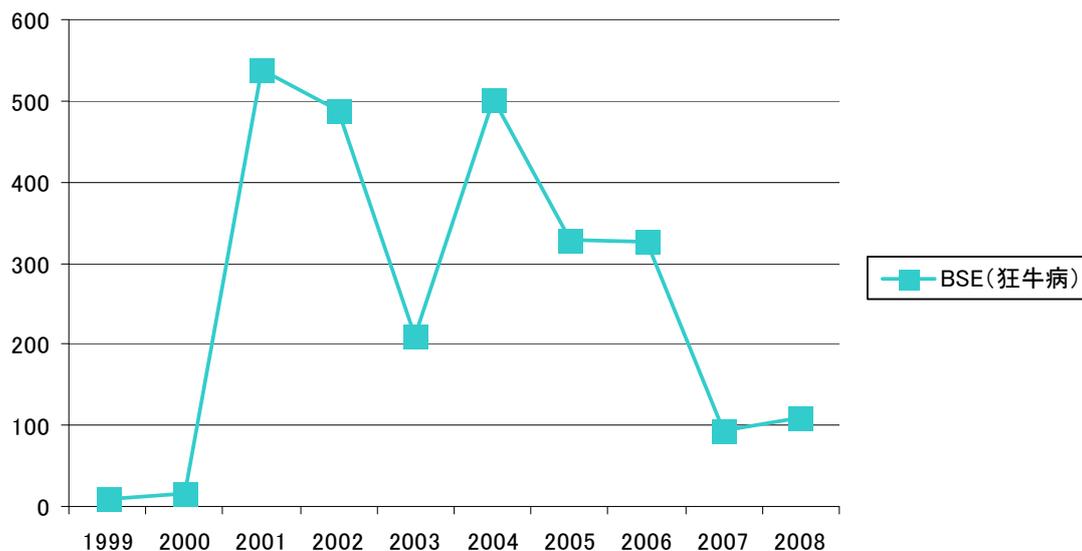
■年間記事数推移（BSE）

※1999年～2008年各年について、朝日、毎日、読売、産経、日経4紙を対象に、「BSE」を検索キーワードとして報道件数を検索した結果の推移を以下に示す（検索データベース：「日経テレコン21」）。



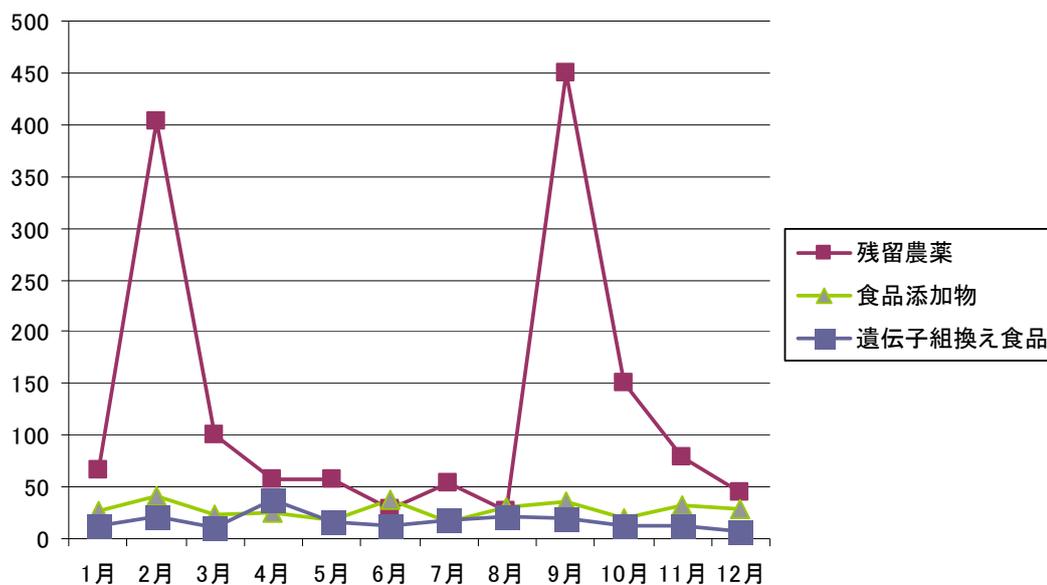
■NHKニュース年間報道件数推移（BSE）

※1999年～2008年各年について、NHKニュースを対象に、「BSE」を検索キーワードとして報道件数を検索した結果の推移を以下に示す（検索データベース：「日経テレコン21」）。



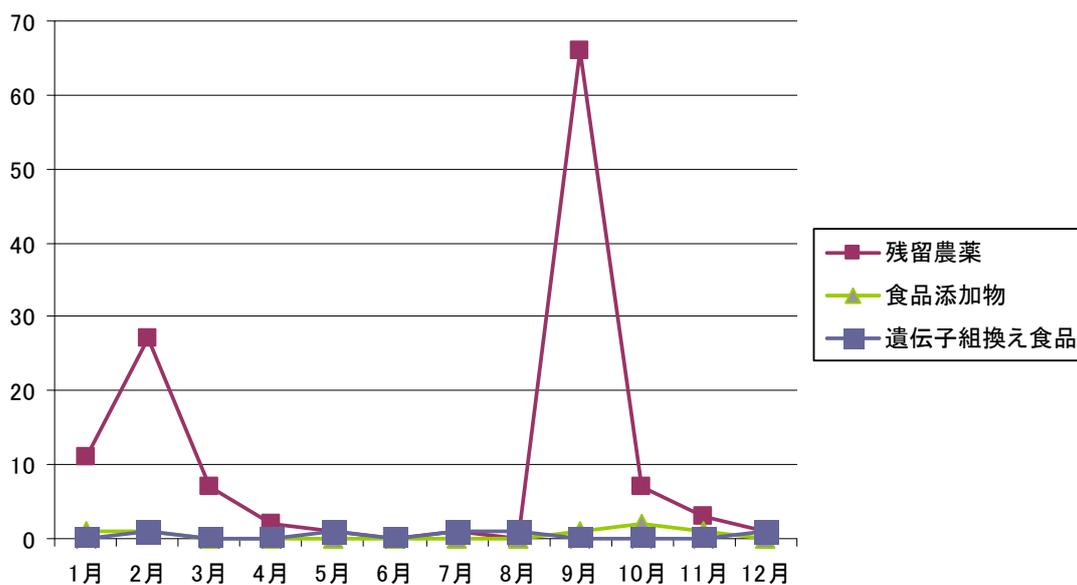
■ 2008年の月別記事数推移（残留農薬/食品添加物/遺伝子組換え食品）

※2008年1月～12月各月について、朝日、毎日、読売、産経、日経4紙を対象に、「残留農薬」「食品添加物」「遺伝子組換え and 食品」それぞれを検索キーワードとして報道件数を検索した結果の推移を以下に示す（検索データベース：「日経テレコン21」）。



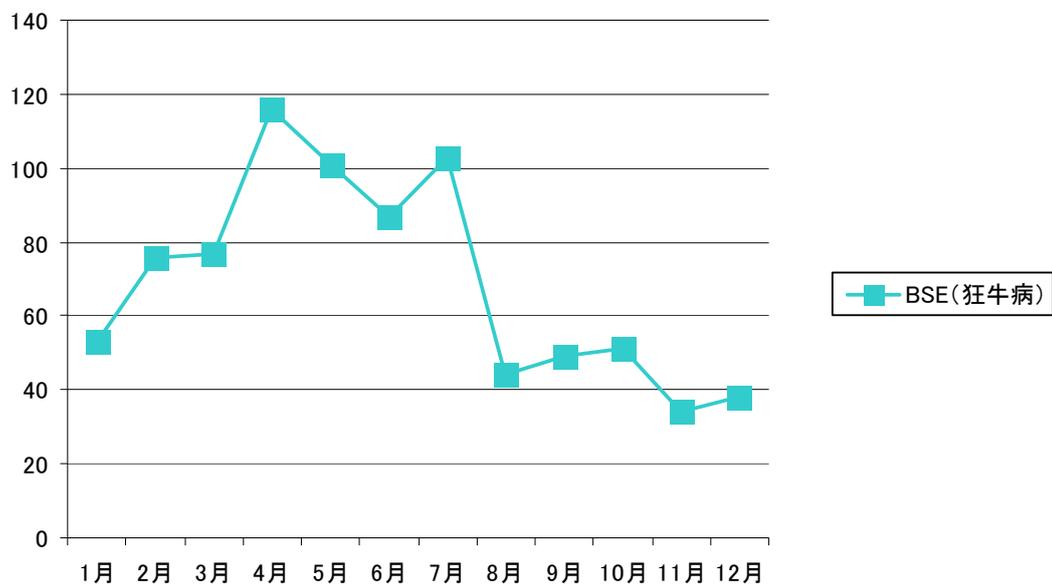
■ 2008年のNHKニュース月別報道件数推移（残留農薬/食品添加物/遺伝子組換え食品）

※2008年1月～12月各月について、NHKニュースを対象に、「残留農薬」「食品添加物」「遺伝子組換え and 食品」それぞれを検索キーワードとして報道件数を検索した結果の推移を以下に示す（検索データベース：「日経テレコン21」）。



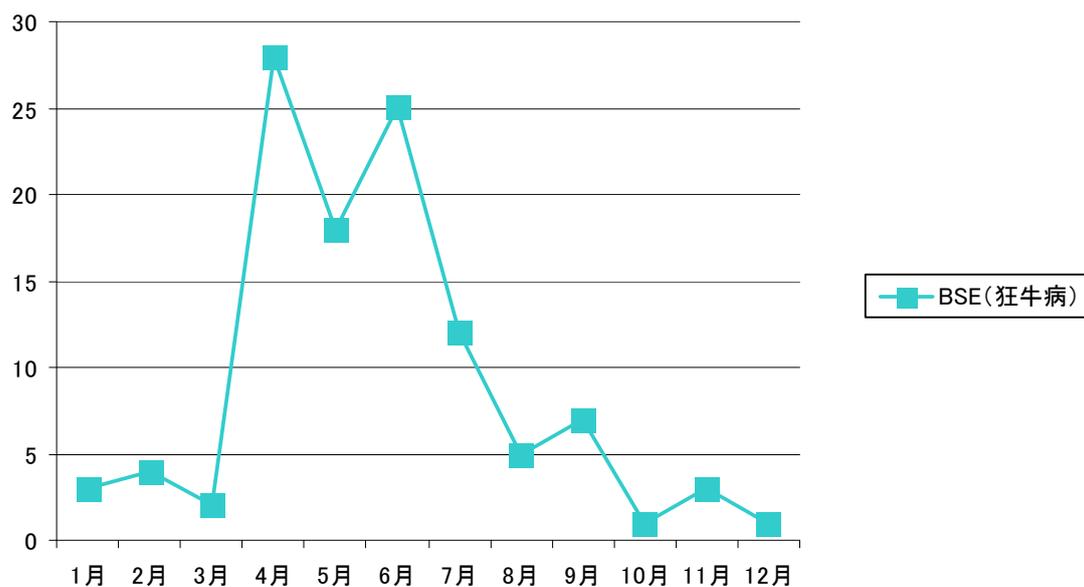
■ 2008年の月別記事数推移（BSE）

※2008年1月～12月各月について、朝日、毎日、読売、産経、日経4紙を対象に、「BSE」を検索キーワードとして報道件数を検索した結果の推移を以下に示す（検索データベース：「日経テレコン21」）。



■ 2008年のNHKニュース月別報道件数推移（BSE）

※2008年1月～12月各月について、NHKニュースを対象に、「BSE」を検索キーワードとして報道件数を検索した結果の推移を以下に示す（検索データベース：「日経テレコン21」）。



## 2) 消費者が不安に感じた情報源・情報内容（マスメディア）

※次頁以降（①～④）のハザード別の結果参照。

- 消費者に不安に感じた情報源・情報内容を尋ねると（Ⅱ－2. インターネットアンケート）、最近生じた事件・事故報道から、その事件・事故に関わるハザードに対する不安を感じたり（平成20年に生じた中国産食品に関わる事件・事故から残留農薬や食品添加物が不安）、衝撃的な映像から不安を感じている（牛がよろめく映像からBSEが不安）ことが分かる。
- また、ハザードを問わず全般的に具体的な情報源や情報内容は忘れた、分からない等、漠然とした回答も多くみられる。
- マスメディアが発信する個別具体的な食品安全情報の内容によって、理性的なりスク認知や判断によって不安が形成されているというよりは、事件・事故報道等における論調や映像などによる印象付けによって、感情面において不安が喚起されていることがうかがえる。
- ハザードを問わず不安を感じた具体的な情報源として、「NHKニュース」が数多く挙げられている。NHKでは、食品安全について「科学的な見地から多角的に取材し、不安をあおることがないように、安心情報も含め冷静に伝えることが大切である」（NHK新放送ガイドライン2008）との方針を持っているが、不安のきっかけとして多く挙げられているのは、上記のようなメカニズムによる不安喚起が生じているためであると思われる。
- そのほか、食品添加物については、「着色料」、「保存料」、「アレルギー」、「発ガン」といったキーワードから不安が感じられている。
- 遺伝子組換え食品については、「大豆」、「とうもろこし」、「アメリカ」、「将来」、「未知」といったキーワードが示されており、不安を感じる情報内容として、「人体への影響は未知」「将来的な影響は推測にしかすぎない」などが挙げられている。

〔日本放送協会（平成20年5月30日改訂）『NHK新放送ガイドライン2008』より〕  
（※「12 暮らしと社会」より「⑥食の安全と表示」の項を抜粋。⑤は「食を取り巻く環境」。）

- BSEや鳥インフルエンザ、食中毒、食品偽装など、食の安全に関する情報について視聴者の関心はきわめて高い。このため、正確な情報を迅速に伝える必要がある。情報を適切に伝えないと、買い控えなどいわゆる風評被害につながるおそれがある。科学的な見地から多角的に取材し、不安をあおることがないように安心情報も含め冷静に伝えることが大切である。
- 一般に健康によいと称して売られている健康食品やサプリメントは、「特定保健用食品」など一部を除いてははっきりとした定義はない。病気の症状の改善など効能をうたうことは法律で禁じられているので、栄養成分などの紹介にあたっては断定的な表現や、誇張は避ける。
- 健康食品の表示に関する法律は、食品衛生法、薬事法、健康増進法など多岐にわたっている。健康食品をめぐるのは、国民生活センターなどへの相談や苦情、法令違反も見られ、慎重に扱う必要がある。
- ダイエットは、生活習慣病の予防という視点から扱うこととして、瘦身願望をあおるようなことはしない。

※Ⅱ-2. のインターネットアンケートを活用して、消費者が不安に感じた情報源・情報内容を自由記述式により把握した結果を以下に示す。

①残留農薬

- 下記表は、残留農薬について不安に感じた情報源で、最も印象に残っている情報の具体的な内容について、出現したキーワードを多い順に並べ替えたものである。
- 情報内容として「中国」に関するものが多く、中国における冷凍食品からの農薬検出、ミルクへのメラミン混入事件、農薬を落とすため野菜を洗剤で洗うといった番組や記事が多数あげられている。

<キーワード頻出件数（上位 30 位）>

順位	キーワード	件数	順位	キーワード	件数
1	中国	328	17	毒	17
2	農薬、残留農薬	312	18	基準	16
3	人体	84	18	検出	16
4	記事	83	18	特集	16
5	有害	82	18	内容	16
6	報道	52	22	散布	14
7	ニュース	51	23	メタミドホス	12
7	野菜	51	23	危険性	12
9	影響	46	25	カップ麺	11
10	冷凍食品（冷凍いんげん、冷凍餃子等）	39	25	伊藤ハム	11
11	食品	36	25	いんげん	11
12	餃子、餃子事件	34	25	問題	11
13	混入	32	25	輸入食品	11
14	被害	22	30	殺虫剤	10
15	メラミン	19	30	最近	10
15	洗剤	19	30	事件	10

<具体的な回答内容（例）>

媒体	具体的な内容
NHKニュース	中国でメラミン混入ミルクで死亡したニュース
テレビのニュース	中国からの輸入冷凍野菜に殺虫剤の成分が入っていたニュース
報道21	中国では野菜をそのまま食べることはないと言っていた
テレビ	最近の中国からの輸入食品の残留農薬報道を見て
テレビの報道番組	中国の野菜や果実にかけられる農薬による被害の状況
ニュース番組	中国での栽培野菜に農薬を散布している画像
報道ステーション	中国・台湾のうなぎ養殖のシアン化合物(マラカイトグリーン)の使用
報道ステーション	中国の農薬入り餃子事件の一連の報道について
朝ズバ	中国の残留農薬、日常中国国民が洗剤で野菜を洗う。
とくだね(フジテレビ)	中国の主婦が、野菜などを専用の洗剤で洗っていた。
テレビ番組(番組名は忘れた)	中国の緑色に変わった川の横で野菜を育てていた
読売新聞	中国の人たちは野菜を専用の洗剤で洗っているという記事
日経新聞	中国から輸入した冷凍野菜から残留農薬が検出されたとの記事
中日新聞	中国での餃子・うなぎ・野菜等の一連の食材での報道
朝日新聞	中国からの輸入食品からの有害物質混入について
読売新聞	中国では恒常的に乳児の飲む粉ミルクにメラミンを添加していたという記事
読売新聞	中国の食品工場で作られた餃子に異常な数値の農薬検出
読売新聞	中国産野菜の残留農薬と日本の基準値との比較
毎日新聞	中国産の食材には残留農薬があるので、現地では農薬を洗い落とすために専用の洗剤を使用している
mixi	中国産の冷凍ぎょうざによる中毒事件

## ②食品添加物

- 下記表は、食品添加物について不安に感じた情報源で、最も印象に残っている情報の具体的な内容について、出現したキーワードを多い順に並べ替えたものである。
- 食品添加物に特徴的なキーワードとしては、「着色料」(66件)、「保存料」(16件)、「アレルギー」(11件)、「発ガン」(10件)といったものがみられる。

### <キーワード頻出件数(上位30位)>

順位	キーワード	件数	順位	キーワード	件数
1	添加物	177	16	ニュース	13
2	人体	86	16	記憶	13
3	有害	80	18	アレルギー	11
4	記事	68	19	発ガン	10
5	着色料	66	19	特集	10
6	影響	53	21	子供	9
7	中国	46	21	蓄積	9
8	食品	22	23	防腐剤	8
8	報道	22	24	毒	7
10	危険	21	24	混入	7
11	農薬、残留農薬	20	24	特集記事	7
12	メラミン	16	24	被害	7
12	保存料	16	24	不明	7
12	内容	16	24	本	7
15	使用	14	30	合成	6
			30	摂取	6

### <具体的な回答内容(例)>

媒体	具体的な内容
テレビ	着色料の人体への有害性に関する特番
テレビの報道	添加物がほとんど無かった昔に比べて今は、人体に与える影響が大きい。アレルギーなど。
とくだね	保存料や着色料が及ぼす影響
NHKドキュメンタリー番組(だったと思う)	児童がアレルギー(?)症状を起こし、全身に発疹が出て苦しんでいる様子
TV番組、特定できない	添加物の影響でガンになりやすい
各局のTV番組	特に子供にアレルギー表情が現れ、各添加物に対するアレルギーへの治療方法が確立されていない。
愛媛新聞	着色料の人体についての悪影響
上毛新聞	着色材のガン発せいについて
新聞各紙	着色料、保存料の人体への悪影響の記事
毎日新聞	着色料の発ガン性の記事
買ってはいけない	合成保存料等についての内容を読んだ記憶あり。危険である。
忘れた 写真週刊誌	コンビニ弁当に使用している着色料が人体に有害性があるという記事
生協	ウイナーなどの着色料、発泡剤
ボラン広場の宅配機関誌	保存料・着色料の催奇形性
自治体のイベント	保存料・着色料等の人体への有害性に関するデータ
山田博士いのち研究所「暮らしの赤信号」	着色料の人体への有害性に関する記事
YWCAセミナー	着色料の人体への有害性に関するセミナー
学校の授業	着色料の人体への有害性に関する資料
家族	ラーメンの添加物からアレルギーがでた。

### ③遺伝子組換え食品

- 下記表は、遺伝子組換え食品について不安に感じた情報源で、最も印象に残っている情報の具体的な内容について、出現したキーワードを多い順に並べ替えたものである。
- 遺伝子組換え食品に特徴的なキーワードとしては、「大豆」(63件)、「アメリカ」(14件)、「とうもろこし」(14件)のほか、「将来」(10件)、「未知」(6件)といったキーワードがみられ、「人体への影響は未知」「将来的な影響は推測にしかすぎない」といった回答があげられている。

#### <キーワード頻出件数(上位30位)>

順位	キーワード	件数	順位	キーワード	件数
1	遺伝子、遺伝子組換え	189	18	豆腐	7
2	人体	68	18	安全	7
3	大豆	63	18	不安	7
4	影響	53	18	問題	7
5	危険性	43	22	クローン	6
5	記事	43	22	未知	6
7	アメリカ	14	24	家畜	5
7	とうもろこし	14	24	ニュース	5
7	報道	14	24	危険	5
10	内容	11	24	使用	5
11	将来	10	28	悪影響	4
11	作物	10	28	解明	4
11	特集	10	28	心配	4
14	不明	8	28	生産	4
14	安全性	8	28	表示	4
14	可能性	8			
14	記憶	8			

#### <具体的な回答内容(例)>

媒体	具体的な内容
TVニュースや何かの番組	大豆やとうもろこし等、害虫に強く農薬が不要な植物DNAの特徴に関わる人体への影響がまだ解明されていない。
テレビニュース	豆腐の大豆の遺伝子組換えの仕組みをテレビで見た
テレビ番組	大豆の遺伝子組み換えで害虫が着かない
ニュースステーション	遺伝子組換え作物とそうでない作物を完全に隔離して栽培するのはむずかしく、どんどん交配が進んでしまう。大豆などほぼ輸入に頼る作物は、遺伝子組換えでないという表示はあてにならない。
一般のニュース	将来的な影響については推測にしかすぎない。
テレビのワイドショー	将来影響が出る
NHKドキュメンタリー	大豆の遺伝子組換えによる次世代への影響
NHKドキュメント	アメリカの遺伝子組み換え商品の現状と問題を紹介していた
TVの特集	まだ未知のもの 遺伝子組み換えの作物は奇形が多いと言っていた
NHK	遺伝子組み換えとうもろこしアメリカでは生産者でさえ子供には普通のとうもろこしをたべさせる。
朝日新聞	遺伝子組換え食品摂取による将来人体に及ぼす影響記事。
読売新聞	将来的なリスクがわからないという記事
毎日新聞	遺伝子組換え技術は進んでいるが、人体への影響はまだ未知という記事
中日新聞	一番目にしたのは大豆であるが、影響の度合いについての最終段階の結論は得られていないようだ、と理解している。
食品安全委員会公聴会	遺伝子組み換え大豆は安全だと力説していたが、根拠が示されなかった
生活クラブ生協の小冊子	遺伝子組換え大豆の輸入により、組み換えしていない大豆までも汚染される可能性がある記事

#### ④BSE

- 下記表は、BSE について不安に感じた情報源で、最も印象に残っている情報の具体的な内容について、出現したキーワードを多い順に並べ替えたものである。
- 印象に残っている情報内容として、「映像」に関するものが多く（106 件）、「牛のグロイ映像のニュース」「牛がよろよろしている映像」などテレビ映像を通してのインパクトが強く影響していると考えられる。

#### <キーワード頻出件数（上位 30 位）>

順位	キーワード	件数
1	BSE、狂牛病	253
2	牛	183
3	映像	106
4	記事	52
5	事件	48
6	事故	44
7	イギリス	43
8	報道	37
9	アメリカ、アメリカ牛	36
10	被害、被害者	23
11	ニュース	22
11	病気	22
13	感染	21
15	発症	16

順位	キーワード	件数
16	食肉汚染	15
16	脳	15
18	影響	14
19	記憶	11
19	人間	11
19	ヨロヨロ、ヨタヨタ、フラフラ	11
22	輸入牛、輸入牛肉	10
22	事件事故	10
22	人体	10
25	牛肉	9
25	死亡	9
25	実態	9
28	症状	8
28	肉	8
28	発生	8

#### <具体的な回答内容（例）>

媒体	具体的な内容
ニュース7	狂ったような牛の映像
ニュース番組	足腰の弱った牛の映像
ニュース番組	牛が立てなくて震えてる映像
ニュース番組	BBSの牛がよろよろしている映像
各局のニュース	狂牛病にかかってフラフラになっている牛の映像
各局のニュース映像	イギリス・アメリカなどのヘタ牛の映像
夕方のニュース番組	牛がフラフラで倒れる映像が怖かった 人間も同じようになるかと思うと恐ろしい
めざましテレビ	牛のグロイ映像のニュース
テレビ(情報番組)	BSEの牛の映像、食した事による被害者の映像
TBSTVで	真っ直ぐに歩けなくなった牛の映像やイギリスで発症した若い女性の映像
イギリスのテレビ映像です。	牛が立てなくてよろよろしている映像です。
複数の番組	発症牛の映像、脳の解析映像等

## (2) 中学・高校の家庭科資料集（副読本）

※調査対象として収集した家庭科資料集（副読本）計14件（高校生用11件、中学生用3件）について、食品安全に関する箇所の内容等を整理した結果は以下のとおりである。なお、以下に示す事項は、問題のある記述であることを適示するものではなく、また調査対象の全ての資料集に掲載されていることを意味するものではない。

- 食品安全に関しては、全般的に食中毒、食品添加物、食品表示について取り上げている資料集が多い（食に関しては食品安全のほかにも食料自給や食文化、食と環境などの内容が取り上げられている）。遺伝子組換え食品や輸入食品等の残留農薬、BSEなどのトピックを取り上げている資料集もある。そのほか、食の安全を揺るがす問題として、様々な食品関連の事件を取り上げている資料集もある。
- 「食品添加物の複合摂取、継続摂取の健康影響が明らかでないため、食品添加物はできるだけ避けるほうがよい」といった趣旨の記述が、多くの家庭科資料集（副読本）で取り上げられている（あるいは、単に食品添加物をできるだけ避けるよう示唆する記述や、心配なもの・発がん性が懸念されるものとして具体的物質を適示するものもある）。
- 資料集の中には、食品添加物について、かつて安全とされていて禁止されたものが存在することを紹介したり、問題を示唆するものがある。なお、直接の情報源ではないと考えられるが、II-1. フォーカスグループインタビューでも添加物がよくないものであるとのイメージの根拠として、家庭科授業で類似の点を学習したことを挙げた調査対象者が存在する。
- 遺伝子組換え食品について取り上げているところでは、表示についての知識を与えるのが典型的な情報内容であるが、社会的背景からの問題点や、環境影響及び食品安全の観点からの懸念など、警鐘的な論調の記述が比較的多いのが特徴として挙げられる。
- 食品安全に関する科学的情報としては、主に食中毒の原因細菌・ウイルス等に関する情報や食品添加物の物質名や用途に関する情報、そして通常、資料集の主要コンテンツを構成している成分表（市販の加工食品やファーストフード等の成分表も多くの資料集で掲載）などが取り上げられている。そのほか、食品添加物の使用基準設定の考え方について、最大無作用量（No Effect Level）や1日摂取許容量（ADI）の概念を視覚的表現で示している資料集もある。

## 2-2. 情報源における情報発信の考え方・方法等

### (1) マスメディア（新聞〔全国紙〕、テレビ報道番組）

#### 1) マスメディアの取材・情報発信の考え方・方法等

##### <取材・情報発信の考え方・スタンス>

- 新聞でもテレビでも生活者、消費者（読者、視聴者）の視点、立場に立って、食の安全が守られているかという点について取材・情報発信するというスタンスが持たれている。特に生活面の記者は、暮らしに役立つ情報の発信が主眼となっており、とりわけ消費者に近い立場からの発信が大事にされている。
- 日々の事件・事故等報道を中心に、速報性が重視されており、食品安全に関する事案では、できるだけ早かつ確に、安全なのか危害があるのかという生活者、消費者が求める情報を伝えたいという考えに基づいて取材・情報発信が行なわれている。とりわけテレビでは速報性が重視され、安全性の検証よりも危害情報が優先的な発信事項と認識されている。
- 食品安全に関する科学的根拠に言及する場合、論争的な点については両論（社説ではこれに限らない）を、未知・未解明な点についてはその旨を取り上げることで、生活者、消費者に判断材料を提供するとの基本認識が持たれており、安全なのか危害があるのかという点を伝えるために、国から科学的根拠情報を得るニーズは高い。しかし、速報性の使命の中で、適時かつ的確な情報の不足感から、十分な情報発信をしにくいとの認識が示されており、実際にはケースバイケースで対応していることがうかがえる。

##### <取材・情報発信体制、方法>

※取材・情報発信体制については、調査対象から得られた範囲の情報を基に概略を示す。全てのマスメディアが同様の体制にあるとは限らない。

- 新聞では、編集担当部署の社会、経済、生活、科学などの各々が、食に関する話題・出来事をそれぞれの視点で取材し、紙面に取り上げている（日々の事件・事故等については主に社会、経済各々が記事にし、生活担当部では日々の事件・事故等を受けて暮らしに役立つ情報の発信を行なっている）。
- 記事を担当する編集担当部署と社説を担当する論説委員所属部署は分かれており、執筆についても特に強い連携関係はない（論説委員が編集担当部署各部署の部長が兼任するなど上層部での連携が図られているが、一義的に記事を執筆する記者サイドでは社説論調の影響を受けることはないことがうかがえる）。
- 日々の事件・事故等の記事については、まず現場記者が取り上げるかどうかを判断して、本社デスクが採否、修正を行ない、さらに編集全体で紙面都合を勘案して最終的に採否が固まる体制にある。各面での特集記事は、編集担当部署各部署レベルで紙面作成され、一面での特集記事、大型特集記事などは編集担当部署全体で部際により紙面作成されている。

- テレビ報道番組では、取材・情報収集上、取材担当部の記者も主要な役割を担っているが、番組構成上は報道番組のディレクターが果たす役割が大きく、特に企画コーナーで何をどのように取り上げるかのハンドリングは、ディレクターサイドが行なう体制にある。
- 新聞でもテレビでも、情報源として食品安全委員会は直接的には恒常的・継続的な取材対象となっていない。農水省や厚労省のリリース・記者発表等での食品安全委員会のデータ等への言及をきっかけとして、必要に応じて、ホームページ等での発信情報の参照・確認をする程度であることがうかがわれる。

## 2) 食品安全に関する情報に対する認識・取り上げ方

- 生活者、消費者の立場に立って、できるだけ早く、安全なのか危害があるのか、どのように気をつければよいのか、という重要な情報を的確に伝えることが使命である点が共通認識として持たれている。
- 安全なのか危害があるのかという点や、その科学的根拠について正しく伝えることを旨としながらも、適時情報が不足する中で速報性の要請から、危害可能性の示唆などに踏み込まざるを得ない場面もある。この点について、リスク情報がきちんと伝わらないと生活者、消費者の不安を増大させてしまう恐れがあると認識し、適時・的確な情報の不足感との間で、どのように発信するか困難に直面する記者も少なくないことがうかがえる。
- 記者には、誤って小さく報じてしまう失敗を恐れる意識があることを指摘する声もあり、国からの情報提供においても、マスメディアが「ひとまず問題があるかもしれない」というスタンスで大きく構える特性があることを理解して、知りたいことに応える的確な情報提供が求められている。

## 3) 食品安全委員会に対する認識、期待・要望等

- 食品安全委員会は存在感がないと認識されており、食品安全委員会自らがもっと前面に出て情報発信を強化する必要があると指摘されている。
  - 食品安全委員会自身の認知度が低い。国民にとって「食品安全委員会が言っているから大丈夫だ」という存在になり得ていない点が残念に思う。
  - 具体的に何をしている機関なのか明確でないところがあり、偉い人が何かやっているというイメージがある。顔が見えないという印象。
  - もっと食品安全委員会の活動についてアピールしたほうがよい。国民に対してアンケートをしたら、ほとんどの人が知らないと答えるのではないか。
  - 世間で食のリスクに関する話題が持ち上がったときに、食品安全委員会が自ら率先して、物質の特徴や、安全性について、説明するほうがよい。
  - なにか事件・事故が発生したときに、食品安全委員会はあまり表に出てこない。もっと出てくるべき。

- 情報発信の強化とともに、勧告権の行使による存在感の向上も期待されている。
  - 全然使っていない勧告権を行使すべきではないか。
  - 勧告権限も行使すべき。
  
- 食品安全委員会が発信する情報は分かりにくい、伝えたいことが何なのかが分からないと指摘されている。勉強会等の開催を求める声も。
  - ホームページ等で発信されている情報を参照することがあるが、内容が難しく、読み解くのが困難である。
  - 分かりにくいだけでなく、何を伝えたいのかが分からない。
  - 内容が専門的なので、定期的に記者を集めて勉強会やレクチャーを開いてもらいたい。
  
- 生活者、消費者が本当に知りたいことに応えていない、実際に暮らしの中で役に立つ確かな情報が発信されていないと指摘されており、緊張感を持って生活者、消費者の懸念に応える姿勢が求められている。
  - 読んでいると言質をとられたくないという雰囲気が伝わってくる。
  - 国民が知りたいことに応えていない印象がある。
  - 物性として危ないかどうかということだけではなく、もっと国民の食生活に応じてどのようなリスクがあるのかという具体的な情報の提供をしてもらいたい。
  - 国民はその情報が正しいのかどうかの判断ができない。正しい情報を食品安全委員会が伝えなければいけない。情報を集める努力をしていないと思う。
  - 食品安全委員会や食品安全担当部局が食の安全のことをやっているから大丈夫という意識になってしまっていて、・・・行政機関だけではなく、業者も農家も含めて、あらゆるところで、緊張感が欠けていたのではないか。食品安全委員会もリスクコミュニケーションを行なう上で、食品安全の仕組み全体が有機的に機能するように、意識できていないのではないかと思う。（一部抜粋）
  
- 食品安全委員会からの情報発信は遅いと指摘されており、適時発信が求められている。また、全て分かってから発信するのではなく、途中経過を含めて随時に情報発信することが求められている。
  - 事件・事故発生時にホームページ上にコメントを出したりはしているが、タイミングがけっこう遅い
  - 全て分かった上でまとまってから発表するのではなく、分かっている範囲で随時に情報提供してもらいたい。
  - 新しく得ようという情報が食品安全委員会にはない。

- 食品安全委員会からも世間が一番騒いでいる時に適時に情報提供してもらいたい。また、科学的根拠が分かってから公表するのではなく、途中経過を含めて情報発信してもらいたい。
- リスク管理機関寄りとの認識も持たれている。情報発信の仕方からリスク管理機関寄りの誤解を招いているのではないかとの指摘もある。
  - 管理機関寄りというところもある。農水から生まれた組織ということもあるのかもしれない。狂牛病については、先に安全だという結論ありきで動いていた。政治問題とも関連し、中立的とはいえない。
  - 情報発信やアナウンスの仕方から変な誤解を与えて、リスク管理機関寄りの印象を与えてしまいがちという面があるかもしれない。

## (2) 中学・高校家庭科資料集出版社

### 1) 家庭科資料集（副読本）の編集・執筆の考え方・方法等

#### <編集・執筆の考え方・スタンス>

- 家庭科資料集は、検定を受ける教科書では扱われていない面を補完するものとして執筆・編集されており、実際に現場教員が使いたいもの、生徒に伝えたいことが内容の主眼とされている。
- 生活者として自ら考え判断できる自立・自活的な能力を養うという観点から、様々な判断材料を中立的に提供していくという考え方に基づいて編集されている。
- 実際の消費生活では科学的根拠のみを判断材料とするわけではないとの視点から、科学的根拠となるデータとともに、事件・事故など他の要素も盛り込まれている。また、科学的に不明確なことや論争的な事項については、両論を取り上げるというスタンスがとられている。
- 上記の観点から、基本的には、価値判断や断定的叙述は極力避けるという考え方で編集されているが、実際には執筆を分担する現場教員の認識が加味されることもある。
- 現場教員からは、事件・事故などの時事的トピックや、食品添加物に関する内容を充実させてほしいというニーズが高い（そのほか、食料自給率、食育）。

#### <執筆・編集体制、方法>

- 執筆・編集体制は、現場教員と出版社編集担当から構成される委員会で方針を決め、現場教員が直接、分担執筆されることが多い（図表・写真等のクリエイティブ面について出版社編集部が協力する程度。またコラム等コンテンツによってはライターに依頼されることもある。）。
- 執筆・編集時の情報源は、基本的には国をはじめ公的機関の統計データ等を利用する方針のもと、執筆を担当する現場教員が決めている。民間研究機関のデータが利用されることもある。

- また、事件・事故の紹介など、コンテンツによっては新聞記事を情報源とするものもある（出版社によって新聞記事の編集により構成された家庭科資料集もある）。
- 家庭科資料集の編集スパンが長いので既刊では食品安全委員会の情報は取り上げられていないが、今後編集されるものについては、基本的には参照する意向が持たれている。

## 2) 食品安全に関する情報に対する認識・取り上げ方

- 食品添加物の複合摂取、継続摂取に関する懸念や、食品添加物等はできるだけ避けるほうが望ましいとの認識は、家庭科教育関係者（現場教員、編集者）の間では一般的な理解として浸透していることがうかがえる。
- 食品の「安全」と「安心」は異なるもの、両面について捉えるべきものと認識されている。実際の生活では科学的根拠に裏付けられる「安全」だけで行動するわけではないことから、家庭科教育では「安全」と「安心」の両面から自ら判断する能力を養うための材料を提供するという姿勢が持たれている。

## 3) 食品安全委員会に対する認識、期待・要望等

- 食品安全委員会に対する社会的信頼感がまだ醸成されていないと認識されている。
  - 世の中（家庭科教員を含む）では「食品安全委員会は信頼できる」という雰囲気はまだ醸成されていない。
  - 消費者の立場を含めて中立的なのか疑問視する現場教員がいる。
- 食品安全委員会からの情報提供は、上からの目線という印象で、消費者の目線とギャップがあると指摘されている。
  - 専門家が上から科学的に「安全」と言っている印象で、消費者が「安心」と受けとめることとの間に温度差があるのを感じる。
  - 消費者の「安心」を見据えた情報提供がなされていないのでは。
- わかりやすい情報提供（セミナー等を含む）、正しい情報の迅速提供が求められている。
  - 消費者が自立・自活した生活を営むために必要な食品安全に関する知識をまとめて、わかりやすく提供してもらいたい。そのような資料があると、家庭科資料集でも取り上げやすい。
  - 食品安全に関する講習会（家庭科編集者向けなど）のようなものがあれば是非受講したい。
  - メールマガジンや「食品安全」をみても専門的で難しく、なかなか読まない。結局何なのかわからない。
  - 正しい情報を迅速に提供してほしい。以前、情報提供を留保していたことがあったという印象を持っている。

## 2-3. 訪問インタビュー調査結果

※以下では、訪問インタビュー調査において、個別の調査対象者から得られた回答結果を示す。

### 2-3-1. マスメディア

#### (1) マスメディア①（全国紙記者〔社会〕）

##### 1) 情報源において発信している典型的な情報内容

- 毒ギョーザ、事故米、ウナギの産地偽装等の事件・事故など日々のニュースについて報じている。そのような事件・事故報道の際に、過去に起きた類似の事件・事故やチェック体制の実態など少し掘り下げた記事を出すこともある。
- 自分自身は社会部で食品分野を担当している。主に農水省で取材して社会面に載るようなニュースを取り上げる。食品分野でも政策的なトピックは経済部が担当するが、明確な境目はなく、ケースバイケースで相談しながら記事を書いている。科学的、専門的なトピックになると科学担当の部が記事を書くこともある。

##### 2) 情報源における情報発信の目的、ターゲット

- 毒ギョーザや事故米など、食の安全に関する事件・事故を報じるときには、それが人体にどのような影響があるのか科学的根拠に基づいて説明できるのは、食品安全委員会しかない（農水省も食品安全委員会によると、という言い方）、そのリスク評価結果をどのように分かりやすく、かみくだいて書くことができるかという点に留意している。それがニュースの価値を決めるひとつの指標になると思っている。
- ニュースは速報性が求められるので、人体にどのような影響があるのか、安全なのかどうなのか、という点をできるだけ早く伝えたいと思っている。しかし、農水省も食品安全委員会が示すデータに言及するだけなので、いまひとつ的確に情報発信しにくいところがある。

##### 3) 情報源にとっての食、食品安全に関する関心事、注目トピックとその理由

- 読者の関心が高いのは、食の安全。特に産地偽装など表示偽装は関心が高いと思う。
- そのほか、自給率の問題など。
- 食に関する話題は読者にとっても身近なことなので、食品安全に限らず全般的に読者の関心が高いと思う。人に直接危害が加わるようなことでなくても、食に関わることであればニュースが大きくなる傾向はある。
- 最近では、食品添加物や遺伝子組換え食品など個別のハザードについて取り上げるという視点ではみていない。遺伝子組換え食品などは取り上げたいと思うが、日々のトピックに追われているので、なかなか余裕がなく手がまわっていない。

#### 4) 食、食品安全に関する取材・情報収集の方法

- 現場で取材している中で、記事になるかならないかは、まず現場記者が価値判断する。現場記者がニュースになる、記事にする必要があると判断すれば、記事を書いて本社に送る。
- 現場記者が必要と判断して記事原稿を書いても、本社のデスクが必要ないと判断すれば、ボツになることもある。デスクは、商品に足るように記事原稿の手直し、校正も行なう。部長は部の責任者であるが、日々のニュースについてはデスクに任されている。世間を震撼させるような大事件のときは、部長が直接、取材や編集の指示をすることもある。
- デスクが記事にすると判断しても、たくさんの記事があるので、編集で見出しをつけたり、レイアウトをする段階で、紙面事情から採用されないこともある。
- よって実際に紙面に掲載されるまでに、現場記者、デスク、編集の判断を経る。
- ただし、現場記者が記事にしないと判断しても、本社からネット上の情報等をみて、記事にするように指示が下りてくることがある。
- 社説については、論説委員が属する部で担当し、内容についても完全に分かれている。日々のニュースの記事と社説の論調が分かれることもありうる。

#### 5) 取材先や出典等

- 自分自身は、主に農水省内をあちこちまわって取材している。
- 食品安全委員会には恒常的な取材は行っていないが、例えば、毒ギョーザや事故米の事件のときに、混入している農薬等の化学物質が安全なのかどうか、どの程度安全なのかということを確認するためにホームページ上で発信している情報を参照したり、不明点を電話等で取材している。
- 食品安全委員会に対する取材は、必要に応じて。記事を書く上で、リスク判断が必要なときに取材する。
- 食品安全委員会常駐の記者はいないと思う。少なくとも社会部にはいない。
- そのほか、必要に応じて取材上の付き合いのある食品メーカーから情報を得たり、取材することもある。

#### 6) 食、食品安全に関する情報発信の方法

- 食の安全に関して社会面で取り上げるニュースは、不安があるような事案が発生した場合である。よって、何故不安なのか、詳しい具体的事実をいかに簡潔にわかりやすく伝えるかという点に留意して記事を書いている。
- 食の安全に関して不安な事案があれば、ここに不安があると注意喚起をしたり、逆に安全なのに不安であると誤解を呼んでいる事案があれば、正しい情報を伝える。

## 7) 食、食品安全に関する情報ニーズ

- 我々は速報性が重要なので、「それは、安全なのか、どうなのか」というところを早く知りたい。しかし、例えば事故米のときにも、農水省が、かびや残留農薬の安全性を説明する際に、「食品安全委員会によると・・・と示している」ということしか言わない。縦割りなので、食品安全委員会が示している情報に対して評価を加えて説明しないし、説明できる材料も持っていない。国民からみれば、農水省も食品安全委員会も同じ国の行政機関であるので、安全なものであれば安心感をほしい、安全でないならそういう情報をほしいと思っている。メディアには安全かどうかは判断できないので、発信するときに困る面がある。国も責任があるので立場上、安全であるとはっきりとは言いにくいことは分かるが、こういった課題について議論してもらって、もう少し情報発信を強化してほしい。
- 一応、農水省が言及した食品安全委員会のデータを記事には書くが、的確に伝えられないところを感じる。食品は口に入ることなので、リスク評価がきちんと伝わらないと余計な不安を煽ってしまうことにつながる。実は大騒ぎするほどではないのかもしれないが、大騒ぎになってしまう。マスメディアにも伝え方が悪いという責任がないわけではないが、情報源である農水省や食品安全委員会からもっとリスク評価についての的確な情報提供をしてもらえたら、と思う。

## 8) その他、意見・要望等

### <食品安全委員会の情報発信に対する認識>

- 食品安全委員会は自ら前に出て発信していない。世間で食のリスクに関する話題が持ち上がったときに、食品安全委員会が自ら率先して、物質の特徴や、安全性について、説明するほうがよい。断定しにくいことは理解できるので、安全であるとは言わなくてよいが、もう少し情報発信に力を入れてもらいたい。
- 食品業界は農水省、食品衛生は厚労省、リスク評価は食品安全委員会と、国民にとっては分かりにくい体制である。組織体制がこのようになっているのは仕方ないが、この仕組みでいくのであれば、もう少し自分達がやっていることをアピールして、存在感を示してほしい。アピールするために、記者を利用してもらいたい。特に食品安全委員会は、事件・事故発生時に一義的に発表する農水省や厚労省と比べて存在感が薄いので、もっとしたたかに自らの存在を主張してもらいたい。農水省や厚労省の発表のときに、食品安全委員会も出てくるとか、他省庁の発表の情報をつかめないなら、農水省や厚労省の発表後、例えば数時間後に、安全性や危険の可能性について上乗せで発表するといったこともやってよいのではないか。
- 説明不足感があるので、マスメディアの特性を踏まえて情報発信を強化してほしい。我々は情報発信するときに、失敗を恐れている。問題ないと誤解して、ひとたび小さく報じてしまうと修正しづらいので、ひとまず問題があるかもしれない、

と大きく構える特性がある。そこに、わけがわからない情報提供をされたり、説明不足感があると、もしかしたら害があるかもしれないと消費者に不安を与えてしまうような情報発信をしてしまうかもしれない。

- また、自分自身は食品安全委員会がリスク管理機関寄りとの印象はないが、情報発信やアナウンスの仕方から変な誤解を与えて、リスク管理機関寄りの印象を与えてしまいがちという面があるかもしれない。安全性について科学的に断定したり、立場上、明言しにくいことは分かるが、安全性や危険な可能性をうまく示唆する必要があるだろう。説明が足りない。説明不足だから、あらぬ疑念を抱かせることにつながっているように思われる。
- (「7) 食、食品安全に関する情報ニーズ」も参照。)
- 食品安全委員会からも、取組みや、このリスク評価を行ったといった案内はもらっていて、全く努力していないとは思わない。しかし、やはり内容が専門的なので、定期的に記者を集めて勉強会やレクチャーを開いてもらいたい。
- また、食品安全委員会の取組みも何をやっているかといえば、リスク評価だろうとなんとなくは分かっているが、逆に言えば漠然としか分かっていないので、テーマを絞って分かるように発信してほしい。記者向けのを特別に作らなくても、国民向けのを作成して記者に提示してもらえれば、国民にも伝わる。積極的に自らをアピールするとともに、分かりやすく発信してほしい。
- 食品安全について、これを見れば基本的なことは分かるというような冊子も整備してもらいたい。

## (2) マスメディア② (全国紙記者〔生活〕)

### 1) 情報源において発信している典型的な情報内容

- 近年ふたたび食の安全を揺るがす事件が発生していることなどから、食については、読者の関心も高く、不安を感じている面もあるだろうということで、去年は、部際の企画としてシリーズで食に関する特集記事も連載した。
- その他通常は食に関して事件・事故などが発生すると、各担当部が記事にしている。事件・事故であれば社会、食品の値上げや食品業界動向などであれば経済、人の健康に関わるような科学的な話題であれば科学や医療、消費者の視点から暮らしに役立つ情報であれば生活の各部が取り上げる。

### 2) 情報源における情報発信の目的、ターゲット

- 食品安全に関する情報発信について会社全体での統一したスタンスのようなものはないが、食の安全が守られているかどうかという点について、新聞社として検証するというのが基本となるだろう。これについて、各部の視点で取り上げる。生活担当の部であれば、消費者の視点で取り上げる。
- 自分が属する生活担当の部では、日々の生のニュースそのものを取り上げるので

はなく、生のニュースを受けて、食品の値上げで暮らしをどうしたらいいのか、危ない食品が出回っているとすれば、どうすればいいのか、といった消費者・生活者の視点から暮らしに役立つ情報を記事にしている。その意味では、食に関して消費者に最も近い立場で情報発信しているのは、生活担当の部であると言えるだろう。

#### <科学的根拠への言及について>

- 食品安全に関する情報発信をする際に科学的根拠に言及する場面はある。
- 科学的見解が分かれる場合は、まずは見解が分かれていることを報じるべきで、我々も素人なので、通常、片方の見解を取り上げることはない。見解、意見が分かれていることをはっきり知らしめる。
- 逆に消費者が非常に不安に思っているときに、実はそれほど問題ではないという場合は、それを報じる。
- 科学的根拠に加えて消費者の不安の問題が別としてある。科学的には安全だが、それを口に入れることの不安ということはあると思う。未知、未解明の部分があれば、それはなおさらである。よって、いま分かっている範囲では安全だが、未知、未解明の部分があるのだとすれば、それも取り上げるという考え方である。
- 安全だけど不安ということに関わることを記事にすることは、色々な意見を併記したり、未知、未解明の部分はそれとして書くことで、消費者に判断材料を提供するという点に留意している。
- ただし、以上の科学的根拠に関する情報の取り上げ方については、ケースバイケースなので、あまり一般化して言うのは難しい。

#### 3) 情報源にとっての食、食品安全に関する関心事、注目トピックとその理由

- クローン牛のリスク評価が終わったので、今後、市場に出てくるのかどうかという点については関心がある。決まったらどんな記事を書こうかということは考えている。
- そのほかにも、食品回収、加工食品の表示、食品の値段に動きによる生活防衛などに関心を持っている。
- 食品安全委員会ができて5年経過したが、未だに食の安全をおびやかす事件・事故が出てくるのはなぜか、ということが気になっている。そもそもBSEが発生したときに肉骨粉をきちんと規制できておらず、どこもチェックできていなかったことから、独立した第三者機関として食の安全を守る食品安全委員会ができたはず。しかし、それによって状況がよくなったかというところ、やはり事件・事故が頻発している。食品安全委員会を含めた食品安全の仕組み全体が、あまりうまく機能していないのではないかと感じている。
- 機能していないというのは、食品安全委員会のリスク評価機能が働いていないと

か、食品安全の仕組み自体が機能していないといったことではない。食品安全委員会も数多くの件数のリスク評価を実施してきており、そこに誤りがあるというような問題もないと思う。しかし、食品安全委員会を含めた食品安全の仕組み全体の形はできていて、その形のところだけは機能しているが、仕組み全体が食品安全が確保されるように有機的に働くような意識が浸透していないように感じられる。

- 例えば、汚染米の事件で、一義的には業者が悪いと言って批判を受けて、農水相とともに次官も辞任したが、業者が悪いのは確かだが、食の安全についての意識が無かったのではないか。食品安全委員会の設置と期を同じくして、農水省にはリスク管理部門として消費安全局ができていますが、当該部局は食の安全をしっかり意識しているのかもしれないが、今回の事件の担当部局は総合食料局で、ここでは食の安全の意識が欠落していたのではないかと感じる。食べ物の安全に従事しているという緊張感がない。つまり、食品安全の仕組みを構築したことで逆に、食品安全委員会や食品安全担当部局が食の安全のことをやっているから大丈夫という意識になってしまっていて、農水省はどの部局でも食の安全に密接に関わっているという緊張感が欠けていたように思われる。行政機関だけではなく、業者も農家も含めて、あらゆるところで、そういった緊張感が欠けていたのではないか。
- 食品安全委員会もリスクコミュニケーションを行なう上で、食品安全の仕組み全体が有機的に機能するように、上述のような広範囲なところを射程として網羅するように意識できていないのではないかと思う。食品安全に直接関わる主体についてはリスクコミュニケーションをやっていたのであろうが、大局的な視点が欠けているのではないか。このように、これまで食品安全委員会のリスクコミュニケーションが及んでいなかったところについて、食品安全委員会が中心になってみんなでカバーしていくことが不可欠であると思う。

#### 4) 食、食品安全に関する取材・情報収集の方法

##### <生活担当部について>

- 生活担当の部では、生のニュースに連動して、暮らし面で何をやるかという考え方で取材する。
- 何か事故が起きたとか、問題のある事態になったというような生のニュース自体は、社会、地方などの生ニュース担当部が取材して取り上げる。そのような生ニュースを受けて、暮らしに役立つ情報として取り上げるのが生活担当の部。事件・事故を受けて、生活担当の部の視点であらためて取材をする。
- 例えば、中国産ギョウザの事件自体は社会や地方の担当部が記事を書くが、暮らし面では、冷凍食品が大丈夫なのか専門家の話を聞いて記事にしたり、中国産が全部危ないというもおかしいとか、メタミドホスを摂取してしまったらどのように対処すればいいのか、どのような中毒症状があるのか、といったことを記事

にする。

- そのほか、企画ものについては、テーマを決めて、みんなで話し合っ、何を取り上げるか決める。

#### <企画記事、解説記事について>

- 1面に掲載するような部際の年間企画は、前年秋ぐらいにテーマなどを固めて準備する。編集局全体の会議で決まったことが下りてきて、「それでは生活担当の部ではこういうことをやろう」といった流れである。
- 暮らし面の中での企画ものは、生活担当部の内部で決める。部長やデスククラスの判断で決まる。これは他の面でも同様である。
- 解説記事は、生ニュースに対応して担当部に解説記事を書くように指示が上層から下りてくることもあれば、現場から売り込んで決まることもある。ケースバイケースである。

#### 5) 取材先や出典等

- 科学的根拠に関する情報については、当局の見解も取材するし、民間の専門家にも取材する。

#### 6) 食、食品安全に関する情報発信の方法

- (「4) 食、食品安全に関する取材・情報収集の方法」を参照。)

#### 7) 食、食品安全に関する情報ニーズ

- (「2) 情報源における情報発信の目的、ターゲット」、「8) その他、意見・要望等」を参照。)

#### 8) その他、意見・要望等

##### <食品安全委員会の情報発信に対する認識>

- リスクコミュニケーションについて、色々と工夫して取組んでいるとは思いますが、ひまひとつ、うまくいっていないのかなという印象がある。
- 冊子とかホームページなどで色々と情報発信しているが、マスメディアは全部を取り上げることはない。また、専門家が発信しているというイメージが強いので、もう少し生活者の目線にするにはどうすればいいのかということが課題になっている。そのこと自体は食品安全委員会も認識しているだろうし、わかりやすく説明しようとする努力は感じるが、なかなかうまくいっていない。
- リスクコミュニケーションをやったからそれでいい、わかりやすく説明したからそれでいい、というところで終わってしまっているように思う。緊張感が足りないという印象がある。どんな情報発信やリスクコミュニケーション活動をやったとしても、それで納得してもらえたと思うのではなく、まだまだうまく伝えられ

ていないことを真摯に伝えていかなければならないというスタンスを持たなければならぬと思う。行政とマスメディアや消費者との間により対立的な緊張感を持ち続けることが必要だと思う。消費者も厳しい目を持って注視しなければならないし、食品安全委員会をはじめ説明する側も、それに対してどうしてそうなのか、ときちんと構えて対応していかないといけない。取り込もうとしてはいけないと思う。取り込もうとすれば離れていってしまうだろう。

- どうも発信している情報をみている、いつもきちんとリスク評価してます、リスク評価をしたから安全です、安全と伝えているのになんで納得してくれないの、というような雰囲気を感じる。そうではなくて、消費者側の緊張感を抱いて情報発信してもらいたいし、自分たちもまだまだ十分ではないというところも発信してほしい。逆に、うまく伝えられないんだという部分を発信していくほうがよいのではないか。
- わかりやすくするという点では、委員会の科学者、専門家自身も日頃、食事をしたり、買い物をしているわけだし、家庭では主婦であったり親であったりするはずなので、委員自身が生活の中でどのように考えたり、どのように選んだり、買ったりしているのかというところをもっと発信してもよいのではないか。例えば、委員が交代でブログに、こういうものを食べたとか、買い物では表示のこういうところを見ているとか、うちでは期限が切れたけど食べているとか、もう少し、科学者、専門家自身の生活を出してほしい。そこから、食品安全に関する事案についてのコメントを付したり、さらに専門的な科学的情報にリンクしたりすれば、親近感を持って、入っていきやすくなるのではないだろうか。同時に消費者意見を書き込めるようにするということも考えられるだろう。
- 食品の科学的安全性に関する情報発信だけではなく、それを踏まえて、食の安全性に間接的に関わるような食の現状についてのトピックも、もっと発信してもよいのではないか。

#### <食品安全委員会に対する意見>

- 全然使っていない勧告権を行使すべきではないか。例えば、汚染米のような問題について勧告権を行使できないのか。勧告する前に問題が発生してしまっている。
- なにか事件・事故が発生したときに、食品安全委員会はあまり表に出てこない。もっと出てくるべき。委員長は表に出てくるのは食品安全委員会の役目ではないと言っているが、それなら内閣総理大臣が出てきてもいい。

#### (3) マスメディア③ (全国紙記者〔生活〕)

##### <食品安全委員会の情報発信に対する認識、及び意見等>

- 食品安全委員会自身の認知度が低い。国民にとって「食品安全委員会が言っているから大丈夫だ」という存在になり得ていない点が残念に思う。
- 認知度の低さは、生活をしている中でも食品安全委員会のことを耳にすることは

ないし、取材をしている過程でもそう感じる。また、色々な業界の人に会う機会があるが、食品安全委員会が何をしているのか認識されておらず、よく何をしているのか尋ねられる。

- 食に関して事件・事故があっても、まず食品安全委員会が前面に出て発表することはない。もう少し大々的に記者会見をするなど派手なパフォーマンスをやってもよいのではないか。
- 事件・事故発生時にホームページ上にコメントを出したりはしているが、タイミングがけっこう遅い。2日、3日経ってからようやく出てくる。ひとまず、その場で分かっている範囲でもよいので、時宜に適った情報発信をしてもらいたい。事件・事故が発生したときは、適時に、どのように事態を認識して、食品安全委員会としては何をやらなければならないかと思っているのかといったことを伝えるべきだと思う。それがリスク管理機関ではないから食品安全委員会の役割ではないというのであれば、なんのためにある機関なのか分からない。
- ホームページ等で発信されている情報を参照することがあるが、内容が難しく、読み解くのが困難である。分かりやすく書いているつもりであろうが、読み手には分からない。
- 分かりにくいだけでなく、何を伝えたいのかが分からない。発信情報を見ても、何をどのように気をつければよいのか分からない。どのように気をつければよいのか、どのように行動すればよいのかといった点についても、もう少し発信してもよいのではないか。
- 読んでいると言質をとられたくないという雰囲気が伝わってくる。立場はよく分かるが、それでは何をしていくのか、何を伝えていくのかというコンセンサスがなかなという印象を持っている。リスクコミュニケーションの勉強会やサイエンスカフェを開くなど色々努力しようとしていることは理解できるが、分かりやすさとか、何を伝えるのかという基本的なところがいまひとつはっきりしない。
- 発信している情報が実践的ではない。メラミンの情報提供についても、いきなり化学式のような情報が出てくるが、国民はこのような情報を一義的に知りたいわけではないような気がする。もっと暮らしの中でどのように気をつければよいのかを知りたいと思っている。まとめを読んでいても、結局なにが言いたいのか分からない。国民が知りたいことに応えていない印象がある。
- 物性として危ないかどうかということだけではなく、もっと国民の食生活に応じてどのようなリスクがあるのかという具体的な情報の提供をしてもらいたい。例えば、EUではヨーロッパに加工品と入ってくるチョコレートやビスケットにどのくらい入っているかということまで評価して、チョコレートやビスケットを沢山食べる約5%の子どもが、そのまま食べ過ぎるとなんらかの健康障害が出る可能

性があるといった情報提供まで行なっているということを耳にした。そのほうが国民にはきちんと伝わると思う。

- 厚労省で、魚介類等に含まれるメチル水銀に関する風評被害について検証しているらしいが、メチル水銀の数値データがリリースされたときも、バンドウイルカにどのくらい含まれるかとか、金目鯛を一週間に1回以上食べるなといったことが書き綴られていた気がするが、日本でバンドウイルカを食べる人や、金目鯛を一週間に1回以上食べる人がどのくらいいるだろうかと思う。基本的には妊婦にとってリスクが高いということがポイントだったと思うが、妊婦にフォーカスした情報提供は、わずかであった。メディア側も情報を読み解く能力が必要ではあるが、もう少し、誰に向けて、なぜこの情報を発信するのかということを考えて発信する必要があるのではないか。
- なにか事件・事故があつて問題だということになっても、なにがどのように危ないのか、あるいは危なくないのかが伝わらないまま、「危ない」というイメージだけが一人歩きするようなどころがある。もちろんマスメディアも同様に考えていかなければならないが、情報を伝える側として、そのような事態にならないように情報提供がどうあるべきかということを考えていく必要があると思う。
- 一番大事な情報が伝わっていないような気がして危惧している。このような状況がもしかしたら風評被害という状況を招いているのかもしれないし、逆に本当に緊急の事案が発生したときに、きちんと大事なことが伝わるのか疑問がある。
- 暮らしの中でどのように気をつければよいのかといった国民が知りたいことに応える上で、科学的に分からないときは、分からないものとして、分かる範囲でこうなんだという情報提供をするということによいと思う。全て分かった上でまとまってから発表するのではなく、分かっている範囲で随時に情報提供してもらいたい。そのほうが、食品安全委員会の認知も高まると思うし、国民にとって「食品安全委員会が言っているから大丈夫だ」と思える存在に繋がっていくと思う。

#### (4) マスメディア④(全国紙論説委員)

##### 1) 情報源において発信している典型的な情報内容

- 社説で中国製ギョーザ事件を取り上げた。中国に早く事件の解明と公表を求めるもの。

##### 2) 情報源における情報発信の目的、ターゲット

- 会社として特別なスタンスはないが、消費者、読者の立場に立って発信している。

##### <科学的根拠への言及について>

- 一般的なニュースについては、科学的見解について論争的なものは、基本的には両論を書く。

- 社説は慎重に議論をし、両論併記する場合もあれば、そうでない場合もある。ケースバイケース。

### 3) 情報源にとっての食、食品安全に関する関心事、注目トピックとその理由

- 中国製ギョーザ事件からちょうど一年経つ。あとは中国の捜査次第であり、事件の早期解明と真相の公表が求められる。ギョーザに限らずこの手の事件は今後も続くと思う。
- 少し前にも、乳製品へのメラミン混入事件があった。この事件は、中国国内に大きな人的被害を引き起こし、海外にも輸出され問題となった。
- さらにもう少し前の話であるが、アメリカで中国産原料を使用したペットフードで犬や猫が死んでしまった事件があった。アメリカの食品メーカーでは「China Free（中国産原料不使用）」のマークを導入するところも出てきた。
- クローン牛については、安全性が確保されているというスタンスには立っているが、なぜ寿命が短いかなど未知な部分もあり、何が起こるか分からない。
- 未知な部分があるものとして、一番典型的なのは、人間の血液など生物由来の薬品。薬害エイズ問題にみるように、人間の血液には何が入っているかわからない。未知のウイルスが入っている可能性もある。
- 未知のものを食べたり、薬として使ったりすることによって引き起こされる被害については、例え専門家であっても分からないかもしれない。それを未然に防ぐための努力を続けていかないといけない。そうでないと被害が今後も繰り返されてしまう。
- 新しい病原体といわれているプリオン。プリオン病について、いままで人間は知らなかった。普通のタンパクがある日突然異常タンパクに変わっていく。その原因がまだ解明されていない。
- 遺伝子組換え食品も安全かもしれないが、解明されていない未知の部分があり、長い時間経つとどのような影響がでるのか分からない。
- このように、便利になればなるほど、それに伴う未知のリスクが積みまとう。その意味で食品安全委員会が果たすべき役割を大きいものと見ている。

### 4) 食、食品安全に関する取材・情報収集の方法

#### <社説について>

- 社説は、毎朝 11 時から 12 時のあいだ、20 人から 30 人くらい集まり、その日のテーマを何にするか議論して、2 本選ぶ。テーマが決まってから、社説を書く担当を決める。
- 既に記事化された情報をベースに論説委員の中で話し合いがされているので、編集局との連携はとれている。論説委員の中には、各部の部長も出ている。
- ひとつの社説を実際に書くのは一人だが、記事の内容は、社内の議論を経て当紙の考えとして書いている。自分が書くときも、議論を経るので、個人の考えと違

うことを書くこともある。

- 論説委員自ら直接取材に行くが、時間がないときは電話で取材をすることもある。

#### 5) 取材先や出典等

- 食品安全委員会に取材しなくても、農水、厚生省を押さえておけば十分情報がとれる。入ってくる情報が、農水、厚生省のほうがしっかりしている。新しく得ようという情報が食品安全委員会にはない。

#### 6) 食、食品安全に関する情報発信の方法

＜一般記事、解説記事について＞

- 日々のニュースは知り得た時点ですぐに記事にする。それが新聞やテレビなどマスコミの基本。
- 時間と紙面のスペースの余裕があれば、解説記事を書く。解説記事を書く場合は、記者が専門家の意見を取材して書く。専門家によって意見が分かれる場合は、両方の話を入れる。
- 速報性と科学的根拠のバランスについては、まず被害発生があれば、その事実はすぐに報道するだろう。例えば、断定はすぐにできなくても、もし遺伝子組換えやクローンが原因と考えられるような場合は、遺伝子組換えやクローンが原因の可能性があるという表現で、すぐに記事にすることもあるだろう。

#### 7) 食、食品安全に関する情報ニーズ

- (「3) 情報源にとっての食、食品安全に関する関心事、注目トピックとその理由」参照。)

#### 8) その他、意見・要望等

＜食品安全委員会の情報発信に対する認識＞

- もっと食品安全委員会の活動についてアピールしたほうがよい。国民に対してアンケートをしたら、ほとんどの人が知らないと答えるのではないか。
- 食品安全委員会は専門家の集まりであり、専門的な情報は蓄積され、より細かい分析を行うことができる。そういうこと（深く細かい分析）と迅速で的確な情報収集・提供を、同時平行でやっていかないとだめだと思う。
- ギョーザ事件が発覚して、国民は冷凍食品全般に対して不安を持つようになった。国民はその情報が正しいのかどうかの判断ができない。正しい情報を食品安全委員会が伝えなければいけない。情報を集める努力をしていないと思う。

＜食品安全委員会に対する意見＞

- ギョーザ事件に対して、事件は警察の仕事で自分たちには関係ないと、食品安全委員会は初め動こうとしなかった。事件かどうかは調べないと分からないことで、

情報のない早い段階で、事件だから関係ないと動こうとしないのはおかしい。

- お役所仕事になってしまっている印象があるので、もっと民間のシンクタンクを活用してもよいのではないか。
- 勧告権限も行使すべき。
  
- 管理機関寄りというところもある。農水から生まれた組織ということもあるのかもしれない。狂牛病については、先に安全だという結論ありきで動いていた。政治問題とも関連し、中立的とはいえない。
- 安全対策、衛生管理の面で、医学、厚労省寄りの観点が不足している。食品安全委員会は農水の出身者が多く、産業を盛りたてようという農水省系の立場では、安全に対して甘くなる。厚労省系の食品衛生の観点をもっと取り入れていかないといけない。農水自身も組織改革を行ったがまだ足りない。事故米は典型的な事件。
  
- 遺伝子組換え食品、クローン牛など、未知のものに対する不安感は当然ある。だからといって、不安、不安と逃げているわけにはいかない。食糧危機は訪れており、遺伝子組換えやクローン牛は食糧生産の上で有効な技術になるだろう。有効なものを安全に使っていくにはどうすればよいのか。便利になればなるほど、危険性が潜むが、その危険性をいかに排除するか。そのためには専門的な研究が必要であり、それを担っているのが食品安全委員会。これからもっと新しい技術が出てくると思うが、それに対応した研究活動に力を入れていかないといけない。
- 航空機事故の場合、国土交通省の事故調が動く。事故調は、航空分野から鉄道分野まで取扱う範囲を拡大し、航空事故、鉄道事故の原因の究明や今後の事故防止のために必要な調査を行っている。アメリカの事故調は、NTSV（国家運輸安全委員会）といって、大統領直轄の機関である。事故を未然に防ぐために起きた事故の原因を探り再発防止のための改善策を考えている。食品安全委員会もしっかりした組織・体制をつくり、事故の原因究明、未然防止に努めないといけない。

#### （５）マスメディア⑤（テレビ局〔キー局〕記者）

##### 1) 情報源において発信している典型的な情報内容

- 毒入りギョーザやウナギの産地偽装等の事件などの事件発生に伴う報道のほか、食品偽装や、食品表示など食をテーマにしてシリーズ企画ものを制作、放送することもある。企画ものは、通常の日々の報道とは異なり、長期的な調査取材も行う。例えば、独自にサンプルを集めて分析を依頼し検証するといった構成や、密着取材による構成などがある。

##### 2) 情報源における情報発信の目的、ターゲット

<食品安全に関する報道・情報発信についての基本スタンス>

- 視聴者、消費者の目線に立つというのが基本スタンスである。
- 食品安全委員会が発表する科学的根拠に基づく情報があれば報じると思うが、タイミングが重要。世間が一番騒いでいる時にその情報があれば報じる。
- 伝える側としては、安心と安全は同じカテゴリーだと思う。両方を同じレベルで伝えなくてはならないと思っている。
- テレビという媒体の特徴からも速報性が重視され、まずは危険性の報道が先。安全性を検証するのは、その次のステップだろう。
- 事故米のような事件では、メタミドホスが含まれた米が流通している可能性があるとかわかれれば、安全でないかもしれない可能性があるという段階でも、消費者が被害を受ける可能性があるのであれば、まずは報道するのが我々の役割だと思っている。
- 去年の餃子でも、色々な業者から同一メーカーの商品が売られている。安全でないかもしれない可能性があることをまずは知ってもらい、視聴者が買った餃子はその業者のものでないか、確かめてもらうことが大切だと思う。
- 留意点としては、報道によって不安をあおりすぎてはいけないと思う。

#### <電波媒体としての報道・情報発信のスタンス>

- 後で読み直せる新聞とちがって、テレビ番組は基本的に放送されたら終わり。別の作業をしながら、視覚または聴覚だけで視聴している人もいる。そのため、1回の放送で理解できるよう、新聞よりも分かりやすさが求められると思う。ぱっと見てわかるような映像や言葉の選択などで工夫をしている。
- 不安をあおりすぎないようにすることとのバランスに配慮している。

### 3) 情報源にとっての食、食品安全に関する関心事、注目トピックとその理由

- これまで食品安全に関して取り上げたテーマは、単純化すれば食品加工から流通までの間に、偽装をするような悪い業者がいて消費者が被害を受けるという構図であった。今後は、表示の偽装に加えて毒入り餃子のような問題も含めて、食品の安全をいかに確保すべきか、というテーマでやっていきたいと思っている。
- 農薬や食品添加物は何らかの事件が発生しているわけではない。事件が発生すれば、事件の発生原因や周辺問題を掘り下げて番組化することもある。その観点から、今は食品偽装に関する番組が多い。
- 遺伝子組み換え食品について去年は取り上げなかった。局内では遺伝子組み換え食品を扱おうという意見もある。安全性や実際の被害等に関するデータや何らかの研究発表があればその時に報道することになるだろう。
- 番組で扱うテーマは世の中の関心がどこにあるかを総合的に判断して決定している。何か指針があるわけではないので、社内の最大公約数で決まっていく。世の中の情報ニーズがどこにあるのかを探るのは難しいところだと思う。
- 消費者の食に対する不信感が高まったのは2008年の春、夏頃がピークだったので

はないか。3、4年前までは食品は安全で当たり前だった。ミートホープの食肉偽装事件のあたりから関心が高まり、一時期落ち着いていたものの、最近の汚染米事件でまた関心が高まっているのではないか。

- 世間の関心が一旦高まったらそう簡単には下がらない。最近では多くの消費者がパッケージ裏の表示をよく見ている姿を見かけるようになった。一昔前は表示など見なくても安全が当たり前なので関心を払っていなかった。逆に、これまで我々は食品に無関心すぎたのかもしれない。

#### 4) 食、食品安全に関する取材・情報収集の方法

##### <番組制作方法、制作体制>

- 報道番組における取材・情報収集、制作には、主に報道番組のディレクターと、取材部の記者の両方が関わる。常時、記者クラブ等で取材・情報収集しているのは記者であるが、報道番組をどのように組み立てるか、企画もののコーナーで何を取り上げるかといったことは、ディレクターや番組スタッフの取材・情報収集による面もある。記者が取材してくる情報を含めて、番組として組み立てていく。
- 記者は、担当分野、担当記者クラブ等が分かれていて、記者クラブや取材対象との個人的なつながりによって取材・情報収集しているところがある。報道番組の構成はディレクターサイドで行なうところが大きい。そのため、番組で取り上げるかどうかという意味では、記者が取材・情報収集している全ての情報がディレクターのところまで伝わってくるわけではない。食品安全委員会は、取り上げられにくい位置にいるかもしれない。

##### <企画ものの制作について>

- まず、報道番組専属のディレクターが「そういえばこんな話を聞いた」というネタをきっかけとして、テーマを決めて企画書を書く。そこに、取材部のほうの記者クラブで取材している記者や、テーマについて継続的に取材している記者、単発で情報収集、リサーチを担当するスタッフなど色々な人員が関与して番組を制作する。ディレクターのほうでリサーチや裏取りなどのハンドリングをして最終的に番組として組み立てる。
- きっかけのネタから番組の方向性を具体化するために、もう少しリサーチをしたり、ディレクターと記者と一緒に打合せをすることもある。

##### <ストレートニュースについて>

- 日々の事件・事故等を報じるストレートニュースは事実の報道のみであるが、取材・番組制作の流れは企画ものでも同様である。地方局の記者からキー局へ送られてきた情報や、キー局の記者が国側から裏を取った情報などをもとにニュースにする。

## 5) 取材先や出典等

- 取り扱うテーマによるが、食に関するトピックであれば主な取材先は農林水産省。
- 食品安全委員会は、あまり普段からまめに動向を把握する対象ではない。若手がリサーチ段階で食品安全委員会にも電話したことがある程度。

### <記述内容の根拠>

- 科学的根拠に基づく情報が利用可能であればもちろん報道する。国の公式発表は大きな拠り所である。
- ディレクターは記者の取材報告を受けて、番組素材として組み立て、必要に応じて記者にさらに情報の裏を取るよう指示する。

## 6) 食、食品安全に関する情報発信の方法

### <視聴者へ伝えたいポイント>

- 消費者目線、被害者の目線で報道することを心がけている。例えば偽装では、消費者にとって被害にあったかどうか分からないからこそ、実際のところ被害はどのようなかを報じることが大切だと思う。
- 視聴者の率直な「なぜ」に答えることが役割だと思う。
- 事件が発生した際にはまず、「何が起ったのか」「安全なのか」という順に関心に移る。安心の前に安全がある。
- 番組の構成を検討する際は「何を伝えたいのか」を考えている。事実の報道以外には何を伝えるべきなのかを考える。

## 7) 食、食品安全に関する情報ニーズ

- 安全かどうかについて関心が高まっている時に国からの情報があれば、安心につながると思う。国の情報は言わばお墨付きの意味合いを持つので安心できる。
- 食品安全委員会の情報発信については、結果公表の際に知るのではなく、途中経過を含めて知りたい。結果公表するかどうかは別に、今何を分析しているのかを知ることができれば、準備して見ていられる。

## 8) その他、意見・要望等

### <食品安全委員会の情報発信に対する認識>

- 消費者も科学的根拠に基づく情報があれば安心感をもてると思う。国の情報はやはり大学やその他の研究機関とは信頼感が違うと思う。中立性、正確性の点では間違いがないと思う。
- テレビ報道であるため速報性が重視されるので、食品安全委員会からも世間が一番騒いでいる時に適時に情報提供してもらいたい。また、科学的根拠が分かってから公表するのではなく、途中経過を含めて情報発信してもらいたい。

#### <食品安全委員会に対する意見・要望等>

- 具体的に何をしている機関なのか明確でないところがあり、偉い人が何かやっているというイメージがある。顔が見えないという印象。
- 他の省庁にも言えるが国の役人がやっていることは視聴者・消費者からは見えにくいことが多い。一方で、国が発表したものは信頼できるのだろうと受けとめている。

### 2-3-2. 中学・高校家庭科資料集出版社

#### (1) 中学・高校家庭科資料集出版社①

##### 1) 情報源における情報発信の目的、ターゲット

- 生活者として自立・自活するための能力を養うというコンセプトで編集した。
- 高校生が卒業後一人暮らしをすることが多いという現状を踏まえ、調理の基本など自炊することを想定した構成になっている。生活全般について実際に役立つ情報や、食を色々な視点から考えられるよう食文化や食品産業に関わるコラムの充実に努めた。
- 教科書で扱う内容は検定があるため、少し古い話題になってしまう。そのため、資料集は教科書の補完として新しい情報を提供することを重視している。教科書に比べると話題性があるものを取り上げる。
- 昨今では授業時間数の不足等により授業で紹介しきれないことがあるので、生徒が読むだけでわかるようにとの狙いから、データや写真とともに一口解説も加えている。教師からの要望による。

#### <食品安全に関する情報発信についての基本スタンス>

- 編集のスタンスとしては、食品安全のためにこうすべきといった断定的な記述を避け、異なる立場の見解があれば両方の立場を取り上げるようにしている。
- 食品添加物や遺伝子組み換え食品をなるべく摂らないでほしいというのは、現場の家庭科教員の多くが認識していること。科学的根拠だけで言えば安全かもしれないが、実際の生活での選択や判断は、科学的根拠が全てではない。科学的根拠だけの話であれば、家庭科では扱わないだろう。
- 以前は食品添加物は何がなんでも駄目という現場教員が多かったが、以前に比べれば、食品添加物に対する否定的なトーンは薄らいだと思う。食品添加物をゼロにすることはできない等、ある程度理解が進んだのではないか。自分で表示を見てなるべく添加物の少ない食品を選ぶようにという指導になっているようだ。
- 食品添加物の複合毒リスクについては、現場教員の間でも、全ての組み合わせを実験したわけではないだろうし、人工物はないにこしたことはないので、できるだけ少ないほうがよいだろうと認識されている。
- 複合毒等の不安要素も残っているため、資料集では両論併記の形をとっている。

メリットだけを記述すると食品添加物は何も問題がないということになり、生徒が勘違いする。

## 2) 情報源にとっての食、食品安全に関する関心時、注目トピックとその理由

- 食品業者のモラル低下に伴う食品偽装問題や食料自給率の低下に関心がある。自給率の低下は大きな問題だが、個人で対策できることが少なく、国としての対策が必要。
- 遺伝子組み換え作物は、現状の自給率が十分であればそもそも必要ないはず。とはいえ、安全性の証明は十分でないと感じている。また、科学者や研究者が安全であると言っても消費者の安心には必ずしもつながらないのではないか。
- オーストラリアではこれまで遺伝子組み換え作物の許可には慎重であったが、最近では導入を検討しているという。日本では食料を輸入に依存しているため、今後難しい選択を迫られることになるだろう。

## 3) 食、食品安全に関する取材・情報収集の方法（注力点、工夫点、留意点等）

### <コンテンツ作成方法、作成体制>

- 資料集作成に当たっては、現場の教師 10 名強程度から成る編集委員会を組織し、編集側のコンセプトに沿って構成を検討していく。現場教師である委員は構成や内容の検討から執筆までを担当する。
- コラムなどの執筆はライターに依頼することもある。
- 既刊の資料集は、2006 年が直近の改訂だが、資料集自体は 10 年以上前からある。毎年データの更新は行っている。

## 4) 取材先や出典等

- 資料集で使用するデータは、大抵、執筆者の先生方の指定があるが、先生方の依頼で内容に適したデータを編集部で調べることもある。使用するのとは基本的に公的な統計データで、一部民間の研究機関のものもある。データのグラフ化など見せ方については編集側で工夫する。
- 食品安全委員会のデータも参照対象となり得る。
- 新聞記事については全く利用していないわけではないが、掲載の許諾を得る手間があるため、あまり引用しない。

### <記述内容の根拠>

- 食品安全に関する記述内容の科学的根拠については、執筆者から参考資料リストの提示を依頼して確認している。編集側がおかしいと感じる内容については執筆者に指摘しているが、価値観に関わる部分は裏を取ることが難しい。執筆者の責任の範囲で記述してもらおう。

#### 5) 食、食品安全に関する情報発信の方法

- 資料集編集のスタンスとしては、現場の教員のニーズに応えることを重視している。
- 現場の教員の声は、出版社の営業に寄せられるものもあれば、編集委員会の開催時等に寄せられるものもある。編集部へ直接連絡がくることもある。
- 食品添加物、時事的な話題、食料自給率、食育等は記述を充実してほしいとの要望が多い。食品成分表については、生徒が普段口にする市販品やファミリーレストランのメニュー等の成分を紹介してほしいとの声も多い。
- 特に時事的な話題は、現場の教師から新聞の切り抜きをして授業準備をする時間がないといったことから、資料集でまとめて取り上げてほしいという要望が強く、時事的な話題として「食の不安」を取り上げている。
- 既刊の資料集でも 2008 年度版は中国産冷凍ギョウザを取り上げたが、来年度版は汚染米に差し替える予定。BSE については世間で話題になった上、事件後、牛肉の流通が変わったという点からも取り上げている。

#### <生徒へ伝えたいポイント>

- 生活者として自立・自活できるようになってもらうこと。
- また、高校での家庭科学習は、自分だけではなく、将来自分の子供に何を食べさせるかに直結していく。

#### 6) 食、食品安全に関する情報ニーズ

- 家庭科教科書・資料集の編集者としてある程度の情報は追っているが、複雑なところまでは分かっていないところがあるかもしれない。分かりやすい情報提供があればうれしい。

#### 7) その他、意見・要望等

##### <食品安全に関する取材/情報発信のあり方、当該情報源の役割に関する意見>

- 安全性の証明についての、科学者と消費者の受けとめ方に差があると思う。
- 「安全」は科学的なものだが、「安心」は感情的なもの。科学的根拠があっても、一般人には不安が残るという現象に対し、科学者は「分かっていない」としか見えていないのではないか。立ち位置が違うためだろう。
- 実際に生活を営む際には、科学的根拠に基づいて「安全」ということだけで行動するわけではない。家庭科という性質上、自立・自活した生活を営むために、「安全」だけではなく、「安心」を得る部分を伝えていく必要があると思っている。
- 科学的な部分は一般人には分かりづらく、どう伝えていくのが課題。日本と外国で安全基準が異なるといったことも不安を引き起こす一因ではないか。

#### <食品安全委員会の情報発信に対する認識>

- 専門家が「安全」と評価することと消費者が「安心」と実感することの間にはギャップがある。食品安全委員会の情報発信はどうしても専門家が上から科学的に「安全」と言っている印象で、消費者が「安心」と受けとめることとの間に温度差があるのを感じる。
- 消費者の「安心」を見据えた情報提供がなされていないのではないだろうか。
- 食品安全委員会からのメールマガジンは受信しているが、中身はあまり見ていない。メールマガジンや『食品安全』を見ても専門的で難しくなかなか読まない。読んでも結局何なのかが分からない。そもそも「リスク評価」という表現も一般にはあまり馴染まないだろう。
- 一般向けと専門家向けなど、もう少し読者によって記述を分ける必要があるのではないかという印象がある。『食品安全』を見ても、相当関心が高い読者向けという感じがする。子ども向けの説明資料の方がかえって分かりやすいと感じたことがある。情報を分かりやすく端的にまとめたものがあればうれしい。

#### <食品安全委員会に対する意見・要望等>

- 食品安全に関する講習会（家庭科編集者向けなど）のようなものがあれば是非受講したい。
- 消費者が自立・自活した生活を営むために必要な食品安全に関する知識をまとめて、分かりやすく提供してもらいたい。そのような資料があると、家庭科資料集でも取り上げやすい。
- 先生方からは、ホームページの中のどこに探しているデータがあるのかがわかりにくいという話をよく聞く。この点は食品安全委員会に限らず、官庁のホームページ全般で共通。

### (2) 中学・高校家庭科資料集出版社②

#### 1) 情報源における情報発信の目的、ターゲット

- 資料集は、教科書には書いていないことで、実際に使う教師が生徒に伝えたい内容を中心にしている。
- 指導書は教員向けで、教科書の内容に基づいている。資料集は、生徒向けで、教員向けの指導書はない。

#### <食品安全に関する情報発信についての基本スタンス>

- 編集委員会の委員が作成した原稿で、事実と異なる、データが古い等については、編集担当者が気づいた範囲で指摘する。
- 価値判断はなるべく盛り込まないようにしている。色々な情報を提供し、生徒が自分で考え、判断できるように促す。価値判断に関わる場所について断定はしないという方針である。

- 実験データ等、科学的に正しい情報と、実生活の行動基準は必ずしも一致しないものである。国の基準も、科学的データを前提としつつも、生活実態等を踏まえて設定していると思う。
- 食品添加物の国の基準について、個々の物質については科学的根拠に基づいている。しかし、複合摂取や、長期摂取による人体への影響に関しては科学的な実験データはない。そのため、安全だとは言いきれない。
- 執筆者を始め、家庭科教育関係者の多くは、食品添加物の複合摂取や、長期摂取に関する安全性については懸念を持っている。
- そのため、「必要以上摂らないように」とは書くが、どれくらいが必要以上になるのか、といったことまでは書けない。

## 2) 情報源にとっての食、食品安全に関する関心時、注目トピックとその理由

- 資料集で食品安全に関する内容を大きく取り上げるようになったのは、指導要領の改訂もあるが、消費者問題として食品安全が世間で注目され始めた頃からだと思う。

## 3) 食、食品安全に関する取材・情報収集の方法（注力点、工夫点、留意点等）

### <コンテンツ作成方法、作成体制>

- 教科書は大学や分野の専門家に関わってもらって作成するが、資料集は、実際に活用する現場の教員に直接執筆をお願いしている。編集委員会を編成し、資料集作成方針などを決めた上で、原稿を執筆してもらう。教科書に盛り込むことができる内容には限りがあるので、それを実際の授業の中で補うことができる内容にするという考え方に基づく。
- 現場教員に直接執筆してもらうが、編集サイドが、執筆者からの指定に基づいて適切なデータ・新聞記事を探してくることもある。また、挿入する写真の撮影や、原稿に沿ったイラストの作成など制作上、技術的なところは編集サイドが行なう。ただし、写真撮影でも通常、執筆担当の現場教員の立会いで行なう。
- 通常、資料集の構成変更は、4年に一度の教科書の改訂に合わせて行なっている。4年間の間は、データ部分等、記述が古くなっている部分の更新など、小さな修正で対応している。
- 発行部数が少ない資料集は、改訂までの期間が長くなる。編集委員会の開催には時間もコストもかかり、執筆者への負担も大きい。

## 4) 取材先や出典等

- 情報源は、新聞や白書等、公に発表されるものが中心。その他、専門書等も参考にしている。
- 新聞などマスメディアが発信する情報は、その認識が全てではないと思っている。ときに過剰に取り上げられたり、重要なことがあまり取り上げられないことがあ

る。資料集作成において新聞記事は、事実関係を示すために事実を述べている部分を引用する。

#### 5) 食、食品安全に関する情報発信の方法

- 世の中の状況を踏まえ、事実はきちんと出す、中立に伝えることを心がけている。
- しかし、様々な主体が教科書・資料集で使用する写真や文章表現等に注文をつけてくる。
- 品質表示の例として使用した食品の製造会社が、イメージ低下を懸念して、クレームしてきたことがある。解説の記述もネガティブな記述はしていないはずだが、クレームがくることがある。
- 食品添加物協会からも、否定的な記述をしないようにとの申し入れが毎回ある。
- 以前は、家庭科教科書バッシングもあった。

#### <生徒へ伝えたいポイント>

- 子どもたちが生活の中で自ら判断できる力をつけられるように、資料集を作成している。

#### 6) 食、食品安全に関する情報ニーズ

- 食品安全委員会には、正しい情報を速やかに出してほしい。以前、事実をしばらく伏せていたというようなことがあったように思う。

#### 7) その他、意見・要望等

##### <食品安全に関する取材/情報発信のあり方、当該情報源の役割に関する意見>

- 世の中の状況を踏まえ、事実はきちんと出す、中立に伝えることを心がけている。
- 食品添加物についてはもっと取り上げてほしいという現場教師からの要望がある。
- 安全は科学的に保障できるが、安心は心理的な要素が強い。安全と安心はセットで考えるべきだと思っている。家庭科では、その両面を意識しながら教育していくことが大事だと思っている。

##### <食品安全委員会に対する意見・要望等>

- 世の中では、「食品安全委員会は信頼できる」という雰囲気はまだ醸成されていない。それは家庭科教員間でも同様である。
- 教科書の執筆者の中には、食品安全委員会の委員はどのような人が選ばれているのか、公正に選ばれているのか、懸念を抱いている人がいた。食品安全委員会が果たして消費者の立場を含めて中立的なのか疑問視する現場教員がいるのは事実。
- 以前、教科書の中で食品安全委員会についての記述に「消費者サイドの専門家が加わるとよいだろう」といった文が、検定の段階で削除されたこともあるので、やはりそうなのかなと感じるところもある。

- 正しい情報を迅速に提供してほしい。以前、情報提供を留保していたことがあったという印象を持っている。



#### IV. 効果的なリスクコミュニケーション手法の検討

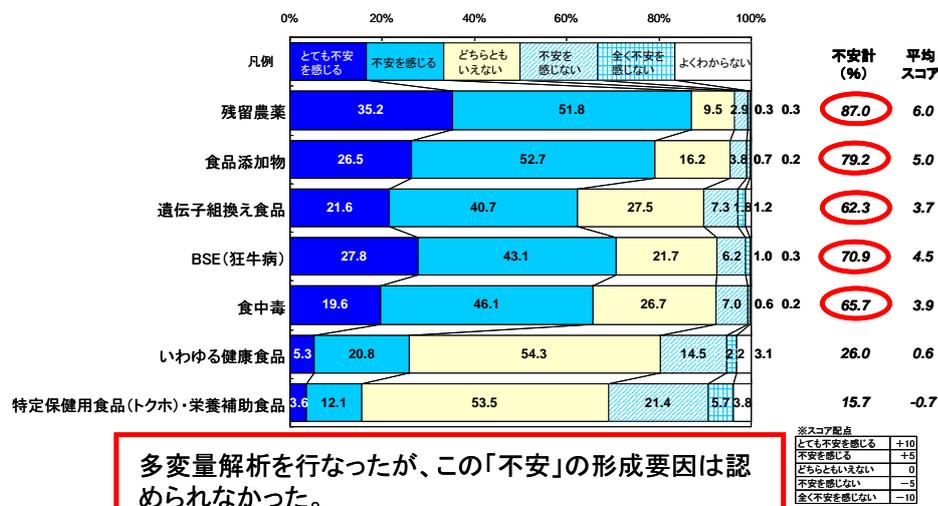
##### 1. 調査研究結果から得られる知見

###### (1) 食品分野ハザードに対するリスク認知・社会的受容性、及びリスク認知形成要因の特徴

- 消費者の意識をみると、食品分野の代表的ハザードに対しては、高い「不安」感を表明しながらも、実際の購買・摂食行動では比較的高い受容性を示す特徴がある。食生活の日常性・持続性等に起因することが示唆される。
  - 「不安」は総じて、“男性より女性”、“就業者等より専業主婦”、“未婚より既婚”、“子どもなしより子どもあり”、“理科系より文科系・その他”のほうが高い。
- 消費者が食品に関して抱く「不安」には心理上、明確な理由はあまり認められず（各ハザードに対する「不安」と各ハザードに対する消費者の認識やイメージの相関をみても、多変量解析を行なっても「不安」を明確に説明することができない）、言わば“なんとなく不安”“漠然とした不安”という感覚が喚起されているものと考えられる。

#### 〔Ⅱ-2. インターネットアンケートより〕

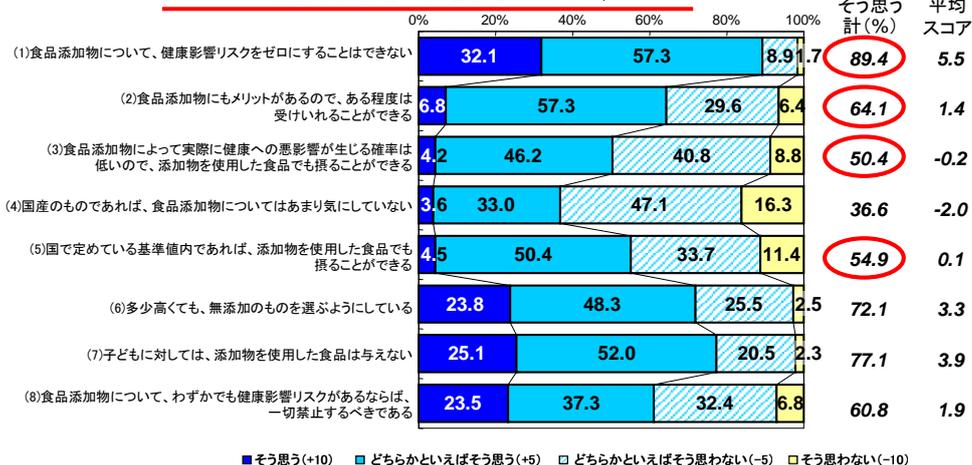
Q5. あなたは次にあげる事柄について、どの程度不安を感じますか。(SA) (N=2000)



多変量解析を行なったが、この「不安」の形成要因は認められなかった。

Q15. 下記にあげる食品添加物に関する記述について、あなたはどのようにお考えですか。

(SA) (ベース：食品添加物を不安と感じている人、n=1583)

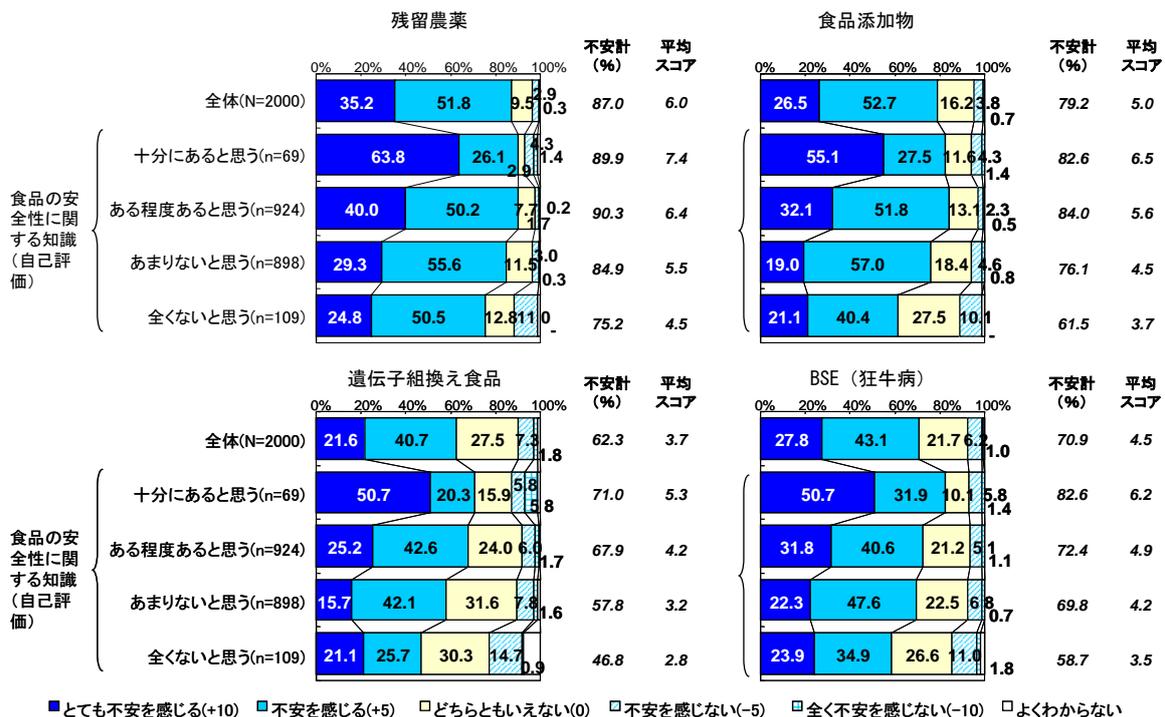


〔Ⅱ-1. フォーカスグループインタビューより〕

- 食生活は**毎日に関わる**こと。買い物などいろいろな際に不安を感じる。(20-30代子育て最中女性)
  - 食べることは**毎日のこと**、三度三度、**半永久的に続くもの**。心配してはいるが、焦って何かしようと思っはてはない。(40-50代子育て一段落女性)
- 
- できれば有機栽培、無農薬、低農薬の食品だけにしたいが、**経済的な問題**があるので、ある程度割り切ってしまう。特売品も買ってしまふ。**妥協し、バランスをとりながら買っている**。(20-30代子育て最中女性)
  - **(無添加のほうが高かったら)たぶん買わない**。(30-40代ビジネスマン)

- また、必ずしも食品の安全性に関する「理解（知識保有）」感が「不安」の払拭を果たすとは限らないこともうかがえる。

〔Ⅱ-2. インターネットアンケートより〕



- 消費者の「不安」形成に大きな影響を与えているのは、マスメディア（特にニュース・報道等のテレビ番組と新聞）である。
- ただし、「不安」形成におけるマスメディアの影響は食品分野のみの特徴ではないと思われる（他の分野でもマスメディア接触頻度が高いほど不安感が高い傾向）。

〔Ⅱ－２．インターネットアンケートより〕

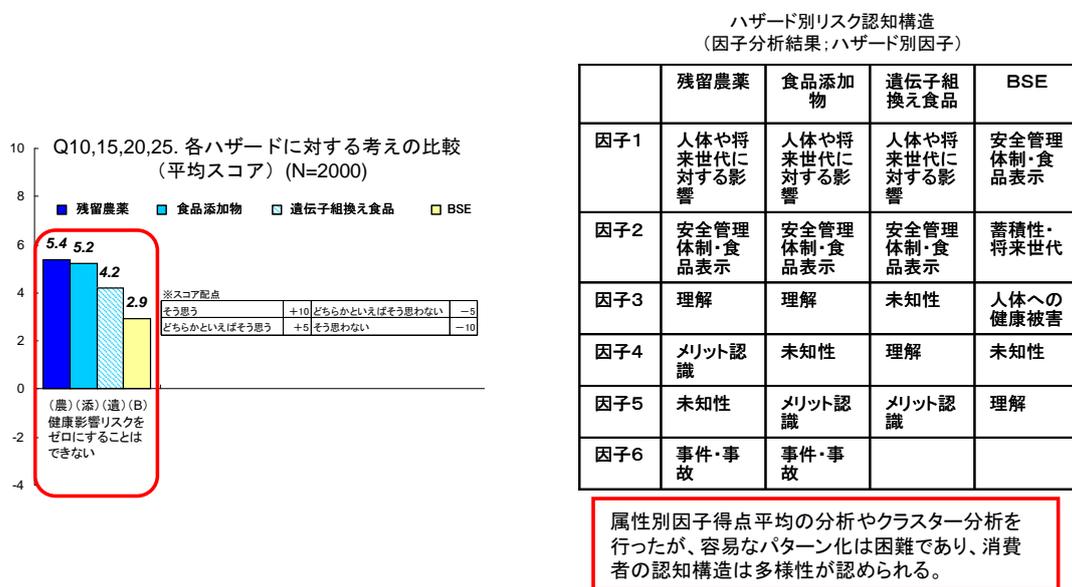
Q6,Q11,Q16,Q21.OOについて、不安を感じるようになったきっかけは何ですか。(MA)(属性別)  
(ベース:各ハザードについて不安と感じている人)

残留農薬			食品添加物			遺伝子組換え食品			BSE		
	n	%		n	%		n	%		n	%
全体	1740	100.0	全体	1583	100.0	全体	1246	100.0	全体	1417	100.0
1 事件・事故のニュース・報道を見て	1563	89.8	1 事件・事故のニュース・報道を見て	1043	65.9	1 事件・事故のニュース・報道を見て	560	44.9	1 事件・事故のニュース・報道を見て	1172	82.7
2 危険性・有害性に関する見解・論調に接して	754	43.3	2 危険性・有害性に関する見解・論調に接して	617	39.0	2 危険性・有害性に関する見解・論調に接して	436	35.0	2 テレビなどで衝撃的な映像を見て	605	42.7
3 テレビなどで衝撃的な映像を見て	625	35.9	3 危険性・有害性を示すデータを見て	449	28.4	3 なんとなく	392	31.5	3 危険性・有害性に関する見解・論調に接して	507	35.8
4 危険性・有害性を示すデータを見て	553	31.8	4 テレビなどで衝撃的な映像を見て	360	22.7	4 危険性・有害性を示すデータを見て	248	19.9	4 危険性・有害性を示すデータを見て	334	23.6
5 家族や知人などから話を聞いて	147	8.4	5 なんとなく	295	18.6	5 テレビなどで衝撃的な映像を見て	172	13.8	5 なんとなく	112	7.9
6 なんとなく	77	4.4	6 家族や知人などから話を聞いて	183	11.6	6 家族や知人などから話を聞いて	89	7.1	6 家族や知人などから話を聞いて	65	4.6
7 国や研究機関などからの勧告を見て	71	4.1	7 講習会・セミナー等に参加して	72	4.5	7 国や研究機関などからの勧告を見て	36	2.9	7 国や研究機関などからの勧告を見て	41	2.9
8 講習会・セミナー等に参加して	52	3.0	8 国や研究機関などからの勧告を見て	54	3.4	8 講習会・セミナー等に参加して	29	2.3	8 身のまわりで被害を受けた人がいる	15	1.1
9 身のまわりで被害を受けた人がいる	32	1.8	9 学校の授業を受けて	39	2.5	9 学校の授業を受けて	5	0.4	9 講習会・セミナー等に参加して	14	1.0
10 学校の授業を受けて	18	1.0	10 身のまわりで被害を受けた人がいる	38	2.4	10 自分自身が被害を受けたことがある	4	0.3	10 自分自身が被害を受けたことがある	4	0.3
11 自分自身が被害を受けたことがある	8	0.5	11 自分自身が被害を受けたことがある	21	1.3	11 身のまわりで被害を受けた人がいる	3	0.2	11 学校の授業を受けて	4	0.3
12 その他	20	1.1	12 その他	16	1.0	12 その他	21	1.7	12 その他	5	0.4

- しかし消費者はマスメディアが発信する具体的な情報内容によって判断しているというよりは、有害性等の論調や映像などによる印象付けによって「不安」が喚起されていることがうかがえる（Ⅲ．リスク認知の形成要因に影響を及ぼす情報源の調査 参照）。
- 信頼できる情報源としても、フォーカスグループインタビューではマスメディアは信頼できないという声も見られたが、インターネットアンケートではマスメディアに対する高い信頼感が示され、言わば印象付け効果によって「結果的に信じてしまう」という意識状況が推測される。
  - 食品の安全性について信頼できる情報源として、「ニュース・報道番組」を挙げた人が72.8%と最も多く、これに「新聞」（55.6%）と続く（Ⅱ－２．インターネットアンケートより）。
- 一方、実際の考え方や行動の側面では、総じて「健康影響リスクをゼロにすることができない」という点は理解されており、一定のリスク認知構造の存在も認められる。
- よって、高い「不安」にも関わらず、消費者なりの判断枠組みを持って食生活を形成していることがうかがえる。しかし、その判断枠組みも俄かにパターン化し

うるものが認められず、多様なスタイルが存在することが示唆される。

〔Ⅱ－２．インターネットアンケートより〕



- マスメディアが消費者の「不安」形成に影響を与えている要因としては、消費者の視点、立場に立って、できるだけ早く、安全か否か、何に気をつけるべきかといった的確な情報を伝えようとするマスメディアの立場と、正確な情報を慎重に伝えようとする国等の立場の違いを指摘することができる。
- つまり、速報性と消費者視点での情報発信の的確性を基本姿勢とするマスメディアにとっては、国等からの適時かつ的確な情報の不足感の中で発信せざるを得ない。このため、的確かつ十分なリスク情報が消費者に訴求されにくくなっている側面がある。このような状況から、接触する事件・事故等の報道件数の増加や、「危害があるのか安全なのか」「何にどのように気をつければよいのか」という消費者が実際に判断するために必要な情報の欠乏から漠然とした「不安」感が喚起され、その感覚が持続的に一人歩きすることが示唆される（Ⅲ．リスク認知の形成要因に影響を及ぼす情報源の調査 参照）。

(2) 「残留農薬」「食品添加物」「遺伝子組換え食品」「BSE」の比較的特徴

- 典型的な食品ハザードに対する消費者のリスク認知及びその形成要因は総じて共通項が認められるが、下記のとおり差異が認められる側面もある。

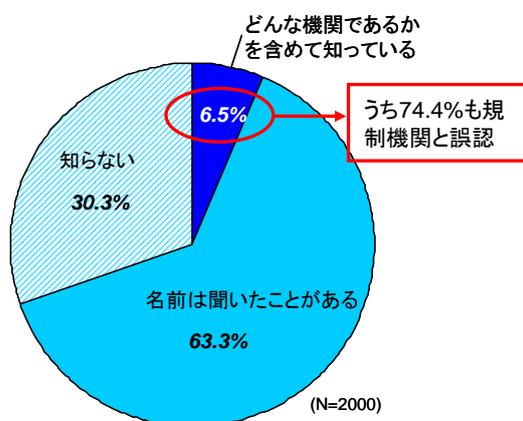
	残留農薬	食品添加物	遺伝子組換え食品	BSE
リスク認知 (不安度)	○ 9割不安。	○ 8割不安。	○ 6割不安。	○ 7割不安。
リスク認知 (不安)形成 要因	○ テレビ・新聞。	○ テレビ・新聞。	○ テレビ・新聞。 ○ なんとなく不安。	○ テレビ・新聞(特 に映像系)。
リスク認知 構造  ※ 因子分析 による。	○ 人体や将来世代 に対する影響。 ○ 安全管理体制・食 品表示。 ○ 理解。 ○ メリット認識。 ○ 未知性。 ○ 事件・事故。	○ 人体や将来世代 に対する影響。 ○ 安全管理体制・食 品表示。 ○ 理解。 ○ 未知性。 ○ メリット認識。 ○ 事件・事故。	○ 人体や将来世代 に対する影響。 ○ 安全管理体制・食 品表示。 ○ 未知性。 ○ 理解。 ○ メリット認識。	○ 安全管理措置。 ○ 蓄積性・将来世代。 ○ 人体への健康被 害。 ○ 未知性。 ○ 理解。
リスク認知 (8割以上 が「そう思 う」イメ ージ)  ※ 下線は比 較的特徴点。	○ <u>人体に悪い影響。</u> ○ <u>蓄積性。</u> ○ <u>被害が大きい。</u> ○ 人工的・人為的。 ○ 安全性判断材料 不足。 ○ <u>将来世代へ影響。</u> ○ <u>怖い。</u> ○ <u>回復が難しい。</u> ○ <u>発生確率が高い。</u>	○ 人工的・人為的。 ○ 安全性判断材料 不足。 ○ 蓄積性。	○ 人工的・人為的。 ○ 安全性判断材料 不足。 ○ <u>科学的未知性。</u> ○ <u>得体がわからない。</u>	○ <u>人体に悪い影響。</u> ○ <u>被害が大きい。</u> ○ <u>回復が難しい。</u> ○ <u>怖い。</u> ○ 安全性判断材料不 足。 ○ <u>将来世代へ影響。</u> ○ <u>得体がわからない。</u> ○ <u>発生確率が高い。</u>
(安全管 理体制確立 や消費 者の選 択肢確 保)	○ 否定的。	○ 否定的。	○ 否定的。	○ 否定的。
社会的受 容性(考 え方・ 行動)の 比較 的特 徴	○ ゼロリスク不可 可能性が理解。 ○ 多少高くても回 避(実際はバ ランス)。	○ ゼロリスク不可 可能性が理解。 ○ 多少高くても回 避(実際はバ ランス)。 ○ ベネフィットに よる受容性高い。	○ ゼロリスク不可 可能性が理解。 ○ 多少高くても回 避する(実際は バランス)。 ○ 国の基準による 受容性低い。 ○ ゼロリスク要求 度高い。	○ ゼロリスク不可 可能性が理解。 ○ ゼロリスク要求度 高い。 ○ 子どもの摂食回避 度が低い。

### (3) 食品安全委員会について

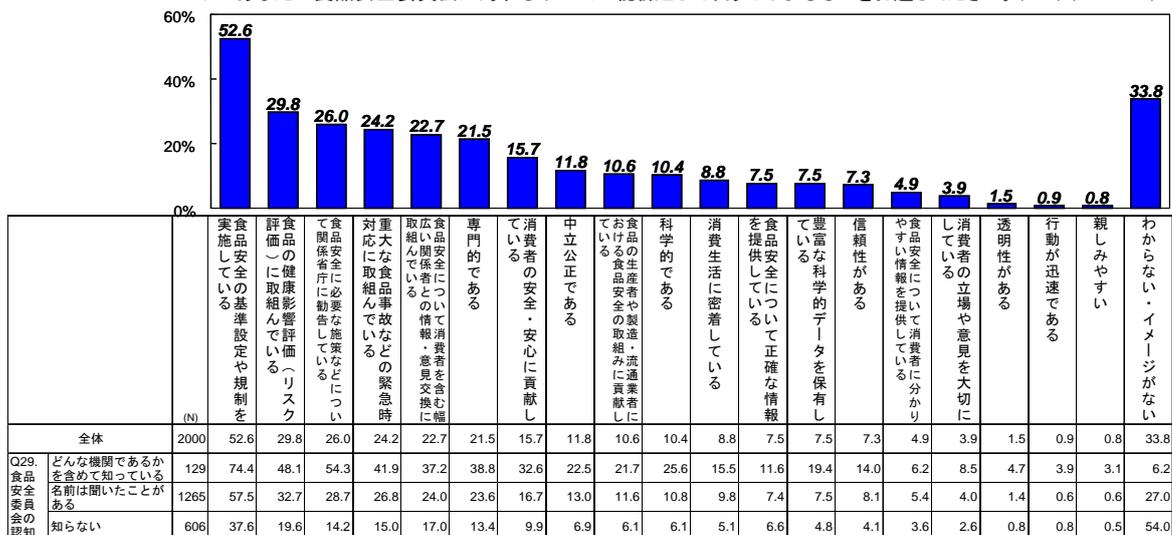
- 食品安全委員会については、機関に対する認知・理解や信頼性が低調である。
  - 食品安全委員会がどのような機関であるかが理解されていない。
    - ◇ 機関内容認知者は6.5%に留まり、そのうち74.4%が「食品安全の基準設定や規制を実施している」と誤認。
    - ◇ 食品安全委員会のイメージ・認識として「わからない・イメージがない」が33.8%。
  - 食品安全委員会の特徴が伝わっていない。
    - ◇ 「中立・公正」(全体の11.8%、機関内容認知者の22.5%)、「科学的」(全体の10.4%、機関内容認知者の25.6%)、「食品安全について正確な情報を提供」(全体の7.5%、機関内容認知者の11.6%)。
  - 信頼性が低い水準に留まる。
    - ◇ 信頼できる情報源として食品安全委員会は13.3%(機関内容認知者の34.1%)。
    - ◇ 食品安全委員会のイメージ・認識として「信頼性がある」は全体の7.3%、機関内容認知者の14.0%。
  - 消費者への貢献、親しみやすさが伝わっていない。
    - ◇ 「消費者の安全・安心に貢献」(全体の15.7%、機関内容認知者の32.6%)、「消費生活に密着」(全体の8.8%、機関内容認知者の15.5%)、「消費者に分かりやすい情報の提供」(全体の4.9%、機関内容認知者の6.2%)、「消費者の立場や意見を大切にしている」(全体の3.9%、機関内容認知者の8.5%)。

#### [Ⅱ-2. インターネットアンケートより]

Q29.食品安全委員会をご存知ですか。(SA)



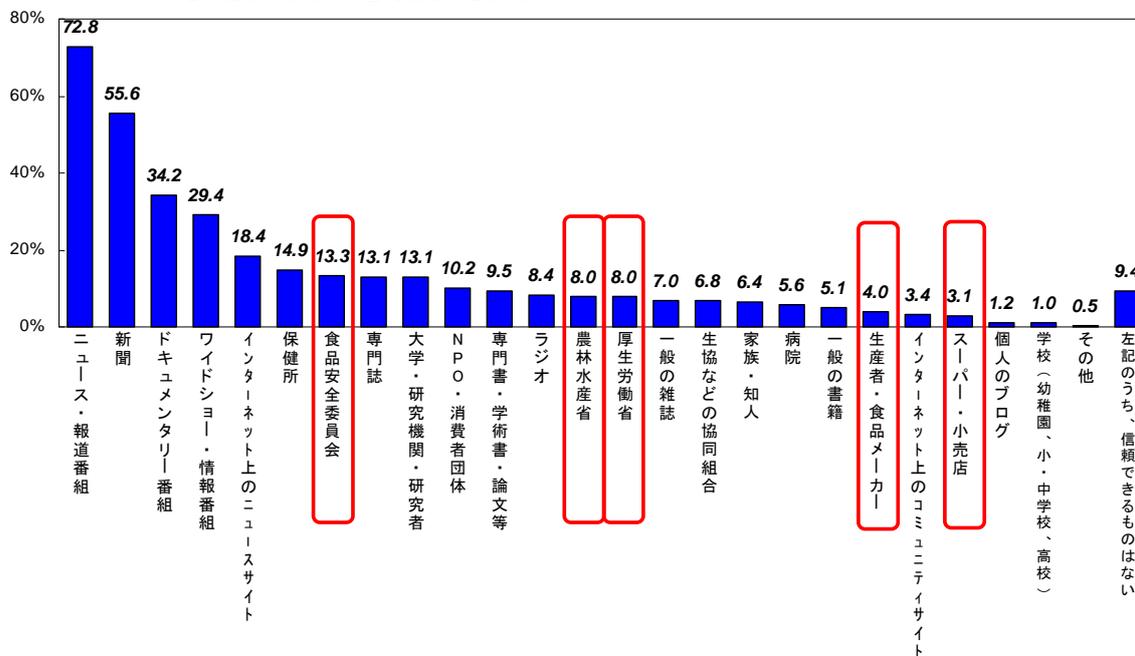
Q30.あなたの食品安全委員会に対するイメージ・認識として、あてはまるものをお選びください。(MA) (N=2000)



- そのほかのリスクコミュニケーション主体である農林水産省、厚生労働省、生産者・食品メーカー、小売も情報源としての信頼性が低調な状況にある。

〔Ⅱ-2. インターネットアンケートより〕

Q27.食品の安全性に関する情報を得る場合、次にあげるメディアや機関・団体等の情報について、あなたが信頼できるものをお選びください。(MA) (N=2000)



## 2. 食品安全分野における効果的なリスクコミュニケーション手法

### (1) 効果的なリスクコミュニケーション手法の検討

- リスク認知の形成要因に関する調査（Ⅱ）及びリスク認知の形成要因に影響を及ぼす情報源の調査（Ⅲ）の調査研究結果から得られた知見、並びに「リスク認知の形成要因等に関する調査検討会」における検討を踏まえて、食品安全分野における効果的なリスクコミュニケーション手法を提示する。
- リスクコミュニケーションとは、「リスクについての、個人、機関、集団間での情報や意見のやりとりの相互作用過程」（National Research Council）である。法律上、リスクコミュニケーションの促進を定める食品安全基本法第13条（情報及び意見の交換の促進）では、「食品の安全性の確保に関する施策の策定に当たっては、当該施策の策定に国民の意見を反映し、並びにその過程の公正性及び透明性を確保するため、当該施策に関する情報の提供、当該施策について意見を述べる機会の付与その他の関係者相互間の情報及び意見の交換の促進を図るために必要な措置が講じられなければならない。」と規定する。
- このリスクコミュニケーションを狭義に解せば、食品安全に関する施策の策定に係る国民意見反映や、意見交換会等の双方向型コミュニケーション施策等についての効果的な手法を検討することもできるが、ここでは、一般消費者のリスク認知形成要因や、これに影響を与える情報源について把握した成果を踏まえることに鑑み、より広く消費者（国民）が食品安全について、適切な情報提供を受け、また、その懸念や意見等について、国をはじめ食品安全に関わる関係者の施策に反映していくことを可能にするような情報提供、広報、コミュニケーション等の活動全般（食品安全に関する科学的情報の発信や、科学的情報の理解促進も含まれ得る）を含めて効果的な手法を検討するものとする。
- よって、食品安全委員会以外の関係者（主に行政機関）を含めて、食品安全分野のリスクコミュニケーションを行なう上で、一般に参考になる事項を「(2) 基本的な考え方」として提示し、その上で、食品安全委員会が講ずる上で効果的な手法として、「(3) 食品安全委員会によるリスクコミュニケーションの方向性」と「(4) 食品安全委員会による効果的なリスクコミュニケーション方策」を示す。

### (2) 基本的な考え方

#### 1) 食品の特性（不安と日常的な購買・摂取の必要性）の考慮

- 食品は誰もが成長し生命を維持するために不可欠のものとして自らの体内に摂り入れるものであり、かつ毎日関わらざるを得ないという日常性及び継続性を持つ。一方、食品に関する技術の発展、生産・流通体制の高度化、輸入食品の増加などにより、消費者にとって、どのようなものを摂食しているのかが見えにくくなってきている。
- 今回の調査研究結果から消費者の意識をみると、以下のことが分かる（「1. 調査研究結果から得られる知見」参照）。

- 食品分野の代表的ハザードに対しては、高い「不安」感を表明しながらも、実際の購買・摂食行動では比較的高い受容性を示す特徴がある。この意識形成には食の日常性の影響も認められる。
- 「不安」形成にはマスメディアの大きな影響が認められるが、心理上、明確な形成要因は見出されず、言わば感情面で漠然とした「不安」という感覚が喚起されていることがうかがえる。また、必ずしも「理解（知識保有）」感が「不安」の払拭を果たすとは限らないこともうかがえる。
- 実際の購買・摂食行動においては消費者なりの判断枠組みが存在することが認められるが、そのパターンは多様である。
- 食品安全分野のリスクコミュニケーションの効果を高めるには、以上のような消費者にとっての食品の意味・特性を考慮した方策を講じることが必要不可欠であり、“(1) 「不安」緩和”と、“(2) 食生活上の選択と判断の支援”の2つを整理して対応することが求められる。

## 2) 消費者による信頼確立

- 食品安全委員会、農林水産省、厚生労働省、生産者・食品メーカー、スーパー・小売とも情報源としての信頼性が低調な状況にある。（「1. 調査研究結果から得られる知見」参照）。
- リスクコミュニケーションの個別的手法以前の問題として、効果的なリスクコミュニケーションの実現には、基盤としてコミュニケーション主体に対する信頼が醸成されていることが必要不可欠の条件となる。
- リスクコミュニケーションの基本条件として、食品安全に関わる各主体自身の信頼度向上を図ることが求められる。

## 3) 消費者の視点での情報提供

- 食品安全に関して、特に行政が提供・発信する情報は分かりにくいと指摘されており、「分かりやすい情報の提供」が期待されている。
  - 約6割の人が、食品の安全性に関する情報提供において、行政に「分かりやすい情報の提供」を期待している（「4) 消費者の関心・懸念に向き合う姿勢」引用のインターネットアンケートデータ参照）。
- 食品安全について、消費者が実際に生活の中で、消費者の選択や判断に役に立つ情報のニーズがある。必要不可欠な食品安全に関する知識をまとめて、分かりやすく簡潔に提供してほしいとの声もある。
- 消費者の視点、立場に立って、実際の食生活における選択や判断に役立つよう、分かりやすく伝え方をさらに工夫していくことが重要である。

〔Ⅱ－２．フォーカスグループインタビューより〕

- 政府発行のものは数字やデータがいっぱいで読むのに一苦労。(20-30代子育て最中女性)
- 国のサイトは作り方が悪い。字が薄いし、リンクは使いにくいし、レイアウトが悪い。(40-50代子育て一段落女性)

〔Ⅲ．リスク認知の形成要因に影響を及ぼす情報源の調査より〕

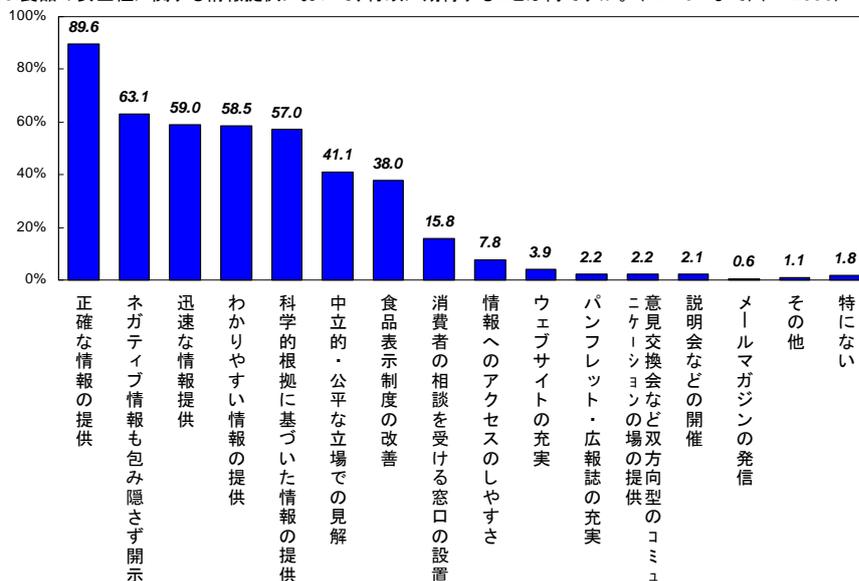
- もっと暮らしの中でどのように気をつければよいのかを知りたいと思っている(全国紙)。
- 国民の食生活に応じてどのようなリスクがあるのかという具体的な情報の提供をしてもらいたい(全国紙)。

4) 消費者の関心や懸念に向き合う姿勢

- 一般に情報提供・発信活動やコミュニケーション活動を効果的なものとするためには、情報の受け手、コミュニケーションの相手方の関心や懸念、及びニーズ等を把握し、これに応じた活動を行なうことが肝要である。
- とりわけ、情報や意見を交換する双方向性を旨とするリスクコミュニケーションにおいては、消費者をはじめとする様々な主体の持つ関心や懸念に向き合う姿勢を一貫して保持し、持続的な関係性を確立していくことが必要不可欠である。
- 行政機関は、消費者の立場に立ち、中立的に、科学的根拠に基づく正確な情報を、包み隠さず、迅速に提供することが期待される。
- また、食品分野の代表的ハザードに対する消費者のリスク認知構造は概ね共通しているものの、差異が認められる側面もあるので、ハザード別に消費者の関心や懸念、及びニーズ等に応じた情報提供を行なうことも有効であると考えられる(「1. 調査研究結果から得られる知見」(2) 参照)。

〔Ⅱ－２．インターネットアンケートより〕

Q28.食品の安全性に関する情報提供において、行政に期待することは何ですか。(MA:5つまで)(N=2000)



〔Ⅱ－２．フォーカスグループインタビューより〕

- **正確な情報をきちんと伝えてほしい。**(20-30代子育て最中女性)
- **消費者の立場に立ち、中立的に、データをたくさん示した情報開示をしてほしい。**(20-30代子育て最中女性)
- **危険性のある情報についても全て教えてほしい。あとは消費者の自己責任による選択に負うところもあるが、とにかく情報は全て教えてほしい。**(20-30代子育て最中女性)
- **都合の悪いことを隠さず、正直にありのままを国民に伝えてほしい。**(30-40代ビジネスマン)

〔Ⅲ．リスク認知の形成要因に影響を及ぼす情報源の調査より〕

- 行政とマスメディアや消費者との間により対立的な緊張感を持ち続けることが必要だと思う。(全国紙)
- 世間が一番騒いでいる時に適時に情報提供してもらいたい。(テレビ報道番組)
- 科学的根拠があっても、一般人には不安が残るという現象に対し、科学者は「分かっていない」としか見ていないのではないか。(家庭科資料集出版社)
- 正しい情報を速やかに出してほしい。(家庭科資料集出版社)

(3) 食品安全委員会によるリスクコミュニケーションの方向性

1) 関係主体の役割分担と食品安全委員会のリスクコミュニケーション

- 食品安全委員会はリスク評価機関という役割を担っている。
- 同時に、食品安全委員会は、食品安全基本法第23条第1項第7号及び第8号に基づいて、リスクコミュニケーションの実施及び関係行政機関によるリスクコミュニケーションの調整を行なうこととなっている。
- しかし本来、リスクコミュニケーションは各関係主体の価値判断を伴い、したがって社会経済的要素や文化的要素とも密接不可分な活動である。よってリスク管理から独立して、中立的に科学的リスク評価を行う機関が、リスクコミュニケーションを行なうこと自体に困難さを内包している面もある。中立なリスク評価機関として消費者からの信頼を確立する観点からも、食品安全委員会自らがあらゆるリスクコミュニケーション施策を講じることが必ずしも効果的な結果をもたらすとは限らない。ときにリスク管理機関の立場に依拠していると誤認される恐れがあることを認識しておく必要がある。
- したがって、関係主体それぞれが有する本来の機関特性を踏まえて役割分担を図り、それぞれの立場を明確にしたリスクコミュニケーション施策を展開することで、食品安全行政全体で効果的なリスクコミュニケーションを展開することが肝要である。
- 食品安全委員会としては、リスク評価機関であるという基本的立場を再認識し、その独立性、中立性、科学的正確性といった特性に応じたリスクコミュニケーション

ョンを行なうことが求められる。

## 2) 食品安全委員会が注力すべきリスクコミュニケーションの方向性

### ①食品の特性（不安と日常的な購買・摂取の必要性）の考慮

- 食品安全分野のリスクコミュニケーションの効果を高めるには、消費者にとっての食品の特性を考慮した方策を講じることが必要不可欠である。消費者にとって食品は、不安はありながらも日常的に購買・摂取しなければならないという特性がある。また、その不安の要因は多様である。よって、“(1)「不安」緩和”と、“(2)食生活上の選択と判断の支援”の2つを整理して対応することが求められる。
- ここで、食品安全委員会のリスク評価機関としての性格に鑑みれば、重きを置くべきは、“不安の緩和”といった消費者の価値観に直接訴えるものではなく、科学的知見に関する情報発信や理解促進、科学的知見の生活への役立て方に関する情報提供等を通じて、消費者の選択と判断に役立てることである。
- すなわち、消費者が食生活においてリスクとうまくつきあうための情報提供やリスクコミュニケーションを目指すことが肝要である。

### ②消費者による信頼確立

- 食品安全委員会の認知・理解は低調であり、まだ信頼感も醸成されていない状況にある。現状では、消費者から規制機関と同一視され、中立性、科学性、情報の正確性といった本来の食品安全委員会の特徴・役割が伝わっていない（「1. 調査研究結果から得られる知見」参照）。
- リスク評価機関としての中立性、情報の正確性及び信頼性が要請される食品安全委員会は、他の機関と比べてもとりわけ、リスクコミュニケーションの基本条件として、食品安全委員会自身の認知及び理解度の向上、および信頼度向上を図ることで存在感を高めることが非常に重要である。

### 〔Ⅲ. リスク認知の形成要因に影響を及ぼす情報源の調査より〕

- 食品安全委員会自身の認知度が低い。国民にとって「食品安全委員会が言っているから大丈夫だ」という存在になり得ていない点が残念に思う。(全国紙)
- なにか事件・事故が発生したときに、食品安全委員会はあまり表に出てこない。もっと出てくるべき。(全国紙)
- 管理機関寄りというところもある。・・・中立的とはいえない。(全国紙)
- 世の中(家庭科教員を含む)では「食品安全委員会は信頼できる」という雰囲気はまだ醸成されていない(家庭科資料集出版社)。

### ③消費者の視点からの情報提供

- 食品安全委員会が提供、発信する情報は、「専門的で難しい」「消費者の視点からはギャップがある」との声があがっており、「分かりやすい情報の提供」が期待されている。
- リスク評価機関として、消費者の関心や懸念に応じて消費者の視点から、実際の食生活における選択や判断に役立つよう、伝え方をさらに分かりやすく工夫していくことも重要である。
- その際、単に情報内容や言葉を容易化するだけでなく、消費者等の情報の受け手にとって、直感的理解を可能にする方法や、「なるほど」と得心がいく訴求方法などの表現や伝達上の様々な工夫が求められる。

#### 〔Ⅲ. リスク認知の形成要因に影響を及ぼす情報源の調査より〕

- ホームページ等で発信されている情報を参照することがあるが、内容が難しく、読み解くのが困難である。(全国紙)
- 分かりにくいだけでなく、何を伝えたいのかが分からない。(全国紙)
- メールマガジンや「食品安全」をみても専門的で難しく、なかなか読まない。結局何なのかわからない。(家庭科資料集出版社)。
- 専門家が上から科学的に「安全」と言っている印象で、消費者が「安心」と受けとめることとの間に温度差があるのを感じる(家庭科資料集出版社)。
- 消費者が自立・自活した生活を営むために必要な食品安全に関する知識をまとめて、わかりやすく提供してもらいたい(家庭科資料集出版社)。

### ④消費者の関心や懸念に向き合う姿勢

- 食品安全委員会は、中立に消費者が真に求める情報を伝達、発信するとともに、双方向性のコミュニケーションを維持・継続することで、消費者等の関心・懸念に向き合う一貫した姿勢を示し続けることが求められる。
- また、リスク評価機関として、コミュニケーション主体としての姿勢と情報内容の両面において、「科学的事実に関する情報」と「価値判断に関する情報」を整理・峻別し、メリハリを持って伝えることが求められる。特に「価値判断に関する情報」の伝達・発信については、必ずしもリスク評価機関に馴染まない面があり、場合によっては中立性に疑念を生じさせる結果を招くことに十分留意する必要がある。
- リスク評価情報を適時かつ迅速に消費者に伝えることは、消費者の安全及び安心の確保に重要な役割を果たす。とりわけ事件・事故等発生時においては、マスメディア等を通じて迅速かつ的確にリスク評価情報を消費者に伝えることで、誤解や不知による不安の増大を抑制し、消費者の適切な選択と判断、そして安心の確保に繋がる。よって、リスク評価機関として常に迅速にリスク評価情報を発信することが求められる。

〔Ⅲ. リスク認知の形成要因に影響を及ぼす情報源の調査より〕

- 国民が知りたいことに応えていない印象がある。(全国紙)
- 何を伝えるのかという基本的なところがいまひとつはっきりしない。(全国紙)
- リスクコミュニケーションをやったからそれでいい、わかりやすく説明したからそれでいい、というところで終わってしまっているように思う。緊張感が足りないという印象がある。(全国紙)
- 消費者側の緊張感を抱いて情報発信してもらいたいし、自分たちもまだまだ十分ではないというところも発信してほしい。(全国紙)
- 情報発信やアナウンスの仕方から変な誤解を与えて、リスク管理機関寄りの印象を与えてしまいがちという面があるかもしれない。(全国紙)
- 消費者の立場を含めて中立的なのか疑問視する現場教員がいる(家庭科資料集出版社)。
- 消費者の「安心」を見据えた情報提供がなされていないのでは(家庭科資料集本出版社)。
- 正しい情報を迅速に提供してほしい。以前、情報提供を留保していたことがあったという印象を持っている(家庭科資料集出版社)。

(4) 食品安全委員会による効果的なリスクコミュニケーション方策

- 食品安全委員会は、以上の注力すべきリスクコミュニケーションの方向性を踏まえ、下記に掲げるような方策を講じることが求められる。

〔効果的なリスクコミュニケーション方策〕

- ① 食品安全委員会の存在感、および中立的評価機関としての役割と毅然とした姿勢を訴求する広報活動
  - 消費者をはじめとする様々な主体に対して、様々な経路を活用して存在感と確固とした姿勢を訴求することで、リスクコミュニケーションの基盤としての信頼感を確立する。
    - 直接又は間接に、食品安全委員会や委員のメディア露出を積極化するなど、顔の見える情報提供活動、広報活動を行なうことも重要である。
    - 勧告権限の行使は食品安全委員会の存在感を高め、その独立性、中立性を訴求する上でも有効であり、消費者の信頼確立に繋がる。
- ② 価値判断から峻別されたリスク情報(科学的知見、科学的事実)の伝達
  - リスク評価機関として、科学的に根拠づけられた事実を明確に範囲付けて情報提供する。
  - 必ずしも直接的な説得・態度変容効果を目的としない。
  - また、遺伝子組換え食品等、特に得体が知れないと捉えられているハザードについてのリスクの理解促進(仕組みなど)を図る。

**③ 科学的不確実情報や説明が難しい情報に関する伝達方針の整理と明確な情報発信**

- 科学的に証明されていない（明快に答えられない）事項は、ここは分かっていないと明確に説明する。
  - 食品安全委員会における意見不一致時の情報提供方針を明確化することも必要である（不一致時の不透明な情報提供は信頼低下に繋がる）。
- 科学的見解について明快な説明が難しい事項は、比喻やイメージ化など平易な伝達方法を工夫する。
  - 例えば、食品添加物の複合摂食の安全性について明快に答えてくれないと認識されている。

**④ 消費者が持つ食品ハザード別のイメージ（誤認を含む）に応じた情報提供**

- ハザード別の消費者のイメージやリスク認知枠組に対応する情報を重点的に提供する。

消費者イメージ	対応する情報(例)	残留農薬	食品添加物	遺伝子組換え食品	BSE
人体に悪い影響がある	影響(障害・疾病等)の有無、内容など	○			○
発生確率が高い	発生確率など	○			○
被害が大きい	発生時の被害の大きさなど	○			○
回復が難しい	症例、生存確率など	○			○
蓄積性	蓄積性の有無など	○	○		○
将来世代へ影響	遺伝的影響の有無など	○			○
得体が知れない	ハザードの特徴・仕組み、科学的知見			○	○

**⑤ 消費者属性別のリスク認知傾向やニーズに応じた情報提供**

- 主婦、ビジネスマン、子ども、文系等の消費者属性別のリスク認知傾向やニーズに応じて提供、発信する情報内容や伝達方法を工夫する。
  - 主婦向け・・・(例) 正確な情報、ネガティブ情報、食品表示などの実用情報、など
  - ビジネスマン向け・・・(例) データの提示、ネガティブ情報、など
  - 子ども向け、文系向け（学校教育、大学生生活等）・・・(例) 自らの判断材料に科学的根拠を導入する教育・啓発、など

**⑥ 消費者の選択、判断に実際に役立つ（中立的な）情報提供**

- 消費者の食生活における安全性の判断材料となる情報の提供を行なう。
  - 消費者の視点からリスク低減、回避に役立つ材料の提示など。

**⑦ 迅速なリスク評価情報の公表及び情報提供**

- 平常時及び緊急時を含め、常に迅速にリスク評価情報を公表及び提供し、消費者の安全及び安心を実質的に確保する。
  - リスク評価の取組み状況等を含めて、日常的な情報提供も行なう。

⑧ 「正しい知識の理解促進」を通じた「食生活上の判断・選択の支援」の推進と、他機関による「心理・感情面における不安低減」を含めた総合的施策の調整

- 社会不安の状況を測る的確な指標の確立と、社会不安メカニズムの理解に基づく施策の推進及び調整を行なう。
- 食品安全行政全体で効果的なリスクコミュニケーションを展開するための調整を図る。
- 関係機関の役割分担の調整と、関係機関間の情報共有を推進する。

※ 上記のリスクコミュニケーション方策に関する具体的な手法を下の囲みに例示する。

※ なお、以下に例示する個別手法を講じるだけでリスクコミュニケーションが効果的になるわけではない点に留意すべきである。それぞれの個別手法の中で以上に述べたリスクコミュニケーションの考え方や方策を反映し、それらを実現するための工夫を図ることこそが重要である。

※ 具体的な手法の選択は、以上の分析及び提言を踏まえて、リスクコミュニケーションだけではなく、機関の役割そのものを含めた総合的な検討が必要である。しかし、今回の調査研究成果から、特に講じることが重要と考えられる事項は、以下の3点である。

- (1) 食品安全委員会の存在感の向上を図る活動
- (2) リスク評価機関の立場から“食生活上の選択と判断の支援”に注力する活動  
（“不安”緩和と“食生活上の選択と判断の支援”の整理に基づく。）
- (3) 消費者の視点からリスク情報を平易かつ直感的に伝えるためのコンテンツ整備及びコミュニケーション活動

〔具体的なリスクコミュニケーション方策例〕

■ マスメディアの活用

- マスメディアとの関係構築と普及啓発
  - 日常的な関係構築
  - 食品安全に関する情報発信についての問題意識の共有
  - 消費者「不安」やネガティブ情報への偏りの緩和
- 食品安全委員会自身の露出、積極的な直接発信
- 第三者による（信頼できる機関、情報源としての）言及、論拠としての露出
- 世間の関心に応じた情報発信
  - 事件・事故等に対する見解の発信
- ニュースづくり

- リスク評価情報の提供（途中経過を含む）
- 「食の安全ダイヤル」等、日常的リスクコミュニケーション活動からのトピックの紹介
- 勧告権限の行使及びニュース化

#### ■ 教育・啓発

- 家庭科教材編集者、現場教員を対象とするセミナー等の開催
- 家庭科資料集等で活用しやすい素材の提供
- 教育現場における科学やリスクに対するリテラシー育成の働きかけ

#### ■ コンテンツ開発

- リスク情報の平易な比喩化、イメージ化
  - 国の情報はある程度信頼できるが、分かりにくいとの消費者の生の声がある。
- 明快で印象的なコンテンツ（一人歩きできる図表・メッセージ）
  - 例えば、テレビ等で用いられるような図表・メッセージ開発
  - テレビ等は必ずしも信頼できなくても印象に残り、結果的に信じるとの消費者の生の声がある。
- 直感的理解を可能にする表現手法の重視
- 簡潔でわかりやすい食品安全に関する消費者基礎知識資料の整備（又は整備推進による当該資料における露出）
- 属性別のコンテンツ整備

#### ■ 双方向コミュニケーションの継続、充実

- 説明会、対話等、双方向コミュニケーションの継続、充実化
- 消費者の認識の把握、情報共有・対話、問題解決に向けた共考のプロセスの継続
  - 食品安全委員会としてのリスクコミュニケーションの継続的改善につなげる。
- 直感的理解を可能にするコミュニケーション手法の重視

#### ■ 人材育成

- リスクコミュニケーションを担う人材育成の継続・充実

